

高槻市

井 尻 遺 跡 2

一般国道 170 号（十三高槻線）道路築造事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2017 年 1 月

公益財団法人 大阪府文化財センター

高槻市

井 尻 遺 跡 2

一般国道 170 号（十三高槻線）道路築造事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



1, 調査地遠景 (南西から) 平成 28 (2016) 年 5 月 12 日撮影 (▼印の交点が調査箇所)



2, 調査地遠景 (南東から) 平成 28 (2016) 年 2 月 22 日撮影 (▼印の交点が調査箇所)

卷頭原色図版 2



1, 196 落込み 出土遺物



2, 包含層出土 石釧

序 文

井尻遺跡が位置する高槻市の北東部は、北に西国街道が走り南に淀川が流れるという、水陸ともに交通の要衝を占める位置にあたります。文献史料等の諸記録から、少なくとも官道である山陽道が定められた奈良時代には、この地が交通の要衝となったことがわかります。そして、今でも北摂山地から淀川北岸までの1 km 足らずの範囲に、名神高速道路、東海道新幹線、JR東海道線、阪急電鉄京都線、国道171号といった交通の大動脈が相接しながら走っています。このような人が盛んに行き交う場所には、常に外部からの情報や物資が盛んに入り出しますが、今回の井尻遺跡の発掘調査でも、弥生時代～中世に亘る様々な遺構・遺物が見つかりました。このことは、交通の要衝という当地の性格が弥生時代や古墳時代にまで遡るということを示唆するものといえるでしょう。また、古墳時代の祭祀遺構が見つかったことは、人々が盛んに行き交う場所で行われた信仰のありさまを探ることができる成果と言えます。

このように井尻遺跡の発掘調査では、非常に実りの多い成果が得られたと言えますが、この成果が学問的な意味合いだけではなく、淀川北岸の歴史を考えるうえでの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたって大阪府茨木土木事務所、大阪府教育庁、高槻市教育委員会、地元自治会をはじめとする関係各位より多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

今後とも当センターの実施する埋蔵文化財発掘調査へのご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成29年1月

公益財団法人 大阪府文化財センター
理事長 田邊 征夫

例 言

1. 本書は、大阪府高槻市井尻 1 丁目に所在する井尻遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、一般国道 170 号（十三高槻線）道路築造事業に伴い、大阪府茨木土木事務所より委託を受け、大阪府教育庁文化財保護課の指導の下、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 調査及び整理に関する受託名称・調査名・受託期間・体制は、以下の通りである。
受託名称：「一般国道 170 号（十三高槻線）道路築造事業に伴う井尻遺跡埋蔵文化財調査業務委託（その 2）」
調査名：井尻遺跡 15 - 1
受託期間：平成 27 年 11 月 12 日～平成 29 年 1 月 31 日
体制：平成 27 年度
事務局次長：江浦 洋、調整課長：岡本茂史
調査課長：岡戸哲紀、副主査：鹿野 塁
平成 28 年度
事務局次長：江浦 洋、調整課長：岡本茂史
調査課長：岡戸哲紀、調査課長補佐：三好孝一、副主査：鹿野 塁
4. 現地調査の写真撮影は調査担当者が、遺物写真撮影は調査課写真室が、鉄器の X 線写真撮影及び木製品の樹種同定は、調査課専門調査員山口誠治が行った。
5. 発掘調査及び整理作業の過程で、以下の方々ならびに諸機関にご指導・ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。
岡本敏行・木村啓章・原田昌浩（大阪府教育庁）、内田真雄・早川圭・三好裕太郎・濱野俊一（高槻市教育委員会）、西田明弘・牟田憲一郎・村上秀明（大阪府茨木土木事務所）、橋本久和（同志社大学）、魚津知克（大手前大学）、青柳泰介・中野咲（奈良県立橿原考古学研究所）
6. 本書の編集・執筆は、非常勤職員の協力の下、鹿野が行った。なお、「第 2 章 第 2 節 歴史的環境」については、これまでの調査と変わるものではないため、当センター発行の井尻遺跡に関する既刊の発掘調査報告書から引用し、一部加筆修正したものである。
7. 本書に関わる写真・実測図などの記録類・出土遺物は、公益財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構図及び断面図に示した標高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用している。図中の標高は、すべて東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値であり、T.P. +は省略した。
2. 座標値は世界測地系（測地成果 2000）による平面直角座標系第VI系に基づき表示し、単位はすべてmである。
3. 全体図及び遺構図の方位は、いずれも国土座標軸第VI系の座標北を示す。
4. 現地調査及び遺物整理に際しては、当センターの『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠した。
5. 土層断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2006年度版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を用いた。その記載方法は記号・土色名・土質名の順とする。（例：10Y4/2 オリーブ灰 シルト）
6. 遺構番号は、1～順に付した。遺構番号＝遺構名とし、複数の遺構の集合体である竪穴建物や掘立柱建物は、それとは別に遺構番号を付した。
（例：「1 溝」・「2 ピット」、「竪穴建物 1」「掘立柱建物 1」）
7. 遺構図における断面位置は、図面上に「□」によって示した。
8. 遺物実測図の縮尺は、4分の1を基本とするが、鉄器などで小型のものは2分の1で掲載するなど、遺物の大きさに即した縮尺としたため、一部はこの限りではない。各図面にはスケールを付しているので参照されたい。また、写真図版の遺物はスケールを統一していない。
9. 遺物実測図のうち、須恵器は断面を黒塗りで表現した。それ以外の土器は断面白抜きである。
10. 掲載遺物は、遺跡ごとに通し番号を付し、本文・挿図・写真図版・一覧表ともに一致する。掲載遺物番号は1～441。
11. 本書を作成するにあたり、古墳時代の土師器は〔寺沢薫 1986〕、須恵器は〔田辺昭三 1981〕、古代の土器については〔古代の土器研究会編 1992・1993・1994〕、中世の土器は〔中世土器研究会編 1998〕、製塩土器は〔積山洋 2004〕に拠った。
12. 引用文献及び参考文献は巻末（65頁）にまとめた。
13. 当センターの名称を「大文セ」と略称することがある。
14. 註は節ごとにまとめた。

目 次

巻頭原色図版

序 文

例 言

凡 例

目 次

第1章 調査の経緯と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 位置と地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

第2節 歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

第3節 これまでの調査について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

第3章 調査の方法

第1節 現地調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

第2節 整理作業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

第4章 調査成果

第1節 基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

第2節 検出遺構面の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

第3節 弥生時代の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19

第4節 古墳時代中期の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・ 19

第5節 古墳時代後期～平安時代の遺構と遺物 42

第6節 鎌倉時代の遺構と遺物 57

第7節 包含層その他出土遺物（古代・中世） 59

第5章 総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60

引用・参考文献

掲載遺物一覧

写真図版

報告書抄録

挿図目次

- | | | | |
|------|------------------|------|--------------------|
| 図 1 | 調査地位置 | 図 29 | 98 溝 出土遺物 (1) |
| 図 2 | 周辺遺跡分布 | 図 30 | 98 溝 出土遺物 (2) |
| 図 3 | 井尻遺跡既往調査区 | 図 31 | 98 溝 出土遺物 (3) |
| 図 4 | 地区割り | 図 32 | 古墳時代 各種遺構断面 |
| 図 5 | 地区割りと調査区配置 | 図 33 | 古墳時代 遺構出土遺物 |
| 図 6 | 西壁断面 | 図 34 | 包含層出土遺物 (古墳時代) (1) |
| 図 7 | 東壁断面 | 図 35 | 包含層出土遺物 (古墳時代) (2) |
| 図 8 | 第 1 面 平面 | 図 36 | 包含層遺物出土地点 (古墳時代) |
| 図 9 | 第 2 面 平面 | 図 37 | 掘立柱建物 1 平・断面 |
| 図 10 | 第 3 面 平面 | 図 38 | 掘立柱建物 4 平・断面 |
| 図 11 | 第 4 面 平面 | 図 39 | 掘立柱建物 5 平・断面 |
| 図 12 | 第 5 面 平面 | 図 40 | 古墳時代後期～平安時代 遺構出土遺物 |
| 図 13 | 弥生時代の遺物 | 図 41 | 掘立柱建物 2 平・断面 |
| 図 14 | 258 溝 断面 | 図 42 | 古代 各種遺構断面 |
| 図 15 | 258 溝 出土遺物 | 図 43 | 167 落込み・195 流路 断面 |
| 図 16 | 196 落込み 断面 | 図 44 | 195 流路 出土遺物 |
| 図 17 | 196 落込み 遺物出土状況 | 図 45 | 167 落込み 出土遺物 (1) |
| 図 18 | 196 落込み 出土遺物 (1) | 図 46 | 167 落込み 出土遺物 (2) |
| 図 19 | 196 落込み 出土遺物 (2) | 図 47 | 4 溝 出土遺物 |
| 図 20 | 196 落込み 出土遺物 (3) | 図 48 | 掘立柱建物 3 平・断面 |
| 図 21 | 196 落込み 出土遺物 (4) | 図 49 | 鎌倉時代 各種遺構断面 |
| 図 22 | 196 落込み 出土遺物 (5) | 図 50 | 鎌倉時代 遺構出土遺物 |
| 図 23 | 白玉分類図 | 図 51 | 包含層出土遺物 (古代・中世) |
| 図 24 | 白玉法量分布 | 図 52 | 196 落込み出土 土師器高杯合成 |
| 図 25 | 白玉分類分布 | 図 53 | 第 3 面合成 |
| 図 26 | 196 落込み 出土遺物 (6) | 図 54 | 第 4 面合成 |
| 図 27 | 98 溝 断面 | 図 55 | 周辺遺跡との関係 |
| 図 28 | 98 溝 遺物出土状況 | | |

表目次

- 表 1 196 落込み 白玉計測一覧及び分類一覧

写真目次

- 写真 1 現地調査及び整理作業風景

- 写真 2 63 ピット断面

巻頭原色図版目次

巻頭原色図版 1

- 1, 調査地遠景 (南西から)
- 2, 調査地遠景 (南東から)

巻頭原色図版 2

- 1, 196 落込み 出土遺物
- 2, 包含層出土 石釧

写真図版目次

写真図版 1

- 1, 1 区西壁断面 (南東から)
- 2, 1 区西壁断面 (東から)
- 3, 1 区西壁断面 (南東から)
- 4, 2 区東壁断面 (南西から)
- 5, 2 区東壁断面 (北西から)
- 6, 2 区東壁深掘断面 (南西から)

写真図版 2

- 1, 258 溝 (南西から)
- 2, 258 溝 断面 (南から)
- 3, 258 溝 断面 (南から)
- 4, 258 溝北東端 土器出土状況 (東から)
- 5, 258 溝北東端 土器出土状況 (北東から)

写真図版 3

- 1, 1 区第 4 面全景 (南から)
- 2, 2 区第 4 面全景 (南西から)

写真図版 4

- 1, 1 区第 4 面 掘立柱建物 1 と 98 溝 (東から)
- 2, 掘立柱建物 1 110 ピット断面 (西から)
- 3, 掘立柱建物 1 111 ピット断面 (西から)
- 4, 掘立柱建物 1 116 ピット断面 (南から)
- 5, 掘立柱建物 1 119 ピット断面 (西から)

写真図版 5

- 1, 2 区第 4 面 掘立柱建物 4 (北西から)
- 2, 掘立柱建物 4 198 ピット断面 (北から)
- 3, 掘立柱建物 4 200 ピット断面 (北から)
- 4, 掘立柱建物 4 203 ピット断面 (東から)
- 5, 掘立柱建物 4 201 ピット断面 (西から)

写真図版 6

- 1, 2 区第 4 面 掘立柱建物 5 (南西から)
- 2, 掘立柱建物 5 226 ピット断面 (南東から)
- 3, 掘立柱建物 5 237 ピット断面 (西から)
- 4, 掘立柱建物 5 257 ピット断面 (西から)
- 5, 掘立柱建物 5 227 ピット断面 (南東から)

写真図版 7

- 1, 1 区第 4 面 98 溝 (北東から)
- 2, 98 溝 断面 (東から)
- 3, 98 溝 土器出土状況 (北東から)
(図 31 - 198)
- 4, 98 溝 土器出土状況 (東から)

- 5, 98 溝 土器出土状況 (東から)
(図 30 - 197)

写真図版 8

- 1, 2 区第 4 面 196 落込み遺物出土状況
(東から)
- 2, 196 落込み 断面 (西から)
- 3, 196 落込み 遺物出土状況 (南から)
- 4, 196 落込み 遺物出土状況 (西から)
- 5, 196 落込み 遺物出土状況 (東から)

写真図版 9

- 1, 124 土坑 断面 (南から)
- 2, 124 土坑 遺物出土状況 (南から)
(図 33 - 208)
- 3, 99 落込み 遺物出土状況 (北東から)
- 4, 包含層 石釧出土状況 (北西から)
(図 34 - 233)
- 5, 包含層 土師器壺 出土状況 (南から)
(図 34 - 248)
- 6, 包含層 須恵器甕 出土状況 (南から)
(図 34 - 234)
- 7, 225 溝 断面 (北西から)
- 8, 225 溝 土器出土状況 (北から)
(図 40 - 252)

写真図版 10

- 1, 2 区第 3 面 195 流路 (南西から)
- 2, 167 落込み及び 195 流路断面 (西から)
- 3, 167 落込み及び 195 流路断面 (南から)

写真図版 11

- 1, 1 区第 3 面全景 (南から)
- 2, 2 区第 3 面全景 (南から)

写真図版 12

- 1, 1 区第 2 面全景 (南から)
- 2, 2 区第 2 面全景 (南から)

写真図版 13

- 1, 1 区第 2 面 掘立柱建物 2 (西から)
- 2, 掘立柱建物 2 検出状況 (西から)
- 3, 掘立柱建物 2 136 ピット断面 (北から)
- 4, 掘立柱建物 2 137 ピット断面 (北から)
- 5, 掘立柱建物 2 131 ピット断面 (南から)

写真図版 14

- 1, 2区第2面 掘立柱建物3 (西から)
- 2, 掘立柱建物3 149ピット断面 (西から)
- 3, 1区第2面 4溝断面 (南から)

写真図版 15 包含層その他出土遺物、
258溝 出土遺物

写真図版 16 196落込み 出土遺物

写真図版 17 196落込み 出土遺物

写真図版 18 196落込み 出土遺物

写真図版 19 196落込み 出土遺物

写真図版 20 98溝 出土遺物

写真図版 21 98溝 出土遺物

写真図版 22 98溝・124土坑・252ピット・
225溝・掘立柱建物2・掘立柱建物3・167
落込み 出土遺物

写真図版 23 195流路 出土遺物
4溝 出土遺物

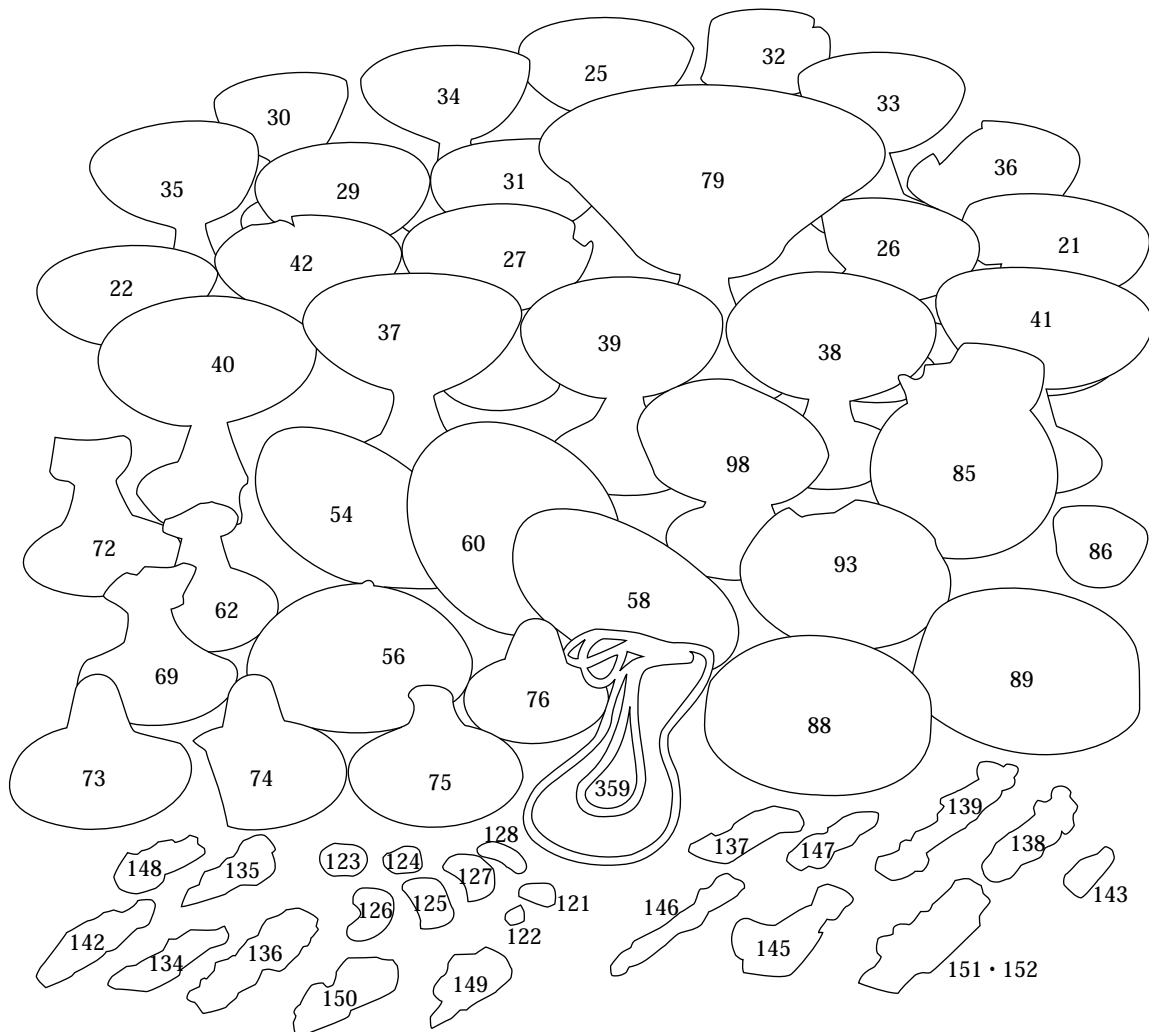
写真図版 24 包含層出土遺物 (古墳時代)

写真図版 25 包含層出土遺物 (古代・中世)
包含層出土 緑釉陶器・灰釉陶器
167落込み・包含層出土 白磁

写真図版 26 遺構・包含層出土 瓦

写真図版 27 196落込み出土 鉄器 X線写真

写真図版 28 196落込み出土 鉄器 X線写真



巻頭原色図版 2 1, 196落込み 出土遺物 遺物番号

第1章 調査の経緯と経過

本書は、大阪府高槻市において実施した「一般国道170号（十三高槻線）道路築造事業に伴う井尻遺跡埋蔵文化財調査業務委託（その2）」の成果をまとめた報告書である。

井尻遺跡は、一般国道170号（十三高槻線）道路築造事業に先立ち、平成25年度に実施された試掘調査によって新たに発見・周知された遺跡である。

試掘調査では、道路予定範囲のうち、上牧遺跡の南西に隣接するエリアでの遺跡の有無を確認するため、井尻1丁目で国道171号から分岐する地点より南西に約1.2kmの長さの範囲に2箇所のトレンチが設定された。

試掘調査の結果、事業区域の北東部に設置した10～12トレンチの3箇所のトレンチにおいて溝、土坑、小穴とともに中世を主体とする多量の遺物が出土し、井尻1丁目地内にて当該期の遺跡の存在が明らかとなり、「井尻遺跡」と命名された。

その後、平成25年11月～平成26年5月に道路築造箇所の最初の発掘調査が行われた。

今回の委託業務では、同事業に伴う用地交渉の進捗の結果、調査が可能となった箇所の発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、調査箇所を2分割し、12月9日より1区の機械掘削を開始した。1区では合計4面の遺構面の調査を行った。2月22日にヘリコプターによる第4面の空中写真測量を行い、2月24日に調査を終了した。2区は2月29日から機械掘削を開始し、合計5面の遺構面の調査を行った。5月

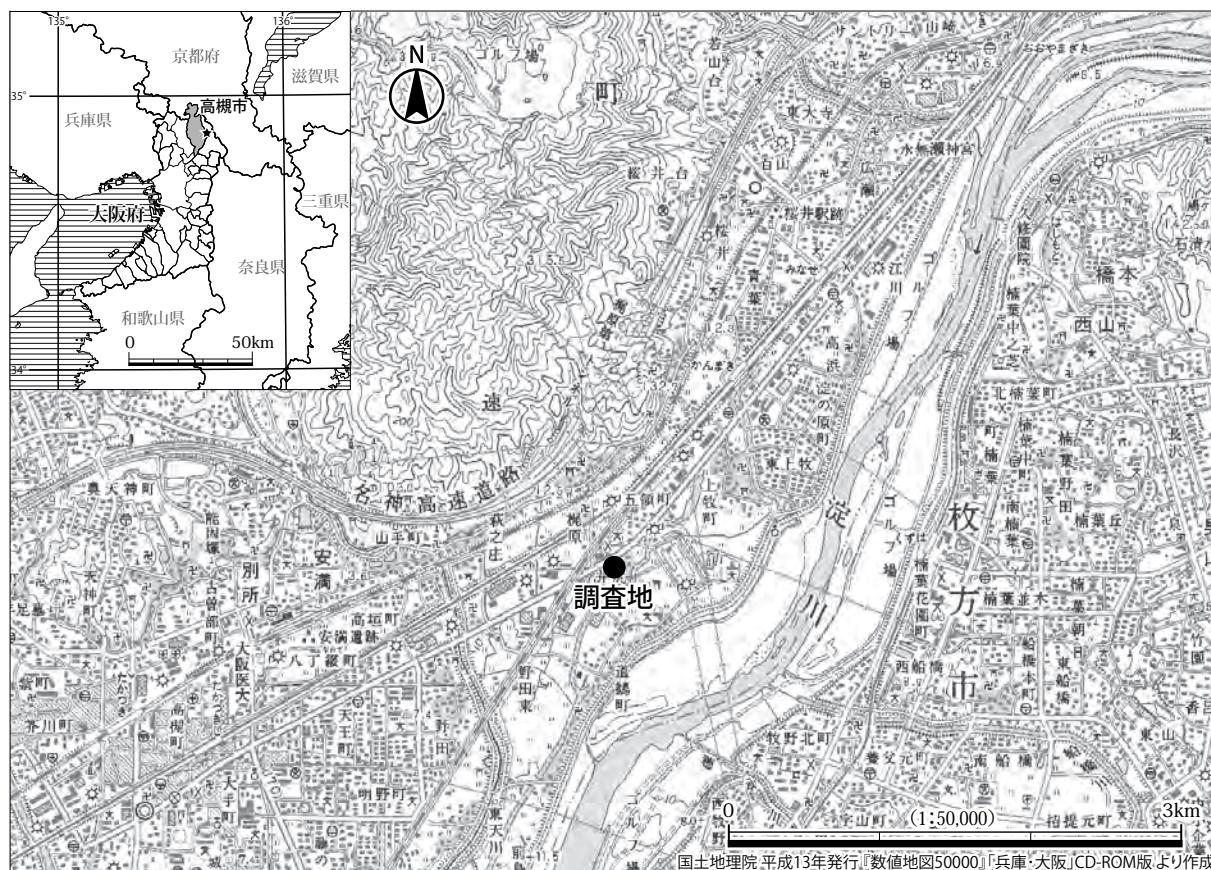


図1 調査地位置

12日にヘリコプターによる第4面の空中写真測量を行い、大阪府教育庁文化財保護課による立会を受けた。2区では、大阪府教育庁文化財保護課からの追加調査の指示を受け、第5面を調査することとなり、さらにトレンチ調査による下層確認を行い、5月26日に調査を終了した。

調査面積の合計は1038㎡（1区：465㎡、2区：573㎡）である。

なお、調査中には遺物洗浄・図面整理などの基礎整理作業を行った。

遺物整理作業は平成28年6月1日より開始し、平成28年10月31日まで行い、平成29年1月31日の本報告書刊行をもって作業を完了した。

調査日誌抄録

12月9日(水) 1区機械掘削開始。	3月15日(火) 第1面精査。平板測量。
12月14日(月) 機械掘削。	3月16日(水) 第1面精査。遺構検出。
12月16日(水) 出来高測量。側溝掘削。	3月17日(木) 第2層掘削。遺構検出
12月17日(木) 第2層掘削開始。	3月18日(金) 第1面全景写真撮影。
12月18日(金) 南法面整形、分層。	3月22日(火) 第1面遺構掘削。
12月22日(火) 第2層掘削。次層分層。	3月23日(水) 第3層掘削開始。
12月24日(木) 第2層掘削。第1面精査。	3月24日(木) 第3層掘削。
12月25日(金) 年内現場作業終了。	3月25日(金) 第3層掘削。
1月6日(水) 現場再開、第1面全景写真撮影。	3月28日(月) 第3層(北半)掘削。
1月7日(木) 4級基準点打設。	3月29日(火) 第2面精査。建物検出。
1月8日(金) 第3層掘削開始。	3月30日(水) 第2面断面写真撮影。
1月12日(火) 第3層掘削。	3月31日(木) 第2面全景写真撮影。
1月13日(水) 北半精査。遺構検出。	4月5日(火) 第4層掘削開始。
1月14日(木) 第3層掘削。	4月6日(水) 第4層掘削。精査。
1月15日(金) 第2面精査。遺構検出。平板測量。	4月8日(金) 第4層掘削。遺構検出。
1月19日(火) 3溝、4溝掘削。	4月11日(月) 第3面精査。
1月20日(水) 第2面全景写真撮影。	4月12日(火) 第4層掘削。精査。
1月21日(木) 第4層掘削開始。	4月13日(水) 第3面遺構掘削。遺構断面写真撮影。
1月22日(金) 第4層掘削。北壁断面図作成。	4月14日(木) 遺構写真撮影。
1月25日(月) 第4層掘削。	4月15日(金) 第3面全景写真撮影。
1月26日(火) 第3面精査。	4月18日(月) 第5層掘削開始。
1月27日(水) 第3面精査。溝、ピット検出。	4月19日(火) 第5層掘削。精査。
1月28日(木) 第3面精査。遺構検出。平板測量。	4月20日(水) 第4面精査。
2月1日(月) 第3面精査。平板測量。	4月22日(金) 第4面精査。遺構検出。
2月3日(水) 第3面全景写真撮影。	4月25日(月) 第4面遺構掘削。
2月4日(木) 第5層掘削開始。	4月26日(火) 第4面遺構写真撮影。
2月5日(金) 第5層掘削。遺構検出。	4月27日(水) 北壁断面分層、写真撮影。
2月8日(月) 遺構面精査。	4月30日(土) 建物4、ピット半截、写真撮影。
2月9日(火) 石釧出土。出土状況写真撮影。	5月6日(金) 東法面整形。
2月10日(水) 遺構遺物出土状況写真撮影。平板測量。	5月7日(土) 第4面遺構断面写真撮影。
2月12日(金) 大阪府教育庁文化財保護課立会。	5月11日(水) 第4面遺構掘削。精査。
2月15日(月) 98溝検出状況写真撮影。	5月12日(木) 第4面全景写真撮影、ヘリコプターによる空中写真測量、大阪府教育庁文化財保護課立会。
2月16日(火) 第4面遺構掘削。遺構断面写真撮影。	5月13日(金) 第6層掘削開始。
2月17日(水) 鋼矢板打設。	5月16日(月) 第6層掘削。鉄器出土状況写真撮影。
2月18日(木) 流路掘削。北壁掘削。	5月17日(火) 東壁断面分層。196落込み埋土水洗作業しばらく続く。
2月19日(金) 標定点打設。	5月19日(木) 東壁断面、断面図作成。
2月22日(月) 第4面全景写真撮影、ヘリコプターによる空中写真測量。	5月20日(金) 第5面精査。遺構検出。
2月23日(火) 西壁清掃。断面写真撮影。	5月23日(月) 大阪府教育庁文化財保護課立会。
2月24日(水) 1区調査終了。	5月24日(火) 第5面全景写真撮影。
2月29日(月) 2区機械掘削開始。	5月26日(木) 深掘トレンチ断面図作成。調査完了。
3月7日(月) 第2層掘削開始。	
3月10日(木) 第2層(北半部)掘削。	
3月11日(金) 第2層掘削。	

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 位置と地理的環境

井尻遺跡は、高槻市の東部に位置し、北を北摂山地、南を淀川に挟まれた、幅約1 kmほどの狭隘な沖積平野上に立地している（図1・2）。井尻の地名は井路（灌漑用水路）の尻（末端部）に由来するとも言われるが、現在も縦横に走る用水路はこれを物語るものであろう。

数千年前（河内湾Ⅰの時代）にはこの付近は淀川の河口であったため、いくつかの流路に分かれ中州が発達したらしい。井尻周辺には内ヶ池・大野池など淀川の分流の名残を留める河跡湖と考えられる池もある。それを考慮すれば、井尻の集落は淀川分流路の自然堤防上に立地しているものと考えられる。それとともに、山地からは小河川が複雑に流下し、小規模な微高地を形成しているものと考えられる。小河川のほとんどは現在では水路化しているが、今もその旧流路や微高地が不定形な耕地区画として痕跡を留めている。

井尻遺跡の南隣、道鶴町には淀川沿いに径1 km程の半月形の土地区画がある。これはその輪郭が元は細長い溜池であり、淀川の旧流路と考えられる。沖積平野でも淀川沿いの地域は、このように旧淀川もしくは淀川の分流路の痕跡及びそれらが形成した自然堤防や後背湿地が複雑に見られる地理的環境にある。

第2節 歴史的環境

今からおよそ6400年前、縄文時代前期の縄文海進最盛期の頃は、この付近が河内湾に注ぐ淀川河口であったと考えられている。

弥生時代には1 km程西方の松尾川右岸に、安満遺跡があり、前期から後期まで存続する拠点集落として知られている。

北東に接する梶原南遺跡では中期前葉の土坑、中期前～中葉の方形周溝墓、後期の竪穴住居跡や溝が検出され、東に隣接する上牧遺跡では庄内式期の竪穴建物1棟が検出されている。さらに500 m程北西の梶原西遺跡では中期前葉の方形周溝墓が約10基検出されている。600 m程西に位置する萩之庄南遺跡では弥生時代末から古墳時代初頭頃の竪穴建物跡や方形周溝墓が検出されている。前回の調査で井尻遺跡でも弥生時代中期の遺物が確認された。

古墳時代には前期の前方後円墳、萩之庄1号・2号墳が梶原山尾根上にあるが、後期の群集墳が多く、北の山腹域に安満山古墳群・梶原古墳群・萩之庄古墳群・磐手杜古墳群などがある。平野部においては上牧遺跡の中期初頭の竪穴建物1棟、梶原南遺跡で後期の竪穴建物1棟等がある。

古代には梶原南遺跡で奈良時代の多数の建物群とともに「新屋首乙賣（にいやのおびとおとめ）」と記された木簡が発見されている。梶原南遺跡は古代駅家の一つ、大原駅の推定地でもある。山地裾では東大寺と関係の深かった梶原寺が創建され、東大寺に瓦を供給した梶原瓦窯跡、萩之庄瓦窯跡などが築かれる。梶原寺・梶原瓦窯跡は正倉院文書に記載があり、天平勝宝九（757）年摂津職解では、造東大寺司が太政官府によって摂津職に命じ、摂津職から梶原寺に東大寺大仏殿歩廊用の瓦4000枚の製作を依頼している。

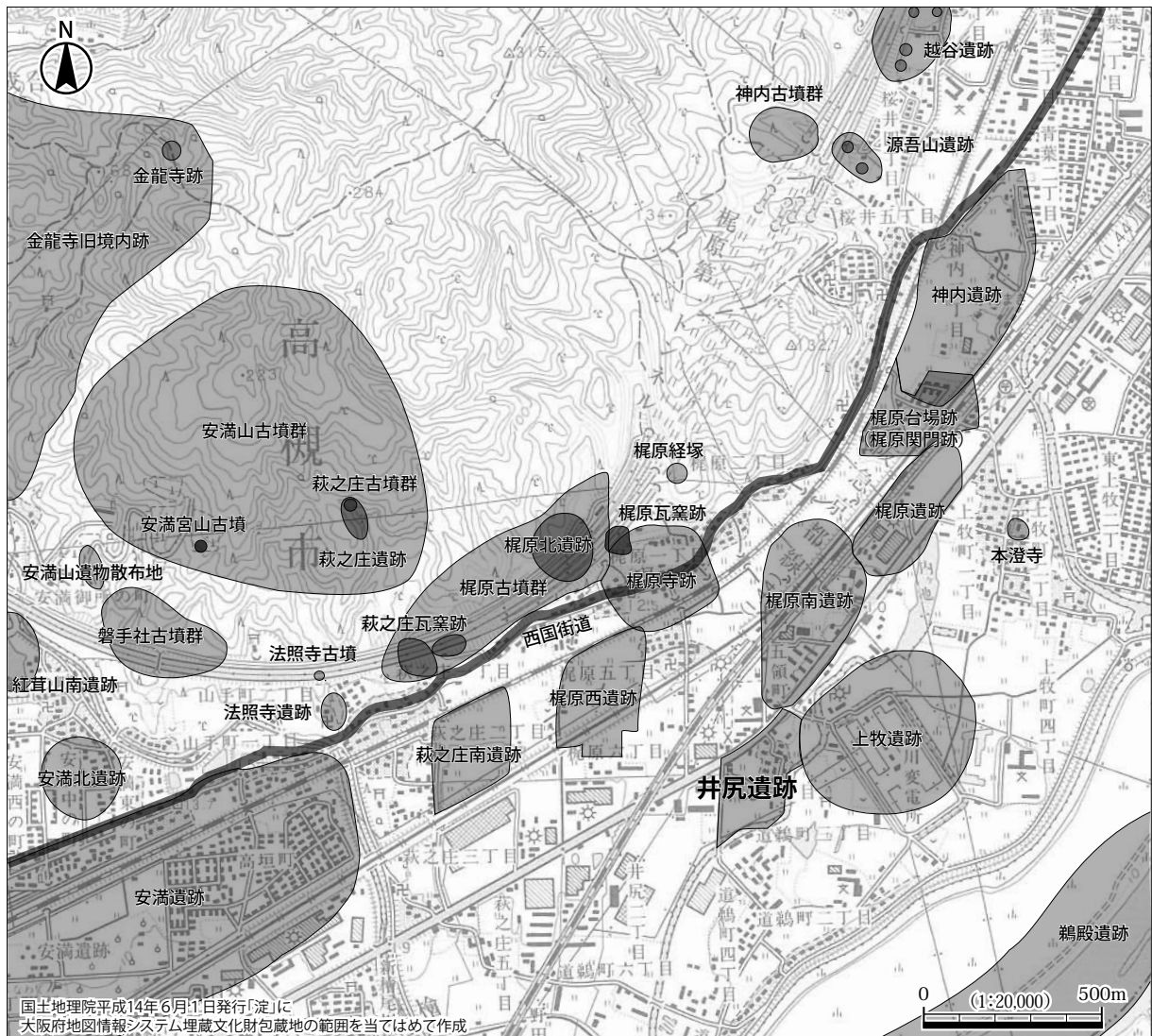


図2 周辺遺跡分布

条里型地割は、梶原西遺跡周辺にその痕跡を認めるのみで、井尻遺跡の西端を画する道路に踏襲された土地区画のラインが、その条里型地割に含まれる可能性はあるが、それ以東の遺跡範囲にはその痕跡らしき土地区画は確認できず、条里型地割が施行されなかったと考えられる。

9世紀末頃、淀川沿いには牧が散在していたらしい。『小右記』に見られる「楠葉牧」はこの付近までも含むという説もある。他に「鳥飼牧」の名や、応永四（1397）年には「井尻牧」の名も見える。周辺には今も「上牧」の他、「三箇牧」「牧野」「牧田」「河原牧」などの地名が残る。淀川流域には摂関家相伝の楠葉牧の他、藤原氏の牧・荘園が多く、後に13世紀初頭頃、春日若宮に寄進されていくが、今も淀川沿いに春日系統の神社が多いのはその名残であろう。『御堂関白記』には楠葉牧に播磨の馬を放牧した記述があり、11世紀初頭頃までは、まだ耕地開発が進まない、実質的な牧であったと思われる。

南の淀川河川敷は「鶴殿の草原」として昭和20（1945）年まで宮内庁雅楽寮に草を納めていた土地で、その地名は紀貫之の『土佐日記』にも宿泊地として見える。11世紀後半には藤原兼家の子孫が鶴殿・井尻に居住し鶴殿氏と称し、開発を進めたいらしい。15世紀頃には周辺は烏丸家の所領となっていた。

当遺跡の東隣の上牧遺跡は大量の瓦器が良好な状態で発見され、瓦器椀編年の基準資料となった事で知られる日本中世考古学の研究史上著名な遺跡である。

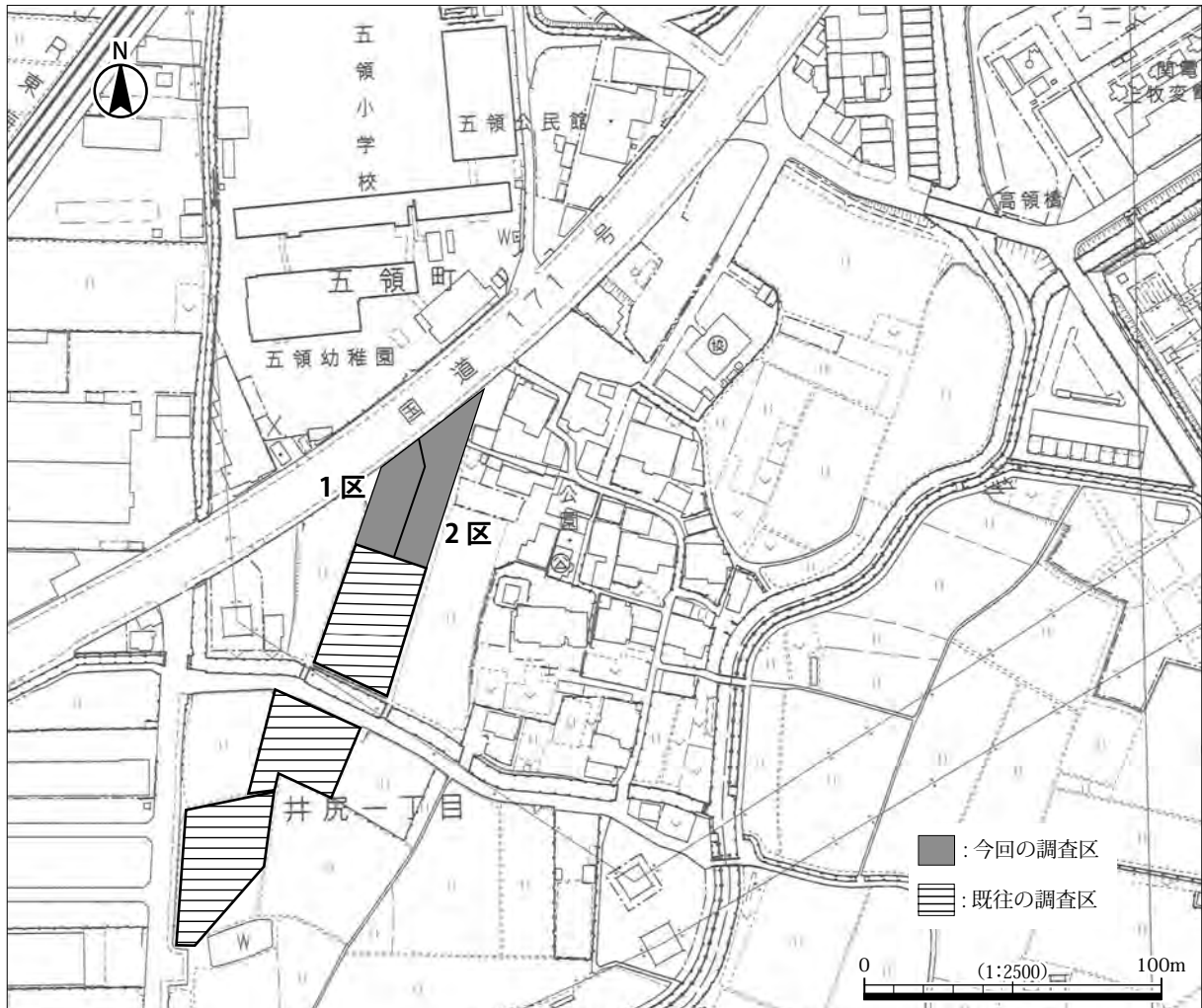


図3 井尻遺跡既往調査区

遺跡周辺は現在でも国道171号、東海道新幹線、JR東海道線、阪急電鉄京都線、名神高速道路が通る交通の要衝で、次第に住宅や工場も増えつつあるが、営々と整備されてきた水路網や複雑な形の耕地区画、そして近世以来の寺社や集落も残り、歴史的景観を留めている。

第3節 これまでの調査について

井尻遺跡は、平成25(2013)年に行われた試掘調査により、遺跡の存在が明らかとなったものである。これまでの調査は、平成25(2013)年11月～平成26(2014)年5月に行われたものが最初であり1次調査となる[大文セ2015]。今回報告する調査が2次調査となる。

1次調査では主に、溝によって方形に区画された11世紀後半の屋敷地と考えられる遺構が検出され、溝の中からは大量に投棄された黒色土器・瓦器・土師器が伴して出土し、瓦器出現期の貴重な資料が得られている。また、青磁碗や青白磁盒子などを副葬した13世紀初頭頃の土壙墓が2基発見されている。そして、13世紀後半には現代に踏襲される水路・耕地区画が成立することが確認された。他に、弥生時代中期中葉～後葉の土坑や古墳時代中期初頭の溝等も検出されており、少なくとも弥生時代中期以降、当地での人々の営みがあったことが明らかにされている。

第3章 調査の方法

第1節 現地調査

〔調査区〕 工程上、南北方向に長い1・2区に分割して調査を行った（図5）。

〔現地調査〕 調査地では、旧家屋の基礎や木の根、アスファルト等が残されていたため、機械により除去した。また、場所によっては厚さ約1mの盛土が確認されたため、盛土についても機械掘削で除去した。また様々な攪乱についても、機械掘削により除去した。その後、旧表土の耕作土層及び近世の耕作土層も機械により掘削した。

続いてスコップ・鋤簾等を使った人力による遺物包含層の掘削、遺構面の精査によって遺構を検出し、遺構面・遺構の確認及び遺物の回収に努めた。遺物の取り上げ、遺構図面の作成、写真撮影等の作業については、当センター作成マニュアル『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠して行った。

〔地区割り・遺物取り上げ〕 地区割りについては、世界測地系に則った平面直角座標系第VI系を基準とし、I～Vの大小5段階の区画を設定した（図4）。これは大阪府内全域に共通する地区割りである。第I区画は大阪府の南西部を通る $X = -192,000\text{ m}$ ・ $Y = -88,000\text{ m}$ を起点に、府域を南北15（A～O）、東西9（0～8）区画に分割したもので、一区画は南北6km、東西8kmとなる。第II区画は第I区画を東西、南北各4分割の、計16区画（1～16）に分けたもので、一区画は縦1.5km、横2.0kmとなる。第III区画は第II区画を東西20（1～20）分割、南北15（A～O）分割する一辺100mの区画

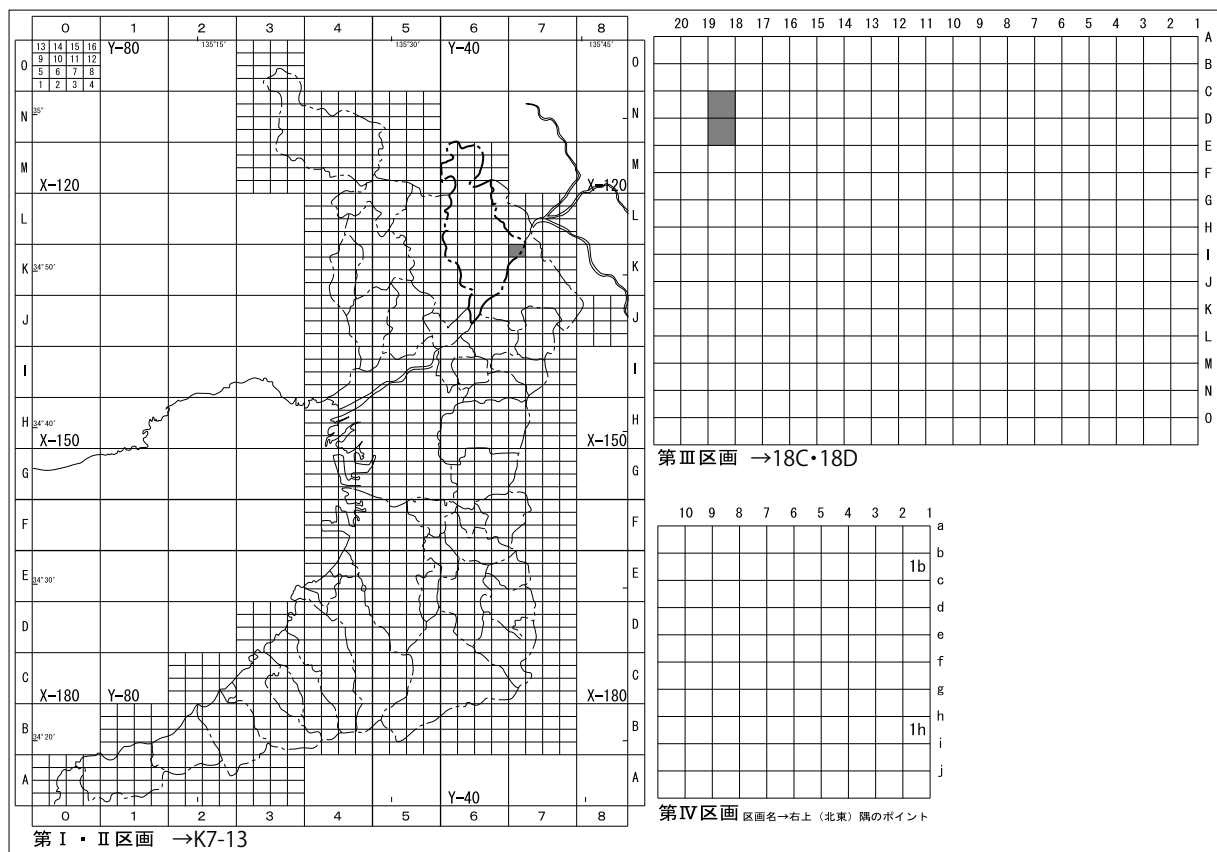


図4 地区割り

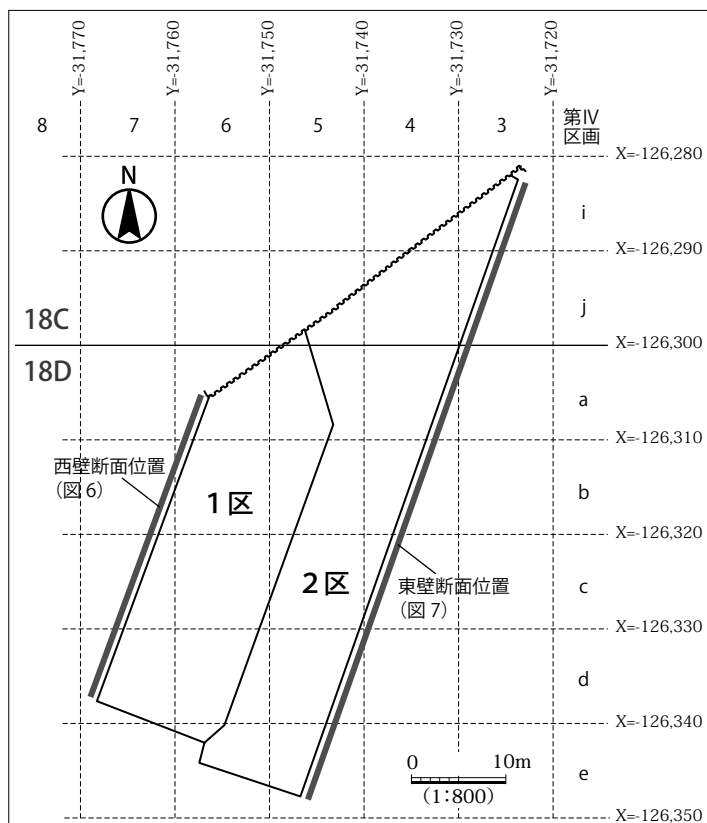


図5 地区割りと調査区配置

である。第IV区画は第III区画をさらに東西、南北ともに10（東西1～10、南北a～j）分割した一辺10mの区画である。

上記の方法で区画した場合、井尻遺跡で使用する第I・II区画は、「K7（第I区画）－13（第II区画）」となり、第III区画は「18C」及び「18D」となる。遺物の取り上げ作業は、この地区割りをうい、基本的に第IV区画の10m区画ごとに行った。遺物取上げ用ラベルへの記入は、煩雑となるため第I・II区画は省略し、第III区画以降を記入した。地区割りの詳細は図5に示した。

〔写真撮影〕遺構の写真撮影は、6×7カメラ、35mmカメラを使用し、それぞれ黒白フィルム、リバーサルフィルムを用いて行った。また、写真台帳作成用にデジタルカメラを使用して撮影を行っ

た。調査区の全景を撮影するような場合には、作業ヤードに制約されず機動性の良さを考慮した、高所作業車を利用して高位置からの写真撮影を行った。

〔遺構図作成〕遺構全体の平面測量は、ヘリコプターによる空中写真測量を行い、50分の1の平面図とそれを縮小編纂した100分の1の遺構全体図を作成した。それ以外に、適宜、平板、エスロンテープやメジャーを使用した図面作成を行っている。そのほか、遺物出土状況等各遺構の詳細図面や、土の堆積状況を示す断面図等については、必要に応じ、随時20分の1・10分の1の図面を作成した。これらの遺構図面はすべて世界測地系に準拠して作成している。方位は座標北を使用し、水準はすべて東京湾平均海面（T.P.）を用いた。このような現地作業における記録類は、A2判図面で69枚になる。

〔遺構番号〕遺構の種類にかかわらず、1～通し番号で振り、遺構の種類は遺構番号の後ろに付した。「1溝」、「2土坑」、「3ピット」という具合である。ただし複数の遺構の集合体である竪穴建物や掘立柱建物などについては、「竪穴建物1」のように前に遺構種類を標記し、後ろに番号を付している。

第2節 整理作業

整理作業の対象となった遺物は、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、灰釉陶器、緑釉陶器、陶磁器類、製塩土器、瓦、木器、石器、鉄器、土製品などで、55×35×15cmの収納コンテナに、36箱にのぼる。これらの整理作業も、当センターマニュアル『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠して行った。

遺物は洗浄し、遺物登録台帳と照合できるよう注記作業を行った。遺物への注記は、マニュアルに従い、「イジリ 15-1-□」（□は遺物登録番号）として各遺物に記入した。破片が小さく記入できない場合や木製品等は、登録番号がわかるよう袋にまとめ、ラベルとともに封入した。

出土遺物は登録番号ごとにデジタルカメラで撮影し、台帳に登録した。その後遺構ごと、また包含

層出土遺物については、近隣の地区とも確認しながら接合作業を行い、必要に応じて石膏を用いた遺物復元作業を行った。同時に実測可能な遺物をピックアップし、ピックアップしたものは順次実測作業を行い、瓦等については拓本をとった。遺物実測数は瓦や木製品等も含め約 350 点となった。実測した遺物については、遺物登録台帳とは別に掲載遺物台帳とリンクした実測遺物台帳を作成した。

上記の手順で作成した遺物実測図は、スキャナーで原図を取り込み、adobe 社製 IllustratorCS5 を用いてトレースし、必要に応じてデジタル化した拓本などのデータを貼り込み、挿図を作成した。最終的には実測した遺物のうちの 342 点を本書に掲載することとした。

遺構図は、空中写真測量によって全体図が既にデジタル化されているものは、必要な箇所を拡大・加工し、遺構平面図を作成した。それ以外の場合は、原図を遺物同様の手順でデジタルトレースをし、主要遺構については、現地で作成した実測図を編集し、デジタルトレースにより挿図を作成した。報告書掲載の挿図は、遺構図・遺物実測図ともにデジタルデータによって作成した。

現地で撮影した遺構面及び個別遺構の写真に関しては、報告書に掲載するものを選別し、デジタル化作業を行った。また、出土遺物については、報告書に掲載するものを選別し実測作業の後、写真撮影し、デジタル化作業を行った。遺物写真については、中部調査事務所の写真室において撮影を行った。以上の作業と併行して報告文を作成し、編集作業を行った。また、編集作業と併行して出土遺物は報告書掲載遺物と未掲載遺物に分類し、収納作業を行った。併せて、現地にて作成した遺構図面や撮影した遺構写真の整理・収納を行い、これらも台帳に登録した。



写真 1 現地調査及び整理作業風景

第4章 調査成果

第1節 基本層序

今回の調査区は、北北東—南南西方向に細長いものである。1区西壁と2区東壁の断面を図化し、基本層序として示す（図6・7、写真図版1）。

盛土：調査区全域に認められた。国土地理院地図（GSI Maps）の1945～1950年の空中写真を見ると、当地は水田である。これ以降に宅地化するにあたって施された盛土と考えられる。層厚0.2～0.9m前後。なお、2区北東隅で池を検出した。国土地理院地図（GSI Maps）の1945～1950年の空中写真を見ると当該箇所には池があることがわかる。国道171号の拡張に伴って、あるいは当地の宅地化に伴って埋められたものと推定できる。池の開削時期については不明である。

第1層：旧表土である。灰色シルト質粘土を主体とする。層厚は20cm前後。なお、本層は部分的に2層に細分できる。東側が若干高く、西側が低くなる地形であり、西側に土層が増える傾向にある。

第2層：2層に細分される。第2-1層は黄灰色極粗砂混粘質シルトを主体とする。層厚は5cm～20cm前後。東壁では大礫～細礫が混じる。第2-2層は灰黄色粗砂混極細砂質シルトを主体とする。層厚は5cm～20cm前後。東壁では中礫～細礫が混じる。第2-1層は調査区全域で見られる層であるが、第2-2層は1区において認められた。第2-1層の方が粒径の粗い礫が混じる傾向にある。第2層を除去した面を第1面として調査した。中世後半以降の作土層と考

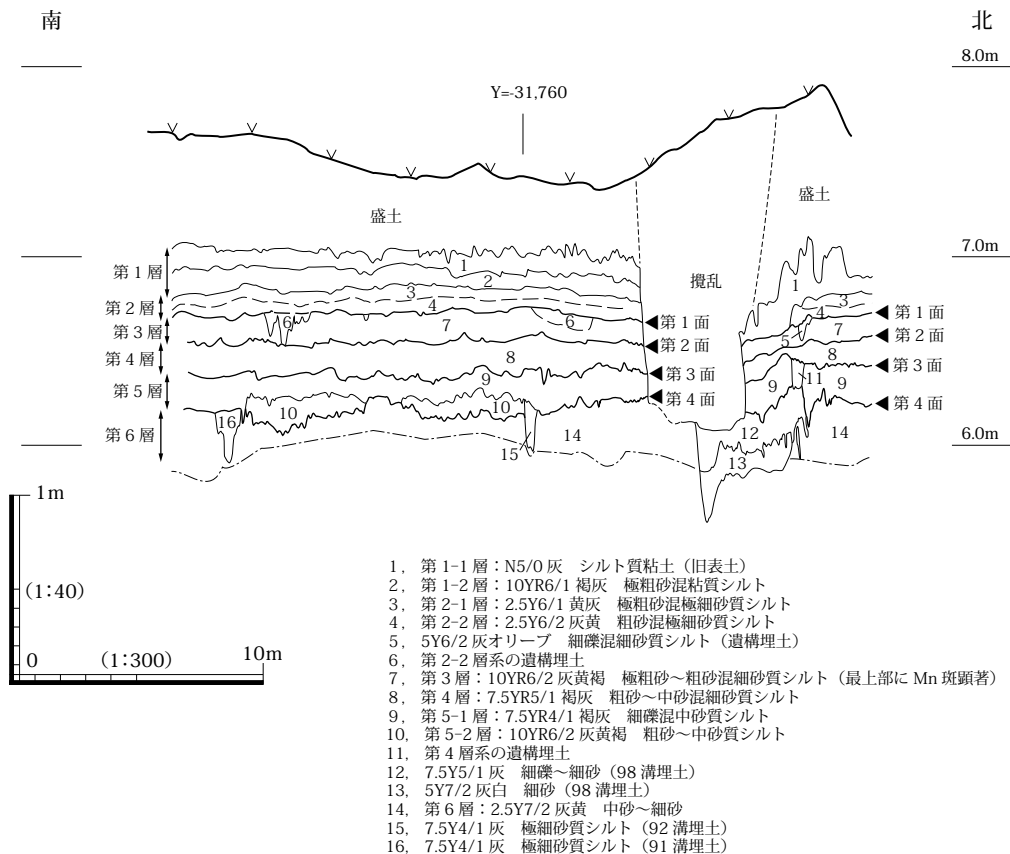
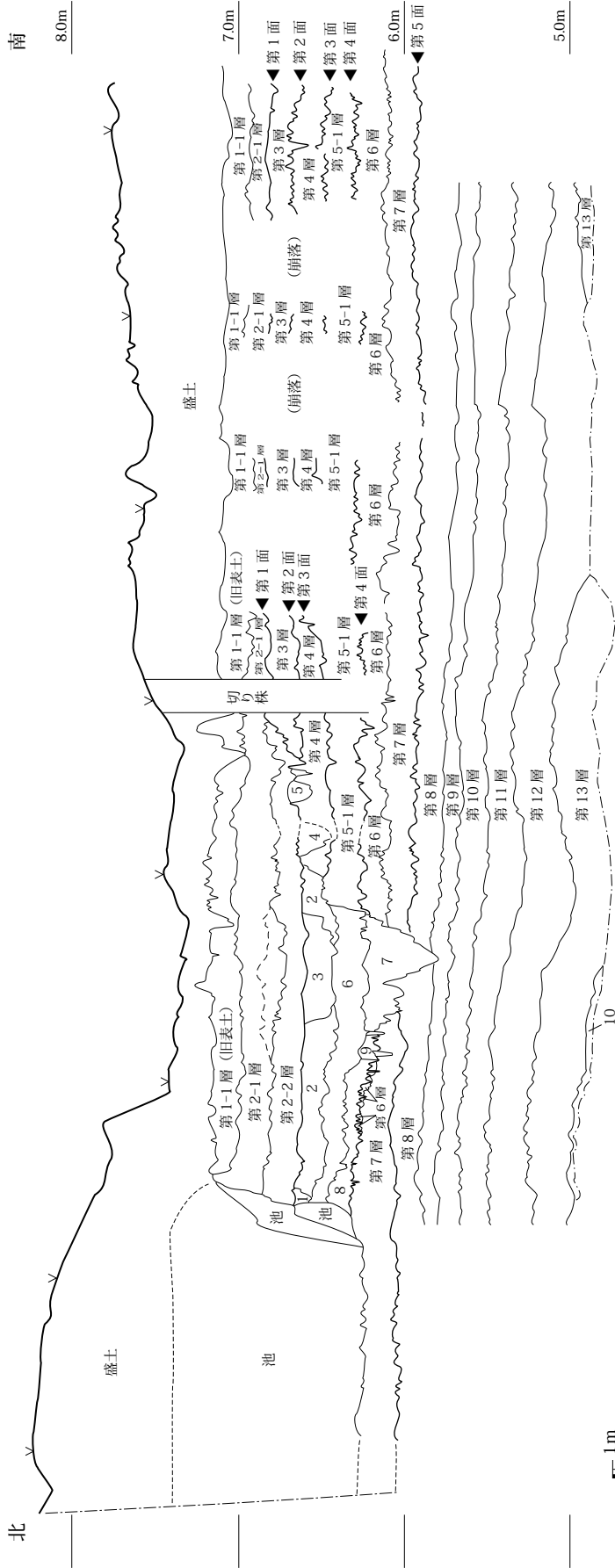


図6 西壁断面



- 第1-1層：N5/O灰 シルト質粘土 (旧表土)
 第2-1層：2.5Y6/1 黄灰 極粗砂混極細砂質シルト (東壁では大礫～細礫を含む)
 第2-2層：2.5Y6/2 灰黄 粗砂混極細砂質シルト (東壁では中礫～細礫を含む)
 第3層：10YR6/2 灰黄褐 極粗砂～粗砂混細砂質シルト (最上部に Mn 斑顯著)
 第4層：7.5YR5/1 褐灰 粗砂～中砂混細砂質シルト
 第5-1層：7.5YR4/1 褐灰 細礫混中砂質シルト
 第6層：2.5Y7/2 灰黄 中砂～細砂
 第7層：2.5Y6/2 灰黄 中砂～極細砂
 第8層：5Y5/1 灰 極細砂質シルト～粘土
 第9層：2.5Y6/1 オリーブ灰 シルト質粘土
 第10層：N3/O 暗灰 粘土
 第11層：5Y5/1 灰 シルト質粘土 (鉄分沈着顯著)
 第12層：5Y7/1 灰白 シルト質粘土 (鉄分沈着顯著)
 第13層：10YR4/1 褐灰 粘土 (鉄分沈着顯著)
1. 2.5GY6/1 オリーブ灰 細礫混中砂質シルト (遺構埋土か)
 2. 10YR6/4 深い黄橙 細礫～極粗砂混細砂質シルト (上半分酸化著しい) (167 落込み埋土)
 3. 5Y7/1 灰白 極細砂混極細砂質シルトに2.ブロック混じる (167 落込み埋土)
 4. 5Y6/1 灰 極細砂混極細砂質シルト (遺構埋土)
 5. 5B6/1 青灰 極細砂混粘質シルト (遺構埋土)
 6. 10YR6/2 灰黄褐 細礫混中砂質シルト (167 落込み埋土)
 7. 10Y6/1 灰 細礫～細砂 (195 流路埋土)
 8. 10YR7/1 灰白 細礫混中砂質シルト (遺構埋土 (調査区外に存在する可能性が高い))
 9. 2.5Y5/2 暗灰黄 極粗砂混中砂質シルト (195 流路埋土)
 10. 5B6/1 青灰 細砂～シルト

図7 東壁断面

えられる。

第3層：灰黄褐色極粗砂～粗砂混細砂質シルトを主体とする。層厚 15～20cm 前後。最上部はマンガン斑が顕著である。2区北東部の地割が異なる箇所では確認できなかった。当層を除去した面を第2面として調査した。出土遺物から中世の作土層と考えられる。井尻遺跡 13-1 調査の第3-1層に相当する。

第4層：褐灰色粗砂～中砂混細砂質シルト。層厚は 15～20cm 前後。調査区全域で認められた。当層を除去した面を第3面として調査した。層中には瓦器が含まれている。中世前半頃の作土層と考えられる。なお、当層を除去した第3面では、第4層下面遺構として異なる方向の耕作溝を検出しており、当層形成中に地割が変更された可能性が高い。井尻遺跡 13-1 調査の第4-2層に相当するか。

第5層：2層に細分される。第5-1層は褐灰色細礫混中砂質シルトを主体とする。層厚は 15～20cm 前後。調査区全域で認められた。第5-2層は灰黄褐色粗砂～中砂質シルト。第6層が若干擾乱を受けたように見える層であり、1区の一部に認められた。層厚は 10～20cm 前後。第5層を除去した面を第4面として調査した。層中には瓦器を含まず、黒色土器や須恵器・土師器を含む。古代に属する作土層もしくは土壌化層と考えられる。井尻遺跡 13-1 調査の第5層に相当すると思われる。

第6層：灰黄色中砂～細砂を主体とする。層厚は 10～25cm 前後。調査区全域で認められた。氾濫堆積層と考えられる。若干擾乱を受けている。

第7層：灰黄色中砂～極細砂。層厚は 15～30cm 前後。氾濫堆積層と考えられる。第6層に比べて粒径が細かい。当層を除去した面を第5面として調査した。なお、第5面で検出した溝の切込み面は、第6層中で形成された可能性が高い。

以下の層序は深掘りトレンチで確認したものである。いずれの層からも遺物は出土していない。

第8層：灰色極細砂質シルト～粘土を主体とするものである。層厚は 10～20cm 前後。水成堆積層と考えられる。北から南へ緩やかに傾斜している。

第9層：オリーブ灰色シルト質粘土。層厚は 10～15cm 前後。水成堆積層と考えられる。北から南へ緩やかに傾斜している。

第10層：暗灰色粘土。層厚は 10～20cm 前後。水成堆積層と考えられる。北から南へ緩やかに傾斜している。

第11層：灰色シルト質粘土。層厚は 15～25cm 前後。鉄分の沈着が顕著である。水成堆積層と考えられる。北から南へ緩やかに傾斜している。

第12層：灰白色シルト質粘土。層厚は 20～30cm 前後。鉄分の沈着が顕著である。水成堆積層と考えられる。北から南へ緩やかに傾斜している。

第13層：褐灰色粘土。層厚は 25～30cm 前後。鉄分の沈着が顕著である。水成堆積層と考えられる。北から南へ緩やかに傾斜している。

さらに、第13層の下には砂が堆積しており、氾濫堆積層が広がっているものと想定される。

第2節 検出遺構面の概要

今次調査で検出した遺構面の概況をここでまとめて報告する。

第1面（図8）

第2層を除去して検出した面である。遺構面の標高は6.6～6.8mで、概ね南西方向へ緩やかに傾斜する。第1面では耕作に伴う小溝を検出した。小溝は、1溝群と2溝群に分別できる。1溝群としたものは、灰色シルト質粘土を埋土とする溝である。これは第1層系の埋土であり、旧表土に伴う耕作溝が極めて深くまで掘削されたために残存したものである。溝の方位はN-20°-Eとそれに直交するものがある。現行の地割に合致するものである。2溝群はいずれも第2層の下面遺構である。極細砂質シルトを埋土とする。①N-20°-Eを指向する溝、②N-25°-Eを指向する溝、③N-40°-Wを指向する溝、④N-70°-Wを指向する溝の大きく4つに分けられる。1溝群とは異なる方向を指向する溝がある。また、調査区中央を斜めに横断する溝があり、どの溝の方向にも関連が見出せない。これは後述の第3面195流路の影響が残っているためと考えられる。溝からは土器の細片が出土しており、それらの時期から概ね中世以降の時期が与えられる。井尻遺跡13-1調査の第3-1面と同一面と判断する。

第2面（図9・写真図版12）

第3層を除去して検出した面である。遺構面の標高は6.5～6.6mで、概ね水平である。第2面では掘立柱建物・溝・落込み・ピットを検出した。掘立柱建物は2棟あり、いずれも2区で検出した。掘立柱建物3は鎌倉時代に、掘立柱建物2は平安時代中期に属するもので時期差が認められる。ピット掘方の規模や、主軸の方向も異なる。溝は北東-南西方向を指向する4溝があり、それに平行する3・6溝が等間隔で並ぶ。概ねN-75°-Wを指向する。3・6溝は幅0.6～1.0mで深さおよそ0.2m。4溝に比べると規模は小さい。4溝は平安時代後期に埋没している。4溝の北側に167落込みを検出した。4溝と167落込みの関係は調査で明らかにすることができなかった。しかし、167落込みの北側では4溝の続きを検出しなかったため、167落込みとの接点辺りで4溝が始まる蓋然性が高い。4溝は最下部に流水堆積層があり、水路として機能していた可能性がある。底面のレベル差がほとんどなかったが、北から南へ流水があったことが考えられる。ただし、167落込みには流水の痕跡はなく、水路として機能していたならば、第3面検出とした195流路とセットであるほうが整合的である。167落込みとその下の195流路はどちらも第2面に帰属させたほうがよいのかもしれない。4溝以外にも方向を異にする164・144溝がある。164溝は鎌倉時代に属するもので掘立柱建物3と近い時期のものである。狭い範囲での調査の所見であるが、4溝以東167落込み以南のエリアに建物が建てられており、集落域になるうか。

第3面（図10・写真図版11）

第4層を除去して検出した面である。遺構面の標高は6.3～6.5mで、概ね南西方向へ緩やかに傾斜する。第3面では溝・落込み・土坑・ピット・畦畔・流路を検出した。溝は浅い小溝が多く、耕作に伴う溝と考えられる。埋土は第4層系のもので第4層下面遺構であろう。方向が異なる数種がある。

①N-25°-Eを指向する溝、②N-65°-Wを指向する溝、③N-35°-Wを指向する溝、④N-55°-Eを指向する溝の大きく4つに分けられる。溝の切り合い関係から③の方向の溝から①の方向の溝へと変化したことがわかる。なお、③方向の溝に伴い、一部ではあるが畦畔状の高まりも検出している。①は第1・2面で検出した溝の方位と概ね合致することから、これ以降地割がほぼ踏襲されてきたものと推測する。当面の時期には主に耕作地として使用されていたことが明らかとなった。

ピットは調査区南端部でまとまって検出した。そのうちの63ピットからは柱材が出土したが、建物の復元には至らなかった。井尻遺跡13-1調査結果からもこの場所以南でピットが密集して見つまっていることから集落域になるものと推定する。流路は調査区北端で検出した。前述したようにこの流路は第2面帰属としたほうが理解しやすいと考える。時期は平安時代中期に属する。

第4面（図11・写真図版3）

第5層を除去して検出した面である。遺構面の標高は6.1～6.4mで、概ね南西方向へ緩やかに傾斜する。第4面では掘立柱建物・溝・落込み・土坑・ピットを検出した。掘立柱建物は3棟あり、調査区中央で検出した。掘立柱建物1と4は概ね主軸方位を同じくするもので、規模もよく似ている。掘立柱建物1のピットから古墳時代後期の遺物が出土してはいるが、掘立柱建物4では時期を示すものがなく、古墳時代後期に属する可能性を考えながらも、もう少し幅を持たせて見たほうがよいかもしれない。特に掘立柱建物4はその構造が特異で、神社建築の建物に似るため、時期比定に慎重にならざるをえない。掘立柱建物5は柱の掘方の規模がとて大きく大型の建物になる可能性がある。奈良時代に属する蓋然性が高い。

溝は幅の広い大規模なものが調査区中央で見つかった。古墳時代中期の遺物がまとまって出土した。付近に集落の存在を窺わせるような土器組成のものである。集落を区画するような溝の可能性もあろう。

今次調査で特筆すべき成果として196落込みが挙げられる。大量の土師器高杯とともに、滑石製模造品、鉄器がまとまって出土した。祭祀を行った場と考えられる。古墳時代中期に属する。98溝の時期と同じであり、98溝が集落を画する溝であったならば、集落の端で祭祀を執り行ったと見ることもできよう。当遺構面では古墳時代～奈良時代に属する遺構を検出した。

第5面（図12・写真図版2）

第6・7層を除去して検出した面である。遺構面の標高は5.8～6.1mで、概ね南西方向へ緩やかに傾斜する。第5面では溝を検出した。概ね南北方向を指向する258溝である。溝の詳細については後述するが、当溝は断面観察の結果、第6層中に立ち上がりが見られそうだとことが判明した。またこの溝は水の営力により自然に形成されたものである蓋然性が高い。井尻遺跡の北東に、国道171号を挟んで梶原南遺跡が存在する。過去の調査において同様の方向を指向する溝が数条検出されており、いずれかが一連の溝になる可能性がある。

258溝の埋没時期と第4面の古墳時代中期に属する遺構の時期差はほとんどない。

今次調査で検出した遺構面では古墳時代～中世以降まで、長い歴史の中で人々が営みを送ってきたことを如実に示す遺構が数多く検出された。次節でその具体について報告する。

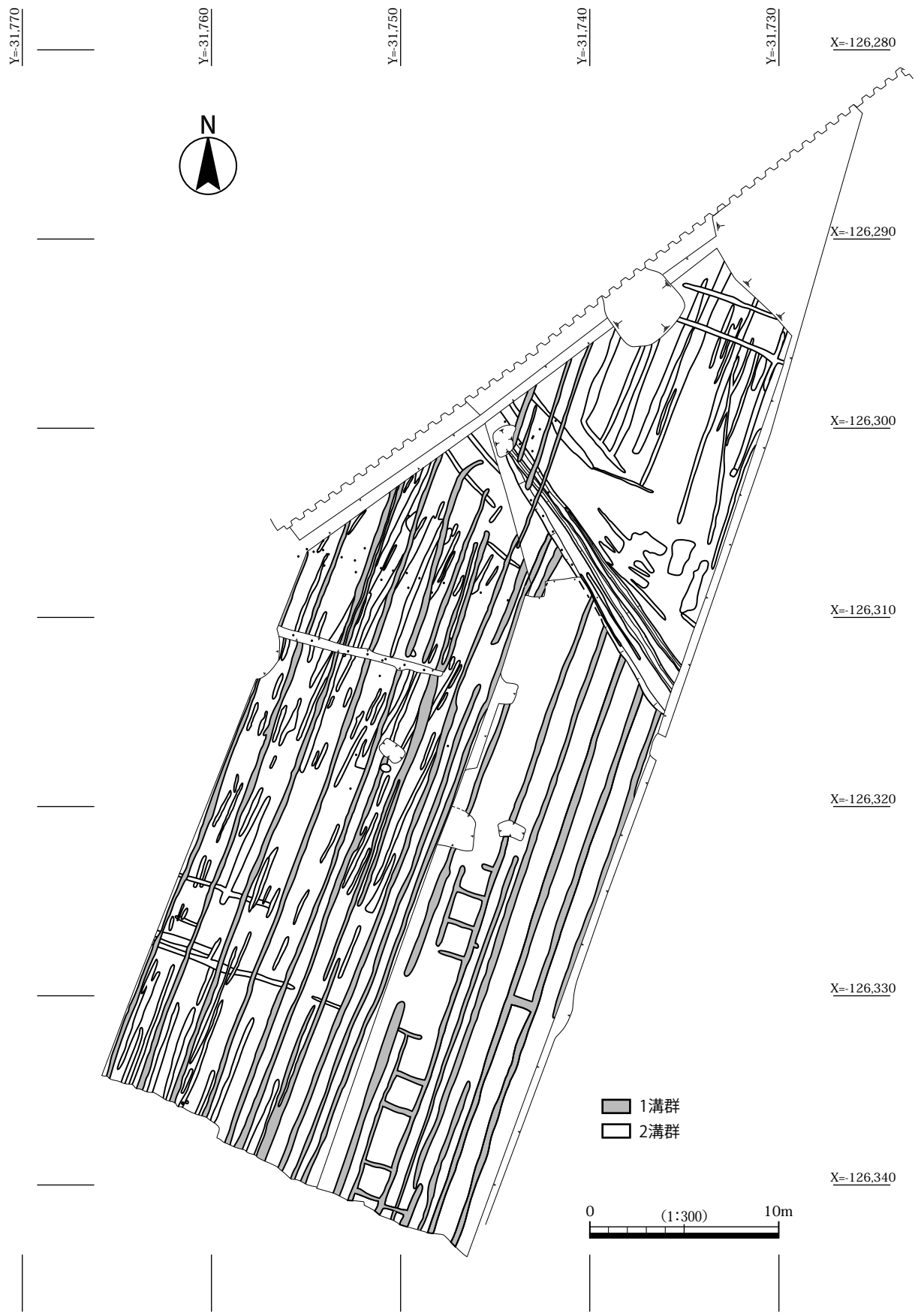


图8 第1面 平面

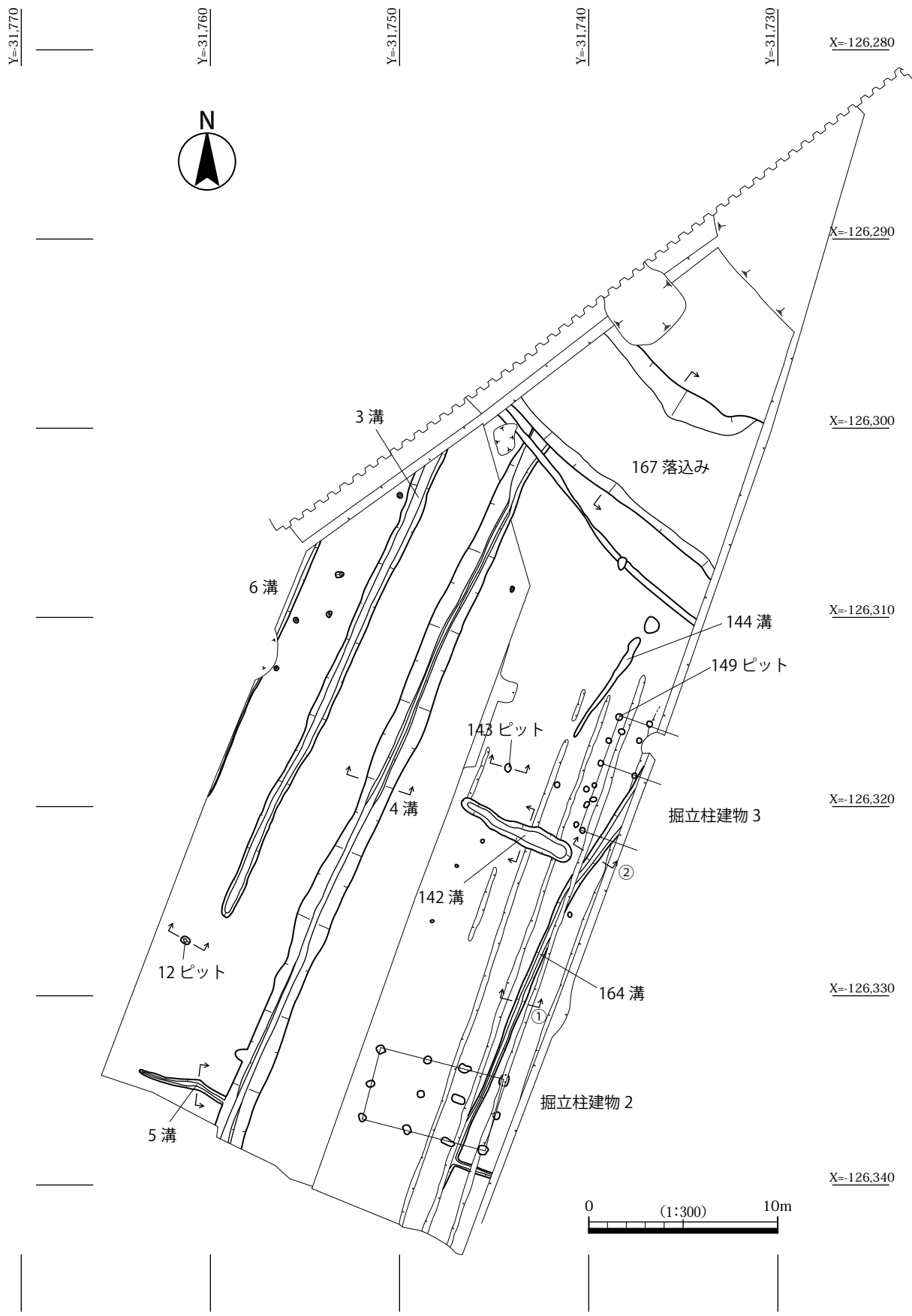


図9 第2面 平面

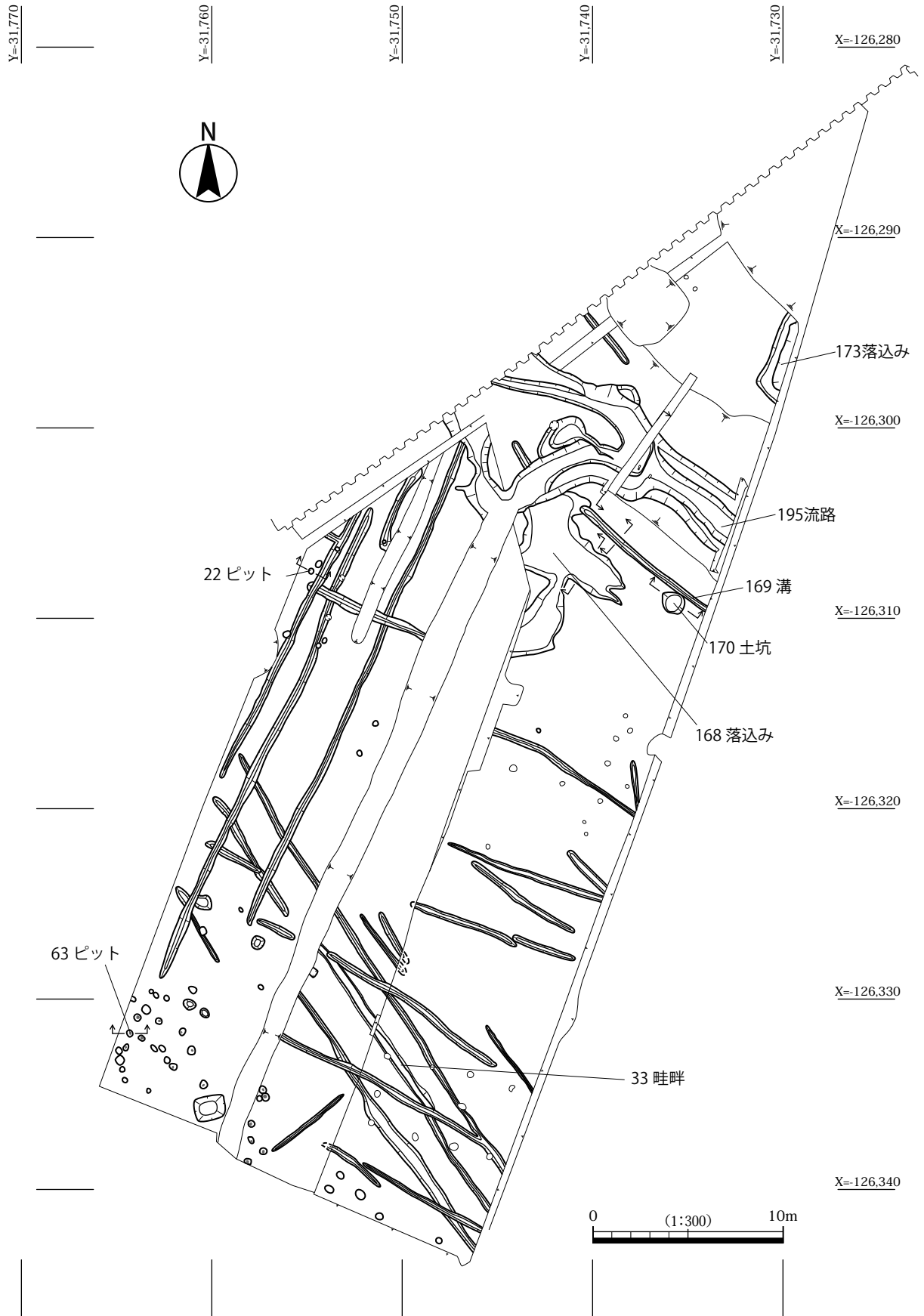


図10 第3面 平面

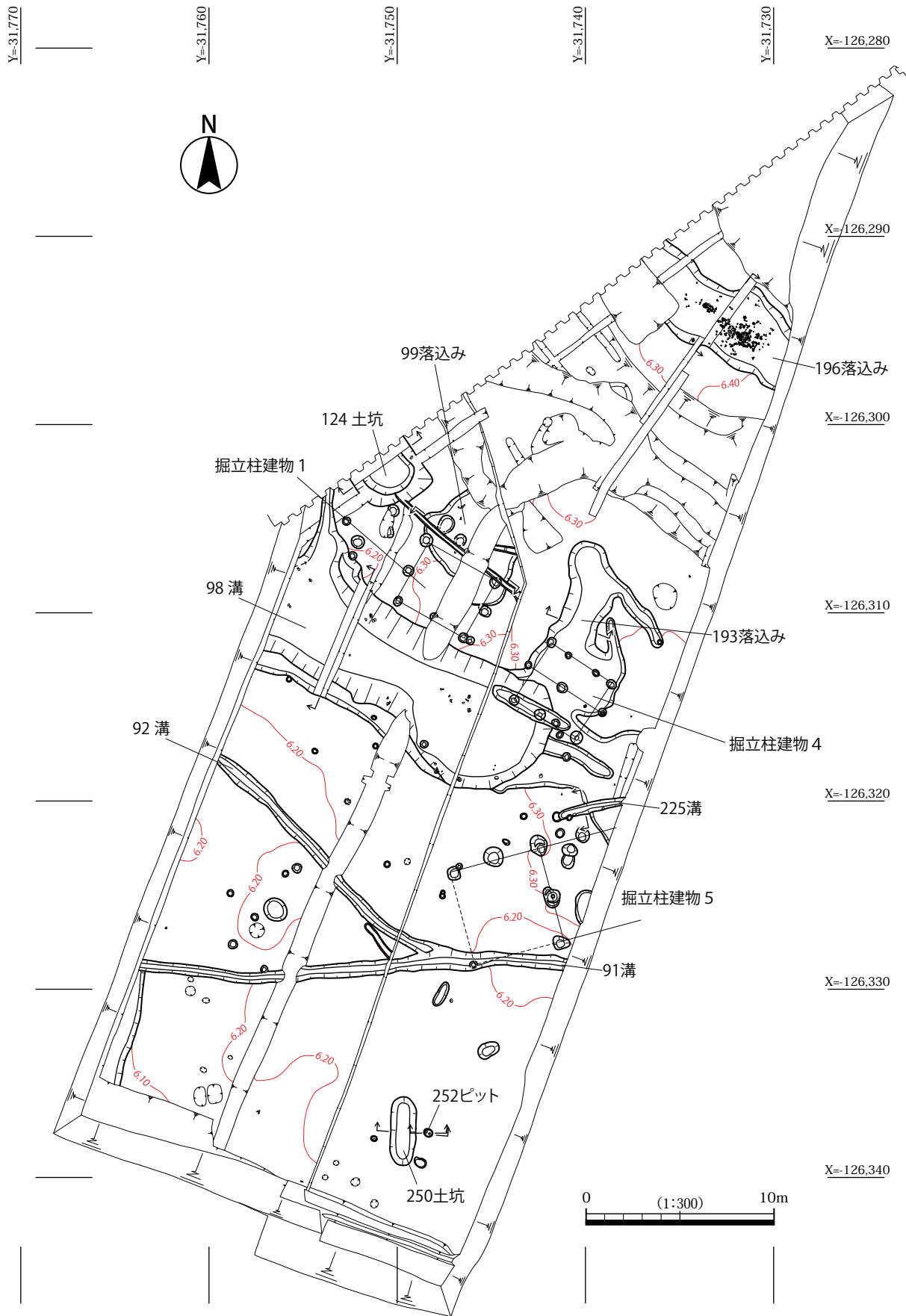


図 11 第 4 面 平面

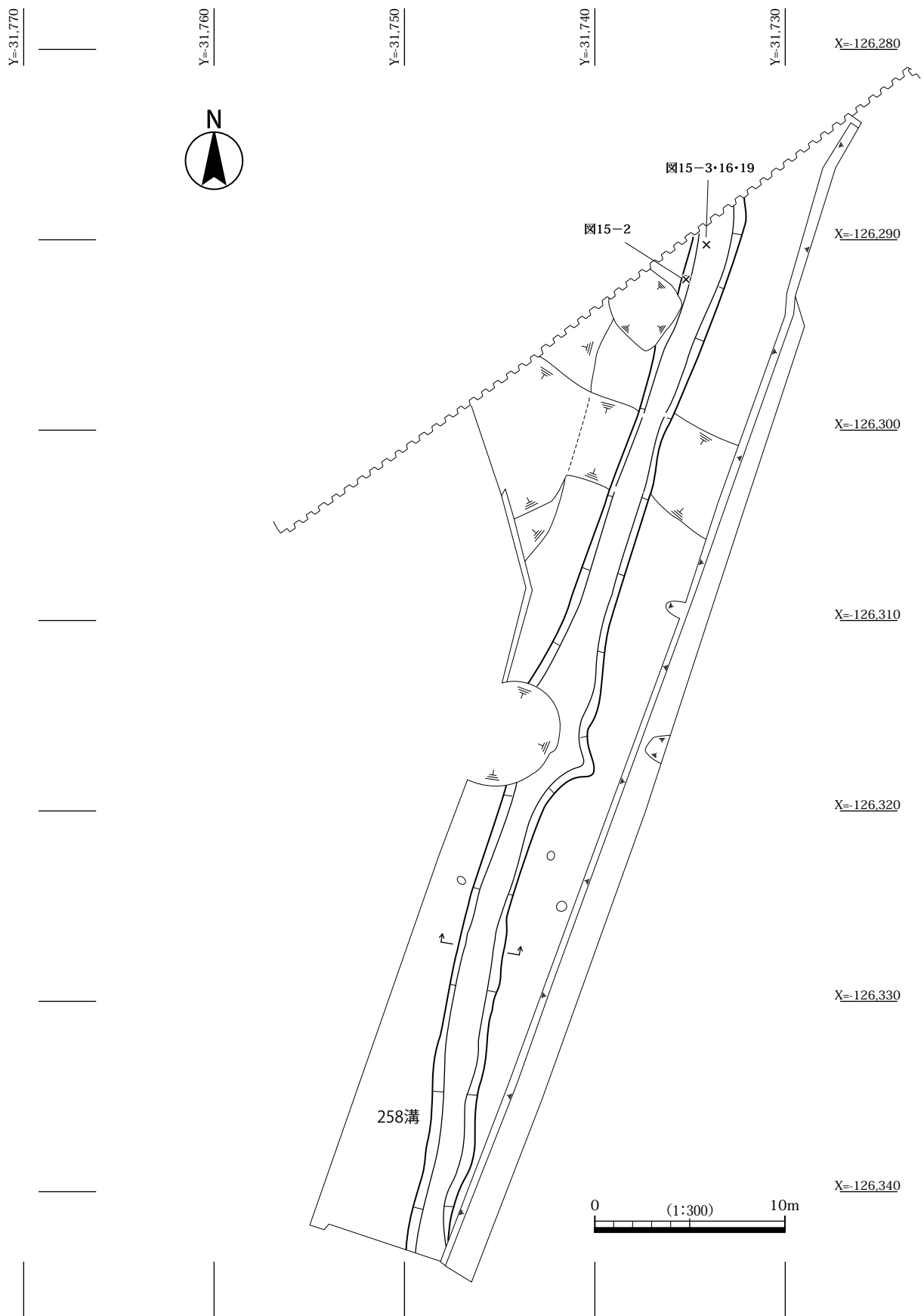


图 12 第 5 面 平面

第3節 弥生時代の遺物

今次調査では弥生時代に属する遺構は検出されなかったが、当該期所産の石器が1点、後世の195流路から出土した。1は磨製石鏃である(図13、写真図版15)。粘板岩製で、長さ5.2cm、重量2.81gである。明瞭ではないが片面に鑄が認められる。一部未研磨部分があるが全体的に丁寧に研磨されている。

高槻市域では、古曽部・芝谷遺跡の住居址や環濠〔高槻市教育委員会1996〕、成合遺跡の段状遺構4〔大文セ2014〕から出土している(註1)。時期は概ね弥生時代中期後半～後期初頭に属するとされる。1はこれらの遺跡出土品に比べて若干幅が狭く細長い形態であるが、同様の時期に位置付けられよう。井尻遺跡13-1調査の第7面検出1071土坑〔大文セ2015〕から弥生時代中期後半の土器がまとまって出土していることから、時期的な矛盾はなく、付近に当該期の集落が存在する可能性がある。

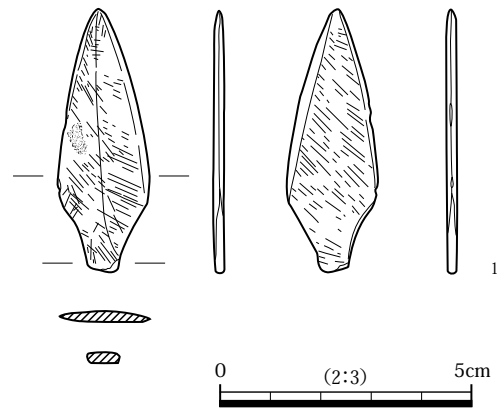


図13 弥生時代の遺物

第4節 古墳時代中期の遺構と遺物

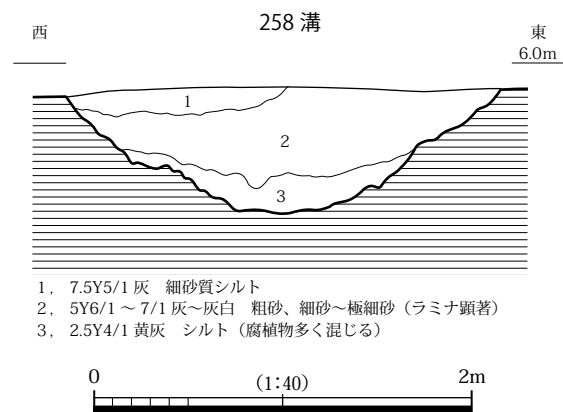
古墳時代中期に属する遺構は第4面・第5面で検出した。遺物は第5層で最も多く出土した。

1. 258溝 (図12・14・15、写真図版2・15)

2区第5面で検出した。両端部が調査区外になるため全容は明らかでないが、北北東-南南西を指向する。概ねN-20°-W。中央付近でN-10°-Wと若干方向を変える。検出した部分の規模は、幅1.8~3.8m、深さ0.4~0.7mを測り、検出長約57mである。断面形は椀形で、埋土は砂を主体とする。最下部に腐植物が混じる堆積層があり、その上にラミナが顕著な砂層が堆積していることから流水があったことがわかる。当溝は一時期流路であったものと判断できる。遺物は北端部と南半部で出土した。北端部の最終埋没層から2・3・16・19が出土し(写真図版2-4・5)、それ以外の遺物は南半部で出土した。

なお、前述したが、当溝は第6層中の切込みである蓋然性が高い。第6・7層掘削中に当溝部分に該当する場所で遺物が集中して出土した。井尻遺跡13-1調査1トレンチ第6面古検出の1476溝〔大文セ2015〕に続くものである。

埋土中から2~19(図15)が出土した。前述したように2・3・16・19は北端部出土で、それ以外は南半部出土である。2・3は須恵器有蓋高杯。2は脚部に円形の透かしを3方に穿つ。3は脚部に台形の透かしを3方に穿つ。異なる脚部形態のものが共伴している。4~6は土師器



- 1, 7.5Y5/1 灰 細砂質シルト
- 2, 5Y6/1~7/1 灰~灰白 粗砂、細砂~極細砂(ラミナ顕著)
- 3, 2.5Y4/1 黄灰 シルト(腐植物多く混じる)

図14 258溝 断面

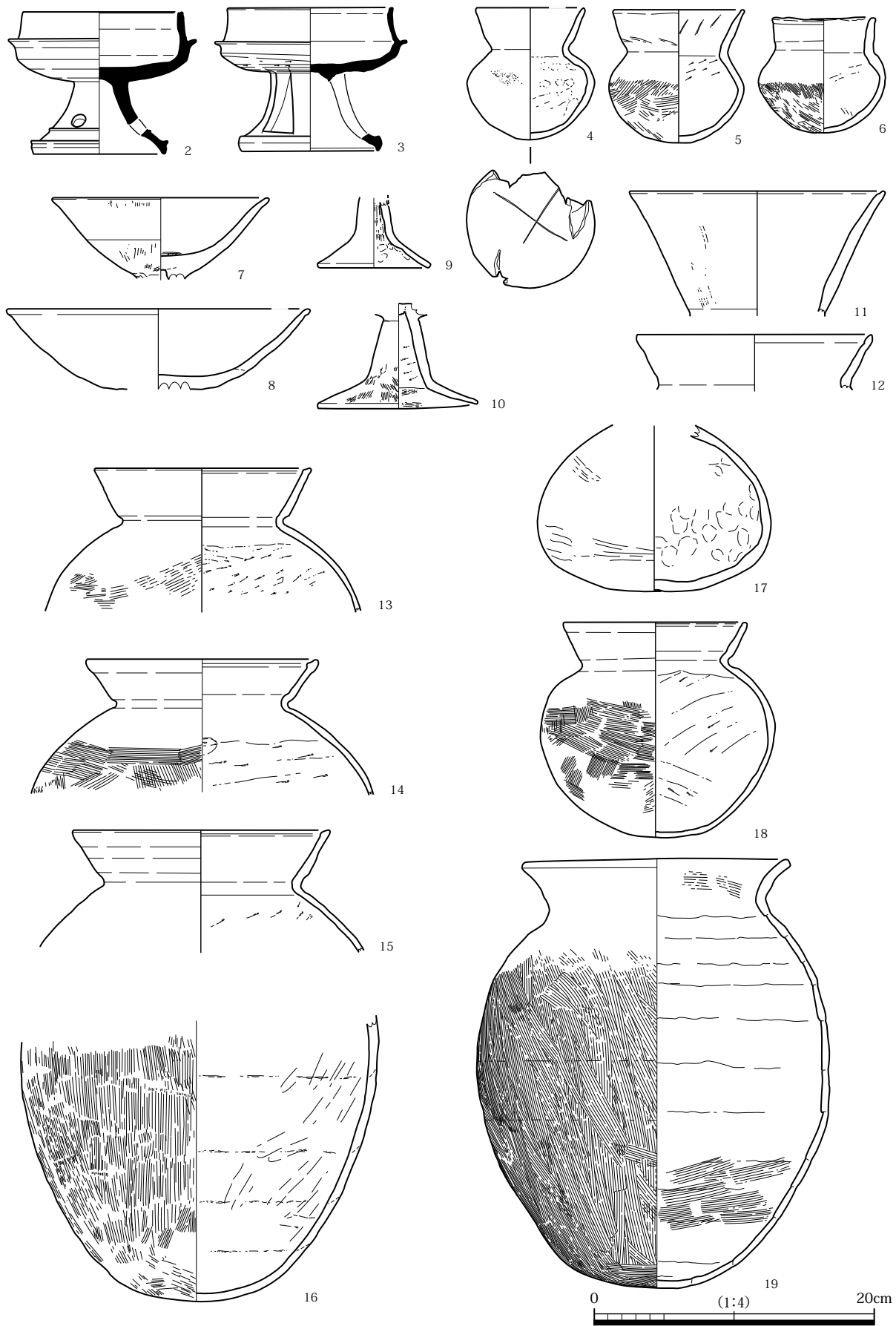


图 15 258 沟 出土遺物

小型丸底壺。いずれも体部外面ハケ、体部内面ケズリ調整である。4は底部外面に×の線刻あり。5・6は煤が付着する。7～10は土師器高杯。7は無稜外反高杯。8は無稜直口高杯。11・17は直口壺。12～16・18・19は甕。このうち12～15は布留式甕である。

北端部と南半部で出土した遺物は若干の時期差が認められる。北端部出土のものはTK208型式、南半部のものはそれよりもやや古く、布留4式古相～新相に位置付けられる。井尻遺跡13-1調査1トレンチ第6面古検出の1476溝及び1475溝出土遺物〔大文セ2015〕についても、無稜直口高杯が含まれる点、須恵器を含んでいない点等を考慮すると、当溝南半部出土遺物と同時期・同組成と判断され、一連のものである蓋然性が高い。付近に当該期の集落が存在する可能性がある。

当溝は古墳時代中期中葉には埋没したものと考えられる。後述する当溝埋没後に形成された196落込みと98溝の時期も概ねTK208型式であることを考え合わせると、当溝埋没後すぐに主軸を異にする遺構が形成されたものと推測する。

2. 196落込み (図11・16、写真図版8・16～19、巻頭原色図版2)

2区第4面で検出した。X=-126,295、Y=-31,732地点に位置する。両端部が調査区外になるため、全容は明らかでない。検出した部分の規模は長さ約9m、幅3.1～4.1mを測り、平面不整形になると思われる。断面形は皿形で、深さ0.18mを測る。埋土は砂質シルトを主体とする。当落込み全域から遺物が出土した。集中する箇所があり、まとまりとしていくつかの単位に分けられる可能性があったが、調査時には明らかにできなかった。出土遺物の多くは土師器高杯であったが、明らかに伏せて置いてあるものが認められた。また、土師器甕は重なり合った遺物の最上部で出土した。

埋土中から20～152・357～402 (図18～22・26、写真図版16～19)が出土した。出土遺物は、土師器(20～86)、須恵器(88～100)、製塩土器(357・358)、石器(87)、滑石製模造品(101～128・359)、鉄器・鉄滓等(129～152・360～402)があり、多種多様である。

土師器のうち、20～61・64・65は椀形高杯。脚部と杯部を接合することで高杯としているものである。接合部外面に粘土を貼り付けるため若干の盛り上がりがある。その粘土を張り付けた部分に縦ハケ調整するものと指オサエのままのものがある。このうち20～31・44～52・61・62は杯部と脚部接合部分の脚部内面に棒状工具の痕が残るものである。棒状工具は径3～7mm程度のもので、径4mmのものが多い。その痕跡から竹のような中空の棒が想定されるものもある。杯部内外面の調整については、ハケ目を残すものが3点あるが大半はナデ調整である。杯部口径の平均値13.3cm、器高の平均値11.1cmである(第5章図52参照のこと)。当落込みで出土した高杯は、黒斑が認められるものが4点

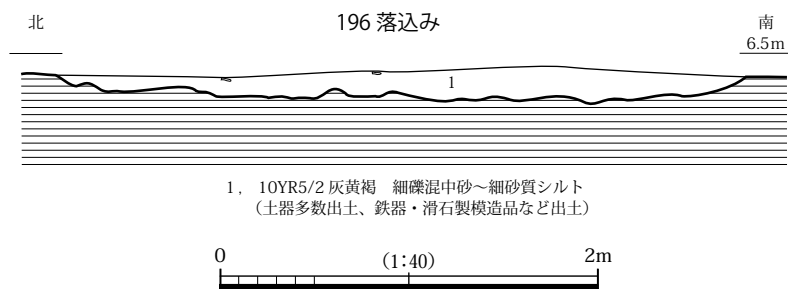


図16 196落込み 断面

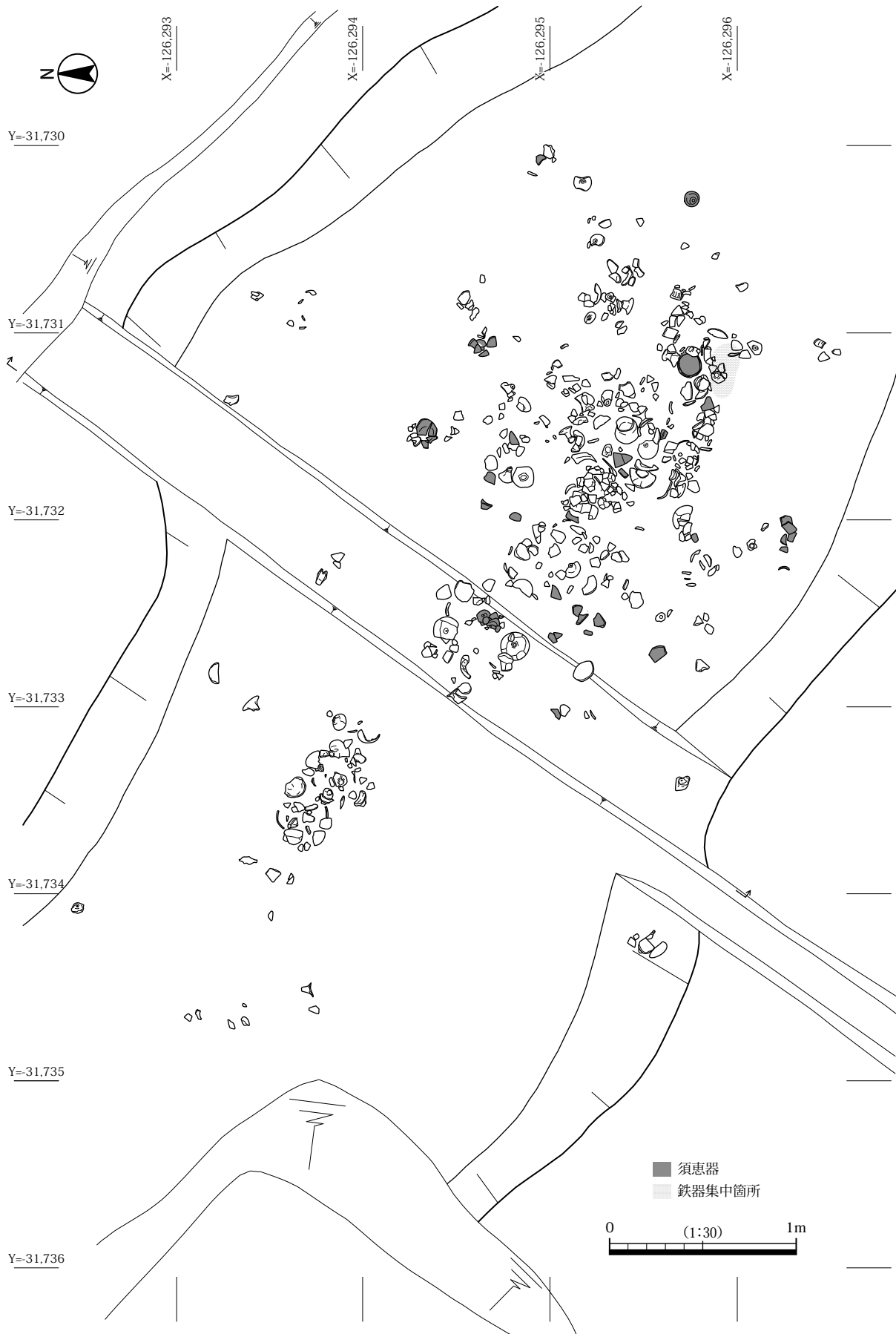


図 17 196 落込み 遺物出土状況

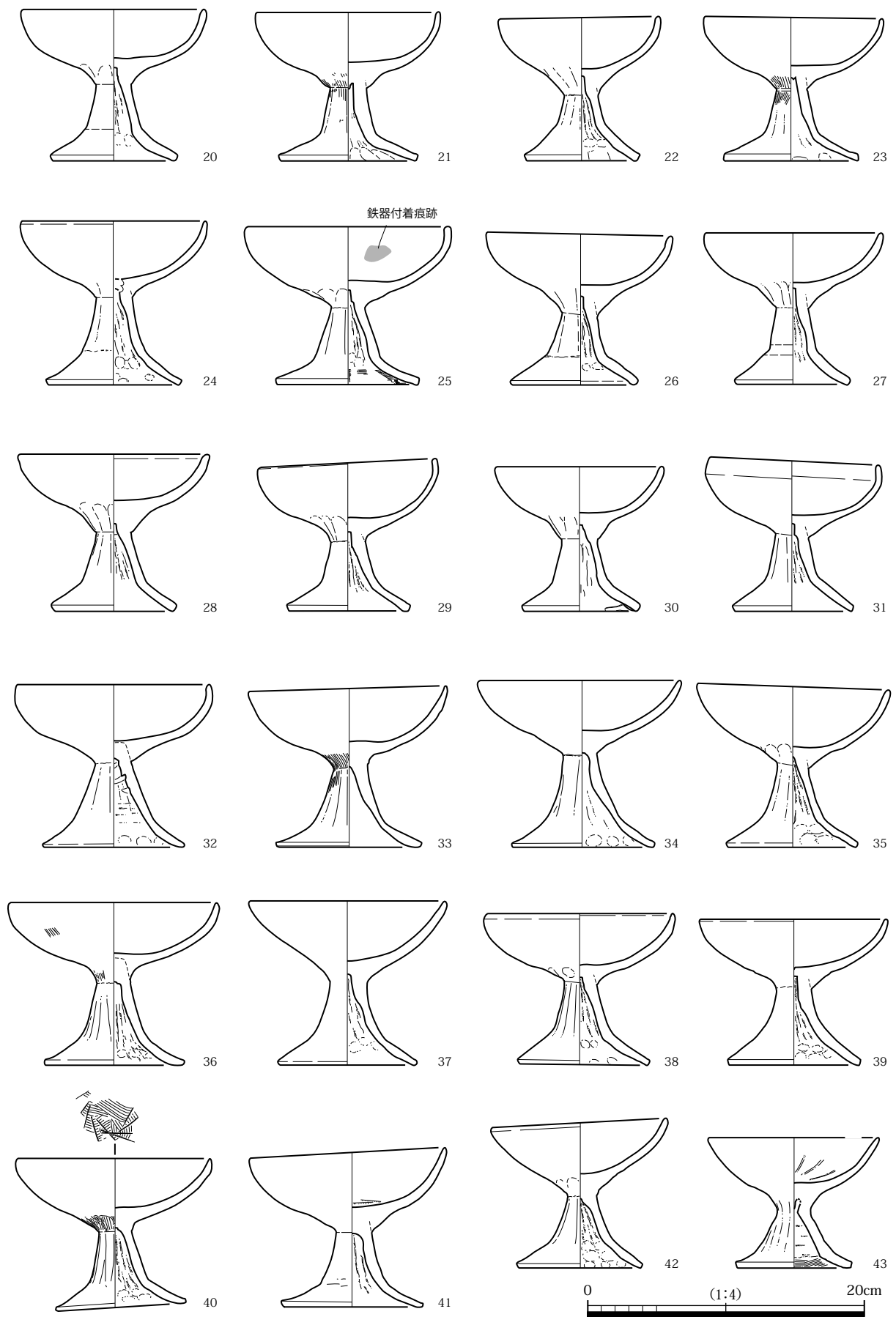


图 18 196 落込み 出土遺物 (1)

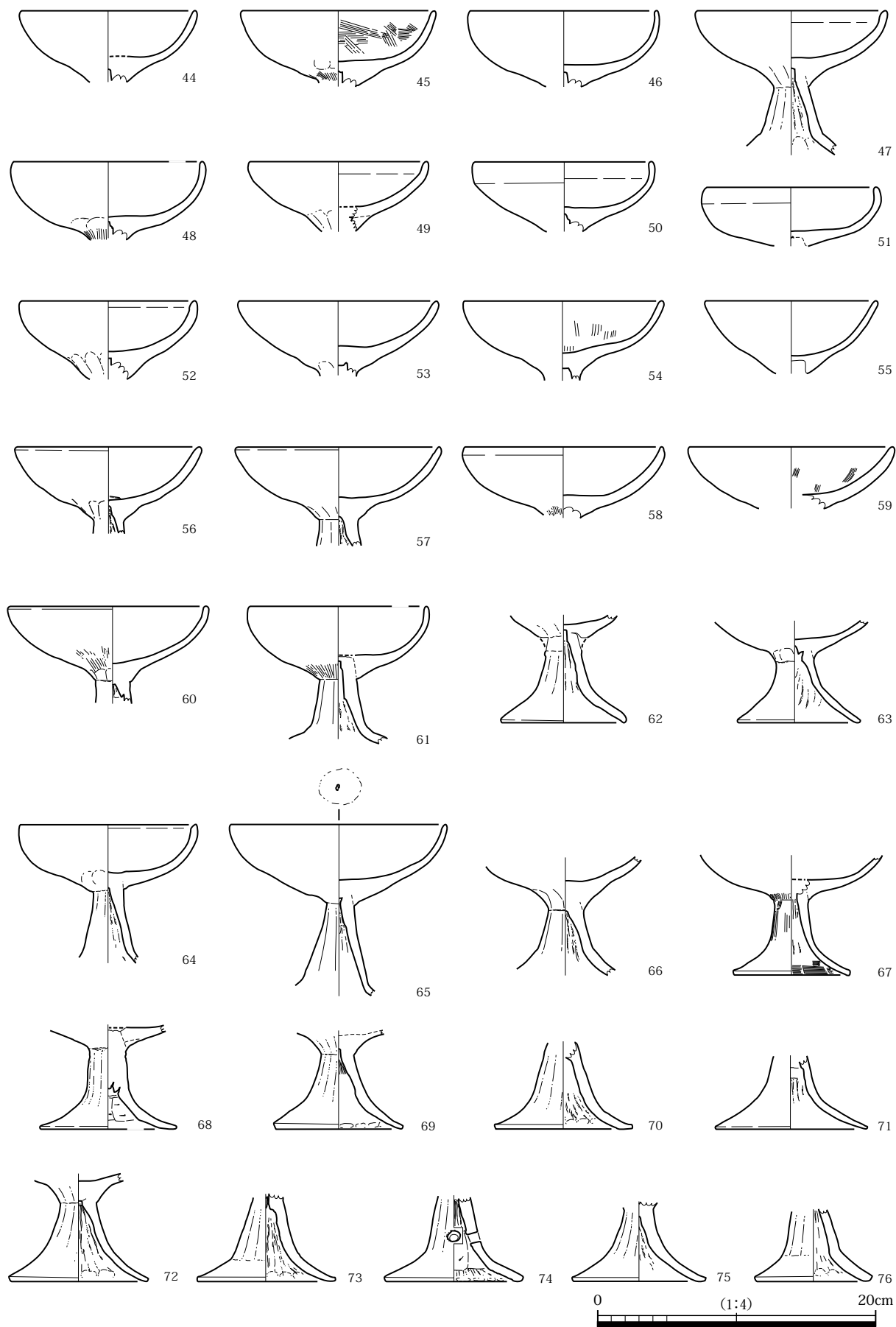


图 19 196 落込み 出土遺物 (2)

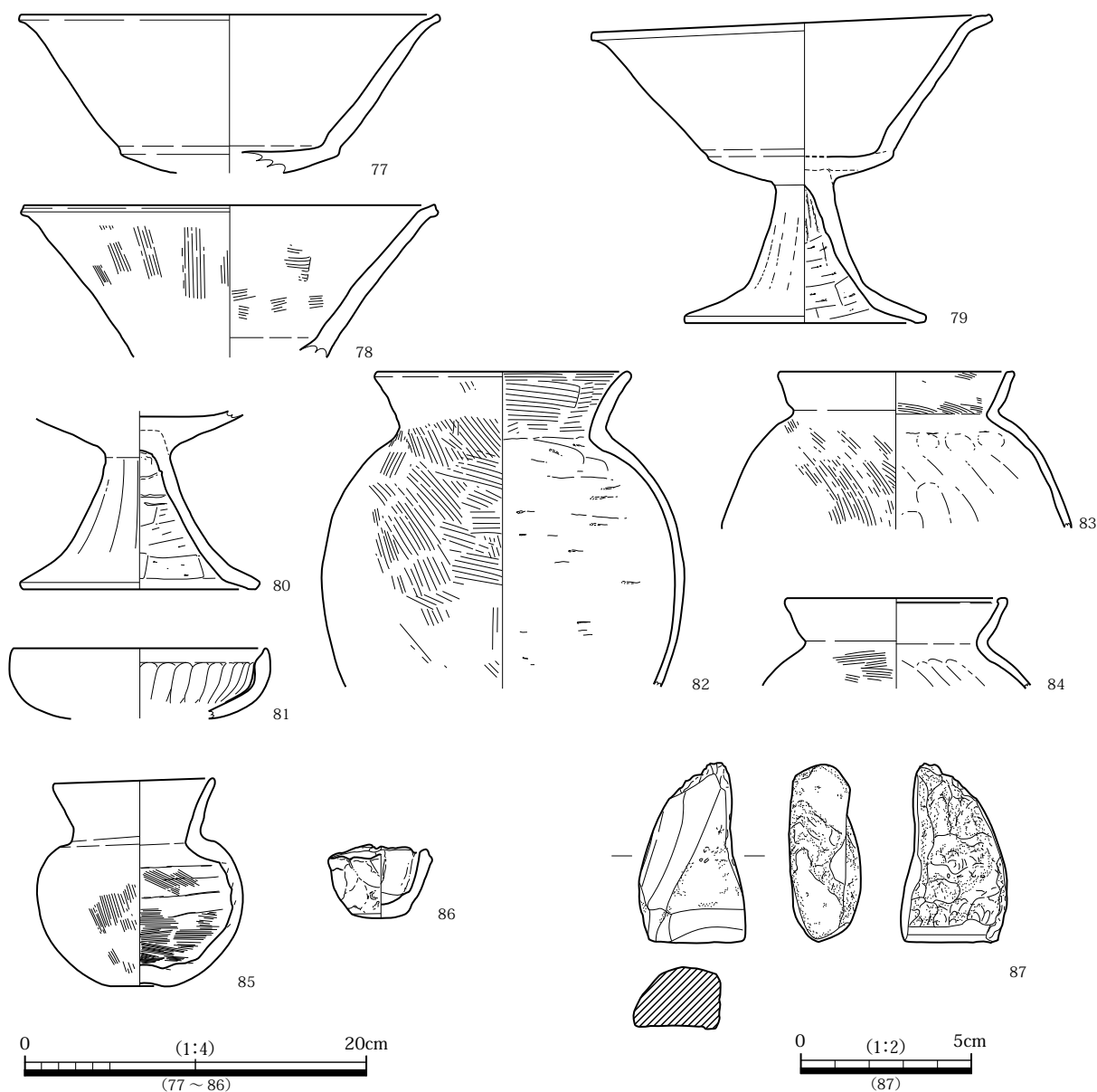


図20 196 落込み 出土遺物 (3)

ある以外は、いずれも赤～橙色を呈している。共伴した甕とは異なる色合いのものである。なお、25は杯内から鉄器が出土したものである（写真図版8-5）。

62・63・66～76は高杯脚部。脚部内面にケズリ調整が認められるものが上述のものも含め4点ある。また脚部内面裾を横ハケ調整するものが3点ある。これらのうち43・68・74はプロポーシヨンの違和感や中実、穿孔ありといった他の高杯とは異なる要素も併せ持つ。工人差や製作地の違いを反映している可能性がある。

77～80は大型有稜高杯。杯部は深い。径口指数（＝杯部高さ÷口径×100）は約33を示す。脚部内面はケズリ調整。黒斑あり。81は杯。内面に菊花状の指ナデを施す。82～84は甕。84は布留式甕。85は壺。粘土紐の痕跡が明瞭で胎土に砂礫を多く含む。粗製壺。86は手捏ね鉢。極めて堅緻に焼成されている。357・358は製塩土器。大阪湾Ⅱ-2式F2類に相当する。外面にタタキ目は見られない。87は砥石。砂岩製。

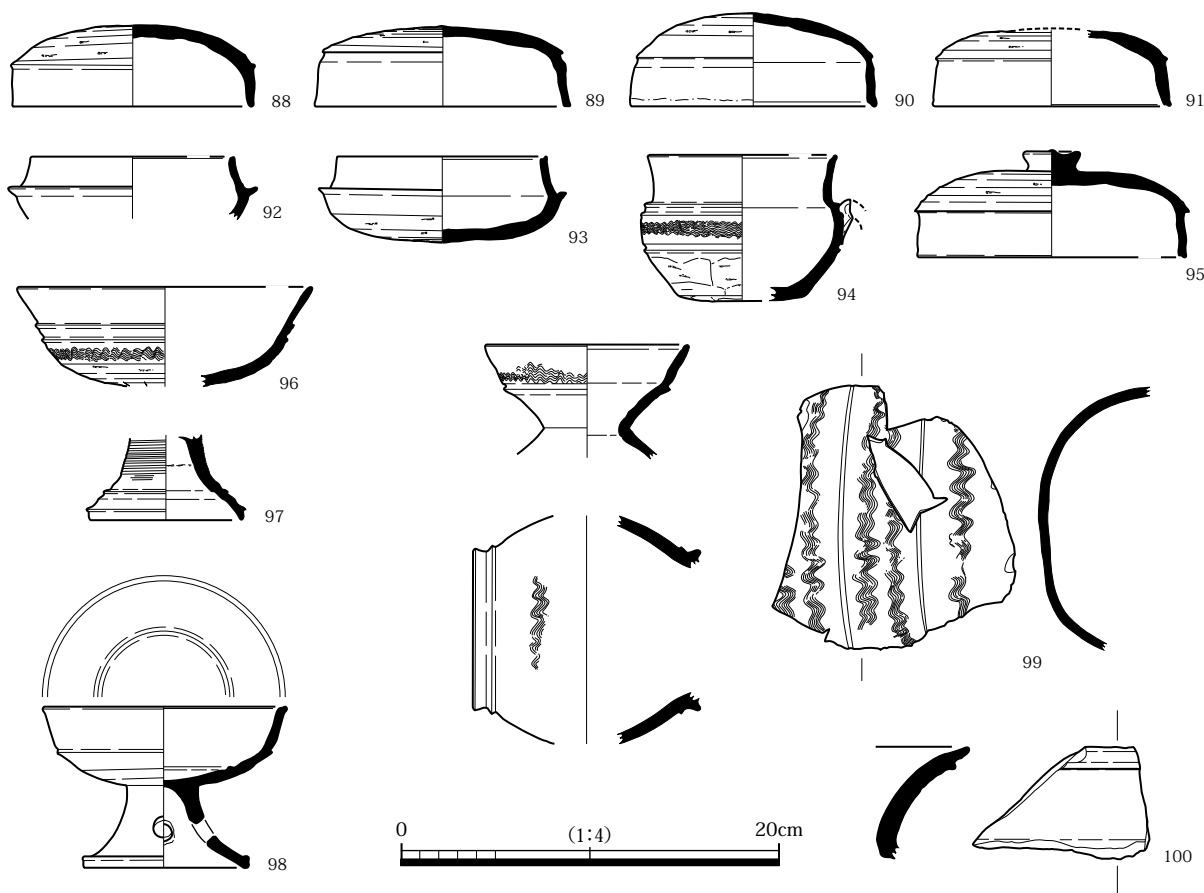


図21 196 落込み 出土遺物（4）

須恵器のうち、88～91は杯蓋。92・93は杯身。94は把手付鉢。95は有蓋高杯蓋。96は無蓋高杯。97は高杯脚部。98は無蓋高杯。見込みに突帯が1条巡る。突帯は削り出しかと観察した。類例が信太山2号窯から出土しており〔(財)大阪府埋蔵文化財協会1987〕、陶邑古窯址群周辺の遺跡でも数例認められることから、陶邑窯での生産品の蓋然性が高い（註2）。99は樽形甕。接合はしなかったが焼成や胎土の様子から同一個体と考えられる。体部を沈線によって4つに区分し波状文を装飾する。100は壺口縁部。焼成不良で灰白色を呈する。

出土遺物の構成は、土師器と須恵器の比率が概ね9：1で圧倒的に土師器が多い。土師器の中でも高杯がおおよそ130個体分（杯部と脚部の接合部の数と杯部、脚部の数に基づいて算出した）あり、9割近くを占める。残りは杯・甕・壺・手捏ね鉢であり、小型丸底壺は皆無である。土師器・須恵器共に供膳具の割合が高い。

土師器・須恵器の様相はTK208型式に位置付けられる。

101～128・359は滑石製模造品である。101～120・359は白玉。当遺構埋土を水洗したところ計463点の白玉を検出した。このうち4点は後述の鉄器に付着して出土している。白玉は〔篠原1995〕及び〔市川・島崎2005〕に依拠し分類した。すべての白玉を計測し分類した。表1を参照されたい。白玉の直径は3～7mmで、4～5.5mmのものが多い。側面形状は胴部が太鼓状にやや膨らむものの割合が多く、側面研磨は斜め方向に施すものが主流を占める。色調は緑色のものが主体で、白色系のもの、赤色系のものが若干ある。121は剣形の可能性がある模造品である。122は有孔の滑石製品

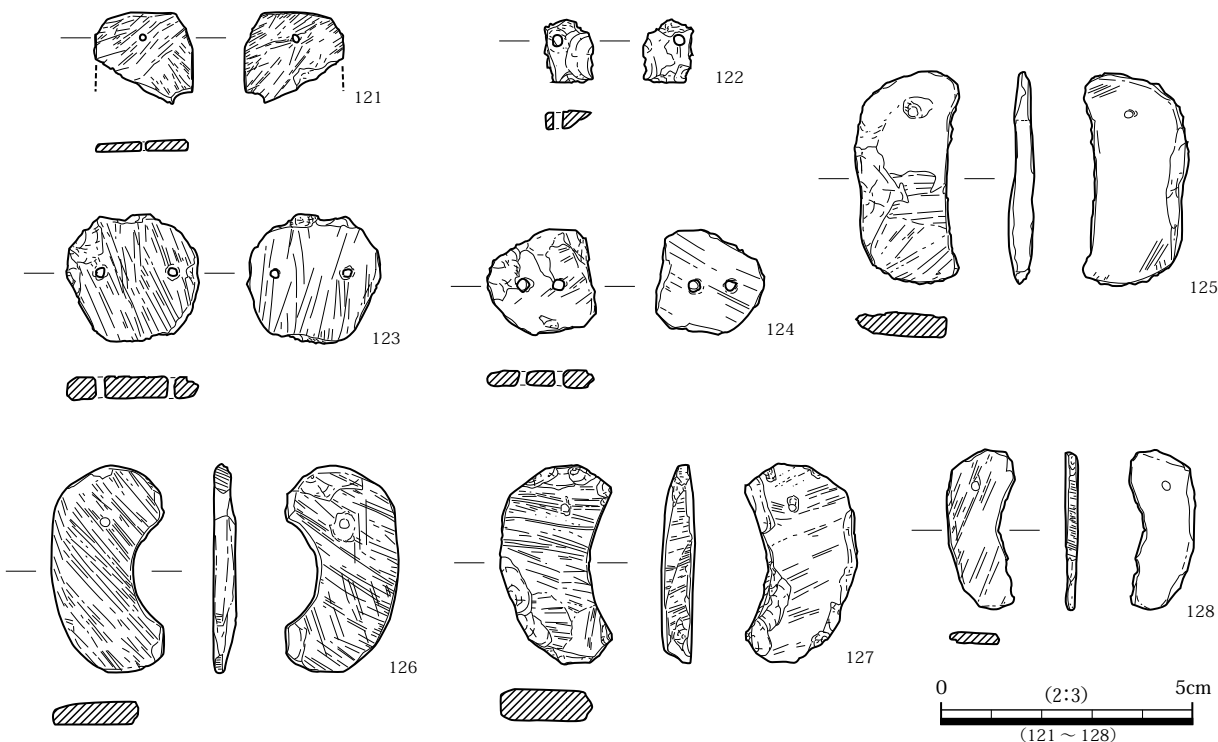
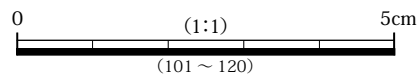
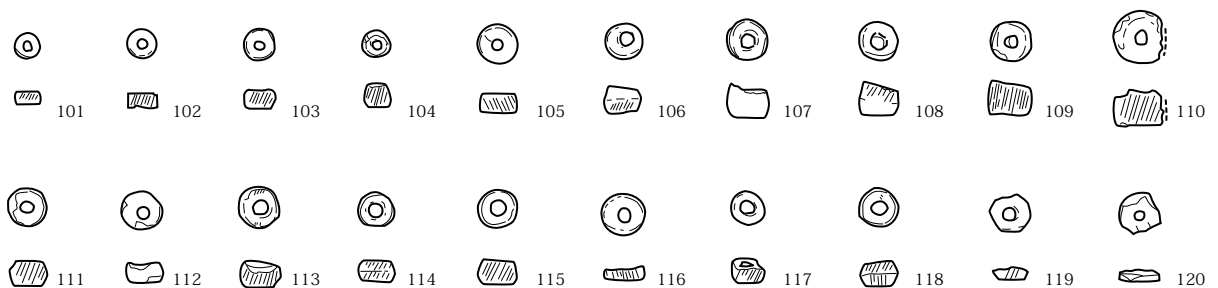


図22 196 落込み 出土遺物 (5)

である。123・124は双孔円板。端面の処理があまり丁寧ではない。125～128は勾玉形。いずれも板状のものである。

滑石製模造品の時期は、古墳時代中期中葉の様相として齟齬はなく、土器の年代とも符合する。

129～152・360～402は鉄器・鉄滓等である。129～137は手鎌の可能性のあるものである。特に129・130・134はX線写真により円孔が確認できたもので、[魚津2009]によるB2類に相当する蓋然性が高い。他のものは[魚津2009]B1類に相当するか、鉄鋌の軸の部分やその他の製品の可能性もあろう。なお、137は端部が上方へ弧を描くように細くなるようであり、手鎌の蓋然性が高い。白玉が面に付着している。また、129は錆膨れで判然としないが、端部を曲げている可能性がある。138～141は刀子と考えられる。140は茎部分に白玉が2点付着する。142は鉄片か。三角形を呈する。143～147は鉄鎌と考えられる。いずれも長頸鎌か。143・146は片刃、147は長三角形の鎌身と考えられる。144・145は頸部と考えられ、台形関に見える。148～152は鉄鋌か。全長は不明であるが、最小幅は1.6～2.0cm程度になる。[東1987]による細型鉄鋌に相当するものとする。151・152は

表1 196 落込み 白玉計測一覧及び分類一覧

No.	法量 (mm)			色調	側面形状	側面研磨	端面形状
	直径	高さ	穿孔径				
101	3.4	1.7	1.0	緑	B	2	I
102	3.9	1.8	1.0	緑	C	2	I
103	4.4	2.5	1.0	白	B	2	I
104	3.8	3.0	1.3	緑	B	2	I
105	5.1	2.6	1.5	緑	B	2	I
106	5.2	3.7	1.9	白	B	2	II
107	5.4	4.3	1.7	緑	B	4	I
108	5.3	4.2	1.9	赤	B	2	II
109	5.6	4.4	1.4	緑	B	3	II
110	6.9	4.8	1.3	白	B	2	II
111	4.9	3.2	1.3	緑	B	2	I
112	5.2	2.5	1.2	緑	B	4	I
113	5.2	3.2	1.8	緑	B	2	I
114	4.8	2.6	1.6	緑	A	2	I
115	5.2	3.2	1.8	緑	B	2	I
116	5.5	1.8	1.3	緑	E	2	I
117	4.4	3.0	1.4	緑	A	2	II
118	5.0	3.1	1.6	緑	B	2	I
119	5.2	1.5	1.4	緑	E	2	I
120	5.3	1.6	1.3	緑	E	4	I
359-1	4.0	2.2	1.1	緑	B	2	I
359-2	4.2	1.3	0.9	緑	B?	2	II
359-3	3.8	2.6	1.4	緑	C	3	I
359-4	3.3	1.4	1.4	緑	B	2	II
359-5	3.5	2.0	0.9	緑	C	2	I
359-6	4.2	1.9	1.2	緑	B	2	II
359-7	4.3	2.5	1.4	緑	B	2	II
359-8	4.3	2.8	1.4	緑	B	2	II
359-9	4.3	2.9	1.4	緑	B	2	I
359-10	4.0	2.5	1.5	緑	C	3	I
359-11	3.7	2.5	1.3	緑	C	2	I
359-12	3.5	1.9	1.3	緑	C	2	I
359-13	4.5	1.7	1.4	緑	B	2	I
359-14	4.3	1.9	1.4	緑	C	2	I
359-15	4.2	2.6	1.4	緑	C	2	II
359-16	4.6	2.5	1.1	緑	C	2	I
359-17	4.2	2.5	1.3	緑	A	2	I
359-18	3.7	2.4	1.2	緑	B	1	I
359-19	4.3	2.1	1.1	緑	A	2	I
359-20	3.8	2.7	1.3	緑	B	2	II
359-21	3.3	2.4	1.2	緑	C	3	II
359-22	3.6	2.0	1.1	緑	C	2	I
359-23	3.9	2.6	1.5	緑	C	2	I
359-24	4.0	1.7	1.4	緑	C	2	II
359-25	4.0	1.5	1.2	緑	B	2	I
359-26	3.8	1.6	1.4	緑	C	1	I
359-27	4.1	3.2	1.6	緑	B	2	II
359-28	3.8	2.5	1.4	緑	C	2	II
359-29	3.5	2.0	1.1	緑	C	2	II
359-30	4.3	2.4	1.2	緑	B	2	II
359-31	3.3	2.7	1.2	緑	C	2	II
359-32	4.4	1.9	1.2	緑	C	2	II
359-33	4.2	2.6	1.2	緑	A	2	II
359-34	4.2	0.8	1.2	緑	E	2	I
359-35	4.1	2.8	1.3	緑	C	2	II
359-36	4.2	1.9	1.3	緑	C	2	II
359-37	3.6	1.4	1.6	緑	C	2	II
359-38	4.4	2.8	1.3	緑	C	3	II
359-39	4.2	1.8	1.3	緑	B	2	I
359-40	4.6	2.9	1.5	緑	C	4	I
359-41	4.6	2.1	1.5	白	C	4	II
359-42	5.5	3.2	1.9	白	B	2	II
359-43	4.5	2.7	1.4	白	C	2	II
359-44	5.4	2.4	1.9	白	B	2	II
359-45	4.9	3.2	1.4	白	C	2	II
359-46	4.6	1.5	1.5	白	E	3	I
359-47	5.5	3.0	2.0	白	C	2	II
359-48	4.9	0.9	1.4	白	E	3	II
359-49	4.8	2.8	1.3	白	C	3	II
359-50	4.7	2.4	1.4	白	C	2	II
359-51	4.8	2.8	1.5	白	B	2	II
359-52	3.7	2.8	1.7	緑	C	2	II
359-53	4.1	3.5	1.9	緑	C	2	I
359-54	5.3	4.1	1.3	緑	C	4	II
359-55	4.7	2.9	1.9	緑	B	2	I

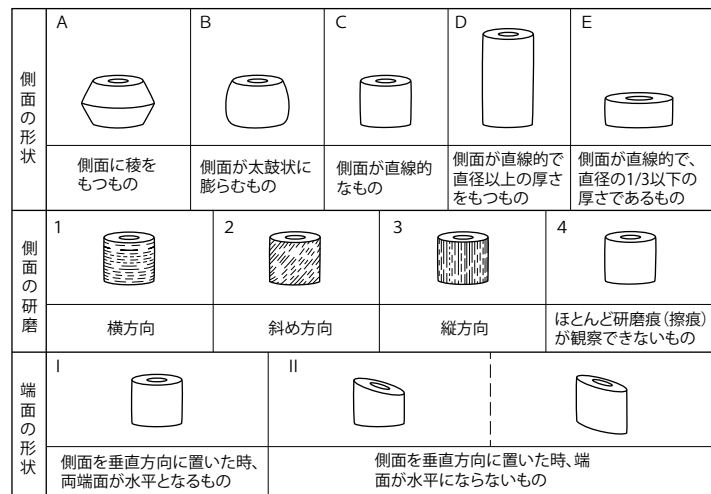
No.	法量 (mm)			色調	側面形状	側面研磨	端面形状
	直径	高さ	穿孔径				
359-56	5.5	2.6	2.2	緑	A	2	II
359-57	5.7	4.7	2.0	緑	B	2	II
359-58	5.0	4.0	2.0	緑	C	2	I
359-59	4.6	4.5	1.9	緑	B	2	II
359-60	5.7	4.1	2.1	緑	C	4	II
359-61	4.4	3.0	1.8	緑	C	2	II
359-62	4.4	2.4	0.9	緑	C	2	II
359-63	5.7	3.5	2.5	緑	A	2	II
359-64	4.7	2.7	1.9	緑	C	2	I
359-65	6.2	4.1	2.5	緑	C	1	II
359-66	5.3	4.2	1.6	緑	B	2	II
359-67	5.9	3.7	2.1	緑	A	2	II
359-68	4.5	3.3	1.2	赤	C	2	II
359-69	5.5	4.1	2.0	赤	B	2	I
359-70	4.6	3.5	1.8	赤	B	2	I
359-71	5.0	2.6	1.6	赤	C	2	II
359-72	5.0	3.7	1.5	赤	A	2	II
359-73	5.1	4.4	1.5	赤	B	2	I
359-74	4.5	2.7	1.2	赤	B	2	I
359-75	5.3	3.1	2.4	赤	A	4	II
359-76	4.8	2.1	2.0	赤	C	2	II
359-77	4.8	1.9	1.6	赤	B	1	I
359-78	5.0	4.4	2.2	赤	C	2	II
359-79	5.1	4.3	2.2	赤	B	2	II
359-80	5.2	4.0	2.2	赤	B	2	I
359-81	5.2	4.2	1.6	緑	C	2	II
359-82	5.4	4.0	2.1	緑	B	3	II
359-83	4.4	4.6	1.6	緑	D	2	II
359-84	4.3	4.0	1.7	緑	C	2	I
359-85	4.6	4.4	1.6	緑	B	2	II
359-86	5.5	3.9	1.5	緑	B	2	II
359-87	5.0	3.5	1.6	緑	C	3	I
359-88	5.4	3.9	1.5	緑	B	2	II
359-89	5.4	5.1	1.4	緑	C	2	II
359-90	5.2	4.0	1.5	緑	B	2	II
359-91	5.4	4.0	2.2	緑	A	2	II
359-92	4.9	3.9	1.9	緑	A	2	II
359-93	4.8	3.8	1.8	緑	A	2	II
359-94	4.9	3.6	2.0	緑	C	2	II
359-95	5.1	4.3	2.0	緑	B	2	II
359-96	5.1	4.2	2.3	緑	B	3	II
359-97	4.8	4.2	2.1	緑	B	3	II
359-98	5.0	4.1	2.0	緑	A	2	II
359-99	5.0	4.8	2.1	緑	B	2	II
359-100	5.2	4.1	2.0	緑	A	1+2	II
359-101	5.2	4.5	2.0	緑	A	2	II
359-102	5.0	3.3	2.1	緑	B	2	I
359-103	5.3	3.7	1.8	緑	A	2	II
359-104	5.3	4.4	2.1	緑	A	2	II
359-105	5.5	3.3	2.3	緑	B	3	II
359-106	4.8	3.5	2.1	緑	B	3	I
359-107	4.7	4.4	2.1	緑	B	2	I
359-108	5.2	4.1	2.2	緑	B	2	I
359-109	4.9	3.8	2.1	緑	B	2	II
359-110	4.8	3.4	2.1	緑	A	2	I
359-111	5.5	3.7	1.9	緑	B	2	II
359-112	4.6	3.8	2.2	緑	A	3	II
359-113	4.7	3.7	1.9	緑	B	2	II
359-114	4.8	3.6	1.6	緑	C	2	II
359-115	4.8	3.8	1.8	緑	B	3	II
359-116	5.2	3.7	2.1	緑	A	2	II
359-117	4.4	4.0	1.4	緑	C	2	I
359-118	5.1	3.8	1.9	緑	A	2	I
359-119	5.2	4.2	2.4	緑	B	3	I
359-120	5.2	3.8	1.8	緑	C	2	II
359-121	5.4	5.3	2.0	緑	B	2	II
359-122	4.8	3.6	1.6	緑	C	2	II
359-123	4.6	4.0	2.2	緑	B	2	II
359-124	4.6	4.6	1.8	緑	C	3	II
359-125	4.9	3.9	1.9	緑	C	2	I
359-126	5.5	3.5	1.9	緑	B	2	I
359-127	5.5	3.8	1.6	緑	B	2	II
359-128	5.1	3.8	1.7	緑	B	2	I
359-129	5.2	4.0	1.5	緑	C	1	II
359-130	5.6	5.4	2.1	緑	A	3	II

No.	法量 (mm)			色調	側面形状	側面研磨	端面形状
	直径	高さ	穿孔径				
359-131	5.7	4.0	1.9	緑	B	2	I
359-132	4.7	3.7	1.9	緑	B	2	I
359-133	4.8	1.8	1.6	緑	B	2	I
359-134	5.0	2.0	2.1	緑	A	2	I
359-135	5.3	2.5	1.6	緑	B	2	I
359-136	4.5	2.7	1.5	緑	C	2	II
359-137	4.3	1.3	1.6	緑	E	4	II
359-138	5.1	1.6	1.5	緑	B	2	II
359-139	5.2	3.2	1.8	緑	B	3	II
359-140	5.1	3.6	1.9	緑	B	2	II
359-141	4.7	2.4	1.6	緑	A	2	I
359-142	5.2	2.8	1.9	緑	A	2	I
359-143	5.6	2.8	2.4	緑	A	2	I
359-144	4.6	4.1	1.9	緑	B	2	II
359-145	3.8	3.3	1.4	緑	B	2	II
359-146	4.7	3.0	1.8	緑	B	2	II
359-147	4.4	2.9	1.9	緑	A	2	II
359-148	5.3	3.5	1.4	緑	B	2	II
359-149	4.4	3.6	1.6	緑	B	2	II
359-150	5.2	2.0	1.6	緑	B	2	II
359-151	4.6	2.6	1.8	緑	B	3	II
359-152	4.4	2.9	1.6	緑	B	3	I
359-153	4.5	1.9	1.4	緑	B	2	I
359-154	4.8	2.4	1.9	緑	A	2	I
359-155	5.2	2.4	1.5	緑	A	2	II
359-156	5.0	3.4	2.3	緑	A	2	II
359-157	4.7	3.2	1.8	緑	C	2	II
359-158	4.6	3.5	2.4	緑	B	2	II
359-159	4.7	2.3	1.6	緑	B	2	II
359-160	4.9	4.3	1.8	緑	C	3	II
359-161	4.7	1.7	1.8	緑	C	3	I
359-162	4.9	2.7	1.7	緑	B	2	II
359-163	5.3	3.0	2.7	緑	A	3	II
359-164	5.3	3.5	1.5	緑	C	3	II
359-165	4.5	2.8	1.3	緑	B	2	II
359-166	4.7	2.5	1.6	緑	C	3	II
359-167	4.9	1.9	2.0	緑	C	3	I
359-168	5.3	2.2	1.7	緑	B	2	II
359-169	4.0	2.7	1.9	緑	B	2	II
359-170	4.6	3					

No.	法量 (mm)			色調	側面形状	側面研磨	端面形状
	直径	高さ	穿孔径				
359-206	4.7	3.1	1.3	緑	C	3	II
359-207	4.3	2.6	1.4	緑	C	3	II
359-208	5.5	3.0	1.4	緑	B	2	II
359-209	5.1	2.4	2.1	緑	B	2	II
359-210	4.6	1.3	1.3	緑	E	2	II
359-211	4.9	2.9	1.5	緑	A	3	I
359-212	5.2	2.8	1.9	緑	B	2	II
359-213	4.2	2.4	2.1	緑	B	2	II
359-214	4.3	2.1	1.1	緑	B	3	II
359-215	4.4	3.5	2.0	緑	A	3	II
359-216	4.4	2.6	2.1	緑	B	3	II
359-217	4.8	3.0	2.2	緑	B	2	II
359-218	3.9	2.5	1.9	緑	B	2	II
359-219	5.0	3.2	1.9	緑	B	2	II
359-220	4.1	2.0	1.7	緑	C	2	I
359-221	4.8	2.5	1.3	緑	C	2	I
359-222	5.1	2.7	1.7	緑	C	3	II
359-223	4.2	2.1	—	緑	—	—	II
359-224	5.0	2.8	2.0	緑	A	2	II
359-225	4.7	1.8	1.6	緑	A	2	I
359-226	4.4	2.4	2.2	緑	B	2	II
359-227	4.8	2.2	1.8	緑	B	2	II
359-228	4.9	2.7	1.8	緑	B	2	II
359-229	4.5	2.5	1.5	緑	B	3	II
359-230	5.2	2.4	1.6	緑	B	2	I
359-231	5.5	2.8	2.4	緑	A	2	II
359-232	4.6	3.5	1.5	緑	B	3	II
359-233	4.4	2.6	1.9	緑	B	2	II
359-234	4.0	1.8	1.7	緑	B	2	I
359-235	4.5	3.0	2.2	緑	A	2	I
359-236	4.4	1.8	1.5	緑	B	2	I
359-237	4.6	3.8	1.9	緑	B	2	I
359-238	4.6	2.2	1.4	緑	E	3	I
359-239	4.6	2.8	2.3	緑	B	2	II
359-240	4.6	2.5	1.8	緑	A	2	I
359-241	4.8	3.2	2.1	緑	A	2	I
359-242	5.0	3.7	2.1	緑	B	2	II
359-243	4.6	2.7	1.4	緑	A	2	II
359-244	4.4	2.1	1.6	緑	A	3	I
359-245	5.0	3.0	1.6	緑	C	3	I
359-246	4.0	3.0	1.7	緑	B	2	I
359-247	5.4	3.3	2.8	緑	A	2	II
359-248	4.5	2.9	2.3	緑	B	2	II
359-249	5.2	2.5	1.7	緑	B	2	I
359-250	4.5	2.8	1.9	緑	B	2	I
359-251	4.5	2.6	2.1	緑	B	2	II
359-252	5.0	2.0	2.2	緑	B	2	II
359-253	4.6	3.0	1.6	緑	B	2	II
359-254	4.2	2.4	1.6	緑	B	4	II
359-255	3.9	2.9	1.7	緑	B	3	II
359-256	4.6	1.8	1.4	緑	B	2	II
359-257	4.5	2.5	2.2	緑	B	2	II
359-258	4.4	3.0	1.9	緑	B	2	II
359-259	4.3	1.8	1.2	緑	B	2	II
359-260	4.4	1.5	1.5	緑	B	2	II
359-261	4.6	1.7	1.6	緑	B	2	II
359-262	5.5	3.0	1.6	緑	B	2	II
359-263	4.8	3.5	1.9	緑	B	2	II
359-264	4.7	2.7	1.3	緑	B	2	I
359-265	4.9	1.9	1.3	緑	B	3	II
359-266	4.5	2.2	1.6	緑	B	2	I
359-267	4.8	1.5	1.4	緑	B	2	I
359-268	4.9	1.4	1.5	緑	A	1	II
359-269	4.1	2.9	2.0	緑	B	2	II
359-270	4.8	2.8	2.2	緑	B	2	II
359-271	5.2	1.7	1.5	緑	B	2	II
359-272	4.5	3.1	1.7	緑	B	2	I
359-273	5.0	2.5	1.7	緑	B	2	I
359-274	5.0	3.4	1.9	緑	B	2	II
359-275	4.6	1.7	1.7	緑	B	2	I
359-276	4.9	2.7	2.0	緑	A	2	II
359-277	4.4	3.5	2.0	緑	C	2	II
359-278	4.8	3.1	1.7	緑	B	2	II
359-279	3.8	1.9	1.7	緑	C	3	I
359-280	4.5	2.7	1.8	緑	A	2	I

No.	法量 (mm)			色調	側面形状	側面研磨	端面形状
	直径	高さ	穿孔径				
359-281	3.9	2.9	1.8	緑	C	2	II
359-282	4.3	2.1	1.2	緑	C	3	II
359-283	4.0	2.4	1.5	緑	B	2	I
359-284	4.7	2.5	1.8	緑	B	2	II
359-285	5.2	3.5	1.8	緑	A	2	II
359-286	5.0	2.3	1.5	緑	B	2	II
359-287	4.8	3.5	1.9	緑	B	2	II
359-288	4.8	3.1	1.5	緑	C	2	II
359-289	4.9	3.5	2.3	緑	A	2	II
359-290	4.1	1.3	1.9	緑	E	3	II
359-291	4.5	1.5	1.4	緑	A	2	II
359-292	4.7	1.6	1.7	緑	B	2	II
359-293	4.9	1.9	1.2	緑	B	2	I
359-294	4.4	2.5	2.0	緑	B	2	II
359-295	4.3	2.5	2.3	緑	A	2	II
359-296	5.1	2.3	1.4	緑	B	2	II
359-297	4.0	3.5	2.1	緑	B	2	II
359-298	4.3	3.3	2.3	緑	B	2	I
359-299	4.4	2.3	1.4	緑	C	3	II
359-300	5.5	2.6	2.0	緑	B	2	II
359-301	5.2	2.8	1.8	緑	C	2	II
359-302	4.4	2.7	2.0	緑	A	2	II
359-303	4.3	2.2	1.5	緑	C	3	II
359-304	4.8	3.3	2.1	緑	B	2	II
359-305	3.8	2.0	1.6	緑	C	2	II
359-306	4.8	1.8	2.2	緑	B	2	I
359-307	4.6	1.8	1.8	緑	C	2	I
359-308	4.9	2.5	1.9	緑	A	3	I
359-309	4.7	2.3	1.6	緑	B	2	II
359-310	4.3	3.0	1.9	緑	B	2	II
359-311	4.4	3.8	1.9	緑	B	2	II
359-312	5.1	2.6	1.6	緑	B	2	II
359-313	4.7	1.9	1.7	緑	A	2	I
359-314	4.2	3.0	2.2	緑	B	2	II
359-315	4.2	3.6	1.7	緑	B	2	II
359-316	4.7	2.8	1.7	緑	C	3	II
359-317	4.6	2.8	1.7	緑	A	2	I
359-318	4.1	3.5	1.5	緑	B	2	I
359-319	4.6	3.3	1.8	緑	B	3	II
359-320	4.4	3.0	1.8	緑	B	2	II
359-321	4.8	3.7	2.2	緑	A	3	II
359-322	4.5	3.4	1.8	緑	B	3	I
359-323	4.5	1.9	1.4	緑	B	2	I
359-324	4.5	2.7	1.7	緑	B	2	II
359-325	4.9	3.2	1.9	緑	B	2	II
359-326	5.5	3.6	2.0	緑	B	3	II
359-327	4.2	1.9	1.5	緑	B	2	I
359-328	3.9	1.5	1.4	緑	C	2	II
359-329	4.5	1.7	1.5	緑	B	2	I
359-330	5.0	2.3	1.6	緑	C	3	II
359-331	5.3	3.0	1.5	緑	B	2	I

No.	法量 (mm)			色調	側面形状	側面研磨	端面形状
	直径	高さ	穿孔径				
359-332	4.7	3.7	1.6	緑	C	4	II
359-333	4.1	3.2	1.5	緑	B	2	I
359-334	4.1	3.3	2.0	緑	B	2	II
359-335	4.7	1.3	1.4	緑	B	4	II
359-336	4.5	2.5	2.4	緑	B	2	II
359-337	4.9	3.5	2.0	緑	B	2	II
359-338	4.3	2.8	2.0	緑	A	2	I
359-339	5.4	3.1	1.7	緑	B	2	II
359-340	4.8	3.2	1.8	緑	A	2	II
359-341	5.4	3.2	1.7	緑	B	2	II
359-342	5.0	2.3	2.0	緑	B	2	II
359-343	4.3	3.1	1.6	緑	B	2	II
359-344	5.1	2.1	1.7	緑	C	2	I
359-345	4.6	2.7	1.9	緑	A	2	II
359-346	4.1	3.1	2.2	緑	B	2	II
359-347	5.0	2.5	1.6	緑	A	2	II
359-348	4.8	2.7	1.7	緑	C	2	II
359-349	5.1	1.9	2.2	緑	A	2	II
359-350	4.6	3.4	1.5	緑	A	2	II
359-351	4.6	3.1	1.5	緑	B	3	I
359-352	4.5	3.0	2.1	緑	B	2	I
359-353	4.6	2.5	1.7	緑	B	2	I
359-354	4.8	3.0	2.0	緑	B	2	II
359-355	4.9	3.3	1.9	緑	B	2	II
359-356	4.5	2.3	1.9	緑	B	2	II
359-357	4.7	3.3	2.0	緑	B	2	I
359-358	4.3	2.6	1.9	緑	B	2	II
359-359	4.2	3.3	1.8	緑	C	2	I
359-360	4.2	2.6	1.4	緑	C	3	I
359-361	4.6	2.5	2.6	緑	B	3	I
359-362	4.6	2.7	1.5	緑	C	2	II
359-363	5.0	3.1	1.8	緑	C	3	II
359-364	4.8	3.3	2.0	緑	B	3	II
359-365	4.7	3.1	2.0	緑	B	2	I
359-366	4.4	2.7	2.1	緑	B	2	II
359-367	4.4	3.0	1.4	緑	B	2	I
359-368	4.4	3.0	2.4	緑	B	2	I
359-369	4.2	3.2	2.1	緑	B	2	II
359-370	4.7	3.1	1.8	緑	B	2	I
359-371	4.4	1.6	1.9	緑	C	3	II
359-372	3.9	3.6	1.9	緑	B	2	I
359-373	4.4	3.3	2.2	緑	B	2	II
359-374	5.1	3.7	2.0	緑	A	2	II
359-375	5.3	2.4	1.8	緑	B	1	II
359-376	4.8	3.4	1.6	緑	B	2	II
359-377	5.2	2.8	2.0	緑	B	2	I
359-378	4.6	2.4	1.6	緑	A	2	II
359-379	4.9	2.6	2.0	緑	B	2	II
359-380	5.1	3.3	1.6	緑	B	2	II
359-381	5.3	3.3	2.1	緑	B	2	II
359-382	4.8	3.3	2.1	緑	B	2	II



No.	法量 (mm)			色調	側面形状	側面研磨	端面形状
	直径	高さ	穿孔径				
359-383	4.0	2.3	1.8	緑	B	3	II
359-384	4.3	3.1	1.9	緑	B	2	II
359-385	5.5	2.1	1.5	緑	C	2	II
359-386	4.4	2.8	1.9	緑	B	2	I
359-387	4.5	3.9	2.3	緑	B	2	II
359-388	5.0	2.7	1.5	緑	B	2	II
359-389	4.4	3.5	2.2	緑	C	2	I
359-390	4.6	3.9	1.8	緑	B	2	II
359-391	4.7	2.7	1.7	緑	B	2	II
359-392	4.4	3.2	2.0	緑	A	2	II
359-393	3.5	2.9	1.8	緑	C	2	II
359-394	4.6	1.7	1.7	緑	A	2	II
359-395	4.7	3.1	1.9	緑	B	2	I
359-396	4.5	2.7	1.2	緑	B	3	II
359-397	5.1	3.1	2.0	緑	B	2	II
359-398	4.3	1.8	1.7	緑	C	2	II
359-399	4.3	2.4	1.6	緑	C	2	I
359-400	5.2	2.8	1.3	緑	C	2	II
359-401	5.0	2.5	2.0	緑	B	2	I
359-402	4.9	2.2	1.6	緑	B	3	II

No.	法量 (mm)			色調	側面形状	側面研磨	端面形状
	直径	高さ	穿孔径				
359-403	4.6	3.7	1.9	緑	B	2	II
359-404	4.5	2.4	1.8	緑	B	2	II
359-405	5.3	3.0	2.0	緑	A	2	II
359-406	4.4	1.9	1.4	緑	C	3	I
359-407	4.6	2.2	1.5	緑	C	2	I
359-408	5.0	2.4	1.8	緑	A	2	I
359-409	3.7	2.1	1.7	緑	B	2	I
359-410	4.3	3.1	1.5	緑	B	3	II
359-411	4.6	3.7	1.7	緑	B	2	II
359-412	4.9	1.4	1.8	緑	A	2	I
359-413	4.7	2.3	1.6	緑	B	3	I
359-414	4.2	1.8	1.6	緑	A	2	I
359-415	4.9	2.1	1.7	緑	A	2	II
359-416	4.3	2.5	1.8	緑	B	2	I
359-417	4.8	2.8	2.2	緑	A	2	II
359-418	4.8	3.5	2.6	緑	B	2	II
359-419	4.4	3.3	2.1	緑	A	2	I
359-420	4.9	3.2	2.6	緑	A	2	II
359-421	4.7	3.3	2.6	緑	B	3	II
359-422	5.2	3.1	2.1	緑	B	2	II

No.	法量 (mm)			色調	側面形状	側面研磨	端面形状
	直径	高さ	穿孔径				
359-423	4.6	3.2	2.3	緑	B	2	I
359-424	5.1	3.2	2.0	緑	C	2	I
359-425	5.2	3.0	2.4	緑	A	2	II
359-426	4.4	3.1	1.7	緑	B	2	II
359-427	5.3	3.2	2.4	緑	A	2	II
359-428	4.8	3.5	1.8	緑	C	2	I
359-429	4.3	3.0	2.5	緑	A	2	II
359-430	4.9	2.3	1.8	緑	B	2	II
359-431	4.6	3.8	1.6	緑	B	3	II
359-432	4.7	3.0	1.8	緑	B	2	I
359-433	4.3	2.8	2.2	緑	A	2	II
359-434	4.9	2.5	2.1	緑	C	3	II
359-435	5.1	3.5	2.3	緑	B	2	II
359-436	4.7	3.0	2.2	緑	B	2	I
359-437	4.5	3.1	2.3	緑	A	2	I
359-438	4.8	2.8	1.7	緑	C	2	II
359-439	4.6	3.8	1.8	緑	B	3	I

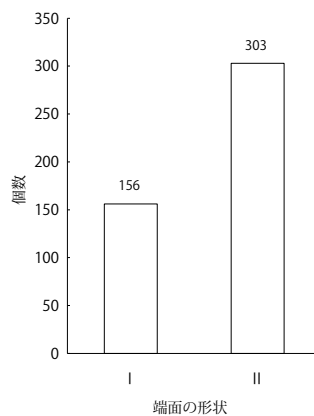
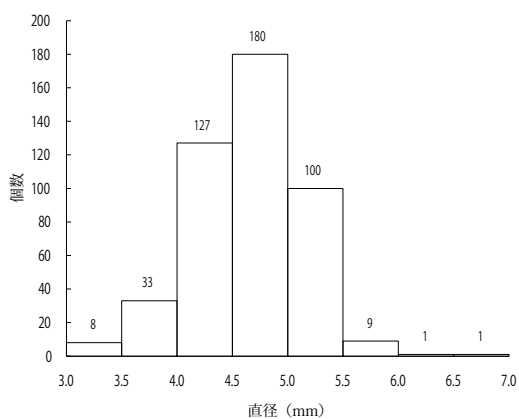
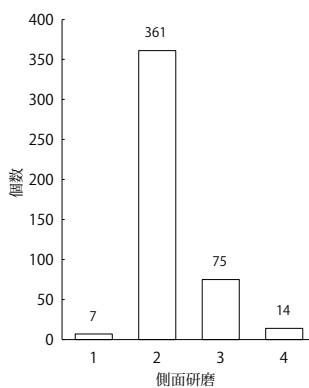
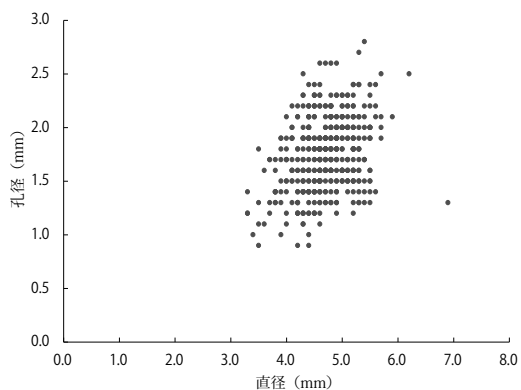
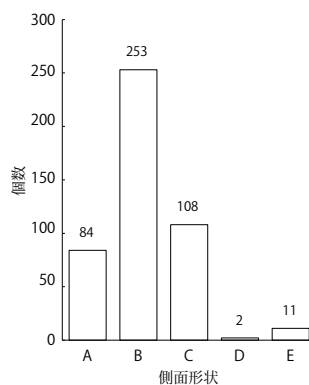
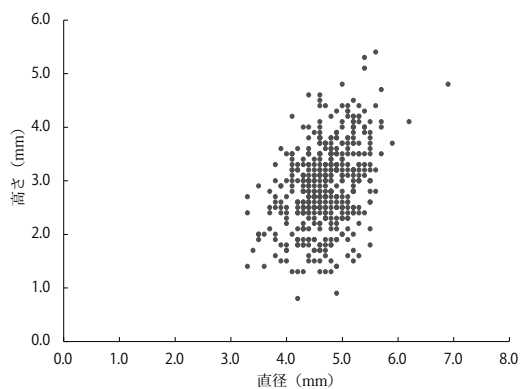


図 24 白玉法量分布

図 25 白玉分類分布

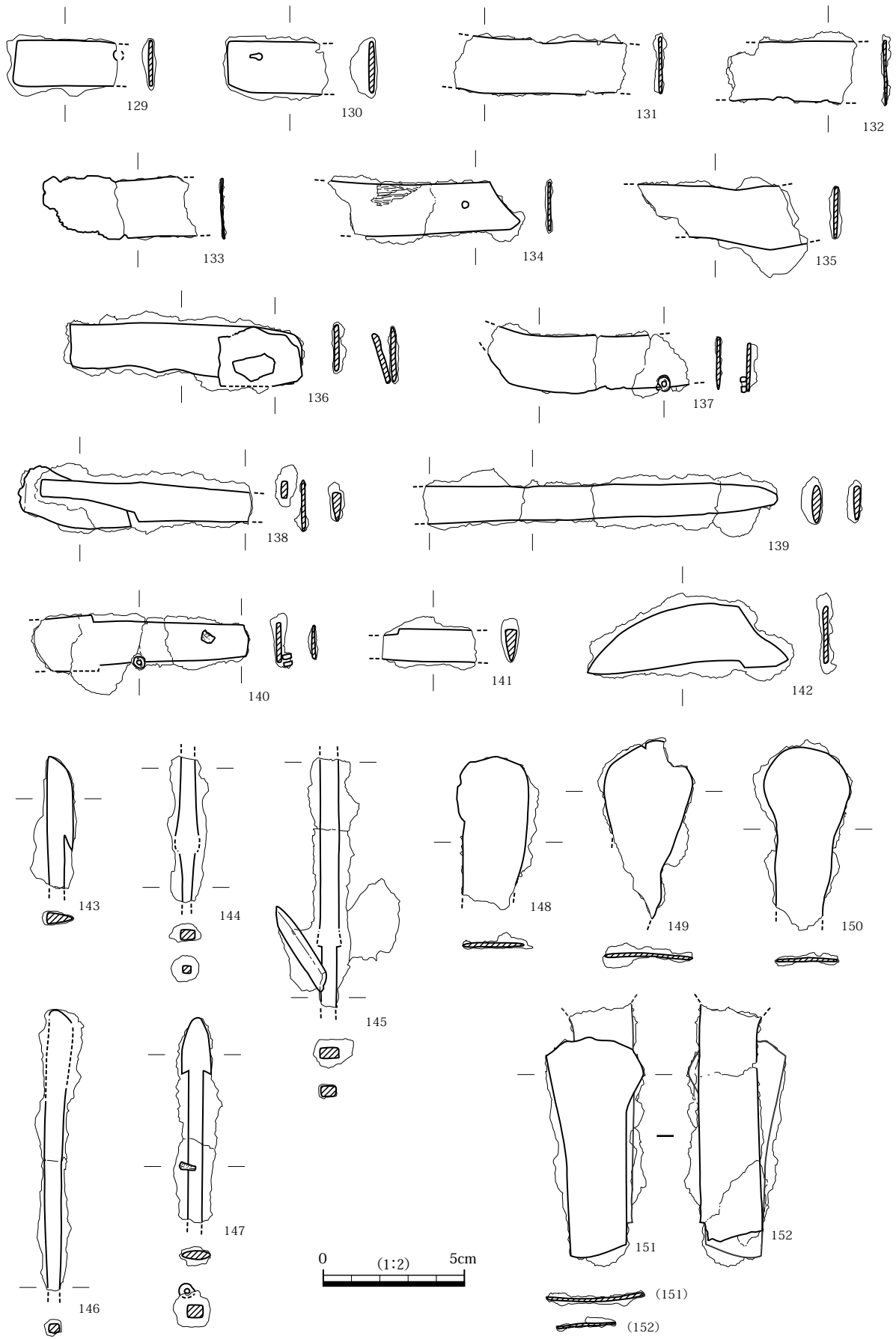


図 26 196 落込み 出土遺物 (6)

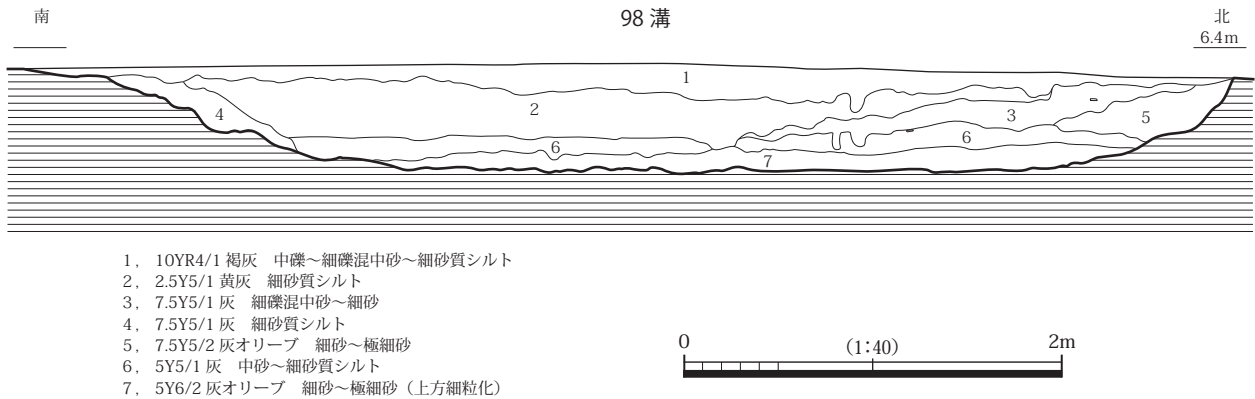


図 27 98 溝 断面

切断されたものの可能性がある。鉄器で確認できた種類は、手鎌・刀子・鉄鍬・鉄鋌の 4 種類である。農工具と武器等に位置付けられるものである。

鉄器の時期は、鉄鍬を参照するならば、古墳時代中期のものとして大過ない。

上述したもの以外にも土師器大型有稜高杯に付着した 360、幅の細い鉄片、幅の広い鉄片等が出土したが、明確に種類を特定できるものはない。種類が特定できないものはすべて鉄片としておく。これらのうち、388 は折り曲げが確認できる。361～364・366 は鉄滓か。365 は鞆羽口の一部と考えられる。当地における鉄器加工を示すものと判断できる。

当落込みからは以上のように、土器だけでなく、滑石製模造品と鉄器がまとまって出土した。土師器高杯に付着した鉄器、鉄器に付着した滑石製白玉という出土状況は、間接的にはあるが土師器高杯と滑石製品との同時性も想起させる。この場所において土師器高杯・滑石製模造品・鉄器の 3 種を同時に用いた祭祀が行われたことはほぼ間違いないであろう。当落込みは祭祀遺構と位置付けられる。また、鉄滓や鞆羽口の存在から、鉄器加工を伴う祭祀があった可能性もあろう。なお、各種遺物からは時期差がほとんど見出せない。出土状況では、いくつかのまとまりがあることも考えられたが、判然としなかった。1 回の祭祀行為の出土遺物というよりも、何度も祭祀を行った結果の集積と考えておきたい。当落込みは古墳時代中期中葉に位置付けられよう。

3. 98 溝 (図 11・27～31、写真図版 4-1・7・20～22)

1・2 区第 4 面で検出した。北西部が調査区外になるため全容は明らかでないが、北西－南東方向を指向する。概ね N－60°－W。ほぼ直線状に検出した。検出した部分の規模は、幅 5.7～6.8 m、深さ 0.6 m を測り、検出長約 16 m である。断面形は皿形で、埋土は砂とシルトを主体とする。1 区調査時に検出した際は、流路かとも考えられたが、2 区調査時に肩が検出され収束したことから溝と位置付けた。また、当地の地形は北東－南西方向に緩やかに傾斜しており、第 5 面検出の 258 溝もその方向に形成されている。それに対し、当溝はその方向に直交するように検出されたことから、自然に形成されたものではなく人為的に形成されたものと判断する。大規模な区画溝の可能性もあろう。遺物は溝の全体から出土しているが、北東辺側に多く出土する状況が看取できた (図 28)。

埋土中から、153～205 (図 29～31)・403～406 が出土した。出土遺物は、須恵器 (153～163)、土師器 (164～175・177～179・189～202)、手捏ね土器 (183～187)、韓式系土器 (176)、

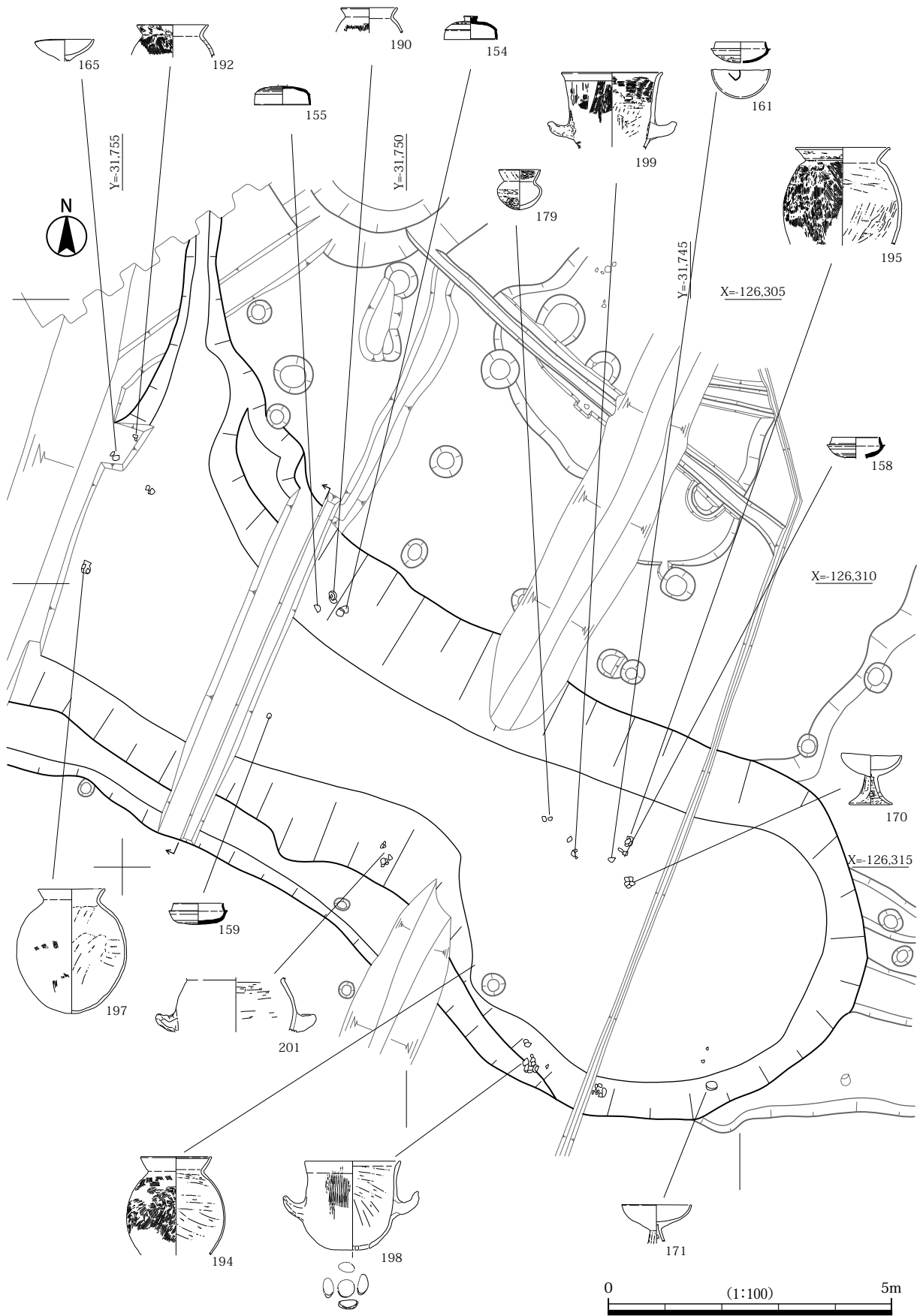


图 28 98 溝 遺物出土狀況

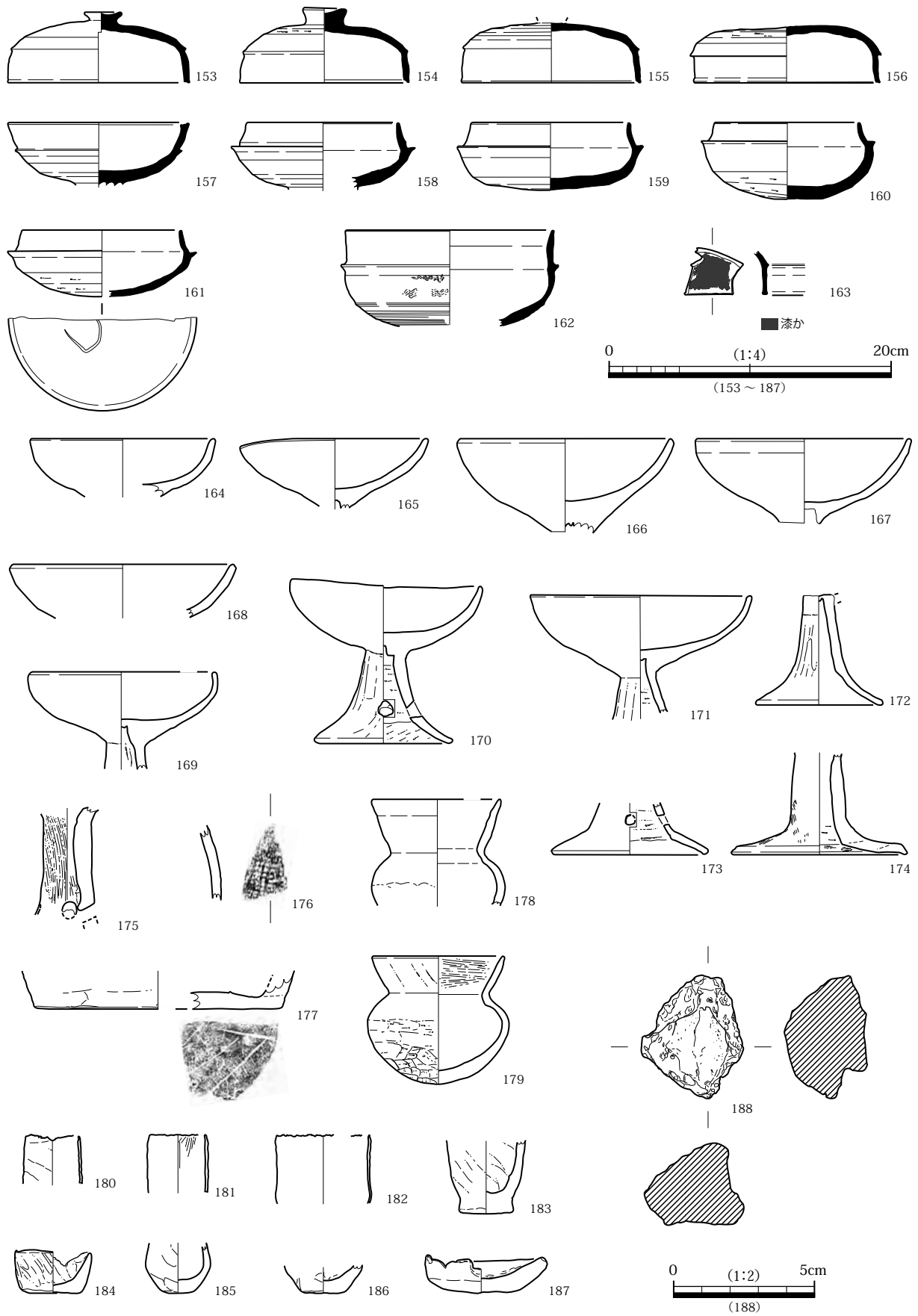


図29 98溝 出土遺物(1)

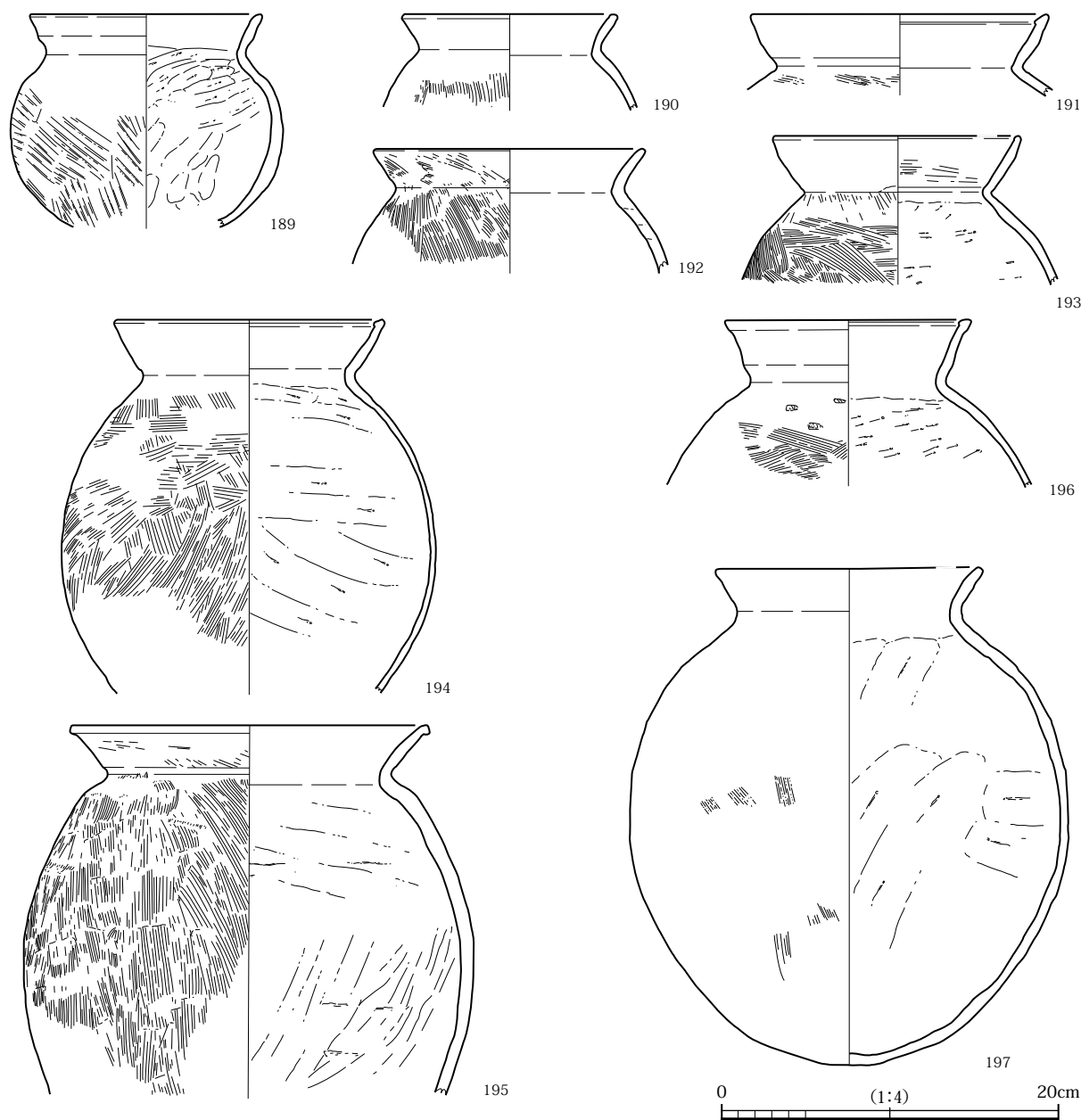


図30 98溝 出土遺物(2)

製塩土器(180～182・403～406)、鉄滓(188)、土塊(203～205)があり、多種多様である。

須恵器のうち153～155は有蓋高杯蓋。156は杯蓋。157・162は無蓋高杯。158は有蓋高杯。159～161は杯身。163は有蓋高杯もしくは杯の蓋であるが、内面に漆かと思われるものが付着していた。このうち153～155は灰白色を呈し、堅緻に焼成されており、今次調査で出土した他の須恵器と明らかに区別できる(註3)。須恵器はTK208型式に位置付けられよう。

土師器のうち164～174は高杯。杯部の残るものはいずれも椀形高杯である。170・171・173・174は脚部内面をケズリ調整する。174は他の高杯脚部と異なる形態であり、胎土や焼成も異なる。搬入品もしくは時期の異なるものの可能性がある。175は器台か。外面を縦方向にミガキ調整、内面をケズリ調整し、4方向に円孔を穿つ。176は韓式系土器鉢の体部片。外面に格子目タタキが残る。177は底部に木の葉の文様を残す。韓式系土器の鉢もしくは土師器甌の可能性があろう。178・179は

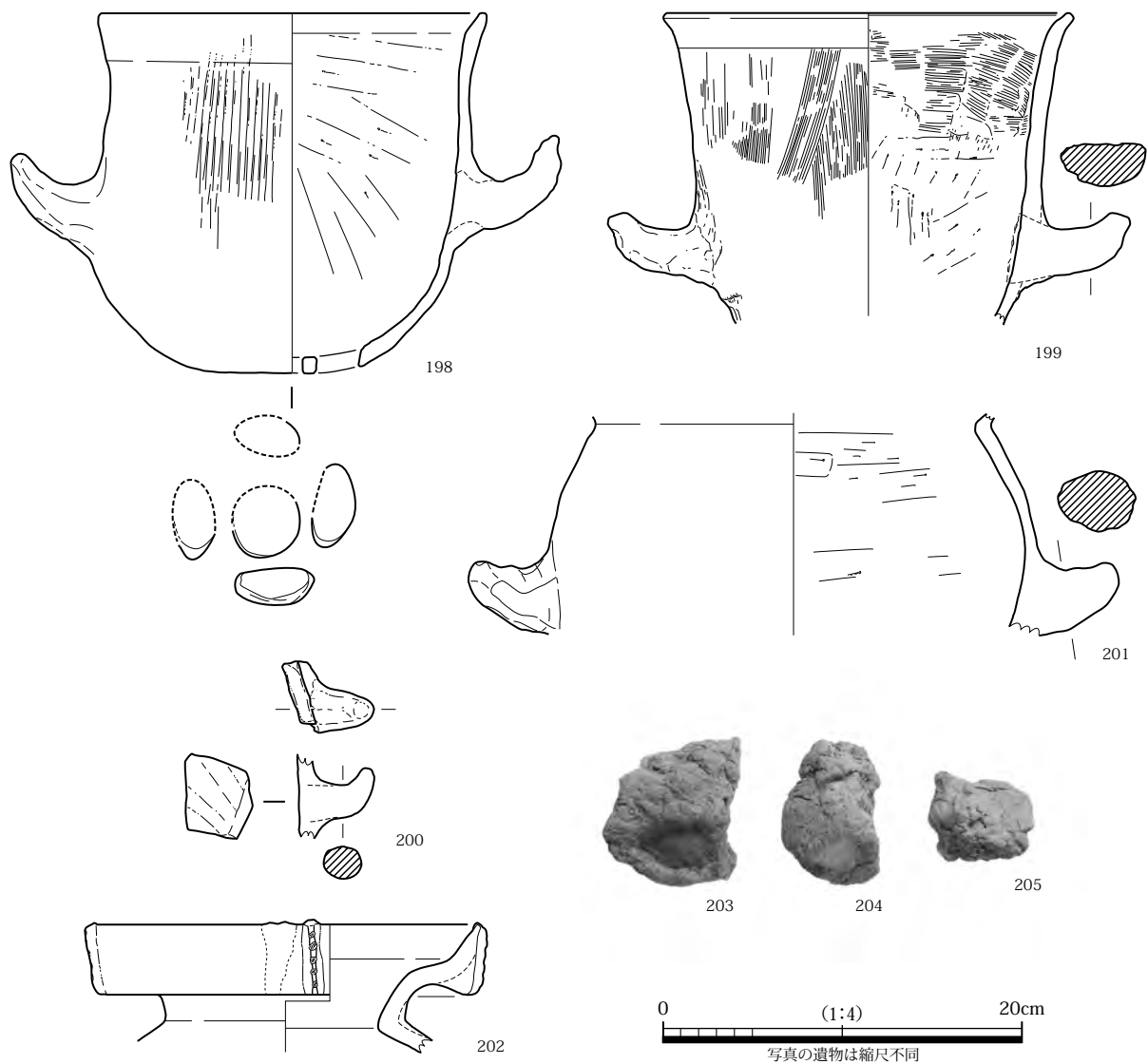


図 31 98 溝 出土遺物 (3)

小型丸底壺。いずれも体部外面をケズリ調整する。

180～182・403～406 は製塩土器。大阪湾Ⅱ-2 式 F2 類に相当する。183～187 は手捏ね土器。183～186 は鉢か。187 は皿か。188 は鉄滓。

189～197 は土師器甕である。189 は粗製の甕。191・193・194・196 は布留式甕。196 は肩部に米粒状の点文を三角形に配する。198・199 は土師器甕。どちらも体部外面に縦ハケ調整を施す。把手は内側からの挿入式である。200 は土師器把手。201 は土師器鍋である。把手の付け方は不明瞭で判然としない。202 は二重口縁壺。粘土を貼り付けることで口縁を肥厚させ、2 条 1 組の貼り付け突帯を 4 箇所につす。東海系の壺の系譜をひくものの可能性があり、時期が遡るもので混入品の可能性がある。203～205 は土塊である。

出土遺物から古墳時代中期中葉に属する溝と判断する。

4. その他の遺構

124 土坑 (図 11・32・33、写真図版 9-2・22)

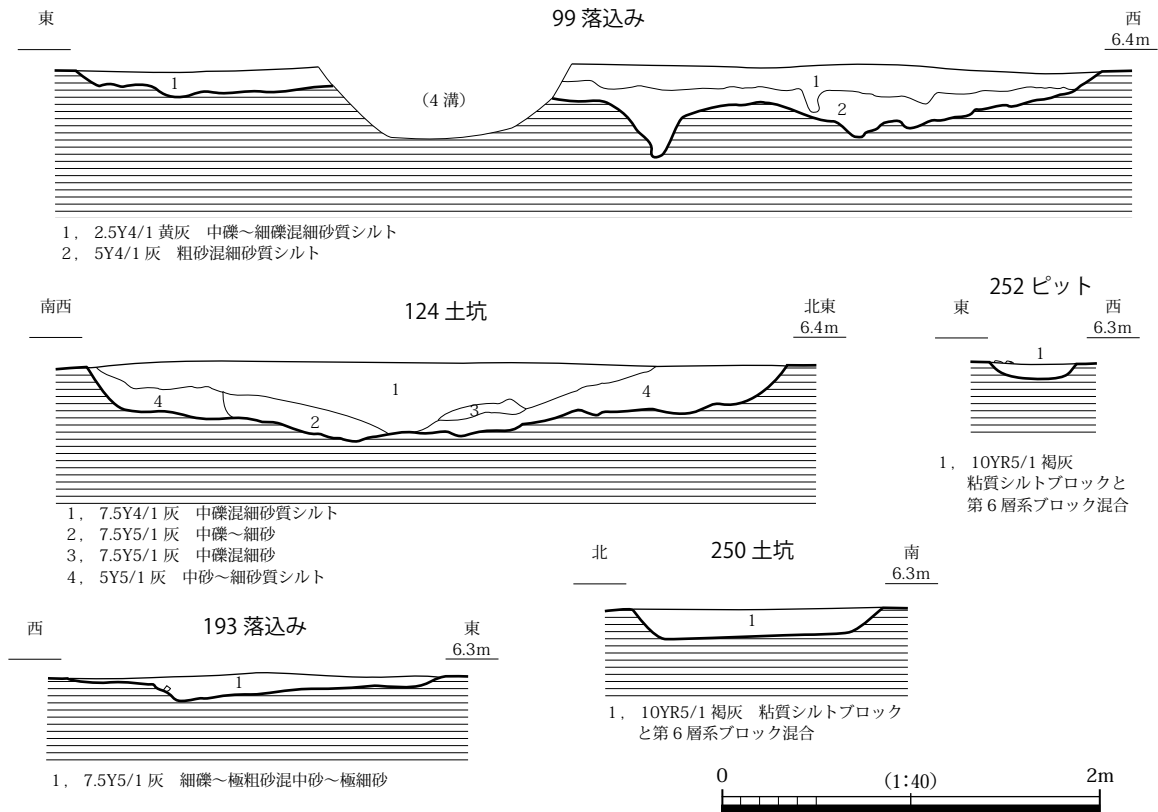


図 32 古墳時代 各種遺構断面

1 区第 4 面で検出した。X=-126,303、Y=-31,750 地点に位置する。北側が調査区外になるため、全容は明らかでないが、検出した部分の規模は長さ 3.7 m、幅 2.7 m を測り、平面方形を指向する。断面形は隅丸矩形で、深さ 0.42 m を測る。埋土はシルトを主体とする。

埋土中から 206～208 (図 33) が出土した。206 は土師器碗形高杯。脚部との接合部に棒状工具痕がある。207 は土師器甕。208 は須恵器壺。

出土遺物から古墳時代中期中葉に属する土坑と判断する。

250 土坑 (図 11・32・33)

2 区第 4 面で検出した。X=-126,337.5、Y=-31,750 地点に位置する。規模は長さ 3.6 m、幅 1.3 m を測り、平面楕円形を成す。断面形は皿形で、深さ 0.15 m を測る。埋土はブロック土を主体とする。

埋土中から 210～218 (図 33) が出土した。210 は土師器碗形高杯。杯部内面にハケ目が残る。211～218 は土塊である。

出土遺物から古墳時代中期中葉に属する土坑と判断する。

252 ピット (図 11・32・33、写真図版 22)

2 区第 4 面で検出した。X=-126,337.5、Y=-31,748 地点に位置する。規模は長径 0.5 m、短径 0.45 m を測り、平面円形を成す。断面形は皿形で、深さ 0.1 m を測る。埋土はブロック土を主体とする。

埋土中から 209 土師器甕 (図 33) が出土した。

出土遺物から古墳時代中期中葉に属するピットと判断する。

193 落込み (図 11・32・33)

2 区第 4 面で検出した。X=-126,312、Y=-31,740 地点に位置する。規模は長さ約 8 m、幅 2～4.2

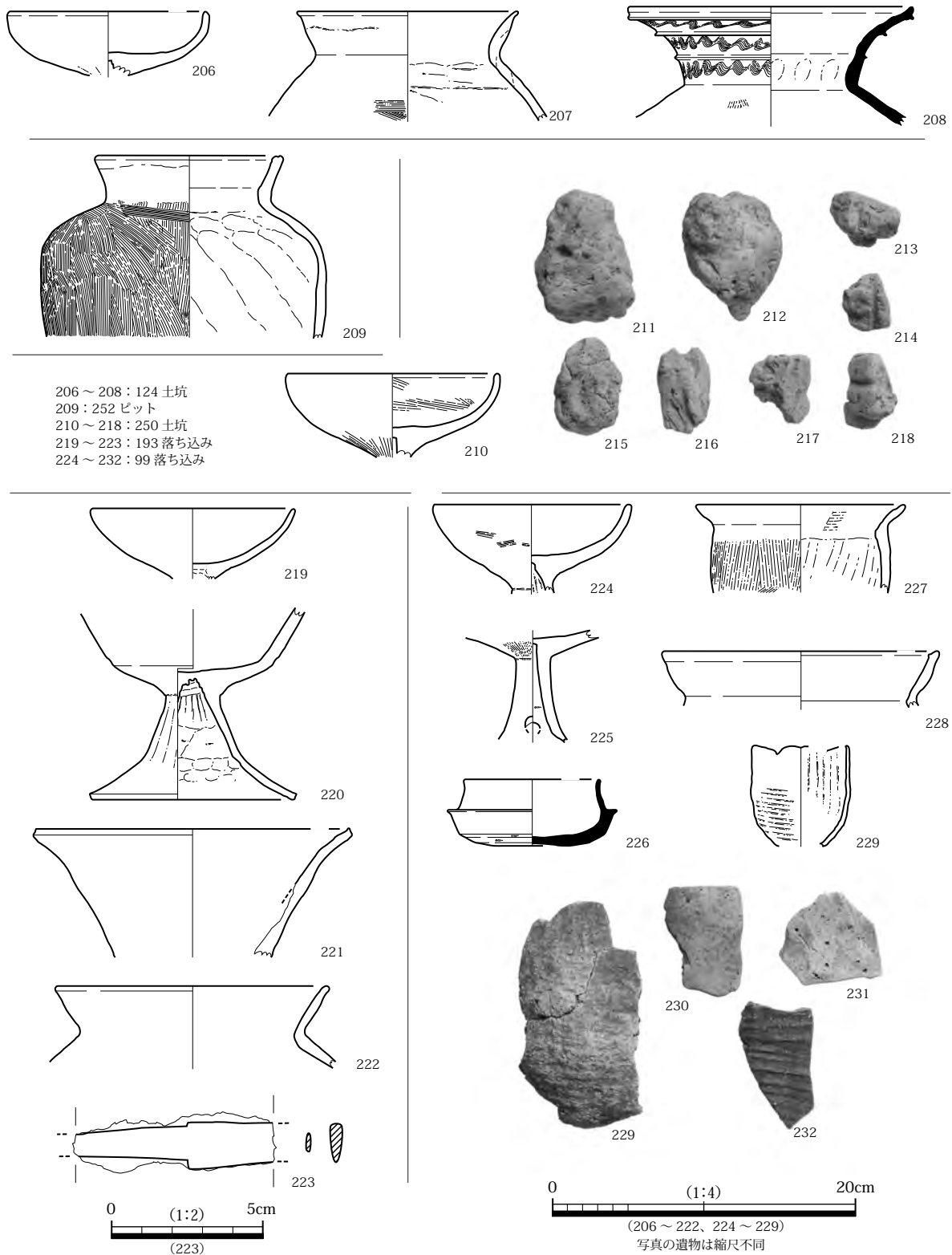


図 33 古墳時代 遺構出土遺物

mを測り、平面不整形になると思われる。断面形は皿形で、深さ 0.17 mを測る。埋土は中砂～極細砂を主体とする。当落ち込みは、前述の 98 溝の埋土と同様の砂礫で埋没しており、98 溝の埋没と時期を同じくする蓋然性が高い。出土遺物の時期から見ても齟齬はなく、98 溝と 193 落ち込みは一連のものとして捉えるのが妥当と考える。

埋土中から 219～223 (図 33) が出土した。219 は土師器椀形高杯。220・221 は土師器大型有稜高杯。222 は土師器甕。223 は鉄器。刀子。

出土遺物から古墳時代中期中葉に属する落込みと判断する。

99 落込み (図 11・32・33、写真図版 9-3)

1 区第 4 面で検出した。X=-126,307、Y=-31,746 地点に位置する。中央部分が後世の 4 溝により削平され、北側も 195 流路により削平されているため全容は明らかでない。検出した部分の規模は長さ 5.5 m、幅 4.4 m を測り、平面不整形である。断面形は皿形で、部分的に深くなる。深さ 0.08～0.48 m を測る。埋土は礫を多く含む砂質シルトを主体とする。

埋土中から 224～232 (図 33) が出土した。224 は土師器椀形高杯。225 は土師器高杯脚部。226・227 は土師器甕。226 は須恵器杯。229～232 は製塩土器。大阪湾Ⅱ-2 式 F2 類に相当する。229・232 は外面にタタキ目を残す。

出土遺物から古墳時代中期中葉に属する落込みと判断する。

5. 包含層出土遺物 (図 34～36、写真図版 9-4・5・6、15・24、巻頭原色図版 2)

包含層から出土した当該期の遺物をまとめて報告する。出土地点が明らかなものは層位に関わらず図 36 に位置を示した。包含層出土遺物は形を残すものが多く、点在する様子が看取できた。また、図化し得なかったが、土師器小型丸底壺が比較的多く出土したことも特徴として挙げられる。

233 は腕輪形石製品の石釧。[蒲原 1987] のⅡ-a 類に相当する。緑色凝灰岩製。白色粒が混じり軟質である。石材は [北條 1994] の材質 2、[岡寺 1999] の材質Ⅲに相当すると思われる。大阪府下において集落出土例は極めて少なく貴重例となろう (註 4)。234 は須恵器甕。235 は須恵器杯。底部外面を手持ちヘラケズリ調整する。236 は須恵器鉢か。体部に円孔がある。237 は須恵器甕。TK73 型式の所産か。238 は須恵器壺か。体部に螺旋状沈線を巡らせる。239～241 は土師器高杯。240 は脚部外面にモミ痕がある。241 は脚部内面裾部に布目を残す。242～244 は土師器小型丸底壺。242 は体部外面ケズリ。243・244 は体部外面ハケ調整。245 は土師器鍋。246・249・250 は土師器甕。249・250 は布留式甕。249 は肩部に米粒状の点文を付す。247・248 は二重口縁壺。247 は底部付近に穿孔あり。

註 1) 周辺では他にも大阪府豊中市新免遺跡 (豊中市史編さん委員会 2005)、京都府向日市森本遺跡 (長岡京発掘調査団 1970)・鴨田遺跡 (向日市教育委員会 1985)、兵庫県三田市奈カリ与遺跡 (兵庫県教委 1983) で出土しており、淀川北岸地域で出土する傾向がある。

註 2) 信太山 2 号窯以外には、泉大津市豊中・古池遺跡 [豊中・古池遺跡調査会 1976]、堺市陶邑・伏尾遺跡 [(財)大阪府埋蔵文化財協会 1992]、堺市陶邑窯跡群豊田地区 STK99 地点 [小谷城郷土館発掘調査団 2001]、奈良県桜井市栗原カタソバ遺跡群 [奈良県立橿原考古学研究所 2003]、和歌山県橋本市東家遺跡 [橋本市遺跡調査会 2014] での出土例がある。信太山 2 号窯出土品は実見したが、焼成の具合は異なっていた。また脚部 3 方透かしと 2 方透かしという差異もある。口縁端部や突帯の具合は概ね同じであり、陶邑産である蓋然性は高い。

註 3) 信太山 2 号窯の出土遺物を資料調査した際、同窯品を併せて実見した。その中に 153～155 と同様の灰白色で堅緻に焼成された須恵器が何点か認められた。重ね焼きの痕跡と自然釉の具合も極めてよく似ていた。この一群の須恵器も陶邑産である蓋然性が高い。

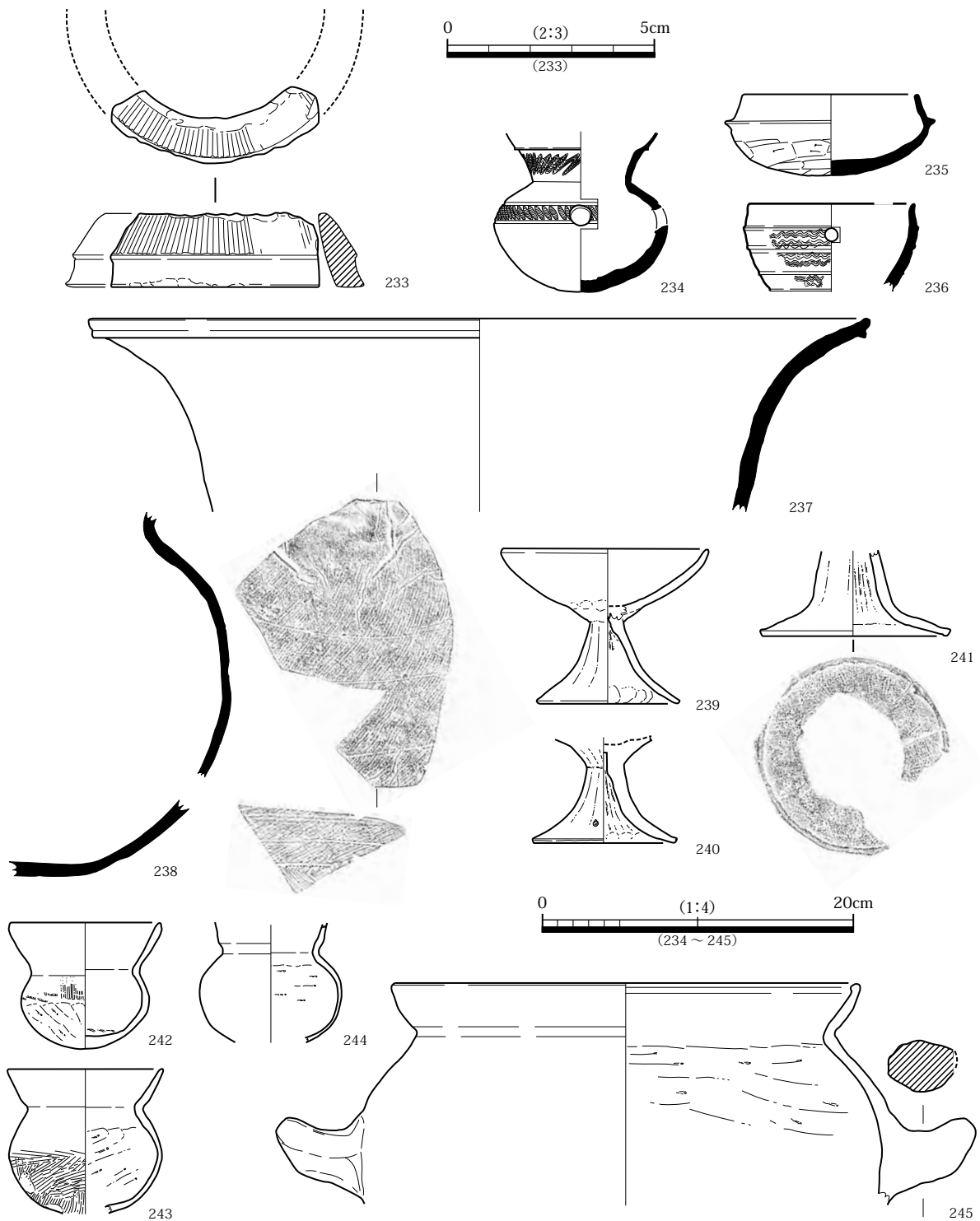


図 34 包含層出土遺物（古墳時代）（1）

註 4) 大阪府域における石釧の集落出土例は、管見では瓜生堂遺跡のものがあるのみである [大阪府教育委員会・大文セ 1998]。

包含層出土で [蒲原 1987] の I - a 類に比定できるものである。石釧は、高槻市域の井尻周辺では萩之庄 1 号墳出土例が知られる。高槻市教育委員会のご配慮でそれを実見することができた。多種多様な石釧がある中で、[蒲原 1987] の III - a 類に比定できる石釧が、1 点だけではあったが白色粒の混じるよく似た石材のものとして確認できた。

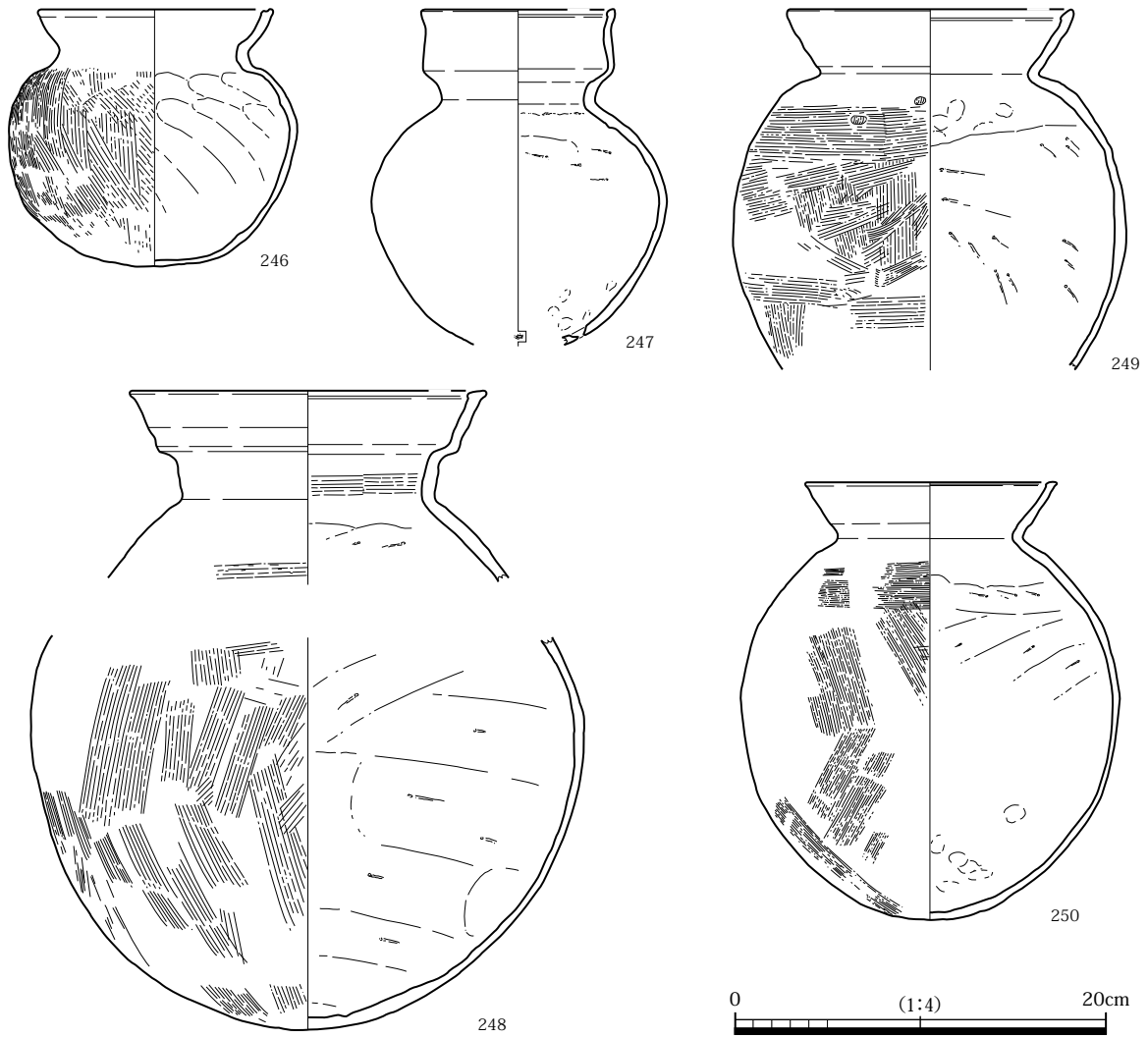


图 35 包含層出土遺物（古墳時代）（2）

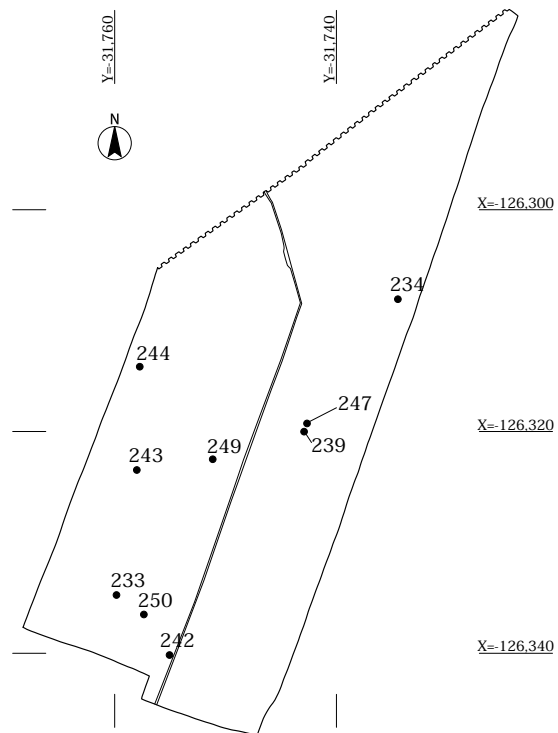


图 36 包含層遺物出土地点（古墳時代）

第5節 古墳時代後期～平安時代の遺構と遺物

古墳時代後期～平安時代に属する遺構は第2～4面で検出した。

1. 掘立柱建物

掘立柱建物1 (図11・37・40、写真図版4)

1区第4面で検出した。X=-126,309、Y=-31,747地点に位置する。後述する掘立柱建物4の北西方約4mにある。構造は、109・110・111・116・117・119・125ピットで構成される桁行2間、梁行2間の柱配置をとる平面長方形の建物である。111・116ピットは古墳時代中期の99落込み埋土を切って形成されている。長軸をN-60°-Wにおく。建物規模は3.9～4.2m×3.5～3.6mを測り、面積は約14㎡である。

柱間寸法は、梁行側が1.7m・1.9m、桁行側が1.9m・2.0mを測る。

ピットの掘方の平面形は不整形円形もしくは隅丸方形であり、直径(一辺)0.4～0.6m、深さは0.2～0.3mを測る。断面形は隅丸矩形、隅丸逆台形である。埋土は、灰色細砂質シルトを基調としてベースである第6層のブロックを含む。なお、柱の抜き取り痕跡はなく、ほとんどのピットで柱痕跡もしくは柱当たりを確認している。柱痕跡は直径12cm前後である。それらのほとんどは、ブロックが混じらない比較的均質な土質により識別された。

なお、当建物の梁行の中央の柱(110・117ピット)が若干外側へ出る構造は、後述の掘立柱建物4の様子と似る。

ピットからは遺物が少量出土した。111ピットの掘方埋土から251須恵器杯が出土した(図40)。古墳時代後期の所産と考えられる。建物の時期を直接判断できる資料としてはこの土器のみであり、不確定要素を多分に残すが、大略的には古墳時代後期に属する建物と考えられる。ただし、今次調査では古墳時代後期所産の遺物は包含層も含め251須恵器以外出土していない。建物の時期はもう少し時期が下る可能性がある。

掘立柱建物4 (図11・38・40、写真図版5)

2区第4面で検出した。X=-126,314、Y=-31,471地点に位置する。前述の掘立柱建物1の南東方約4mにある。構造は、197・198・199・200・201・202・203・204・205・206・207ピットで構成される桁行3間、梁行1間の柱配置をとる長方形の建物である。197～203ピットは古墳時代中期の193落込み埋土を切って、204～206ピットは古墳時代中期の98溝埋土を切って形成されている。長軸をN-55°-Wにおく。建物規模は3.3～3.7m×3.9mを測り、面積は約13㎡である。当建物は梁行の中央の柱(201・203ピット)がピット1基分程度外側へ出ていることから、独立棟持柱を持つ構造の建物と推定する。また、桁行の柱間の間隔が北東辺と南西辺では大きく異なる。

柱間寸法は、柱根及び柱痕跡がほとんど認められなかったため明確にはできないが、ピットの中心間の距離においては、梁行側が3.3m・3.7m、桁行側が0.9m～1.7mを測る。

ピットの掘方の平面形は基本的に不整形円形であり、直径0.3～0.5m、深さは0.1～0.25mを測る。断面形は隅丸逆台形、U字形である。埋土は、灰色細砂質シルトを基調としてベースである第6層のブロック及び98溝・193落込み埋土の極細砂ブロックを含む。

当建物は、独立棟持柱を持つ点、建物中央部の201・203ピットを結んだライン上に202ピットがある点、さらに桁行の柱間の間隔が大きく異なる点、といった大きく3点について、通常の掘立柱建物

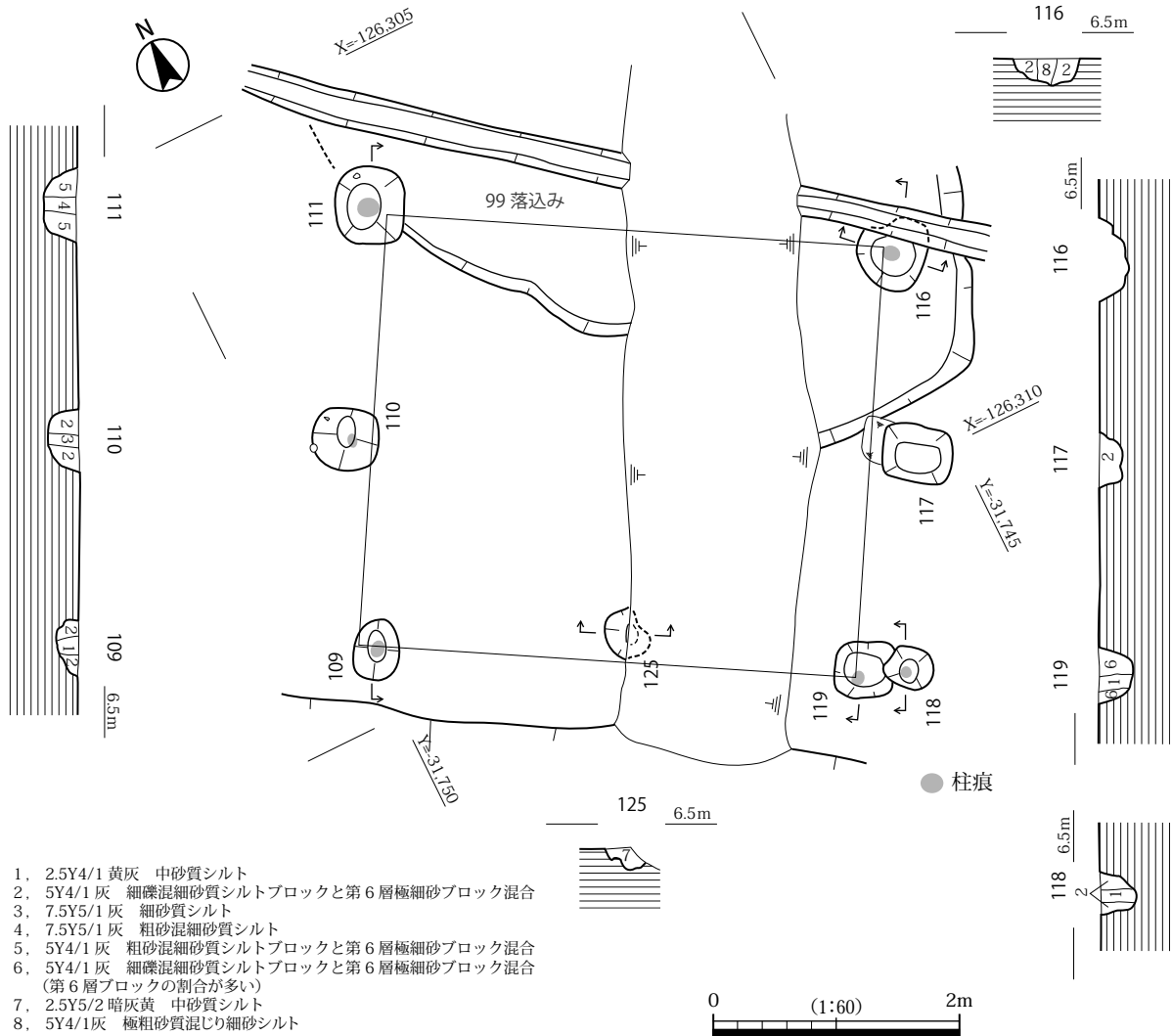


図 37 掘立柱建物 1 平・断面

とは異なる点を見出すことができる。202ピットについては、位置から見て心柱とされるものに相当する可能性が高い。なお、202ピットについては、断面図ではあまり深くないが、193落込み埋土を掘削中に検出したものであり、上部をかなり削平した状態での記録であるため、本来はもう少し深さがあった。少なくとも棟持柱と同等の深さがあったものと推定する。そして、桁行の柱間の間隔については、198・199ピット間が1.7m、205・206ピット間が0.9mと大きく差がある。これについては、どちらかが入口であったことが想起され、平入りの建物であった可能性が指摘できる。これら、独立棟持柱を持つ点、心柱と想定される柱がある点、平入り建物の可能性がある点を考慮すると、本建物は神明造とされる神社建築建物に類似する。

ピットからは出土遺物がなく、建物の時期を直接判断できる資料はない。ただし、98溝・193落込み埋土を切る形でピットが形成されていることから、少なくとも古墳時代中期以降であることは疑いない。併せて、第4面検出であることから、奈良時代頃までに収まるものと考えられる。前述の掘立柱建物1と主軸の方向、建物面積、梁間の柱の感じが似ていることから、掘立柱建物1・4は建替え、もしくは併存の可能性もあろう。

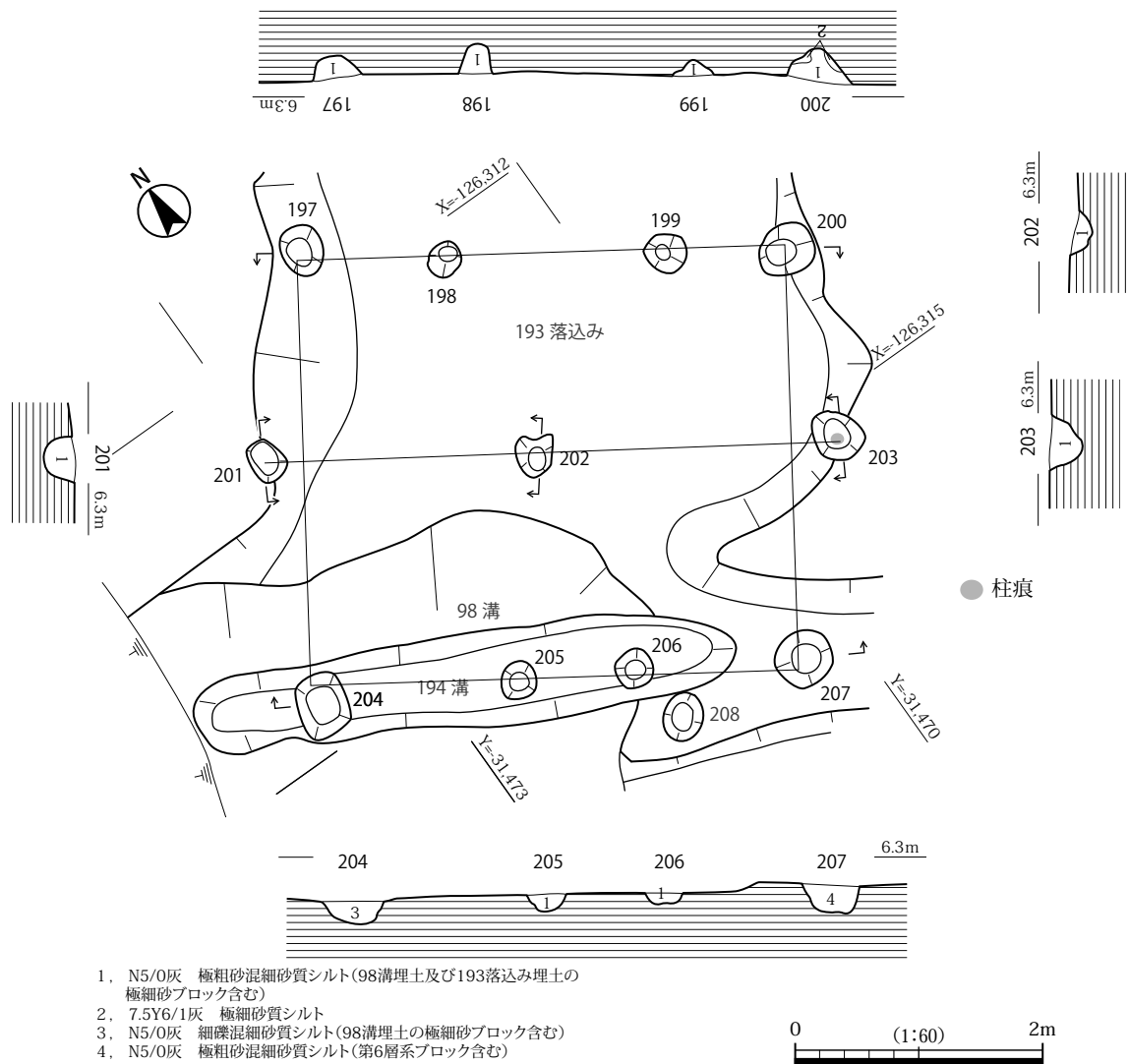


図 38 掘立柱建物 4 平・断面

掘立柱建物 5 (図 11・39・40、写真図版 6)

2区第4面で検出した。X=-126,325、Y=-31,742 地点に位置する。前述の掘立柱建物 4 の南方約 5 mにある。構造は、東部が調査区外になるため、全容を確認できないが、226・227・228・229・237・257ピットで構成される2間以上×3間以上の柱配置をとる建物になると考えられる。主軸の方向は不明であるが、226ピットと229ピットの通りを軸線とすると、建物の軸は概ねN-75°-Eである。

柱間寸法は、柱痕跡から、東西方向の226-229ピット間が2.3・2.5 m、南北方向の227-257ピット間が2.6・2.7 mを測る。

ピットの掘方の平面形は不整円形及び隅丸方形であり、直径(一辺)0.6~1.1 m、深さは0.4~0.6 mを測る。断面形は隅丸逆台形が主体である。227・228・229ピットでは最下部に土を入れ、柱の高さ調整を行ったかと考えられる土層状況であった。なお、本建物を構成するピットは今次調査の中で規模が最も大きいものである。

ところで、91溝調査時に259ピットを検出した。切り合い関係は不明瞭であったが、259ピットが91溝埋土を切って形成されたように観察できた。図面上で検討したところ、229ピットと257ピット

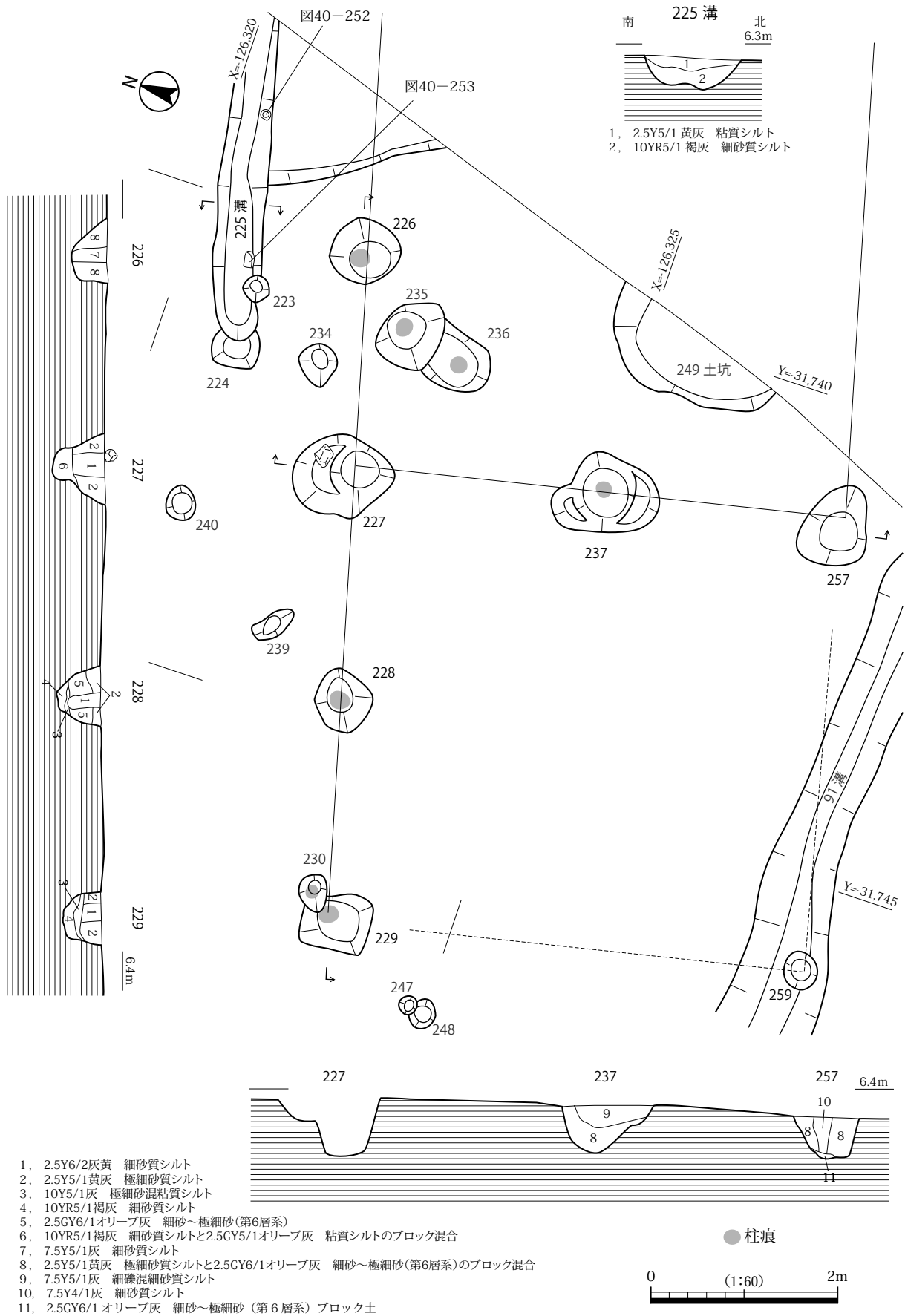


図 39 掘立柱建物 5 平・断面

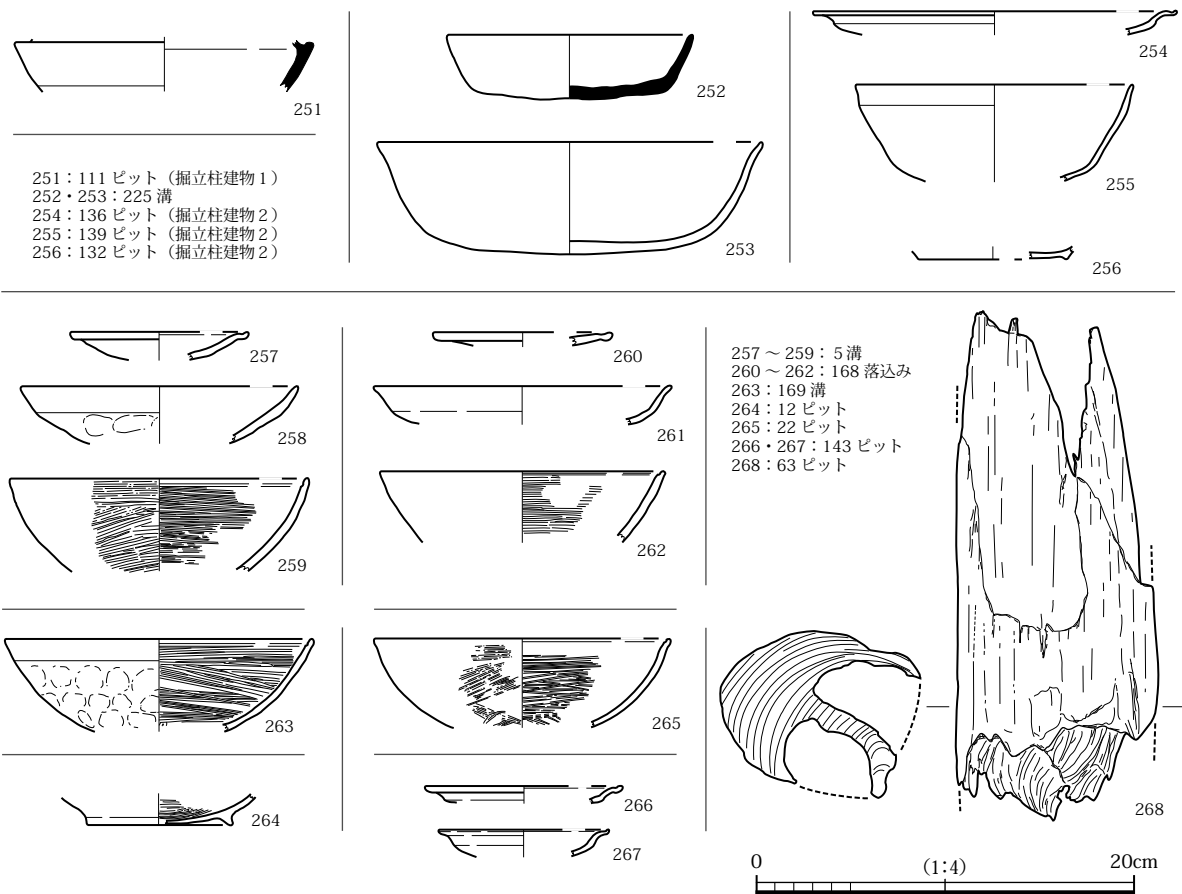


図 40 古墳時代後期～平安時代 遺構出土遺物

との距離が 227 - 229 ピット間距離と 227 - 257 ピット間距離とほぼ同一であることから、259 ピットも当建物を構成する柱穴である可能性があり、関連するものとして付記しておく。

なお、本建物の北側に柱列に平行するように 225 溝を検出した。柱列との距離はおおよそ 1.1 m である。詳細は後述するが、本建物に伴う雨落ち溝の可能性がある。

ピットからは出土遺物がなく、建物の時期を直接判断できる資料はない。ただし、225 溝が建物に伴う雨落ち溝として良ければ、建物の時期を判断できる資料としてはその出土遺物（252・253）であり、不確定要素を多分に残すが、奈良時代に属する建物である蓋然性が高い。

掘立柱建物 2 (図 9・40・41、写真図版 13・22)

2 区において、第 2 面で検出した。X=-126,336、Y=-31,748 地点に位置する。構造は、127～138 ピットで構成される桁行 3 間、梁間 2 間の柱配置をとる長方形の建物である。長軸を N-75°-W におく。建物規模は 6.5・6.7 m × 3.8 m を測り、面積は約 25 m² である。

柱間寸法は、柱根及び柱痕跡が認められなかったため明確にはできないが、ピットの中心間の距離においては、梁間側が 1.8 m～2.0 m、桁行側が 2.0 m～2.4 m を測る。

ピットの掘方の平面形は基本的に不整円形であり、直径 0.35～0.7 m、深さは 0.2～0.4 m を測る。断面形は隅丸逆台形、U 字形のものが主体である。埋土は、極細砂～中砂と極細砂質シルトのブロック混合である。いずれの柱穴にも柱根及び柱痕跡は認められなかった。

当建物は、東西に長い 2 間 × 3 間の建物と推定したが、最も西側の 127・131・135 ピット列と

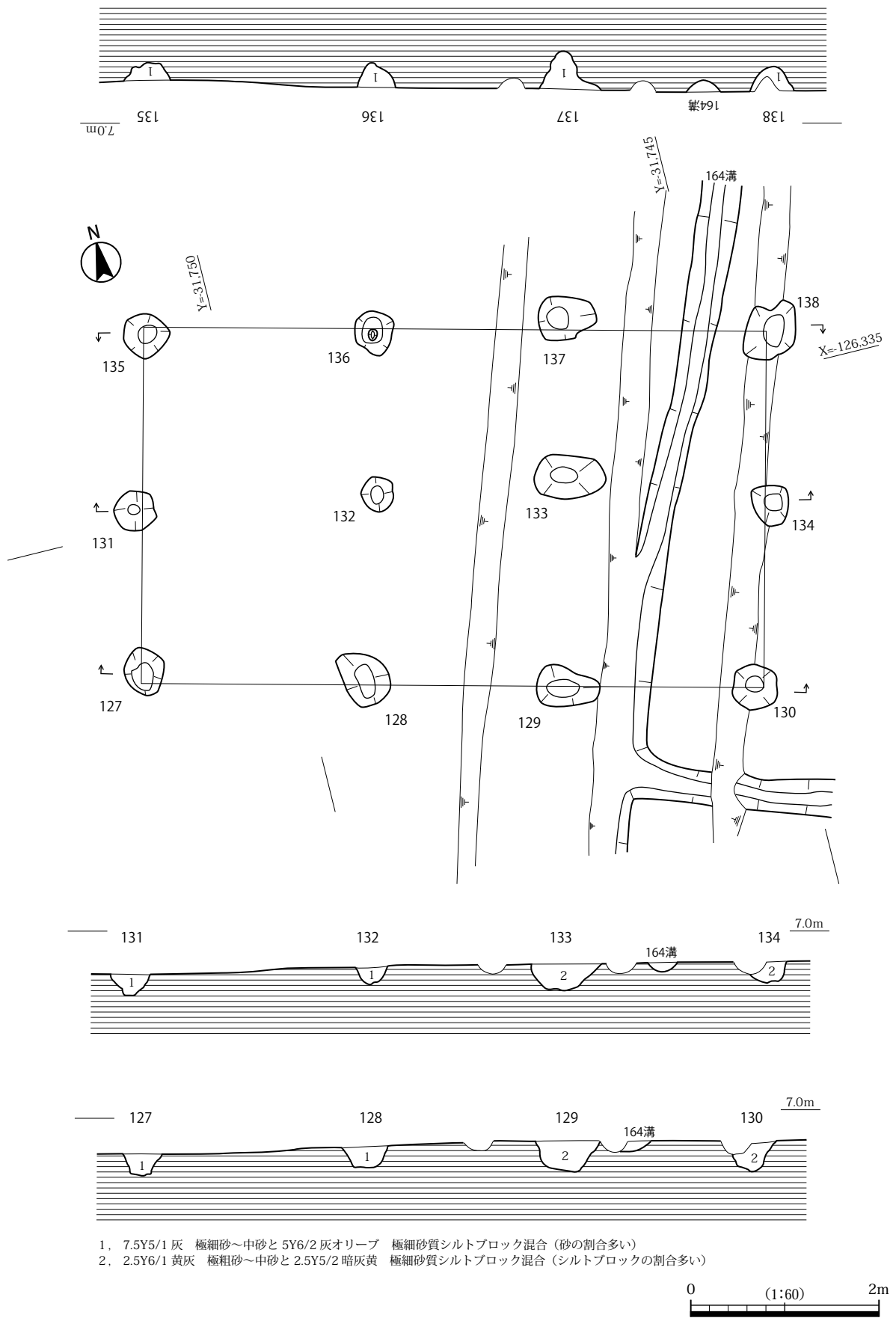


図 41 掘立柱建物 2 平・断面

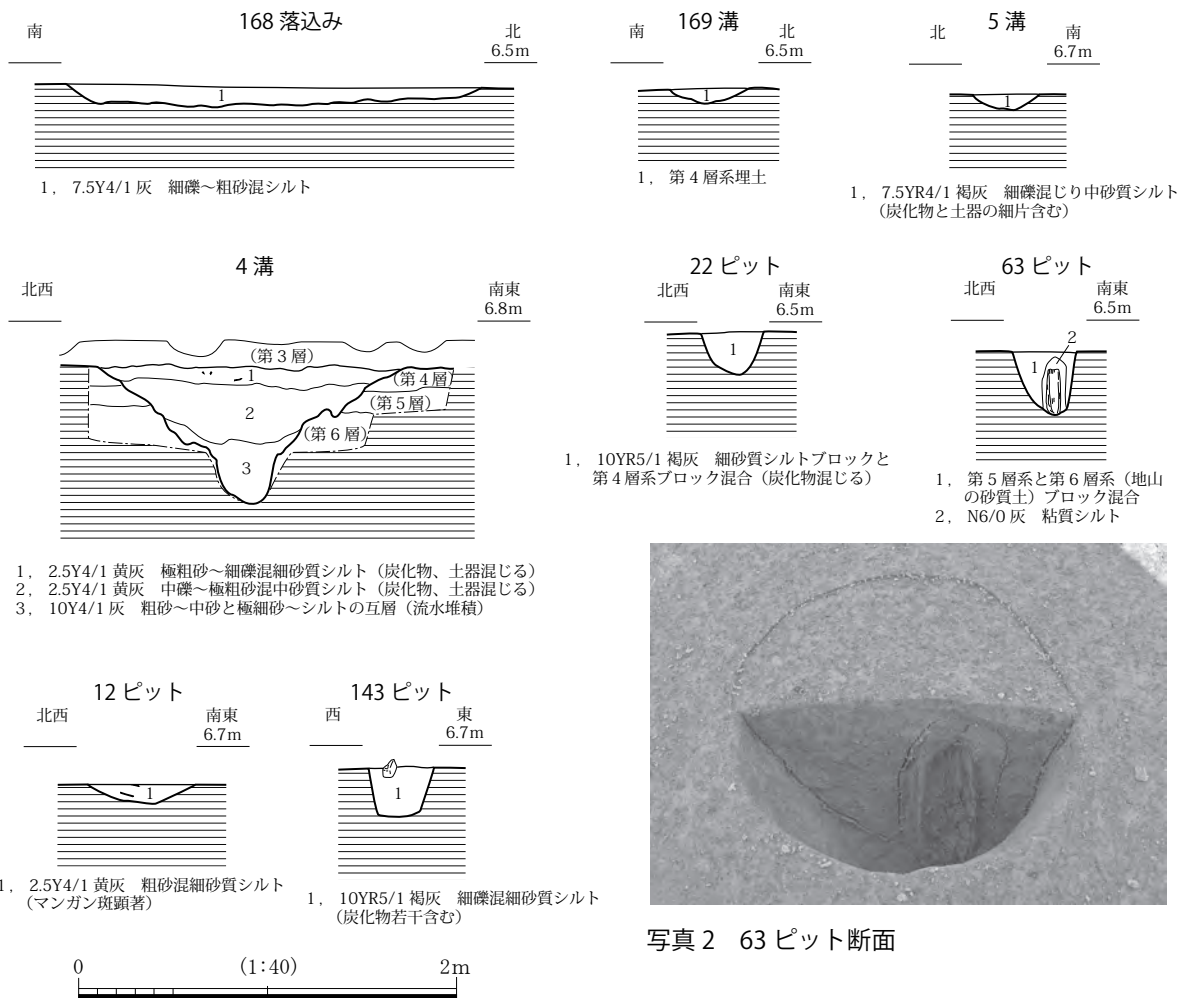


図42 古代 各種遺構断面

128・132・136ピット列の間隔が東側に比べて若干広がっている。また、129・133・137ピットは他に比べて規模が若干大きく、深い。将来的に隣接する調査如何では建物復元に変更が生じる可能性がある。

ピットからは遺物が少量出土した。そのうち、132・136・139ピットから出土した土器を図示し得た(図40-254～256)。254は土師器杯。口縁で字状。胎土に赤色粒が混じる。乳白色。255は土師器椀。器壁が3mm程度と薄い。256は黒色土器椀の底部。内黒。いずれも10世紀代の所産と考えられる。

建物の時期を示す資料はこれらの土器であり、当建物は平安時代中期に属するものと判断する。

2. 溝

225 溝 (図11・39・40、写真図版9-7・9-8)

2区第4面で検出した。東部が調査区外になるため全容は明らかでないが、N-75°-E方向を指向する。検出した部分の規模は、幅0.45～0.6m、深さ0.15mを測り、検出長約3.5mである。断面形は椀形で、埋土はシルトを主体とする。

埋土中から252・253(図40)が出土した。252は須恵器杯。外面上半部が黒色化しており、重ね焼きの痕跡と推量する。253は土師器杯。表面の剥離が著しい。出土遺物から奈良時代に属する溝と

判断する。

上述したように、当溝は掘立柱建物5の北辺に平行するように検出した溝である。建物に付随する遺構と考えられ、雨落ち溝である蓋然性が高い。

169 溝 (図 10・40・42)

2区第3面で検出した。南東部が調査区外になるため全容は明らかでないが、N-50°-Wを指向する。北西端で168落込み埋土を切る。検出した部分の規模は、幅0.3~0.5m、深さ0.08mを測り、検出長約8.5mである。断面形は皿形で、埋土は細砂質シルトを主体とする。

埋土中から263(図40)が出土した。瓦器碗。内面には0.5~1mmのミガキを比較的密に施す。出土遺物から平安時代後期に属する溝と判断する。

4 溝 (図 9・42・47、写真図版 14-3・23)

1区第2面で検出した。ほぼ直線状で、N-25°-Eを指向する。検出した部分の規模は、幅1.1~2.0m、深さ0.62~0.82mを測り、検出長約41mである。断面形はV字形で、最下部が一段深くなる。埋土は最下部に流水堆積層があり、その上部に炭化物や土器片の混じる砂質シルトが堆積する。北端の溝底の標高は概ね6.0m、南端の溝底の標高が5.9mで、ほとんどレベル差は認められないが、北から南へ流水があったものと推定する。水路として機能したのち、埋められたものと推定する。なお、当溝の北端部は後述の167落込みと接しているが、切り合い関係が確認できなかった。167落込みの北側の延長上には当溝が確認できなかったことから、当溝の始まりが167落込みとの接点辺りであることは間違いない。

ところで、4溝は第2面検出として図9に図示しているが、4溝と167落込み、そして第3面検出とした195流路の関係について若干の問題がある。それぞれの遺構の詳細は後述するが、各遺構出土遺物の時期から見て、4溝埋没時(埋め戻し時)と167落込みが併存していたと考えた方が整合的である。また、4溝最下部に流水堆積が見られたことを検討した結果、4溝機能時と195流路機能時が同時期と考え、195流路が機能していた時期に、そこから取水して、用水路として4溝が機能していたと考えた方が整合的である。この当否については隣接の調査を待たねばならないが、現段階ではこのように理解しておきたい。

また、当溝は井尻遺跡13-1調査の第4-2面検出753溝の北端部[大文セ2015]に続くものである。

埋土中から、318~331(図47)が出土した。318は白磁皿。内外面貫入あり。V類か。319は白磁皿。内面段あり。II類か。320は灰釉陶器碗。内外面に薄い施釉あり。外面の回転ナデが顕著

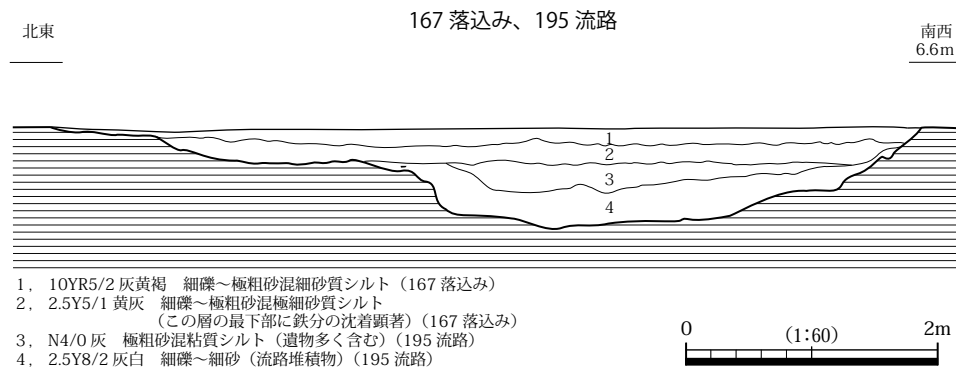


図 43 167 落込み・195 流路 断面

である。321は須恵器甕。口縁端部に面を持つ。胎土に長石かと思われる白色粒を多く含む。外面は格子状にも見える縦方向の平行タタキ。内面は当て具痕が残る。322は須恵器鉢。口縁端部は丸く内側に肥厚する。外面上端部が黒色化しており、重ね焼きの痕跡と思量する。323・324は瓦器椀。323は外面口縁部以下にユビオサエの痕を残す。324は内外面にミガキを施す。325は土師器皿。口縁で字状。器壁4～5mm程度。326は土師器皿。器壁5mm程度。327は土師器台付皿。328～330は羽釜。摂津C型。331は平瓦。凸面に縄目を残す。436は丸瓦。出土遺物から平安時代後期に埋没した溝と判断する。

5溝 (図9・40・42)

1区第2面で検出した。上述の4溝に対し直交する方向に取り付くように検出した。N-75°-Wを指向する。規模は、幅0.35～0.5m、深さ0.08mを測り、検出長約4.7mである。断面形は皿形で、埋土は中砂質シルトを主体とする。

埋土中から257～259(図40)が出土した。257は土師器皿。口縁で字状。器壁4mm程度。258は土師器皿。口縁端部はやや尖り気味。259は瓦器椀。内外面ともに0.5～1.5mmのミガキを密に施す。出土遺物から平安時代後期に属する溝と判断する。

3. ピット

12ピット (図9・40・42)

1区第2面で検出した。X=-126,327、Y=-31,761地点に位置する。規模は長径0.5m、短径0.35mを測り、平面楕円形を成す。断面形は皿形で、深さ0.1mを測る。埋土は細砂質シルトを主体とする。

埋土中から264(図40)が出土した。黒色土器椀か。内黒(A類)。見込み部分に3～4mm幅のミガキを一定方向に施す。出土遺物から平安時代中期に属するピットと判断する。

22ピット (図10・40・42)

1区第3面で検出した。X=-126,307.5、Y=-31,755地点に位置する。規模は長径0.45m、短径0.3mを測り、平面楕円形を成す。断面形はU字形で、深さ0.23mを測る。埋土は細砂質シルトを主体とする。

埋土中から265(図40)が出土した。黒色土器椀。両黒(B類)。内外面に0.5mm幅のミガキを密に施す。出土遺物から平安時代中期に属するピットと判断する。

143ピット (図9・40・42)

2区第2面で検出した。X=-126,318、Y=-31,744地点に位置する。規模は長径0.4m、短径0.3mを測り、平面不整形円形を成す。断面形は隅丸逆台形で、深さ0.27mを測る。埋土は細砂質シルトを主体とする。最上部から自然石が出土した。

埋土中から266・267(図40)が出土した。266は土師器皿。口縁で字状。器壁2～3mm。267は土師器皿。口縁で字状。器壁2～3mm。出土遺物から平安時代中期に属するピットと判断する。

63ピット (図10・40・42、写真2)

1区第3面で検出した。X=-126,332、Y=-31,764地点に位置する。規模は長径0.35m、短径0.25mを測り、平面不整形円形を成す。断面形はU字形で、深さ0.21mを測る。埋土は第5層・第6層ブロック土を主体とする。中から円形の268柱材が出土した(図40、写真2)。径10.7cmを測る。材はスギである。痩せた分を考慮すると、4寸程度の柱であったと考えられる。周囲に同様のピットを密集して検出したが、建物の復元には至っていない。

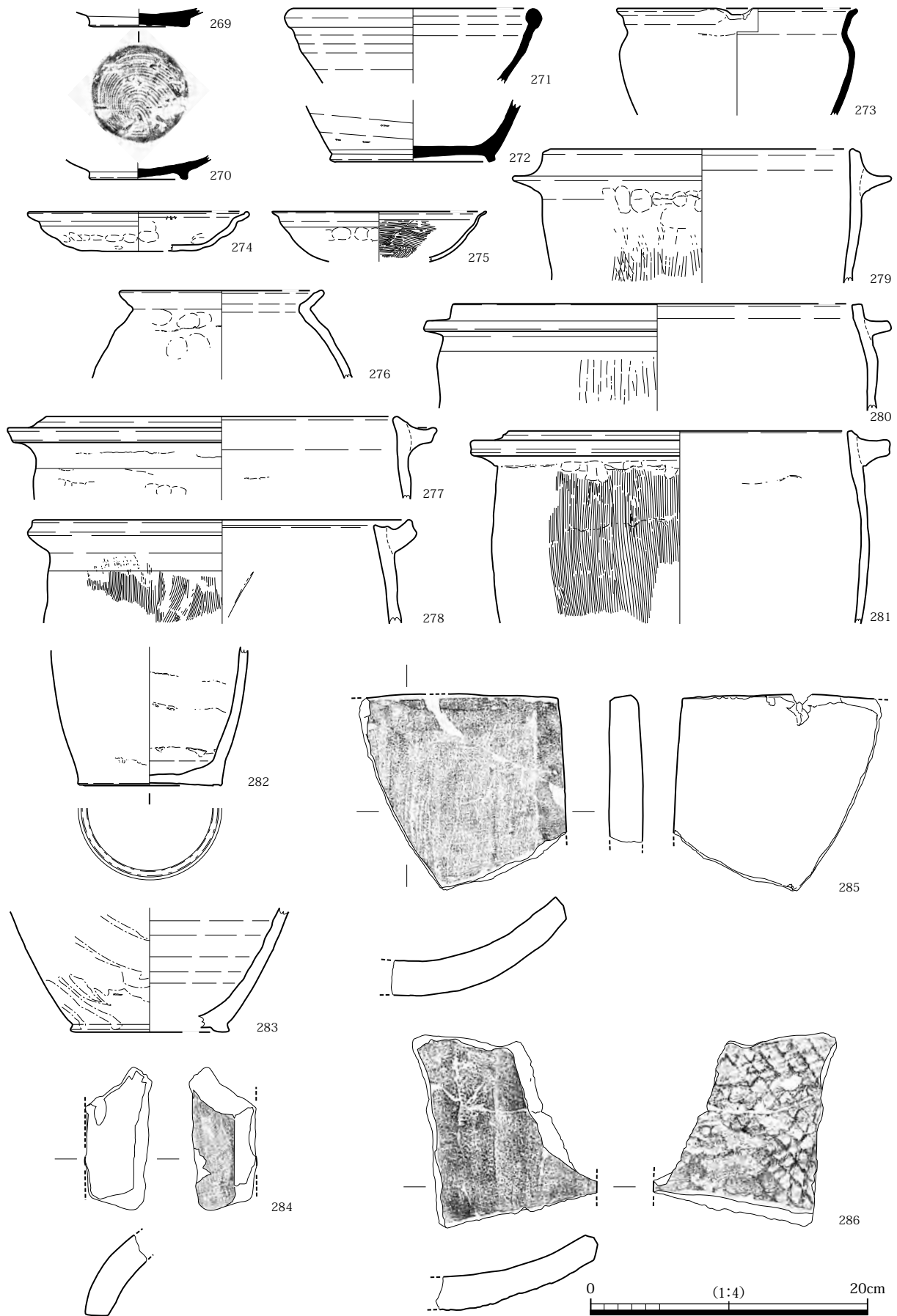


图 44 195 流路 出土遺物

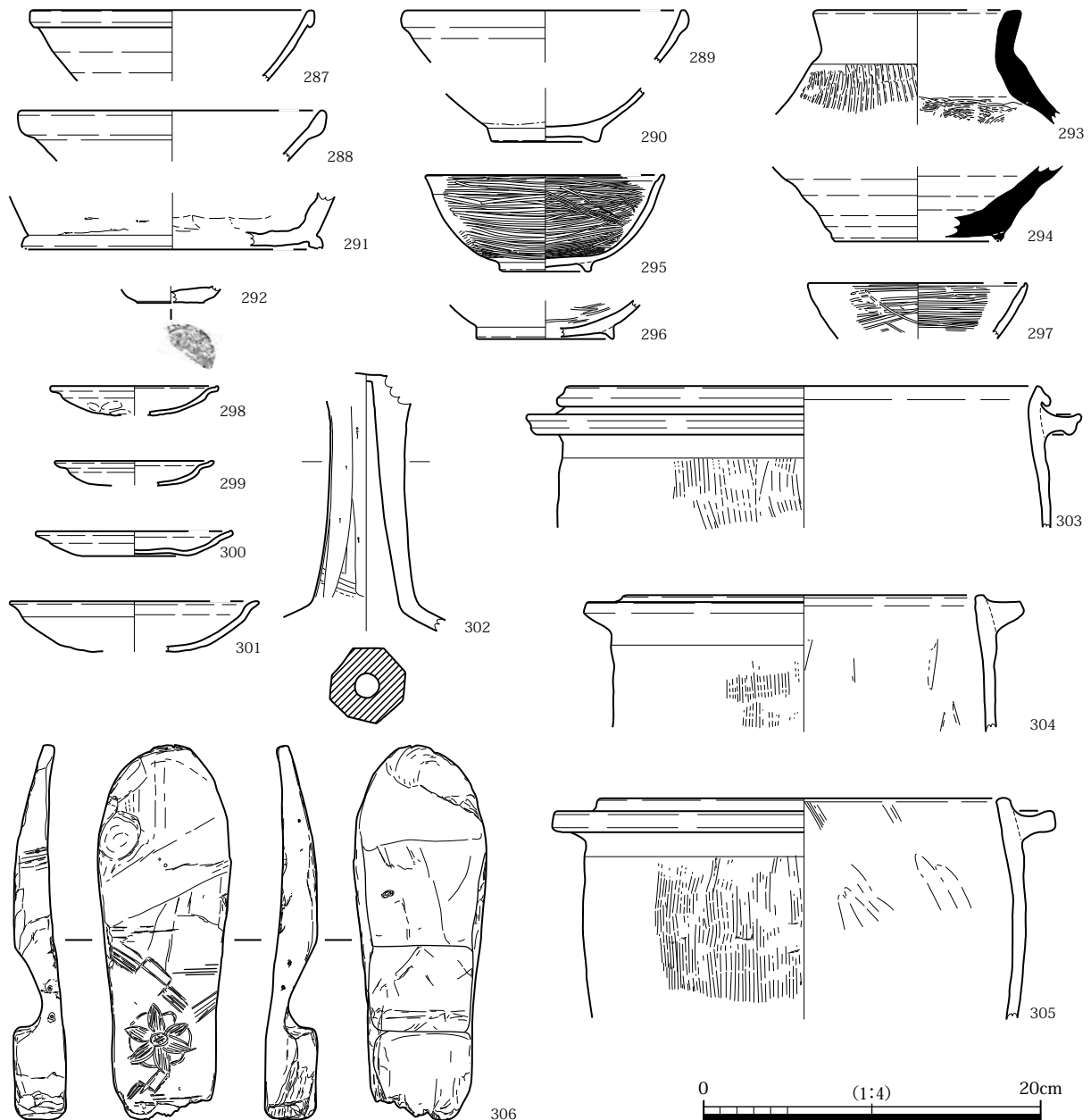


図45 167 落込み 出土遺物 (1)

埋土中から遺物が出土していないため時期は特定できないが、第3面検出であることを考慮すると、平安時代に属する蓋然性が高い。

4. 落込み

168 落込み (図10・40・42)

2区第3面で検出した。X=-126,305、Y=-31,742 地点に位置する。規模は長さ約10m、幅2.0～3.5mを測り、平面不整形になると思われる。断面形は皿形で、深さ0.03～0.12mを測る。埋土は灰色シルトを主体とする。

埋土中から260～262(図40)が出土した。260は土師器皿。口縁で字状。器壁4mm程度。261は土師器皿または杯。262は瓦器椀。外面は摩滅しているが、内面は1～2mmのミガキを密に施す。

出土遺物から平安時代後期に属する落込みと判断する。

167 落込み (図 9・43・45・46、写真図版 10-2・10-3・25・26)

2区第2面で検出した。X=-126,300、Y=-31,737 地点に位置する。両端部が調査区外になるため、全容は明らかでない。検出した部分の規模は検出長約 13 m、幅 6.8～8.7 mを測り、断面形は皿形で、深さ 0.25 mを測る。埋土は砂質シルトを主体とする。

後述の 195 流路が埋没したのち、その低まり部分に形成されたものと考えられる。なお、調査時には 195 流路埋土と考えられる図 43 の 3、の堆積層も同時に掘り上げたため、遺物が混じることになってしまった。遺物の時期では厳密には分別しがたいため、167 落込み出土として報告する。

埋土中から 287～317 (図 45・46)・414・415 が出土した。287～290 は白磁碗。IV類か。いずれも胎土中に微細な黒色粒混じる。287・289 は黄色味を帯びた釉。287 は貫入が見られる。290 は削り出し高台。291 は灰釉陶器壺か。外面に薄く釉がかかる。292 は灰釉陶器瓶子底部か。底部に糸切痕を残す。内面の一部と底部の一部に若干の釉が見られる。293 は須恵器甕。口縁端部に面を持ち、外面に縦方向の粗いタタキ目を残す。294 は須恵器鉢。体部は砂礫の混じる粗い胎土だが、高台部は精良なきめ細かい粘土を貼り付ける。東播系か。295 は黒色土器碗。両黒 (B類)。見込みのミガキにはジグザグ状に連続施文された折り返し点が多く認められる。296 は黒色土器碗。内黒 (A類)。内外面摩滅しており調整不明。297 は瓦器碗。内面のミガキは密だが、外面はやや粗い。器壁 4～5 mm程度。298・299 は土師器皿。口縁で字状。器壁 2～3 mm程度。300 は土師器皿。褐色。301 は土師器杯か皿。口縁部のナデが顕著。302 は土師器高杯の脚部。断面八角形を成す。303～305 は羽釜。摂津 C型。303 は口縁端部が外側に肥厚する。306 は木器。断面を掘削中に出土したもので、層位及び出土レベルから当落込み出土と判断した。浅沓か。足を置く部分に花卉文様と八つ橋の表現かと思われる長方形の線刻を互い違いに配した文様が認められる。また、指の付け根辺りに相当する箇所、斜め方向に 2.5～3 cm幅の帯状に他よりも木が痩せていない部分がある。さらに、側縁に小さな鉄釘があることが確認できた。つま先に近い側に 1 本、中央付近の踵寄りに 2 本、計 3 本あり、反対側の側縁にもほぼ同じ箇所にある。本来は足の甲を覆うものがあってと考えられ、鼻緒孔がないことから下駄ではなく、沓と推定した。材質はスギ。

307～316・414・415 は平瓦。凸面は、①縄目を残すもの (309)、②横ナデ調整するもの (307・308・311～315)、③縦ナデ調整するもの (310)、④斜格子タタキを残すもの (316・414・415) の 4 種が認められる。凹面は布目を残すものが多いが、縦方向にナデ調整もしくはケズリ調整を一部施すものが大半である。310のみ斜め方向にケズリ調整を施しており、焼成も他とは異なる瓦である。

②のうち、312・313 は外面青灰色で断面セピア色の須恵質焼成で堅緻。311・314・315 は外面セピア色で断面青灰色の須恵質焼成で堅緻。307 もよく似る。これらは梶原瓦窯 1 号窯の製品と焼成具合や調整方法等が類似しており、その製品である蓋然性が高い (註 1)。他に 308 は乳白色で包含層出土の 424・425 と同一品の可能性がある。④はいずれも黄橙色で焼成もやや軟質。包含層や他の遺構からも同類の平瓦が出土している。平瓦は、分割後に面取りをするものが多く認められた。317 は丸瓦。これらの瓦の多くは梶原瓦窯産である蓋然性が高い。土器の年代との誤差があり、混入品の可能性がある。

出土遺物から平安時代後期に属する落込みと判断する。

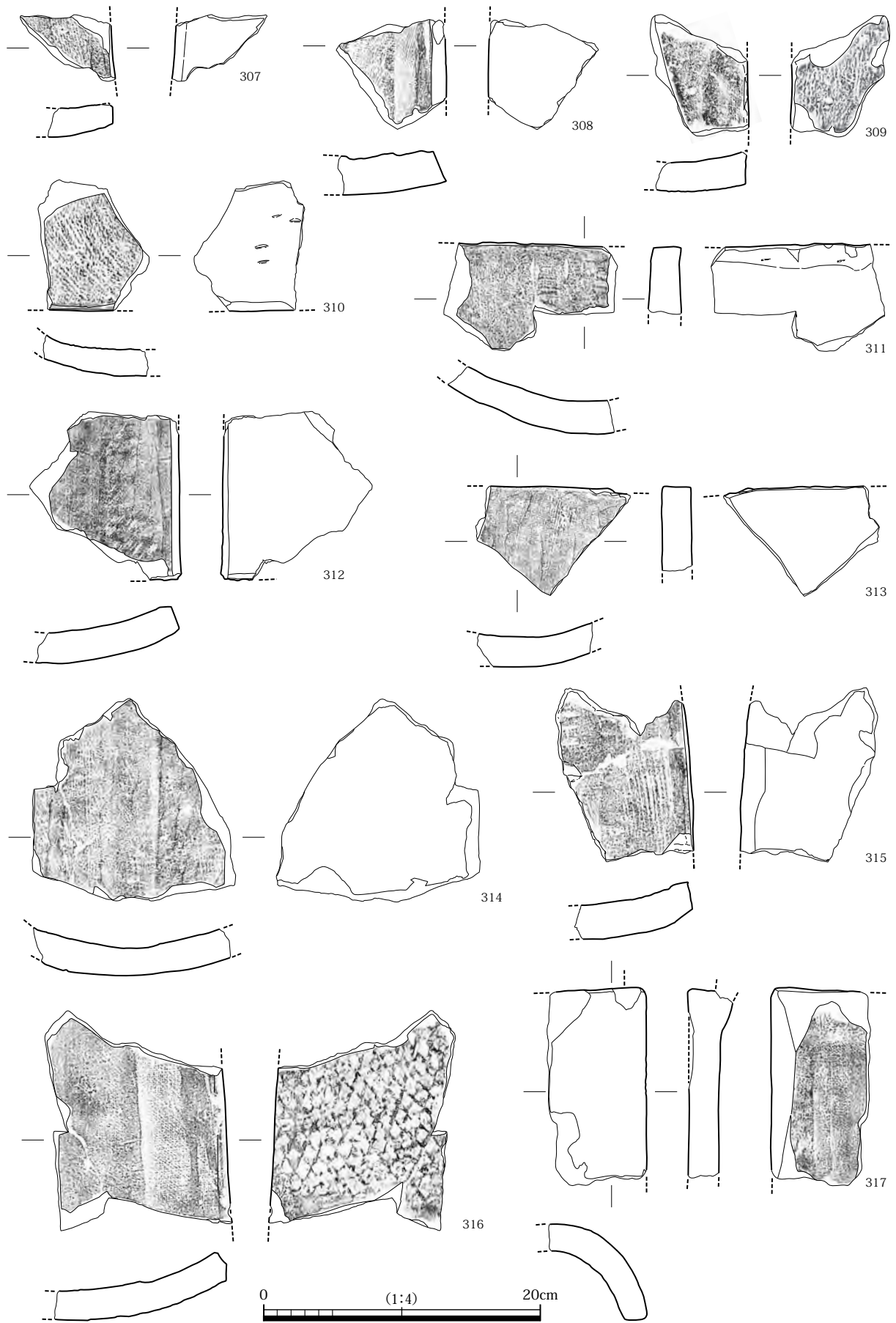


图46 167 落込み 出土遺物 (2)

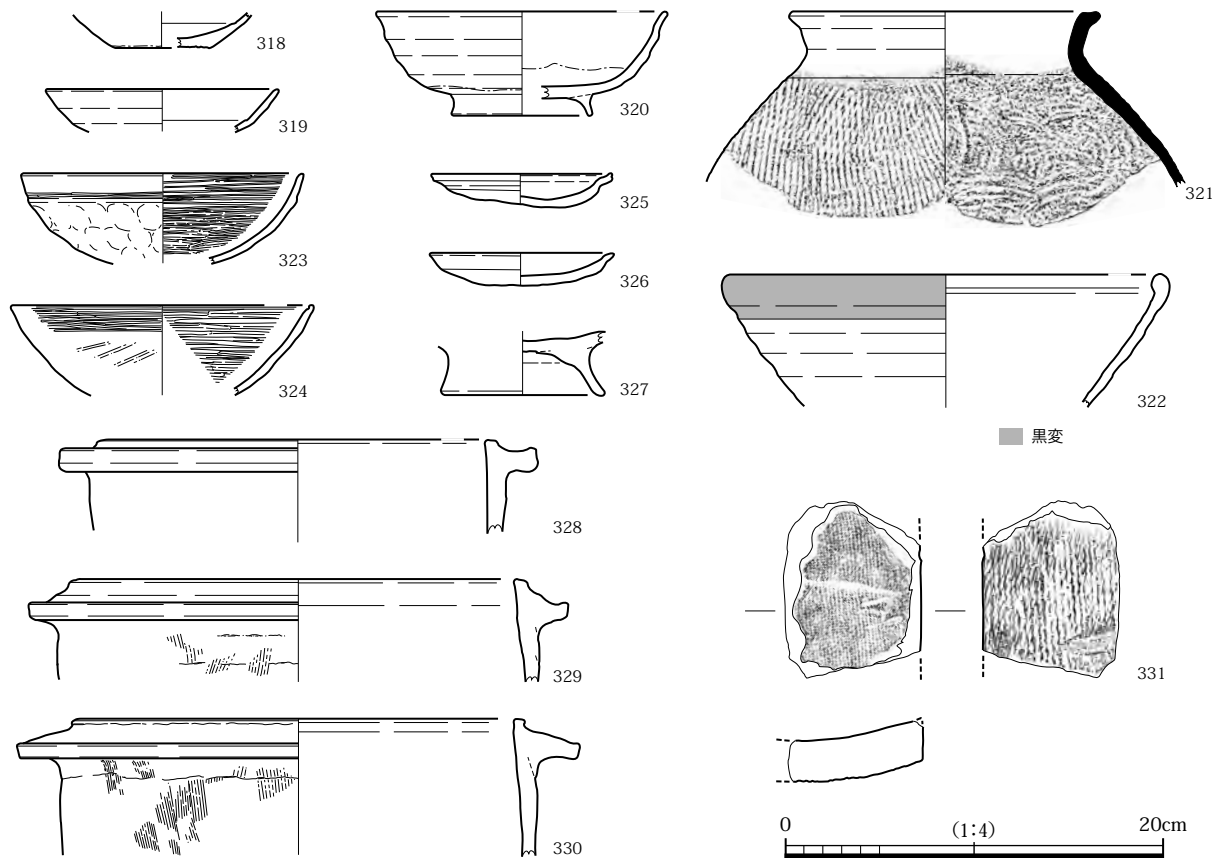


図 47 4 溝 出土遺物

5. 流路

195 流路 (図 10・43・44、写真図版 10-1・23・26)

2区第3面で検出した。両端部が調査区外になるため全容は明らかでないが、およそN-65°-Wを指向する。検出した部分の規模は、幅2.6～7.7m、深さ0.5mを測り、検出長約15mである。断面形は隅丸矩形で、埋土は細礫～細砂を主体としている。地形を考慮すれば、北西から南東方向へ流水があったと考えられる。

流路断面の観察から、ある程度埋没し(図43の4層)、その後、凹みに粘土～シルト(図43の3層)が堆積している。その凹みに堆積した土層から遺物が多く出土した。その後は低まりとしての地形を成しており、それを上述の167落込みとして扱った。この流路は平安時代後期にはほぼ埋没していたようだ。

埋土中から269・286・407・426・427(図44、写真図版23・26)が出土した。269は須恵器椀。底部に糸切痕を残す。底部に棒状の平行する痕跡が認められる。芯々距離でおよそ2.8cm幅。乾燥時の台の痕跡かと推量する。270は須恵器椀か皿の高台部。削り出し高台と思われる。胎土に微細な黒色粒が多く混じるが極めて精良。緑釉陶器素地の可能性もあろう。271は須恵器鉢。口縁端部は丸く肥厚する。272は須恵器壺底部。外面は回転ヘラケズリを施す。砂礫が多く混じる胎土である。273は須恵器片口の鉢か。274・275土師器杯。275は内面にハケ目があり、器壁2～3mmと薄い。276は土師器甕。外面に煤が付着する。277～281土師器羽釜。摂津C型。罎より上に口縁端部が出るものと、

口縁端部が鏝とほぼ同じ高さのものがある。282・283は灰釉陶器壺。282は底部にも施釉が認められ、底部外面に円形の凹みがある。型枠の痕跡か。284は丸瓦。285・286は平瓦。285は凸面横ナデ調整。外面青灰色～灰色で須恵質焼成。286は凸面に斜格子タタキが残る。407は灰釉陶器長頸壺の頸部。426・427は平瓦。凸面に縄目タタキを残す

流路埋土からは概ね10世紀代所産の土器が出土した。出土遺物から平安時代中期に属する流路と判断する。

当流路は、掘立柱建物2の時期とほぼ同じと考えられる。調査時には167落込みとは異なる遺構面と判断したが、整理作業を経た出土遺物の様相から、195流路埋没から167落込み形成は一連のステージでの出来事の可能性が高く、当流路は第2面に帰属させた方がよいかもしれない。

註1) 高槻市教育委員会のご配慮で梶原瓦窯出土瓦を実見した。その際の所見による。なお、凸面縄目タタキの瓦は実見していないため、同窯品かどうかの判断はつかない。凸面横ナデする平瓦と凸面斜格子タタキの平瓦については、梶原瓦窯1号窯出土品に酷似しており、同窯品と判断してもよさそうである。

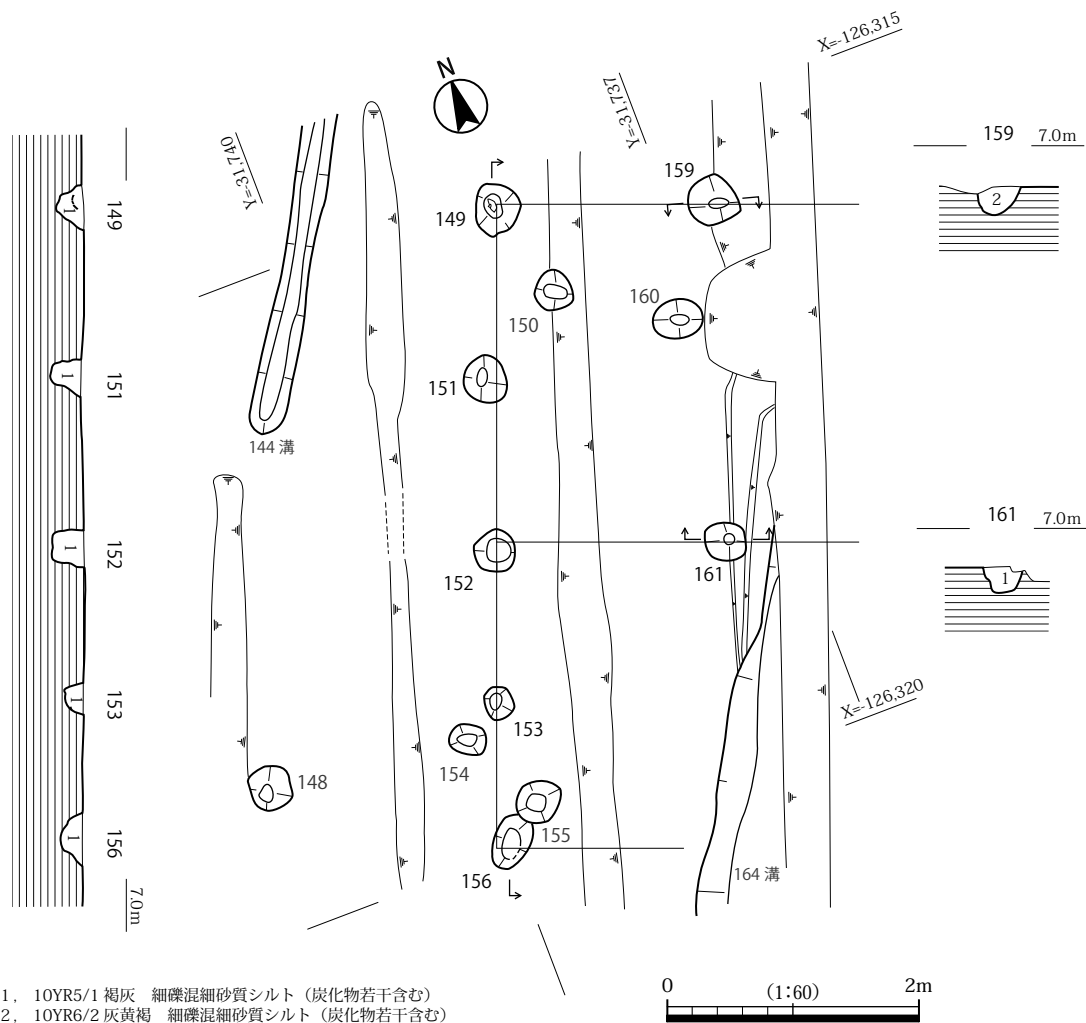


図48 掘立柱建物3 平・断面

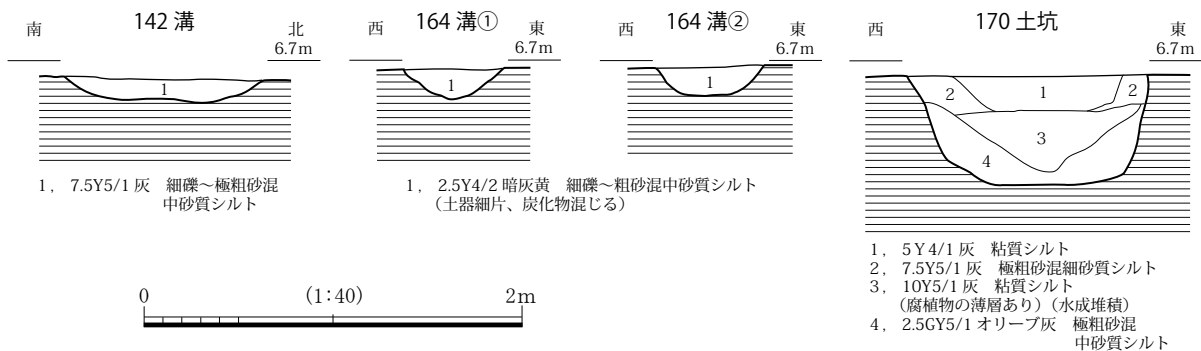


図49 鎌倉時代 各種遺構断面

第6節 鎌倉時代の遺構と遺物

鎌倉時代に属する遺構は、第2面（一部、第3面）で検出した。

1. 掘立柱建物

掘立柱建物3 (図9・48・50、写真図版14-1・14-2・22)

2区第2面で検出した。X=-126,318、Y=-31,737地点に位置する。構造は、東部が調査区外になるため、全容を確認できないが、149・151・152・153・156・159・161ピットで構成される建物になると考えられる。ただし、149・151・152・153・156ピットの柱通りが良いので一連の建物と想定復元したが、柱間を検討すると149・151ピットと151・152ピット間の柱間が中心間の距離で1.35mと同一なのに対し、152・153ピットと153・156ピット間の柱間が1.2m・1.15mと、若干狭くなっている。これから考えると、149・151・152・159・161ピットで構成される空間を主屋として、南側に廂もしくはそれに類する付属施設があると考えた方がよさそうである。また、西北西-東南東方向の149・159ピット間及び152・161ピット間が1.8m～1.85mを測り、桁方向になる可能性もある。そうすると主軸の方向は西北西-東南東を指向し、建物の軸は概ねN-70°-Wと推定される。

ピットの掘方の平面形は不整形であり、径0.3～0.4m、深さは0.15～0.25mを測る。

ピットからは遺物が少量出土した。そのうち、149ピットから出土した瓦器を図示し得た(図50-332・333)。332は椀。全体的に摩滅しており調整は不明。333は椀。見込みに簡略なジグザグ状の暗文を施す。内面には幅1mmの圏線ミガキを6～7周程度巡らす。いずれも樟葉型。13世紀後半の

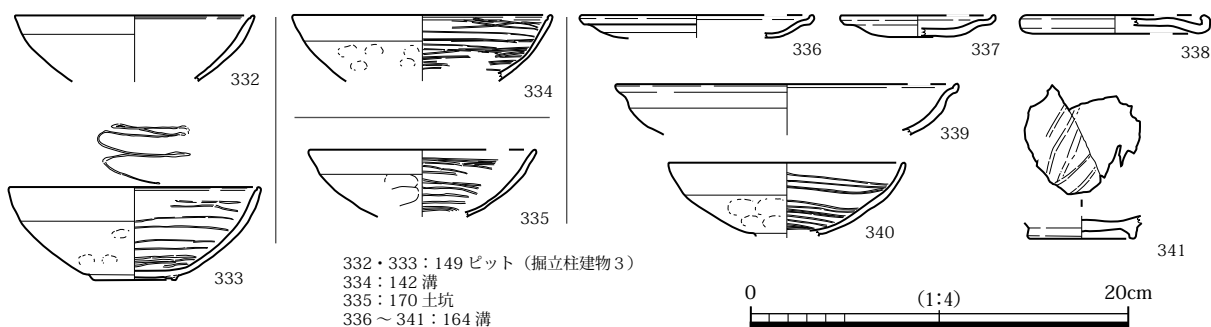


図50 鎌倉時代 遺構出土遺物

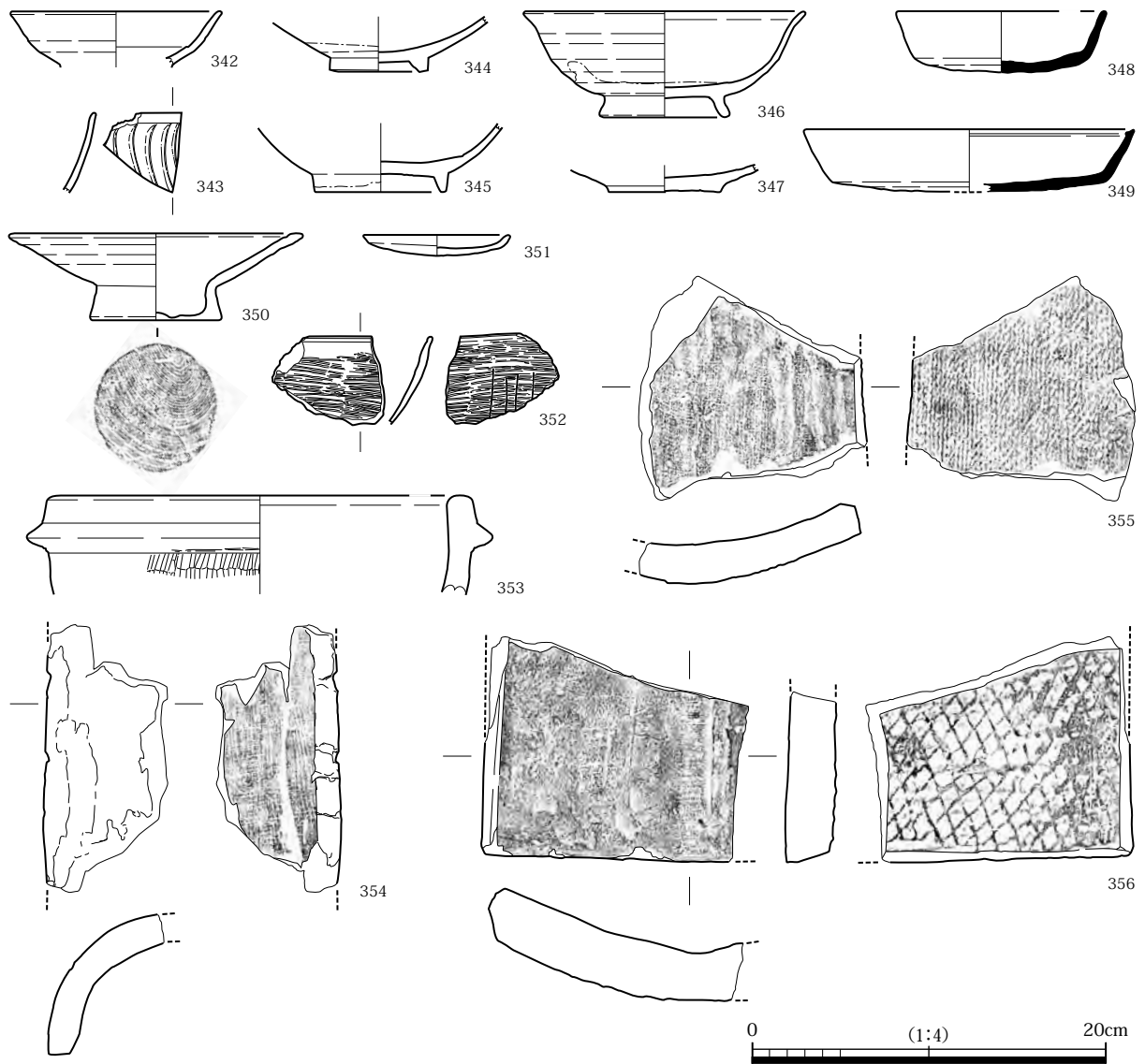


図 51 包含層出土遺物（古代・中世）

所産か。建物の時期を直接判断できる資料としてはこれらの土器のみであるが、大略的には鎌倉時代に位置付けられる建物である。

2. 溝

142 溝（図 9・49・50）

2区第2面で検出した。N-65°-W方向を指向する。規模は、長さ6.5m、幅0.65～1.25m、深さ0.12～0.16mを測る。断面形は皿形で、埋土は中砂質シルトを主体とする。埋土中から、334（図50）が出土した。瓦器碗。内面には幅0.5～1mmの圏線ミガキを10周程度巡らす。樟葉型。13世紀前葉～中葉の所産か。

164 溝（図 9・49・50）

2区第2面で検出した。一部調査区外になるため全容は明らかでないが、北東-南西方向を指向する。X=-126,324、Y=-31,741地点で方向を若干変える。北側はN-35°-E方向を指向し、南側は

N-23°-E方向を指向する。検出した部分の規模は、幅0.3～0.7m、深さ0.12～0.2mを測り、検出長約24mである。断面形は椀形で、埋土は中砂質シルトを主体とする。埋土中から、土師器(図50-336～339)、瓦器(図50-340・341)が出土した。336・337は皿。口縁で字状。乳白色。338はいわゆるコースター型の皿。339は杯。口縁で字状。乳白色。336～339は概ね11世紀の所産。340は椀。内面には幅0.5～1mmの圏線ミガキを数周巡らす。樟葉型か。13世紀前半の所産か。341は椀底部。見込みに幅2mm程度の暗文を施す。12世紀前半の所産か。11世紀代の遺物を含むが、最も新しい340を重視し、鎌倉時代に属する遺構と判断する。

3. 土坑

170土坑(図10・49)

2区第3面で検出した。X=-126,309、Y=-31,736地点に位置する。規模は長径1.3m、短径1.15mを測り、平面不整形円形を成す。断面形は隅丸台形で、深さ0.56mを測る。埋土は大きく4層に分けられ、途中に腐植物の薄層を含む水成堆積層があり、湧水層まで掘削されていないことから井戸ではないが、水を溜める施設であった可能性がある。埋土中から、335瓦器椀(図50)が出土した。内面に0.5～1mm幅のまばらな圏線ミガキが見られる。13世紀中葉頃の所産か。なお、遺物の時期を考慮すると、当遺構は本来第2面で検出されるべきものと考えられ、見逃していた可能性が高い。

第7節 包含層その他出土遺物(古代・中世)

包含層や側溝掘削中に出土した古代・中世所産の遺物について、図化し得たものを報告する(図51、写真図版25・26)。

342～345は白磁である。342は皿。内面に段あり。施釉は部分的に厚く、気泡が見られる。胎土中に微細な黒色粒含む。Ⅱ類か。343は碗。外面弓形縦線で花卉文を施す。内外面貫入あり。Ⅴ類か。344は碗。見込みに目跡あり。貫入あり。Ⅱ-1類。345は碗。高台にも施釉あり。Ⅴ類か。白磁はいずれも11世紀後半～12世紀前半の所産と考えられる。346は灰釉陶器の椀。外面のナデが明瞭である。10世紀後半～11世紀初頭の所産か。347は緑釉陶器の皿。内外面の釉の剥離が著しいが全面施釉。削り出しの蛇の目高台か。土師質素地。9世紀の所産か。348は、須恵器杯身。7世紀後半～8世紀前半の所産。349は須恵器杯もしくは皿。口縁端部が内側に肥厚。350は土師器椀。底部に糸切痕が明瞭に残り、幅5.2cmの間隔で平行する線の痕跡あり。乾燥時の台の痕か。内面底が大きく凹む特徴を有する。西播磨地域の布勢駅家出土品によく似たものがある(龍野市教育委員会1992・1994)。11世紀前半の所産か。351は土師器の小皿。13世紀の所産か。352は黒色土器Ⅱ類の椀。外面に縦方向の4本の線刻あり。353は滑石製石鍋である。12世紀の所産か。354～356は瓦である。354は丸瓦。355は平瓦。凸面に縄目タタキの文様が残る。356は平瓦。凸面に斜格子タタキの文様が残る。梶原瓦窯1号窯出土のT141に酷似するものである(註1)。

註1) 第5節(註1)を参照のこと。

第5章 総括

今次調査では、弥生時代～中世に至る様々な遺構・遺物を検出した。当地における人々の活動の端緒は弥生時代中期に求められそうである。遺構は確認できなかったが、当該期の磨製石鏃が出土した。次に人々の活動が活発に見えてくるのは古墳時代中期である。

第5面検出258溝は、北北東―南南西を指向している。北側に位置する梶原南遺跡では同様の方向の溝が数条検出されている。地形から見て北から南へと流水していたものと考えられ、258溝の上流に当たる可能性がある。梶原南遺跡で検出された溝は弥生時代後期に属するものが多い中、唯一、溝2が古墳時代中期の遺物を含むとされることから、258溝と一連のものである蓋然性が高い(図55)。梶原南遺跡溝2は弥生時代中期～古墳時代中期の土器が出土しており、258溝の時期とも符合する。古墳時代中期初頭に当地で再び人々が活動を始めたようである。これに近い時期と考えられる遺物に、包含層出土の石釧があり、大阪府域では集落出土例がほとんどない中、重要な成果があった。

258溝埋没後、ほとんど時を置かずして古墳時代中期中葉に属する98溝、196落込み等が形成される。今次調査における特筆すべき成果として、196落込み出土遺物が挙げられる。196落込みからは大量の土師器高杯と滑石製模造品、鉄器が出土した。土師器高杯は約130点出土しており、形態が判明するものはいずれも椀形高杯である。黒斑のあるものは極めてまれで、基本的に赤褐色の単色に焼成された高杯である。口径は15.7～11.3cmで平均値は13.3cmを測る。底部径の平均値は9.2cm。器高は12.0～9.4cmで平均値は11.1cmである。完形に復元できたものを合成したものが図52である。脚部の高さにバラつきはあるが、プロポーショナル的に逸脱するものはなく、相似形と言える。口径や器高など若干の差がある中で、杯部と脚部の接合部は径2.5cm±1mmと一定した大きさである。高杯の製作に型や様のようなものが用いられていた可能性もあろう。

196落込み出土の土師器は、[辻1999]にあるように、「粗製の小型壺が消失し、椀形の高杯が組成で大きな割合を占めるようになった3段階から4段階への移り変わり」が体现されているような機種構成である。また、その背景には小型の壺と高杯が「両者が祭祀で同じように用いられて」おり、「同じ機能を果たしていた」ものが「一器形にまとめられた」と想定していることも、196落込み出土土

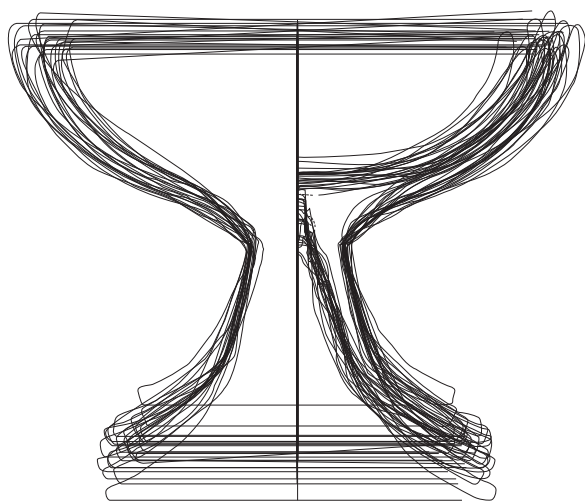


図52 196落込み出土 土師器高杯合成 (S=1/2)

器の組成を鑑みると首肯できるものである。すなわち、古墳時代前期から中期へと時代が移り行く中で、祭祀に用いられる土器が、土師器小型丸底壺・高杯から土師器高杯のみへと集約される流れが想定できる。

196落込みから、手鎌かと考えられる鉄器が出土した。[魚津2009]でB類とされるものである。[魚津2009]で指摘されるように、古墳出土例や集落出土例から想定される「A類は・・・北部九州や吉備、畿内では河内の地域に多く副葬される。これに対し、B類は・・・但馬から丹波、さらに山城南部に至る地域に分布が集中する。」

ことから「両者の分布域がほぼ明確に区分できる」ことは多くの示唆を与えてくれる。淀川水系地域にある井尻遺跡は、B類の分布域に含まれ、そこでB類の手鎌と目される鉄器が出土した意義は大きい。また、手鎌とすることが首肯されるならば、196 落込みでの祭祀の具体についても、稲穂を刈る道具が供献されることから、農耕祭祀的な側面を見出すことも可能であろう。さらに 196 落込みでは、鉄鋌と考えられる鉄片が出土した。高槻市域ではこれまでの調査では出土しておらず、大阪府域でも集落出土例は極めて少なく、貴重例となろう。

196 落込みでは祭祀的遺物が多数出土しているが、[笹生 2015]によれば、「TK208 型式段階、五世紀中頃までには、祭祀の場における鉄製品と石製模造品の組み合わせは、列島内各地で共通して成立していた」ようで、196 落込み出土遺物はまさにその時期の祭祀の具体を現在に伝えてくれる遺物群である。大阪府域における同様の遺構は、管見では能勢町岐尼遺跡・阪南市亀川遺跡が知られる程度であり、貴重例となろう。

また祭祀の実態について、「大和王権は、鉄製品・鉄鋌など自らが管理する優れた品々を各地に供与し、各地ではそれを捧げ地域の環境の中で神々を祀り、災害を防ぎ交通・生産・生活の安寧を保証する」[笹生 2015]のものであり、地域の首長がその祭祀を執り行っていたとされる。196 落込みから出土した農具や武器などの鉄器がそれぞれ生産と生活の安寧を得るために捧げられたものである可能性もあろう。また、こうした祭祀は水上も含めた交通の要衝で行われている例が多く、井尻遺跡も淀川に近接する立地であり、平野部が最も狭くなる地理的状況でもあるので、当地が交通の要衝であることは明らかである。井尻遺跡には、祭祀を執り行い得る権力を持った人物がおり、集落が形成されていたものと推察する。古墳時代中期の建物は未検出であるが、周辺で見つかる蓋然性が高い。

その後、時期比定は難しいが古墳時代後期から奈良時代に属する建物を検出した。このうち、時期は不明であるが、独立棟持柱を持つ掘立柱建物 4 が特筆される。柱構造から神社建築建物に類するものの可能性がある。

今次調査では、196 落込みの祭祀遺構や磨製石鎌、石釧、土師器小型丸底壺といった祭祀を想起させる遺物が出土している。掘立柱建物 4 が神社に類する建物であるならば、当地は弥生時代以降、連綿と祭祀が行われた「場」であった可能性もある。

奈良時代の建物の可能性がある掘立柱建物 5 は、雨落ち溝かと考えられる溝の出土遺物を参考にすれば、奈良時代前半に属する可能性がある。この時期、近接の梶原南遺跡が隆盛を迎えている時期である。梶原南遺跡は大原駅の可能性も指摘されており、当時の重要な拠点であった。梶原南遺跡では、建物の軸方位でおよその時期のまとまりが確認されているが、掘立柱建物 5 はそれらのどの建物とも軸方位が異なっている。梶原南遺跡から延びる道路に沿って建てられたものの可能性もあろう。また、今次調査では、梶原瓦窯産の平瓦が一定量出土した。梶原寺は奈良東大寺から四千枚の瓦の発注を受けており、実際に梶原寺から東大寺に瓦が運ばれたとなると、今回出土した瓦がその一群である可能性もある。それは、津すなわち港湾施設としての機能がこのあたりにあった可能性もある。

これ以後、梶原南遺跡の動向と軌を一にするように、9 世紀以降目立った遺構は確認できなかった。第 3 面の状況から、この頃耕作地と化していたものと推定する。

その後、平安時代中期になり、流路が形成され、集落が営まれるようになる。鎌倉時代にも一時期集落を形成していたものと見られる。それ以後は連綿と耕作地としての土地利用が続いたものと推測される。

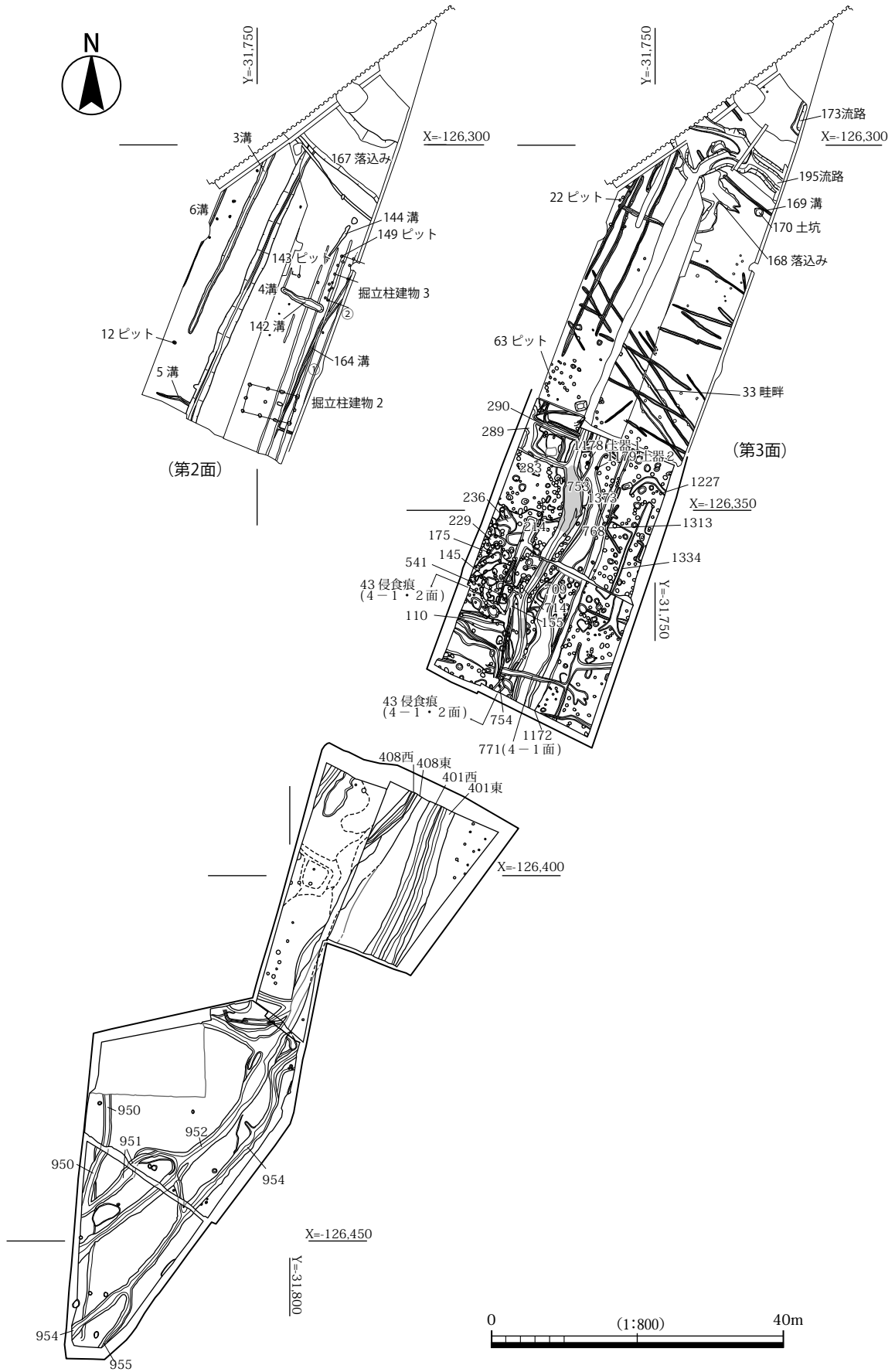


図 53 第 3 面合成

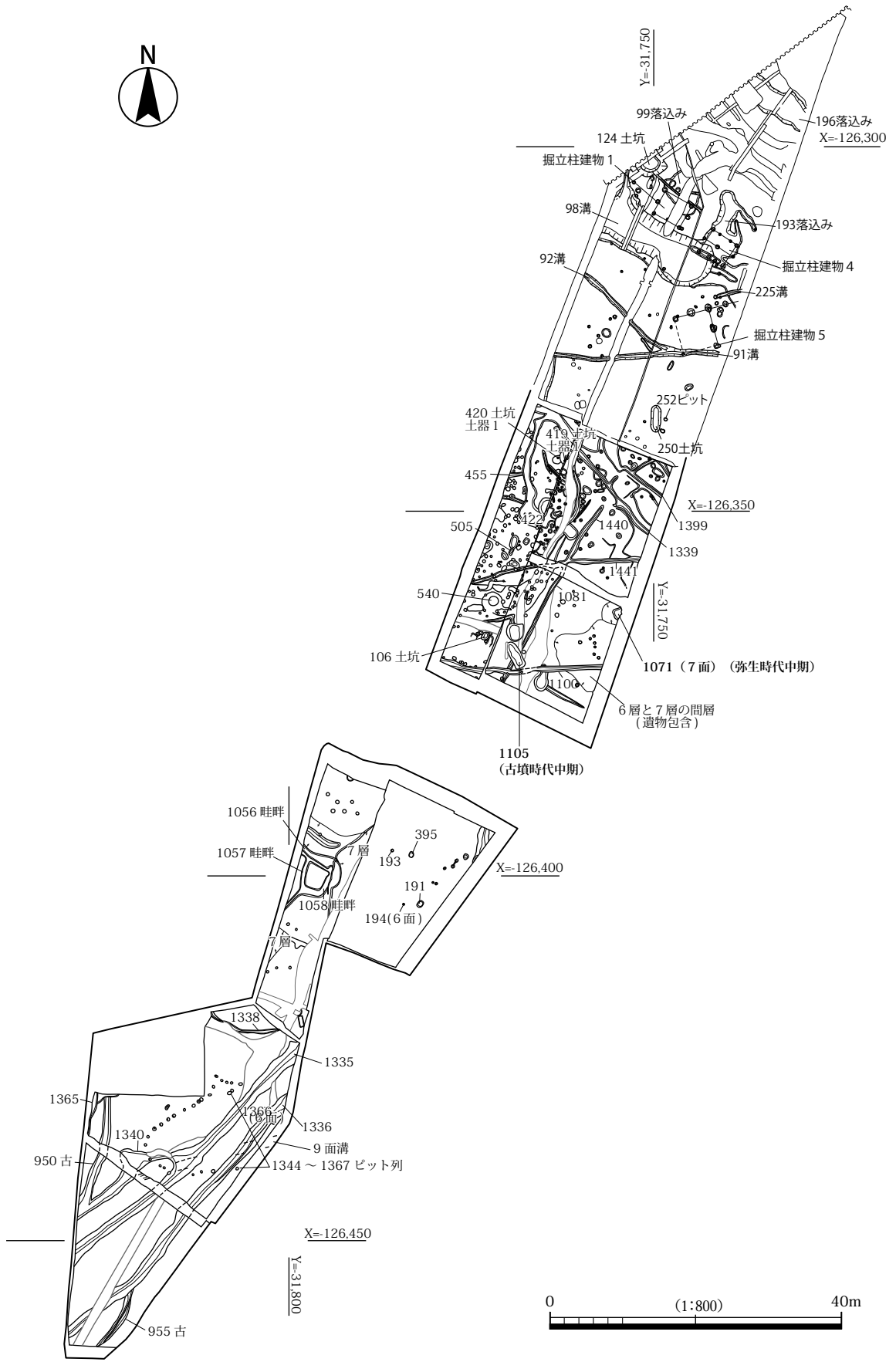


図 54 第 4 面合成

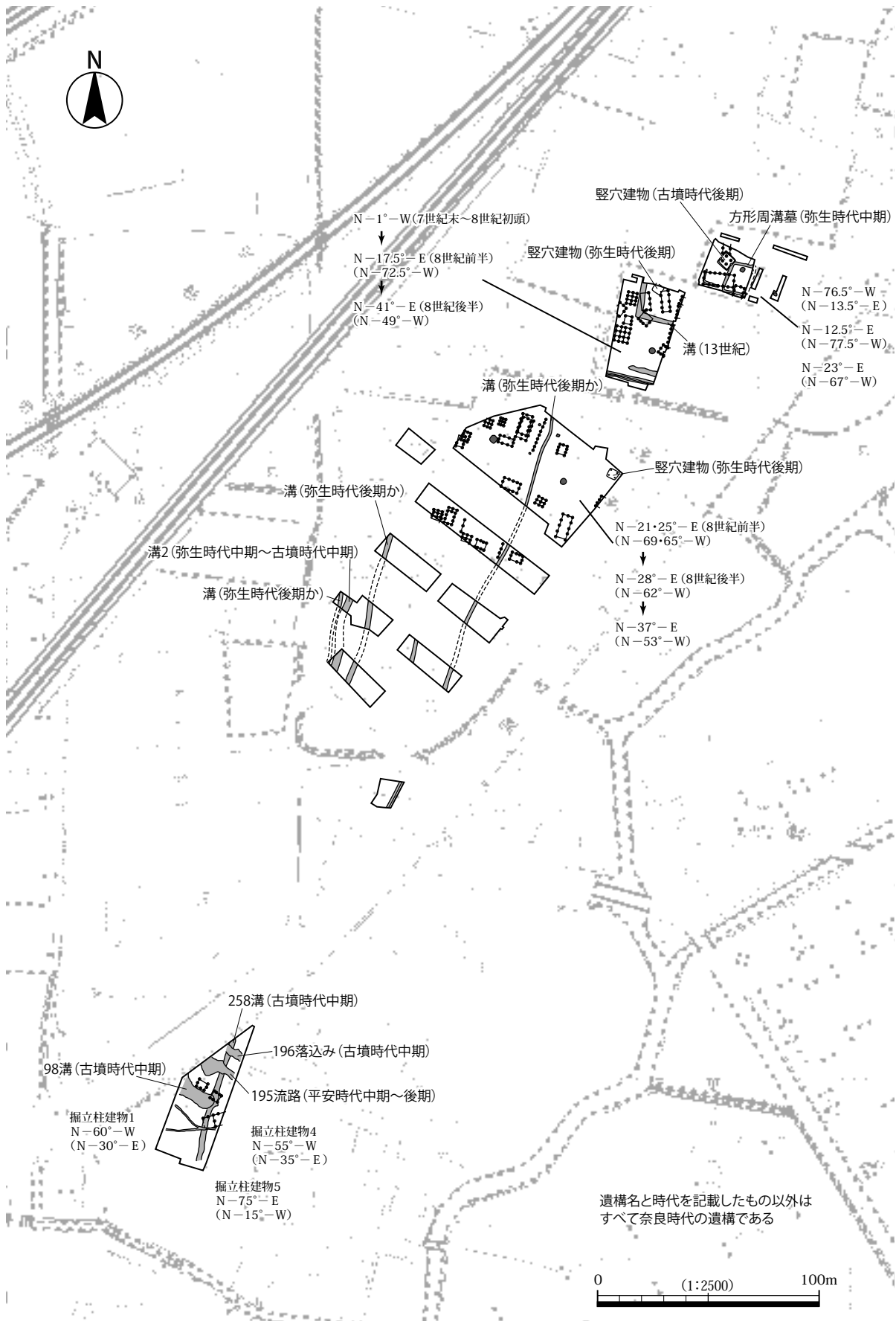


図 55 周辺遺跡との関係

引用・参考文献

- 東潮 1987「鉄鋌の基礎的研究」『考古学論攷』12 榎原考古学研究所紀要
- 市川創・島崎久恵 2005「畿内における集落出土の滑石製品」『古墳時代の滑石製品 その生産と消費』第54回埋蔵文化財研究集会
- 魚津知克 2009「弥生・古墳時代の手鎌—全形復原と用途の推定—」『木・人・文化—出土木器研究会論集』出土木器研究会
- (財)大阪府埋蔵文化財協会 1987『信太山遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第12輯
- (財)大阪府埋蔵文化財協会 1992『陶邑・伏尾遺跡ⅡA地区』(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第72輯
- 大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財調査研究センター 1998『河内平野遺跡群の動態Ⅳ』
- (財)大阪府文化財センター 2006『古式土師器の年代学』
- (公財)大阪府文化財センター 2014『成合遺跡・金龍寺旧境内跡2』調査報告書第251集
- (公財)大阪府文化財センター 2015『井尻遺跡』調査報告書第255集
- 岡寺良 1999「石製品研究の新視点—材質・製作技法に着目した視点—」『考古学ジャーナル』No.453 ニュー・サイエンス社
- 蒲原宏行 1987「石釧研究序説」『比較考古学試論』雄山閣出版
- 古代の土器研究会編 1992『古代の土器1 都城の土器集成』
- 古代の土器研究会編 1993『古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ』
- 古代の土器研究会編 1994『古代の土器3 都城の土器集成Ⅲ』
- (財)古代学協会・古代学研究所編 1994「第二章 土器と陶磁器」『平安京提要』角川書店
- 小谷城郷土館発掘調査団 2001『陶邑窯址群堺市豊田・STK99 地点発掘調査報告書』
- 小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究—日本律令的土器様式の成立と展開、7世紀～19世紀—』真陽社
- 笹生衛 2015「祭祀の意味と管掌者—五世紀の祭祀遺跡と『古語拾遺』「秦氏・大蔵」伝承—」『季刊考古学別冊22 中期古墳とその時代』雄山閣
- 篠原祐一 1995「白玉研究私論」『研究紀要 第3号』(財)栃木県文化振興事業団 埋蔵文化財センター
- 鋤柄俊夫 1995「第1章 大阪府南部の瓦質土器生産(1)」『日置荘遺跡』大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター
- 積山洋 2004「大阪湾沿岸の古墳時代土器製塩」『季刊考古学』別冊14号 雄山閣
- 高槻市教育委員会 1996『古曾部・芝谷遺跡』高槻市文化財調査報告書第20冊
- 龍野市教育委員会 1992『布勢駅家』龍野市文化財調査報告8
- 龍野市教育委員会 1994『布勢駅家Ⅱ』龍野市文化財調査報告11
- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群』平安学園考古クラブ
- // 1981『須恵器大成』角川書店
- 中世土器研究会編 1998『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 辻美紀 1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学 大阪大学考古学研究室10周年記念論集』大阪大学考古学研究室
- 寺沢薫 1986「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」奈良県立榎原考古学研究所『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊
- 寺前直人 1999「近畿地方の磨製石鏃にみる地域間交流とその背景」『国家形成の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—』大阪大学考古学研究室
- 豊中市史編さん委員会 2005『新修豊中市史 第4巻 考古』
- 豊中・古池遺跡調査会 1976『豊中・古池遺跡発掘調査概報そのⅢ』
- 長岡京発掘調査団 1970『森本遺跡発掘調査概報』
- 中村浩 2014「和歌山県橋本市東家遺跡出土承盤型土器(高杯)について」『東家遺跡・東家館跡発掘調査報告書』橋本市遺跡調査会
- 奈良県立榎原考古学研究所 2003『栗原カタソバ遺跡群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第65冊
- 橋本市遺跡調査会 2014『東家遺跡・東家館跡発掘調査報告書』
- 橋本久和 1991「大阪北部の古代後期・中世土器の様相」『高槻市文化財年報 昭和63年・平成元年度』高槻市教育委員会
- 橋本久和 2009『中世考古学と地域・流通』真陽社
- 兵庫県教育委員会 1983『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ』
- 北條芳隆 1994「鋸形石の型式学的研究」『考古学雑誌』79-4
- 向日市教育委員会 1985『鴨田遺跡』向日市埋蔵文化財調査報告書第14集

掲 載 遺 物 一 覧

遺物 番号	挿図 番号	写真 図版 番号	種別	器形	調査 区	遺構名	面・層 名	法量(単位cm)			残存 率 (%)	調整等(ヨコナデ・ 回転ナデは省略、砂 →はヘラケズリによ り砂が動いた方向)	外色調	備考
								口径 長	底径 幅	器高 厚				
1	13	15	石器	磨製石鏃	2	195 流路	第4面	5.2	1.85	0.2	100	不明瞭だが片面に鏃あり、一部未研磨の部分あり	N5/0 灰	粘板岩か、重量：2.81g
2	15	15	須恵器	有蓋高杯	2	258 溝	第5面	11.4	9.3	10.1	75	外：回転ヘラケズリ	N5/0 灰	脚部：三方円形透孔、自然軸
3	15	15	須恵器	有蓋高杯	2	258 溝	第5面	11.7	9.7	10.3	100	杯部 外：回転ヘラケズリ→	N5/0 灰	脚部：台形三方透孔
4	15		土師器	小型丸底壺	2	258 溝	第5面	7.6		9.4	60	外：ハケ 内：ケズリ 底部：「×」線刻	10YR7/3 にぶい黄橙	胴部最大径：9.1cm
5	15	15	土師器	小型丸底壺	2	258 溝	第5面	9.2		9.5	80	外：ハケ 内：ケズリ→	10YR8/2 灰白	内・外面煤付着 胴部最大径：9.7cm
6	15	15	土師器	小型丸底壺	2	258 溝	第5面	7.0		8.2	90	外：ハケ、黒斑 内：ケズリ、煤付着	2.5Y7/2 灰黄	胴部最大径：9.0cm
7	15		土師器	無稜外反高杯杯部	2	258 溝	第5面	15.0		(5.8)	25	外：ハケ、黒斑顕著 外底：棒状工具	10YR3/1 黒褐	
8	15		土師器	無稜直口高杯杯部	2	258 溝	第5面	21.4		(5.7)	10以下		7.5YR8/4 浅黄橙	
9	15		土師器	高杯脚部	2	258 溝	第5面		7.7	(5.0)	33	内：シボリ	5YR6/8 橙	
10	15		土師器	高杯脚部	2	258 溝	第5面		11.4	(6.7)	25	外：ハケ 内：ケズリ←、ハケ	7.5YR6/4 にぶい橙	
11	15		土師器	直口壺	2	258 溝	第5面	18.0		(8.9)	13	外：ミガキか	10YR7/3 にぶい黄橙	
12	15		土師器	甗	2	258 溝	第5面	16.8		(4.0)	13		10YR7/2 にぶい黄橙	布留式甗
13	15		土師器	甗	2	258 溝	第5面	15.4		(10.2)	10	外：ハケ 内：ケズリ→	10YR7/3 にぶい黄橙	布留式甗
14	15	15	土師器	甗	2	258 溝	第5面	16.4		(9.7)	33	外：ハケ、黒斑 内：ケズリ→	2.5Y7/3 浅黄	布留式甗
15	15	15	土師器	甗	2	258 溝	第5面	18.2		(8.7)	30	内：ケズリ→	7.5YR7/4 にぶい橙	布留式甗
16	15	15	土師器	甗	2	258 溝	第5面			(20.5)	25	外：ハケ	2.5Y7/2 灰黄	胴部最大径：25.5cm
17	15		土師器	直口壺か	2	258 溝	第5面			(11.8)	40	外：ミガキか	2.5Y8/2 灰白	胴部最大径：16.6cm
18	15	15	土師器	甗	2	258 溝	第5面	12.9		15.3	100	外：ハケ、一部煤付着 内：ケズリ←	5YR7/6 橙	胴部最大径：16.7cm
19	15	15	土師器	甗	2	258 溝	第5面	18.6		30.5	90	外：ハケ 内・外面煤付着	10YR8/2 灰白	胴部最大径：25.0cm
20	18		土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	13.0	8.8	10.9	50	脚部 内：棒状工具+シボリ	7.5YR7/6 橙	
21	18	16	土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	13.0	9.6	10.7	80	接合部：ハケ 脚部 外：ヘラナデ、 内：棒状工具+シボリ	5YR6/6 橙	
22	18	16	土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	11.3	7.8	10.4	90	脚部 外：ヘラナデ、 内：棒状工具+シボリ	5YR7/6 橙	
23	18		土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	12.8	9.6	10.4	40	接合部：ハケ 脚部 外：ヘラナデ、 内：棒状工具+シボリ	5YR7/6 橙	接合部に沈線巡る
24	18		土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	13.3	9.4	11.8	70	脚部 外：板ナデ、内： 棒状工具+シボリ	10YR8/4 浅黄橙	
25	18	16	土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	14.4	10.1	11.4	60	脚部 外：指頭圧痕、 内：棒状工具+シボリ、 ハケ	7.5YR8/6 浅黄橙	杯部 内：鉄器付着痕跡
26	18	16	土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	13.2	8.7	11.0	80	脚部 外：板ナデ、内： 棒状工具+シボリ	7.5YR8/6 浅黄橙	
27	18		土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	12.7	7.9	10.9	80	脚部 内：棒状工具+シボリ	7.5YR8/6 浅黄橙	
28	18		土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	13.4	8.4	11.3	40	脚部 内：棒状工具+シボリ	7.5YR7/6 橙	
29	18	16	土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	12.5	8.5	11.0	98	脚部 内：棒状工具+シボリ	7.5YR8/6 浅黄橙	
30	18		土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	11.8	8.1	10.4	70	脚部 内：棒状工具+シボリ、 一部粘土付着	5YR7/4 にぶい橙	脚内裾部に粘土付け足し
31	18	16	土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	12.0	8.4	11.1	90	脚部 外：ヘラナデ、 内：棒状工具+シボリ	7.5YR8/6 浅黄橙	
32	18		土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	13.8	10.0	11.7	40	脚部 内：シボリの ちケズリ←	7.5YR8/6 浅黄橙	
33	18		土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	14.2	9.9	11.6	70	接合部：ハケ 脚部 外：ヘラナデ	7.5YR8/6 浅黄橙	
34	18		土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	14.3	10.1	12.0	75	脚部 外：ヘラナデ か、内：シボリ	5YR7/6 橙	

遺物 番号	挿図 番号	写真 図版 番号	種別	器形	調査 区	遺構名	面・層 名	法量(単位cm)			残存 率 (%)	調整等(ヨコナデ・ 回転ナデは省略、砂 →はヘラケズリによ り砂が動いた方向)	外色調	備考
								口径 長	底径 幅	器高 厚				
35	18		土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	13.8	9.1	11.8	50	脚部 外：ヘラナデ、 内：シボリ	5YR7/6 橙	
36	18		土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	14.8	9.8	11.7	70	接合部：ハケ 脚部 外：ヘラナデ、 内：シボリ	7.5YR8/4 浅 黄橙	
37	18	16	土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	14.0	9.6	11.8	75	脚部 内：シボリ	10YR8/4 浅黄 橙	杯部：内外面 1/2 黒斑残る
38	18		土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	13.3	9.1	10.9	80	脚部 外：板ナデ、内： シボリ	7.5YR7/4 に ぶい橙	
39	18		土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	13.2	9.3	10.5	80	脚部 外：板ナデ、内： シボリ	10YR8/4 浅黄 橙	杯部 内：見込 みに直径 1.5 mm の孔あり
40	18		土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	13.9	9.4	11.0	80	接合部：ハケ 杯部 内：ハケ 脚部 外：ヘラナデ、 内：シボリ	5YR7/6 橙	
41	18		土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	14.0	9.9	11.5	70	杯部 内：板状工具 痕 脚部 外：ヘラナデ、 内：シボリ	7.5YR7/6 橙	
42	18	16	土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	12.5	8.7	10.8	90	脚部 外：ヘラナデ、 内：シボリ	7.5YR8/6 浅 黄橙	
43	18		土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	12.2	8.0	9.4	30	杯部 内：ミガキカ 脚部 外：ヘラナデ、 内：ケズリ←、ハケ	5YR7/8 橙	
44	19		土師器	椀形高杯杯部	2	196 落込み	第4面	12.4		(5.1)	20	外底：棒状工具	7.5YR8/4 浅 黄橙	
45	19		土師器	椀形高杯杯部	2	196 落込み	第4面	13.8		(5.4)	40	接合部：ハケ 外底：棒状工具、内： ハケ	5YR5/6 明赤 褐	
46	19		土師器	椀形高杯杯部	2	196 落込み	第4面	13.4		(5.4)	30	外底：棒状工具	5YR7/6 橙	
47	19		土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	13.4		(10.3)	35	脚部 外：板ナデ、内： 棒状工具+シボリ	7.5YR7/6 橙	
48	19		土師器	椀形高杯杯部	2	196 落込み	第4面	13.6		(5.6)	20	接合部：ハケ 外底：棒状工具(筒 状のもの?直径 7mm)	5YR7/6 橙	
49	19		土師器	椀形高杯杯部	2	196 落込み	第4面	12.6		(5.0)	20		7.5YR8/6 浅 黄橙	
50	19		土師器	椀形高杯杯部	2	196 落込み	第4面	12.6		(5.0)	40	外底：棒状工具	7.5YR8/6 浅 黄橙	
51	19		土師器	椀形高杯杯部	2	196 落込み	第4面	12.1		(4.2)	40	外底：棒状工具	2.5YR6/8 橙	
52	19		土師器	椀形高杯杯部	2	196 落込み	第4面	12.4		(5.6)	20	外底：棒状工具	7.5YR8/6 浅 黄橙	
53	19		土師器	椀形高杯杯部	2	196 落込み	第4面	14.2		(5.4)	25		7.5YR7/6 橙	円板充填か
54	19		土師器	椀形高杯杯部	2	196 落込み	第4面	14.0		(5.7)	50	内：ハケ	7.5YR8/6 浅 黄橙	円板充填か
55	19		土師器	椀形高杯杯部	2	196 落込み	第4面	12.2		(5.2)	20		7.5YR8/6 浅 黄橙	
56	19		土師器	椀形高杯杯部	2	196 落込み	第4面	13.2		(6.2)	45	杯部 内：工具痕あ り 脚部 内：シボリ	7.5YR8/4 浅 黄橙	杯部 内：直径 1.5 mmの凹みあり
57	19		土師器	椀形高杯杯部	2	196 落込み	第4面	14.4		(7.1)	20	杯部 外：黒斑あり 接合部：板ナデ 内：シボリ	10YR7/4 にぶ い黄橙	
58	19		土師器	椀形高杯杯部	2	196 落込み	第4面	14.1		(5.1)	40	内：ハケ、工具痕 接合部：ハケ	5YR7/6 橙	
59	19		土師器	椀形高杯杯部	2	196 落込み	第4面	14.6		(4.4)	25	内：ハケ	5YR7/6 橙	
60	19		土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	14.0		(7.0)	50	杯部 内：工具痕あ り 接合部：ハケ 脚部 内：シボリ	7.5YR8/6 浅 黄橙	
61	19		土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	12.6		(9.8)	60	接合部：ハケ 脚部 外：ヘラナデ、 内：棒状工具+シボ リ	5YR6/6 橙	
62	19		土師器	高杯脚部	2	196 落込み	第4面		8.8	(7.8)	50	脚部 内：棒状工具 +シボリ+ナデ	7.5YR7/8 黄 橙	内外面、黒斑あ り
63	19		土師器	高杯脚部	2	196 落込み	第4面		8.5	7.3	40	脚部 内：シボリ	2.5YR6/8 橙	
64	19		土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	12.6		(9.9)	70	脚部 内：シボリ	7.5YR7/6 橙	
65	19		土師器	椀形高杯	2	196 落込み	第4面	15.7		(11.4)	60	脚部 外：ヘラナデ、 内：シボリのちケズ リか	7.5YR8/6 浅 黄橙	杯部 内：見込 み中央、孔あく 円板充填か
66	19		土師器	高杯脚部	2	196 落込み	第4面			(8.5)	35	脚部 外：ヘラナデ、 内：シボリ	5YR7/6 橙	
67	19		土師器	高杯脚部	2	196 落込み	第4面		8.2	(8.6)	20	接合部：ハケ 脚部 内：シボリ、 ハケ	5YR6/6 橙	
68	19		土師器	高杯脚部	2	196 落込み	第4面		9.7	(7.5)	10以 下	脚部 外：ヘラナデ、 内：ケズリ→	7.5YR7/4 に ぶい橙	
69	19		土師器	高杯脚部	2	196 落込み	第4面		9.1	(7.1)	25	接合部：ヘラナデ 脚部 内：シボリ	10YR7/4 にぶい黄橙	内・外面に黒斑 あり
70	19		土師器	高杯脚部	2	196 落込み	第4面		9.8	(6.3)	30	外：ヘラナデ、内： シボリ	7.5YR7/6 橙	

遺物番号	挿図番号	写真図版番号	種別	器形	調査区	遺構名	面・層名	法量(単位cm)			残存率(%)	調整等(ヨコナデ・回転ナデは省略、砂→はヘラケズリにより砂が動いた方向)	外色調	備考		
								口径長	底径幅	器高厚						
71	19		土師器	高杯脚部	2	196 落込み	第4面		10.8	(5.3)	40	内:シボリ	5YR7/8 橙			
72	19		土師器	高杯脚部	2	196 落込み	第4面				9.8	(7.8)	50	接合部:ヘラナデ 脚部 内:シボリ	7.5YR7/6 橙	
73	19		土師器	高杯脚部	2	196 落込み	第4面				9.8	(6.3)	40	外:ヘラナデ、内: シボリ	5YR7/8 橙	
74	19		土師器	高杯脚部	2	196 落込み	第4面				9.8	(6.1)	40	外:ヘラナデ 内:シボリのちヘラ ケズリ←	7.5YR6/6 橙	穿孔1ヶ所
75	19		土師器	高杯脚部	2	196 落込み	第4面				9.5	(5.8)	50	外:ヘラナデ、内: シボリ	7.5YR7/6 橙	
76	19		土師器	高杯脚部	2	196 落込み	第4面				8.2	(5.1)	50	外:ヘラナデ、内: シボリ	5YR7/8 橙	
77	20		土師器	大型有稜 高杯杯部	2	196 落込み	第4面	24.2			(9.2)	15	外:一部黒斑あり	7.5YR7/6 橙		
78	20		土師器	大型有稜 高杯杯部	2	196 落込み	第4面	24.0			(8.9)	10以下	外:ハケ、内:ハケ	5YR7/8 橙		
79	20	17	土師器	大型有稜高杯	2	196 落込み	第4面	23.2	14.0	18.0	100	脚部 外:ヘラナデ、 内:シボリ、ケズリ→	7.5YR7/6 橙	杯・脚部 外: 黒斑あり		
80	20		土師器	大型有稜 高杯脚部	2	196 落込み	第4面				13.5	(10.4)	40	脚部 外:板ナデ、内: ケズリ←	5YR7/6 橙	杯・脚部 外: 黒斑あり
81	20		土師器	杯か	2	196 落込み	第4面	14.8			(4.1)	40	内:菊花状の凹凸あ り	5YR7/6 橙		
82	20		土師器	甕	2	196 落込み	第4面	14.6			18.4	15	外:ハケ、内:ハケ、 ケズリ←	10YR7/3 にぶ い黄橙	胴部最大径: 21.2cm	
83	20		土師器	甕	2	196 落込み	第4面	13.6			(9.2)	10	外:ハケ、煤付着、内: ハケ	10YR6/3 にぶ い黄橙 +10YR4/2 灰 黄褐		
84	20		土師器	甕口縁部	2	196 落込み	第4面	12.7			(5.3)	10以下	外:ハケ	10YR8/3 浅黄 橙	布留式甕	
85	20	17	土師器	粗製壺	2	196 落込み	第4面	9.3	3.4	12.1	90	外:ハケ、内:ハケ、 黒斑あり	2.5Y7/2 灰黄	底部凹む		
86	20	17	土師器	手握ね鉢	2	196 落込み	第4面	6.1	3.1	4.3	100		5YR7/6 橙	隅丸平底		
87	20	18	石器	砥石	2	196 落込み	第4面	(5.2)	(3.1)	1.7					砂岩製、手持ち 砥か	
88	21	17	須恵器	杯蓋	2	196 落込み	第4面	12.6			4.3	90	外:回転ヘラケズリ ←	N6/0 灰		
89	21	17	須恵器	杯蓋	2	196 落込み	第4面	13.4			4.2	98	外:回転ヘラケズリ ←	N7/0 灰白		
90	21		須恵器	杯蓋	2	196 落込み	第4面	12.8			4.9	75	外:回転ヘラケズリ ←	2.5Y6/1 黄灰		
91	21		須恵器	杯蓋	2	196 落込み	第4面	12.4			(4.0)	20	外:回転ヘラケズリ ←	N6/0 灰		
92	21		須恵器	杯身	2	196 落込み	第4面	10.6			(3.3)	10		7.5Y6/1 灰		
93	21	17	須恵器	杯身	2	196 落込み	第4面	11.0			4.6	90	外:回転ヘラケズリ →	5B5/1 青灰		
94	21	17	須恵器	把手付鉢	2	196 落込み	第4面	9.8	6.8	7.7	30	外:手持ちヘラケズ リ←、1波状文(最 大10条)	N6/0 灰	把手一ヶ所		
95	21		須恵器	有蓋高杯蓋	2	196 落込み	第4面	14.0			5.7	40	外:回転ヘラケズリ ←	N7/0 灰白	ツマミ径:3.0cm	
96	21		須恵器	無蓋高杯	2	196 落込み	第4面	15.4			(5.3)	15	外:2突帯、1波状文 (7条)、回転ヘラケ ズリ←	10YR6/1 褐灰	脚部透かし台形	
97	21		須恵器	高杯脚部	2	196 落込み	第4面		8.0	(4.5)	30	外:カキメ、2突帯	N6/ 灰			
98	21	17	須恵器	無蓋高杯	2	196 落込み	第4面	12.7	8.6	8.5	60	杯部 外:回転ヘラ ケズリ、内:見込 みに1条突帯	2.5Y7/1 灰白	脚部:円形2孔 あり		
99	21	17	須恵器	樽形甕	2	196 落込み	第4面	10.6			10以下	口縁部 外:波状文1 体部 外:波状文6、 沈線3	N6/0 灰	頸部径:4.6cm、 復元長:20.0cm		
100	21		須恵器	壺口縁部	2	196 落込み	第4面	(5.9)	(9.3)		10以下		2.5Y8/2 灰白	生焼け		
101	22	18	滑石製模造品	白玉	2	196 落込み	第4面	0.34	0.33	0.17	100				孔径:0.10cm	
102	22	18	滑石製模造品	白玉	2	196 落込み	第4面	0.39	0.39	0.18	100				孔径:0.10cm	
103	22	18	滑石製模造品	白玉	2	196 落込み	第4面	0.44	0.44	0.25	100				孔径:0.10cm	
104	22	18	滑石製模造品	白玉	2	196 落込み	第4面	0.38	0.38	0.30	100				孔径:0.13cm	
105	22	18	滑石製模造品	白玉	2	196 落込み	第4面	0.51	0.51	0.26	100				孔径:0.15cm	
106	22	18	滑石製模造品	白玉	2	196 落込み	第4面	0.52	0.51	0.37	100				孔径:0.19cm	
107	22	18	滑石製模造品	白玉	2	196 落込み	第4面	0.54	0.54	0.43	100				孔径:0.17cm	
108	22	18	滑石製模造品	白玉	2	196 落込み	第4面	0.53	0.51	0.42	100				孔径:0.19cm	
109	22	18	滑石製模造品	白玉	2	196 落込み	第4面	0.56	0.55	0.44	100				孔径:0.14cm	
110	22	18	滑石製模造品	白玉	2	196 落込み	第4面	0.69	(0.62)	0.48	90				孔径:0.13cm	
111	22	18	滑石製模造品	白玉	2	196 落込み	第4面	0.49	0.48	0.32	100				孔径:0.13cm	
112	22	18	滑石製模造品	白玉	2	196 落込み	第4面	0.52	0.51	0.25	100				孔径:0.12cm	
113	22	18	滑石製模造品	白玉	2	196 落込み	第4面	0.52	0.51	0.32	100				孔径:0.18cm	
114	22	18	滑石製模造品	白玉	2	196 落込み	第4面	0.48	0.47	0.26	100				孔径:0.16cm	
115	22	18	滑石製模造品	白玉	2	196 落込み	第4面	0.52	0.51	0.32	100				孔径:0.18cm	
116	22	18	滑石製模造品	白玉	2	196 落込み	第4面	0.55	0.55	0.18	100				孔径:0.13cm	
117	22	18	滑石製模造品	白玉	2	196 落込み	第4面	0.44	0.44	0.30	100				孔径:0.14cm	

遺物番号	挿図番号	写真図版番号	種別	器形	調査区	遺構名	面・層名	法量(単位cm)			残存率(%)	調整等(ヨコナデ・回転ナデは省略、砂→はヘラケズリにより砂が動いた方向)	外色調	備考
								口径長	底径幅	器高厚				
118	22	18	滑石製模造品	白玉	2	196 落込み	第4面	0.50	0.49	0.31	100			孔径:0.16cm
119	22	18	滑石製模造品	白玉	2	196 落込み	第4面	0.52	0.50	0.15	95			孔径:0.14cm
120	22	18	滑石製模造品	白玉	2	196 落込み	第4面	0.53	0.52	0.16	95			孔径:0.13cm
121	22	18	滑石製模造品	剣形か	2	196 落込み	第4面	(1.80)	1.95	0.20				
122	22	18	滑石製模造品	有孔片	2	196 落込み	第4面	(1.25)	(0.95)	(0.35)				
123	22	18	滑石製模造品	双孔円板	2	196 落込み	第4面	2.60	2.60	0.40	100			
124	22	18	滑石製模造品	双孔円板	2	196 落込み	第4面	(2.10)	2.20	0.35	80			
125	22	18	滑石製模造品	勾玉	2	196 落込み	第4面	4.20	2.10	0.50	100			
126	22	18	滑石製模造品	勾玉	2	196 落込み	第4面	4.10	2.20	0.45	100			
127	22	18	滑石製模造品	勾玉	2	196 落込み	第4面	3.90	2.20	0.60	100			孔あけなおし
128	22	18	滑石製模造品	勾玉	2	196 落込み	第4面	3.15	1.35	0.25	100			
129	26	19・28	鉄器	手鎌か	2	196 落込み	第4面	(3.7)	(1.9)	0.2				円孔か(直径0.3cm)
130	26	19・28	鉄器	手鎌か	2	196 落込み	第4面	(3.5)	(1.8)	0.1~0.2				円孔あり(直径0.2cm)
131	26	19・28	鉄器	鉄片か手鎌	2	196 落込み	第4面	(6.0)	(2.0)	0.1				
132	26	19・28	鉄器	鉄片か手鎌	2	196 落込み	第4面	(4.5)	(2.2)	0.1				
133	26	19・28	鉄器	鉄片か手鎌	2	196 落込み	第4面	(5.4)	(2.1)	0.1				
134	26	19・28	鉄器	手鎌か	2	196 落込み	第4面	(6.8)	(1.9)	0.1~0.2				円孔あり(直径0.2cm)、木質遺存か
135	26	19・28	鉄器	鉄片か手鎌	2	196 落込み	第4面	(6.0)	(2.3)	0.2				
136	26	19・28	鉄器	鉄片か手鎌	2	196 落込み	第4面	(8.1)	(1.8)	0.2				
137	26	19・27	鉄器 滑石製模造品	手鎌か 白玉	2	196 落込み	第4面	(7.1)	(2.0)	0.1				白玉1点錆着
138	26	19・27	鉄器	刀子	2	196 落込み	第4面	(7.4)	(1.4)	0.3				手鎌か錆着
139	26	19・27	鉄器	刀子か	2	196 落込み	第4面	(12.4)	(1.3)	0.3				
140	26	19・27	鉄器 滑石製模造品	刀子 白玉	2	196 落込み	第4面	(7.6)	(2.0)	0.2	50			白玉2点錆着
141	26	19・27	鉄器	刀子	2	196 落込み	第4面	(3.3)	(1.1)	0.4				
142	26	19・28	鉄器	鉄片か	2	196 落込み	第4面	(7.1)	(2.9)	0.3				
143	26	19・27	鉄器	長頸鎌	2	196 落込み	第4面	(4.6)	(0.9)	0.4				
144	26	19・27	鉄器	長頸鎌か	2	196 落込み	第4面	(5.1)	(0.8)	0.3				
145	26	19・27	鉄器	長頸鎌	2	196 落込み	第4面	(8.7)	(0.6)	0.3				鉄鎌 or 刀子錆着
146	26	19・27	鉄器	長頸鎌か	2	196 落込み	第4面	(9.8)	(0.9)	0.3				
147	26	19・27	鉄器 滑石製模造品	長頸鎌 白玉	2	196 落込み	第4面	(7.2)		0.4				白玉1点錆着
148	26	19・28	鉄器	鉄鋌か	2	196 落込み	第4面	(5.4)	(1.8) ~(2.5)	0.15~0.2				
149	26	19・28	鉄器	鉄鋌か	2	196 落込み	第4面	(6.3)	(3.2)	0.1				
150	26	19・28	鉄器	鉄鋌か	2	196 落込み	第4面	(6.4)	(3.0)	0.1				
151	26	19・28	鉄器	鉄鋌か	2	196 落込み	第4面	(7.7)	(3.4)	0.1				
152	26	19・28	鉄器	鉄鋌か	2	196 落込み	第4面	(8.4)	(2.2)	0.1				
153	29	20	須恵器	有蓋高杯杯蓋	1	98 溝	第4面	12.8		5.0	80	外:回転ケズリ、一部自然釉、黒色粒あり	N7/0 灰白	重ね焼き痕あり
154	29	20	須恵器	有蓋高杯杯蓋	1	98 溝	第4面	12.0		5.3	60	外:回転ケズリ→、一部自然釉	N7/0 灰白	重ね焼き痕あり
155	29	20	須恵器	有蓋高杯杯蓋	1	98 溝	第4面	12.6		4.2	50	外:回転ケズリ	5Y7/1 灰白	
156	29		須恵器	杯蓋	1	98 溝	第4面	13.1		4.1	60	外:回転ケズリ←	N6/0 灰	
157	29	20	須恵器	無蓋高杯杯部	1	98 溝	第4面	12.8		(4.5)	50	外:回転ヘラケズリ	N6/0 灰	
158	29		須恵器	有蓋高杯	1	98 溝	第4面	10.6		(4.8)	30	外:回転ヘラケズリ	N5/0 灰	
159	29	20	須恵器	杯身	1	98 溝	第4面	11.0		4.8	90	外:回転ヘラケズリ	N5/0 灰	
160	29	20	須恵器	杯身	1	98 溝	第4面	10.2		5.4	70	外:回転ケズリ→	N4/0 灰	
161	29	20	須恵器	杯身	1	98 溝	第4面	11.1		4.7	50	外:回転ケズリ	N5/0 灰	ヘラ記号あり
162	29		須恵器	無蓋高杯杯部	1	98 溝	第4面	14.4		(6.8)	20	外:波状文、突帯、カキメ、自然釉	N3/0 暗灰	
163	29	20	須恵器	杯蓋	2	98 溝	第4面			(13.1)	10以下	内:漆附着	N4/0 灰	
164	29		土師器	椀形高杯杯部	1	98 溝	第4面	13.0		(4.1)	13		7.5Y7/4 にぶい橙	
165	29		土師器	高杯杯部	1	98 溝	第4面	13.1		(5.0)	40		5YR7/6 橙	
166	29		土師器	椀形高杯杯部	1	98 溝	第4面	15.1		(6.7)	25	外:面取り	5YR7/6 橙	
167	29		土師器	椀形高杯杯部	2	98 溝	第4面	15.0		(6.0)	40		7.5YR7/6 橙	
168	29		土師器	高杯杯部	1	98 溝	第4面	15.8		(3.7)	20		7.5YR7/6 橙	
169	29		土師器	高杯杯部	1	98 溝	第4面	13.0		(6.9)	10以下	内:棒状工具+シボ	10YR7/4 にぶい黄橙	
170	29	21	土師器	椀形高杯	1	98 溝	第4面	13.3	9.2	6.6	90	外:板ナデ 透穴1ヶ所 内:ケズリ←	7.5YR7/6 橙	
171	29		土師器	椀形高杯	2	98 溝	第4面	15.6		(8.8)	40	外:ヘラナデ 内:ケズリ←	7.5YR7/6 橙	
172	29		土師器	高杯脚部	2	98 溝	第4面		8.9	(7.8)	30	外:ヘラミガキ	7.5YR8/3 浅黄橙	
173	29		土師器	高杯脚部	2	98 溝	第4面		10.8	(3.7)	10	脚部 外:透穴1ヶ所、内:ケズリ←	5YR7/6 橙	
174	29		土師器	高杯脚部	1	98 溝	第4面		12.2	(7.2)	25	外:ハケ 内:ケズリ→、ハケ	5YR7/6 橙	

遺物 番号	挿図 番号	写真 図版 番号	種別	器形	調査 区	遺構名	面・層 名	法量(単位cm)			残存 率 (%)	調整等(ヨコナデ・ 回転ナデは省略、砂 →はヘラケズリによ り砂が動いた方向)	外色調	備考
								口径 長	底径 幅	器高 厚				
175	29	22	土師器	高杯脚部 か器台筒部	2	98溝	第4面			(7.6)	30	外：ミガキ、透穴4ヶ所 内：ケズリ	7.5YR8/3 浅 黄橙	透穴4ヶ所 脚柱径：3.4cm
176	29	22	土師器	韓式系土器 平底鉢か	1	98溝	第4面			0.7	10以下	外：正格子タタキ	10YR3/1 黒褐	拓本あり
177	29	22	土師器	甌か鉢底部	1	98溝	第4面		17.1	(2.7)	10以下	底部：木葉痕	10YR7/3 にぶい黄橙	拓本あり
178	29		土師器	小型丸底壺	2	98溝	第4面	8.8		(7.5)	10以下	外：ケズリ	7.5YR7/6 橙	
179	29	21	土師器	小型丸底壺	1	98溝	第4面	9.2		9.0	90	外：工具痕、ケズリ 内：ハケ	2.5Y7/2 灰黄	
180	29	21	製塩土器		1	98溝	第4面	3.7		(3.5)	13	外：指紋明瞭	7.5YR4/1 褐 灰	大阪湾Ⅱ-2式 F2類
181	29	21	製塩土器		2	98溝	第4面	3.9		(4.2)	13	内：シボリメ	10YR5/2 灰黄 褐	大阪湾Ⅱ-2式 F2類
182	29	21	製塩土器		1	98溝	第4面	6.6		(4.9)	10以下	外：指紋明瞭	2.5Y7/3 浅黄	大阪湾Ⅱ-2式 F2類
183	29	22	土師器	手握ね鉢	2	98溝	第4面		3.8	(5.2)	50	外：黒斑あり	2.5Y7/2 灰黄	
184	29	22	土師器	手握ね鉢	1	98溝	第4面	5.3	3.7	3.1	100	外：黒斑あり	7.5YR7/3 に ぶい橙	
185	29		土師器	手握ね鉢	1	98溝	第4面		2.4	3.6	10以下		7.5YR7/4 に ぶい橙	胴部最大径：4.6 cm
186	29		土師器	手握ね鉢	2	98溝	第4面		3.0	(2.0)	50		7.5YR7/4 に ぶい橙	
187	29	22	土師器	手握ね皿	1	98溝	第4面	8.6		2.7	50		2.5Y7/2 灰黄	
188	29	22	金属製品	鉄滓	2	98溝	第4面	4.3	3.6	2.9				
189	30	21	土師器	甕	1	98溝	第4面	13.7		(12.6)	30	外：ハケ 内：ケズ リ	10YR7/2 にぶ い黄橙	
190	30		土師器	甕	1	98溝	第4面	12.6		(5.7)	10	外：ハケ	10YR6/3 にぶ い黄橙	
191	30		土師器	甕	2	98溝	第4面	17.3		(4.8)	10	外：ハケ 内：ケズ リ	2.5Y7/2 灰黄	布留式甕
192	30		土師器	甕	1	98溝	第4面	15.7		(7.4)	10	外：ハケ	10YR7/3 にぶ い黄橙	
193	30		土師器	甕	1	98溝	第4面	14.4		(9.1)	10以下	外：ハケ 内：ハケ、ケズリ	5YR6/4 にぶ い橙	布留式甕
194	30		土師器	甕	1	98溝	第4面	15.8		(22.2)	70	外：ハケ 内：ケズ リ	7.5YR7/4 に ぶい橙	布留式甕 内・外面煤付着
195	30	21	土師器	甕	1	98溝	第4面	21.0		(21.9)	30	外：ハケ、黒斑あり	10YR7/3 にぶ い黄橙	
196	30	21	土師器	甕	2	98溝	第4面	14.4		(9.9)	30	外：ハケ、米粒状点 文3ヶ所 内：ケズリ	7.5YR7/4 に ぶい橙	布留式甕
197	30		土師器	甕	1	98溝	第4面	15.2		29.5	40	外：ハケ、下半煤付着 内：ケズリ↑	10YR6/3 にぶ い黄橙	胴部最大径： 26.0cm
198	31	21	土師器	甌	1	98溝	第4面	21.2		20.0	90	外：ハケ 内：ケズ リ	2.5Y7/3 浅黄	
199	31		土師器	甌	1	98溝	第4面	22.4		(17.3)	30	外：ハケ 内：ハケ、ケズリ↑	2.5Y8/2 灰白	
200	31		土師器	把手	2	98溝	第4面	4.7	4.2	0.8	10以下		10YR7/3 にぶ い黄橙	把手厚：2.1cm
201	31		土師器	鍋	1	98溝	第4面			(12.3)	15	外：黒斑あり 内： ケズリ	2.5Y7/2 灰黄	
202	31		土師器	壺	2	98溝	第4面	21.2		(7.2)	10以下	外：2条貼り付け突 帯4ヶ所	10YR7/3 にぶ い黄橙	
203	31		土製品	土塊	1	98溝	第4面	(5.8)	(4.7)	2.7			10YR7/4 にぶ い黄橙	
204	31		土製品	土塊	1	98溝	第4面	(5.4)	(4.1)	2.6			10YR7/4 にぶ い黄橙	
205	31		土製品	土塊	1	98溝	第4面	(3.8)	(3.5)	2.1			10YR7/3 にぶ い黄橙	
206	33		土師器	椀形高杯杯部	1	124土坑	第4面	13.0		(4.2)	10以下	内：棒状工具	5YR7/6 橙	
207	33		土師器	甕	1	124土坑	第4面	14.3		(7.2)	10	外：ハケか 内：ケ ズリ	10YR7/2 にぶ い黄橙	
208	33	22	須恵器	壺	1	124土坑	第4面	18.6		(7.8)	20	外：突帯3条、波状 文3条	N7/0 灰白	内・外面自然釉
209	33	22	土師器	甕	2	252ピット	第4面	12.1			33	外：ハケ、黒斑あり	2.5Y8/2 灰白	胴部最大径： 18.8cm
210	33		土師器	高杯杯部	2	250土坑	第4面	13.8		(5.5)	50	外：ハケ 内：ハケ、棒状工具	7.5YR7/6 橙	
211	33		土製品	土塊	2	250土坑	第4面	(4.6)	(3.3)	2.1			7.5YR7/4 に ぶい橙	
212	33		土製品	土塊	2	250土坑	第4面	(4.5)	(3.4)	1.8			7.5YR7/4 に ぶい橙	
213	33		土製品	土塊	2	250土坑	第4面	(2.6)	(1.8)	1.7			7.5YR7/4 に ぶい橙	
214	33		土製品	土塊	2	250土坑	第4面	(1.9)	(1.7)	1.4			7.5YR7/4 に ぶい橙	
215	33		土製品	土塊	2	250土坑	第4面	(3.5)	(2.4)	1.7			7.5YR7/4 に ぶい橙	
216	33		土製品	土塊	2	250土坑	第4面	(3.0)	(1.9)	1.1			7.5YR7/6 橙	

遺物番号	挿図番号	写真図版番号	種別	器形	調査区	遺構名	面・層名	法量(単位cm)			残存率(%)	調整等(ヨコナデ・回転ナデは省略、砂→はヘラケズリにより砂が動いた方向)	外色調	備考	
								口径長	底径幅	器高厚					
217	33		土製品	土塊	2	250土坑	第4面	(2.5)	(2.1)	1.3			7.5YR7/4に ぶい橙		
218	33		土製品	土塊	2	250土坑	第4面	(2.7)	(1.8)	1.5			7.5YR7/4に ぶい橙		
219	33		土師器	椀形高杯杯部	2	193落込み	第4面	13.3		(4.6)	33		7.5YR7/8黄 橙		
220	33		土師器	大型高杯	2	193落込み	第4面		13.3	(12.6)	50	外：ヘラナデ 内：ケズリ←、シボ リ	5YR6/8橙		
221	33		土師器	大型高杯杯部	2	193落込み	第4面	20.5		(8.5)	10以 下		7.5YR7/6橙		
222	33		土師器	甗	2	193落込み	第4面	17.7		(5.5)	10以 下		7.5YR6/6橙		
223	33	27	鉄器	刀子	2	193落込み	第4面	(6.7)	1.5	0.4	50				
224	33		土師器	椀形高杯杯部	1	99落込み	第4面	12.9		(5.9)	50	外：ハケ 内：棒状工具+シボ リ	7.5YR7/4に ぶい橙		
225	33		土師器	高杯脚部	1	99落込み	第4面			(2.3)	30	外：ハケ 内：棒状工具、ケズ リ←	5YR7/8橙	透穴2ヶ所	
226	33		須恵器	杯身	1	99落込み	第4面	8.8		4.4	30	外：回転ヘラケズリ ←	N6/灰		
227	33		土師器	甗	1	99落込み	第4面	13.4		(5.8)	10以 下	外：ハケ	10YR8/3浅黄 橙		
228	33		土師器	甗	1	99落込み	第4面	18.0		(3.7)	10	外：黒斑あり	10YR7/2にぶ い黄橙	布留式甗	
229	33		製塩土器		1	99落込み	第4面	6.2		(6.6)	10	外：タタキ 内：タタキ、シボリ	10YR7/3にぶ い黄橙	大阪湾Ⅱ-2式 F2類	
230	33		製塩土器		1	99落込み	第4面	(3.5)	(3.2)	0.3	10以 下		7.5YR7/6橙	大阪湾Ⅱ-2式 F2類	
231	33		製塩土器		1	99落込み	第4面	(2.8)	(3.1)	0.2	10以 下		10YR8/2灰白	大阪湾Ⅱ-2式 F2類	
232	33		製塩土器		1	99落込み	第4面	(3.8)	(2.6)	0.3	10以 下	外：タタキ	10YR5/2灰黄 褐	大阪湾Ⅱ-2式 F2類	
233	34	15	腕輪形 石製品	石釧	1		第5層			1.8	25	内側、横方向に研磨	7.5GY7/1明 緑灰	緑色凝灰岩 外径：(7.2)cm 内径：(5.0)cm	
234	34	24	須恵器	壺	2		第5層		11.1	(10.3)	66	外：波状文、列点文	N5/0灰	内・外面：自然 釉	
235	34	24	須恵器	杯身	2		第5層	11.0		5.2	90	外：ヘラケズリ←	5Y7/1灰白		
236	34	24	須恵器	鉢	2		第5層	10.6		(5.6)	10以 下	外：波状文、円孔あ り 内：自然釉	N5/0灰		
237	34		須恵器	大甗	1		第4層	49.6		(12.4)	10	外：ハケ 内：自然 釉	N5/0灰		
238	34	24	須恵器	壺か	2	195流路	第3面		14.4		10以 下	外：タタキ、螺旋状 沈線	N6/0灰	拓本あり 体部：(17.0)cm 底部：(4.6)cm	
239	34		土師器	椀形高杯	2		第5層	13.1	8.9	9.9	90	外：ヘラナデ、黒斑 内：シボリ	7.5YR7/6橙		
240	34	24	土師器	高杯	2		第4層		9.0	(6.8)	25	外：ヘラナデ 内：棒状工具+シボ リ	10YR8/3浅黄 橙	外面にモミ痕あ り	
241	34	24	土師器	高杯	1		第5層		11.8	(5.5)	33	外：ヘラナデ 内：布目痕、シボリ	7.5YR8/3浅 黄橙		
242	34		土師器	小型丸底壺	1		第5層	9.5		8.1	75	外：ハケ、ケズリ↓、 黒斑あり	7.5Y8/4浅黄 橙	頸部：6.9cm 胸部：8.1cm	
243	34		土師器	小型丸底壺	1		第5層	9.9		(9.3)	20	外：ハケ 内：ケズ リ→	10YR7/4にぶ い黄橙	頸部：6.9cm 胸部最大径：9.8 cm	
244	34		土師器	小型丸底壺	1		第5層			(6.9)	20	内：ケズリ→	2.5Y7/2灰黄	頸部：6.2cm 胸部最大径：9.1 cm	
245	34		土師器	鍋	2		第5層	29.6		(19.2)	10	内：ケズリ→	2.5Y8/2灰白		
246	35	24	土師器	甗	2		第5層	12.4		13.8	100	外：ハケ、煤付着	10YR7/3にぶ い黄橙		
247	35		土師器	二重口縁壺	2		第5層	10.2		(18.1)	40	外：黒斑あり 内： ケズリ→	10Y8/2灰白	焼成後、外面か ら穿孔 胸部最大径： 15.9cm	
248	35		土師器	二重口縁壺	1		第5層	19.0		上： 10.3 下： 21.2	60	外：ハケ、黒斑あり 内：ケズリ下半←・ 肩→、ハケ	10YR8/4浅黄 橙	胸部最大径： 29.7cm	
249	35		土師器	甗	1		第5層	15.2		(19.4)	40	外：ハケ、点文あり 内：ケズリ←	5Y7/6橙	布留式甗 胸部最大径： 21.1cm	
250	35		土師器	甗	1		第5層	13.3		23.5	40	外：ハケ 内：ケズ リ→	7.5YR7/4に ぶい橙	布留式甗 胸部最大径： 20.3cm	
251	40		須恵器	杯身	1	110ビット 掘立柱建物 1	第4面			(2.7)	10以 下	外：ケズリ	N6/0灰	復原最大径： 15.8cm TK43型式か	

遺物番号	挿図番号	写真図版番号	種別	器形	調査区	遺構名	面・層名	法量(単位cm)			残存率(%)	調整等(ヨコナデ・回転ナデは省略、砂→はヘラケズリにより砂が動いた方向)	外色調	備考
								口径長	底径幅	器高厚				
252	40		須恵器	杯	2	225 溝	第4面	12.8		(3.4)	80	2.5Y7/1 灰白	平城Ⅱ～Ⅲか	
253	40		土師器	杯	2	225 溝	第4面	20.2		(5.9)	25	10YR8/4 浅黄橙	平城Ⅰ～Ⅱか	
254	40	22	土師器	杯		136 ビット掘立柱建物2	第2面	19.0		(1.3)	10以下	10YR7/2 にぶい黄橙	平安京Ⅲ中か	
255	40	22	土師器	椀	2	139 ビット掘立柱建物2	第2面	14.6		(5.1)	11以下	7.5YR6/6 橙	10世紀代か	
256	40	22	黒色土器	椀	2	132 ビット掘立柱建物2	第2面		7.8	(0.7)	10以下	10YR6/3 にぶい橙	内黒(A類)、10世紀代か	
257	40		土師器	皿	1	5 溝	第2面	9.4		(1.5)	10	10YR8/2 灰白	平安京V古か	
258	40		土師器	皿	1	5 溝	第2面	14.6		(3.0)	10	10YR8/2 灰白	平安京V新か	
259	40		瓦器	椀	1	5 溝	第2面	15.6		(4.9)	10	外:ミガキ 内:ミガキ N6/0 灰	楠葉型Ⅰ期	
260	40		土師器	皿	2	168 落込み	第3面	9.3		(0.7)	10以下	2.5Y7/1 灰白	褐色系、平安京V古か	
261	40		土師器	皿	2	168 落込み	第3面	15.6		(2.0)	10以下	10YR4/1 褐灰	褐色系、平安京Ⅳ中～新か	
262	40		瓦器	椀	2	168 落込み	第3面	15.0		(3.8)	10以下	内:ミガキ N3/0 暗灰	楠葉型Ⅰ期	
263	40		瓦器	椀	2	169 溝	第3面	16.2		4.9	20	内:ミガキ N7/0 灰	楠葉型Ⅱ期	
264	40		黒色土器	椀か	1	12 ビット	第2面		7.6	(1.7)	10以下	内:ミガキ 2.5YR6/6 橙	内黒(A類)、畿内系Ⅲ類、10世紀代か	
265	40		黒色土器	椀	1	22 ビット	第3面	15.5		(4.7)	10以下	外:ミガキ 内:ミガキ 2.5Y4/1 黄灰	両黒(B類)、畿内系V類、10世紀後半～11世紀前半	
266	40		土師器	皿	2	143 ビット	第2面	10.4		(0.9)	10以下	7.5YR7/3 にぶい橙	平安京Ⅲ中か	
267	40		土師器	皿	2	143 ビット	第2面	9.0		(1.4)	10以下	7.5Y7/4 にぶい橙	平安京Ⅲ中か	
268	40		木器	柱根	1	63 ビット	第3面	26.8	10.7	8.1		樹皮なし、加工痕不明	スギ材	
269	44	23	須恵器	椀	2	195 流路	第3面		6.7	(1.3)	20	外:糸切り底	削り出し高台か、底部に乾燥台の痕か、10世紀か、拓本あり	
270	44	23	須恵器	高台部	2	195 流路	第3面		6.8	(1.7)	20	外:回転ヘラケズリ	削り出し高台か	
271	44	23	須恵器	鉢	2	195 流路	第3面	17.2		(5.4)	10以下	N6/0 灰	篠窯産か、10～11世紀初頭	
272	44	23	須恵器	壺底部	2	195 流路	第3面		11.1	(4.5)	20	外:回転ヘラケズリ←	5Y7/1 灰白	
273	44	23	須恵器	片口鉢	2	195 流路	第3面	17.1		(7.7)	10	5YR6/2 灰褐と5YR5/2の間		
274	44	23	土師器	杯	2	195 流路	第3面	15.7		(2.9)	10	2.5Y8/2 灰白	器壁4mm、平安京Ⅲ中か	
275	44	23	土師器	杯	2	195 流路	第3面	15.3		(3.6)	10以下	内:ハケ 10YR6/2 灰黄褐	器壁2～3mm、平安京Ⅱ新～Ⅲ古か	
276	44	23	土師器	甗	2	195 流路	第3面	14.2		(6.4)	10以下	外:煤付着 7.5YR4/1 褐灰	10世紀代か	
277	44	23	土師器	羽釜	2	195 流路	第3面	25.2		(6.0)	10以下	外:煤付着 7.5YR7/4 にぶい橙	摂津C型、掛け口径27.2～30.9cm	
278	44		土師器	羽釜	2	195 流路	第3面	22.0		(7.5)	10以下	外:ハケ 内:板ナデ 10YR7/2 にぶい黄橙	摂津C型、掛け口径25.8～28.0cm	
279	44	23	土師器	羽釜	2	195 流路	第3面	21.6		(9.7)	10以下	外:ハケ、煤付着 内:工具によるナデ 7.5YR7/4 にぶい橙	摂津C型、掛け口径23.0～27.3cm	
280	44		土師器	羽釜	2	195 流路	第3面	29.2		(7.7)	10以下	外:ハケ、煤付着 内:下半煤付着 7.5YR7/4 にぶい橙	摂津C型、掛け口径31.8～33.6cm	
281	44	23	土師器	羽釜	2	195 流路	第3面	24.5		(13.9)	10	外:ハケ、煤付着 10YR7/3 にぶい黄橙	摂津C型、掛け口径27.2～30.2cm	
282	44	23	灰釉陶器	壺	2	195 流路	第3面		10.2	(10.0)	20	外:釉 5Y7/1 灰白	底部に型枠の痕か	
283	44	23	灰釉陶器	壺	2	195 流路	第3面		11.0	(9.0)	10以下	外:回転ヘラケズリ、釉 内:底部に釉(自然釉か) 5Y7/1 灰白と5Y7/2 灰の間		
284	44	26	瓦	丸	2	195 流路	第3面	(10.3)	(4.8)	2.0	10以下	凹面:布目、側縁ケズリ 10YR7/2 にぶい黄橙	拓本あり	
285	44	26	瓦	平	2	195 流路	第3面	(14.2)	(14.9)	1.9～2.5	25	凸面:(無文) 凹面:布目、側縁ケズリ N6/0 灰	楠巻き、拓本あり、梶原瓦窯1号窯産か	
286	44	26	瓦	平	2	195 流路	第3面	(13.9)	(13.2)	1.8～2.4	13	凸面:斜格子タタキ 凹面:布目、側縁ケズリ 10YR7/3 にぶい黄橙	拓本あり、梶原瓦窯1号窯産か	

遺物番号	挿図番号	写真図版番号	種別	器形	調査区	遺構名	面・層名	法量(単位cm)			残存率(%)	調整等(ヨコナデ・回転ナデは省略、砂→はヘラケズリにより砂が動いた方向)	外色調	備考
								口径長	底径幅	器高厚				
287	45	25	白磁	碗	2	167 落込み	第2面	16.4		(4.2)	13	内・外面：釉、貫入あり	5Y7/1 灰白	IV類か、11世紀後半～12世紀前半
288	45	25	白磁	碗	2	167 落込み	第2面	17.6		(3.0)	10以下	内・外面：釉	5Y8/1 灰白	IV類か、11世紀後半～12世紀前半
289	45	25	白磁	碗	2	167 落込み	第2面	16.3		(3.1)	10以下	内・外面：釉	5Y8/1 灰白と5Y7/1 灰白の間	IV類か、11世紀後半～12世紀前半
290	45	25	白磁	碗	2	167 落込み	第2面		6.4	(3.2)	20	内・外面：釉	5Y8/1 灰白	IV類か、11世紀後半～12世紀前半
291	45		灰釉陶器	壺か	2	167 落込み	第2面		17.6	(3.4)	10以下	外：回転ヘラケズリ←、釉	5Y8/1 灰白	10～11世紀か
292	45		灰釉陶器	瓶子か	2	167 落込み	第2面		4.0		10以下	外：糸切り底、釉 内：釉	5Y8/1 灰白	9～10世紀か、拓本あり
293	45		須恵器	甃	2	167 落込み	第2面	11.8		(6.8)	10以下	外：タタキ 内：あて具痕	N5/0 灰～N4/0 灰	11～12世紀か
294	45		須恵器	鉢	2	167 落込み	第2面		9.8	(4.5)	10以下		N6/0 灰	高台あり、束播系か
295	45		黒色土器	碗	2	167 落込み	第2面	14.0	5.0	5.7	33	外：ミガキ 内：ミガキ	N3/0 暗灰	両黒(B類)、畿内系V類
296	45		黒色土器	碗	2	167 落込み	第2面		8.0	(2.3)	16	内：ミガキ	10YR8/3 浅黄橙	内黒(A類)、畿内系III類
297	45		瓦器	碗	2	167 落込み	第2面	12.9		(3.3)	10以下	外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	N5/0 灰	器壁4～5mm、楕葉型I～II期
298	45		土師器	皿	2	167 落込み	第2面	9.8		(1.8)	33		10YR7/2 にぶい黄橙	器壁2～3mm、平安京IV中～新
299	45		土師器	皿	2	167 落込み	第2面	9.3		(1.5)	25		7.5YR8/2 灰白	器壁2～3mm、平安京IV中～新
300	45		土師器	皿	2	167 落込み	第2面	11.5		(1.5)	16		10YR6/1 褐灰	器壁3mm、平安京III中か
301	45		土師器	杯	2	167 落込み	第2面	14.6		(3.0)	16		10YR8/2 灰白	平安京IV古か
302	45		土師器	高杯脚部	2	167 落込み	第2面			(15.3)	33	外：ケズリ↑、ハケ	10YR8/2 灰白	脚柱中位径：4.4cm、断面八角形
303	45		土師器	羽釜	2	167 落込み	第2面	27.6		(8.4)	10以下	外：ハケ、煤付着	10YR6/2 灰黄褐	褐色系、摂津C型、掛け口径29.1～32.8cm
304	45		土師器	羽釜	2	167 落込み	第2面	20.6		(8.1)	10以下	外：ハケ 内：板ナデ	10YR8/3 浅黄橙	摂津C型、掛け口径22.6～26.0cm
305	45		土師器	羽釜	2	167 落込み	第2面	23.4		(13.1)	10	外：ハケ、煤付着 内：下半煤付着	10YR6/3 にぶい橙	褐色系、摂津C型、掛け口径26.2～29.7cm
306	45	22	木器	浅沓か	2	167 落込み	北壁掘削中	22.1	7.9	3.1	90	側面に鉄釘 材質はスギ		花卉文、八つ橋の文様か
307	46	26	瓦	平	2	167 落込み	第2面	(4.7)	(6.8)	1.7～2.0	10以下	凸面：(無文) 凹面：布目のちタテケズリ、側縁ケズリ	N4/0 灰	須恵質、内外面セピア色、断面青灰色、梶原瓦窯1号窯産か、拓本あり
308	46	26	瓦	平	2	167 落込み	第2面	(7.9)	(7.9)	2.5～2.8	10以下	凸面：(無文) 凹面：布目、側縁ケズリ	10YR7/3 にぶい黄橙	軽い 拓本あり
309	46	26	瓦	平	2	167 落込み	第2面	(8.8)	(7.1)	2.1～2.2	10以下	凸面：縄目タタキ 凹面：布目	N3/0 暗灰	瓦質 拓本あり
310	46	26	瓦	平	2	167 落込み	第2面	(9.4)	(8.0)	2.0	10以下	凸面：(無文)、工具痕か 凹面：ケズリ2種	N7/0 灰	拓本あり
311	46	26	瓦	平	2	167 落込み	第2面	(7.8)	(12.5)	1.9～2.4	10以下	凸面：(無文) 凹面：布目、側縁ケズリのちタテケズリか	7.5YR5/1 褐灰	須恵質、内外面セピア色、断面青灰色、梶原瓦窯1号窯産か、拓本あり
312	46	26	瓦	平	2	167 落込み	第2面	(12.2)	(10.9)	2.2	10	凸面：(無文) 凹面：布目のちタテケズリ、側縁ケズリ	N5/0 灰	須恵質、内外面青灰色、断面セピア色、梶原瓦窯1号窯産か、拓本あり
313	46	26	瓦	平	2	167 落込み	第2面	(7.9)	(11.1)	2.2	10以下	凸面：(無文) 凹面：布目のちタテケズリ	N5/0 灰	須恵質、内外面青灰色、断面セピア色、梶原瓦窯1号窯産か、313と同一か、拓本あり
314	46	26	瓦	平	2	167 落込み	第2面	(14.6)	(14.7)	2.0	13	凸面：(無文) 凹面：布目のちタテケズリ、側縁ケズリ	5YR5/2 灰褐	須恵質、内外面セピア色、断面青灰色、梶原瓦窯1号窯産か、拓本あり
315	46	26	瓦	平	2	167 落込み	第2面	(12.5)	(9.9)	2.5	10	凸面：(無文)、側縁ケズリ 凹面：布目のちタテケズリ、側縁ケズリ 拓本あり	2.5YR6/3 にぶい橙	須恵質、内外面セピア色、断面青灰色、梶原瓦窯1号窯産か、307・311・317と同一か

遺物番号	挿図番号	写真図版番号	種別	器形	調査区	遺構名	面・層名	法量(単位cm)			残存率(%)	調整等(ヨコナデ・回転ナデは省略、砂→はヘラケズリにより砂が動いた方向)	外色調	備考
								口径長	底径幅	器高厚				
316	46	26	瓦	平	2	167 落込み	第2面	(15.9)	(13.4)	2.2	17	凸面:斜格子タタキ 凹面:布目のちタテナデかタテケズリ	10YR7/3 にぶい黄橙	焼成やや軟質、黄土色、梶原瓦窯1号窯産か、拓本あり
317	46	26	瓦	丸	2	167 落込み	第2面	(14.8)	(7.1)	2.1	10以下	凹面:布目	2.5Y7/1 灰白	拓本あり
318	47	23	白磁	皿	1	4 溝	第2面		5.0	(1.9)	10	内・外面:釉、貫入あり	7.5Y8/1 灰白	V類か、11世紀後半～12世紀前半
319	47	23	白磁	皿	1	4 溝	第2面	12.2		(2.3)	16	内・外面:釉、内面段あり	7.5Y8/1 灰白	II類か、11世紀後半～12世紀前半
320	47	23	灰釉陶器	椀	1	4 溝	第2面	15.3	7.3	5.5	17	内・外面:釉	2.5Y7/1 灰白	貼り付け高台
321	47	23	須恵器	甃	1	4 溝	第2面	16.0		(9.2)	10以下	外:平行タタキか 内:あて具痕	2.5Y6/1 黄灰	平安京V古か、拓本あり
322	47	23	須恵器	鉢	1	4 溝	第2面	22.8		(7.0)	10以下	口縁部:黒色化	2.5Y8/1 灰白	重ね焼き痕跡か、11世紀前半か
323	47	23	瓦器	椀	1	4 溝	第2面	14.8		(4.8)	50	外:ヘラミガキ 内:ヘラミガキ	N5/0 灰	器壁4mm、和泉型II期か
324	47	23	瓦器	椀	1	4 溝	第2面	15.9		(4.8)	10	外:ミガキ 内:ミガキ	N4/0 灰	器壁4～5mm、楠葉型I期か
325	47	23	土師器	皿	1	4 溝	第2面	9.5		1.8	90		10YR7/4 にぶい黄橙	器壁4～5mm、平安京V古か
326	47	23	土師器	皿	1	4 溝	第2面	9.6		1.7	33		7.5YR8/3 浅黄橙	器壁5mm、平安京V古か
327	47	23	土師器	台付皿	1	4 溝	第2面		8.3	(3.4)	10以下		10YR7/2 にぶい黄橙	平安京IV新か
328	47	23	土師器	羽釜	1	4 溝	第2面	20.0		(5.0)	10以下		10YR6/2 灰黄褐	摂津C型、掛け口径22.0～25.2cm
329	47	23	土師器	羽釜	1	4 溝	第2面	23.0		(5.4)	10以下	外:ハケ、煤付着	10YR4/2 灰黄褐	摂津C型、掛け口径25.4～28.4cm
330	47	23	土師器	羽釜	1	4 溝	第2面	23.0		(7.2)	10以下	外:ハケ 内・外面煤付着	7.5YR6/6 橙	摂津C型、掛け口径25.2～29.6cm
331	47	26	瓦	平	1	4 溝	第2面	(9.3)	(7.3)	2.2	10以下	凸面:縄目タタキ 凹面:布目、側縁ナデか	2.5YR7/1 灰白	拓本あり
332	50	22	瓦器	椀	2	149ピット(建物3)	第2面	12.6		(3.5)	13		5Y4/1 灰	器壁2～4mm、楠葉型IV期か
333	50	22	瓦器	椀	2	149ピット(建物3)	第2面	13.1	4.3	4.9	25	内:ミガキ	N4/0 灰	器壁2～4mm、楠葉型IV期か
334	50		瓦器	椀	2	142 溝	第2面	13.6		(3.5)	13	内:ミガキ	N5/0 灰	器壁2～3mm、楠葉型III期か
335	50		瓦器	椀	2	170 土坑	第3面	11.9		(3.5)	10	内:ミガキ、糊痕あり	N4/0 灰	器壁1.5～3mm、楠葉型III～IV期
336	50		土師器	皿	2	164 溝	第2面	12.2		1.2	10以下		7.5YR8/4 浅黄橙	平安京III新か
337	50		土師器	皿	2	164 溝	第2面	8.2	3.0	1.1	10以下		7.5YR8/3 浅黄橙	平安京IV中～新か
338	50		土師器	皿	2	164 溝	第2面	9.3	8.6	1.0	10以下		5YR8/3 淡橙	平安京IV新か
339	50		土師器	杯	2	164 溝	第2面	18.0		(2.7)	10以下		10YR8/2 灰白	平安京III中～新か
340	50		瓦器	椀	2	164 溝	第2面	12.4		(3.9)	20	内:ミガキ	N5/0 灰	楠葉型III期か
341	50		瓦器	椀	2	164 溝	第2面		5.4	(1.2)	40	内:ミガキ	N6/0 灰	II期か
342	51	25	白磁	皿	2		第3層	11.7		(3.2)	25	内・外面:釉 内面段あり	5Y8/1 灰白	II類、11世紀後半～12世紀前半
343	51	25	白磁	碗	2		第4層		(4.3)	(4.6)	10以下	内・外面:釉 貫入あり	5Y8/1 灰白	V類か、11世紀後半～12世紀前半
344	51	25	白磁	碗	1		第3層		(4.6)	(3.1)	40	内・外面:釉、貫入あり、見込みに目跡あり	2.5Y8/1 灰白	II-1類、11世紀後半～12世紀前半
345	51	25	白磁	碗	2		第4層		7.1	(3.9)	10	内・外面:釉、高台にも施釉あり	10GY8/1 明緑灰	V類か、11世紀後半～12世紀前半
346	51	25	灰釉陶器	椀	2		第4層	15.7	6.6	6.0	33	内・外面:釉	5Y7/1 灰白	10世紀後半～11世紀初頭か
347	51	25	緑釉陶器	皿	1		第4層		6.2	(1.5)	20	全面釉、土師質素地、削り出し蛇の目高台か	10YR8/3 浅黄橙	9世紀か
348	51		須恵器	杯身	2		第5層	11.7	9.8	3.4	33		N6/0 灰	7世紀後半～8世紀前半
349	51		須恵器	皿か杯	2		第5層	18.5	15.5	3.5	50	外:回転ヘラケズリ	2.5Y8/1 灰白	口縁端部を内側に肥厚、平安前期か
350	51	25	土師器	椀	1		西側溝	15.7	7.2	4.9	33	外:糸切り底、底部に5.2cm間隔の平行する線状痕跡あり	2.5Y8/3 淡黄	拓本あり、11世紀前半か
351	51		土師器	小皿	2		第4層	8.2		1.2	33		10YR7/4 にぶい黄橙	鎌倉時代か

遺物番号	挿図番号	写真図版番号	種別	器形	調査区	遺構名	面・層名	法量(単位cm)			残存率(%)	調整等(ヨコナデ・回転ナデは省略、砂→はへラケズリにより砂が動いた方向)	外色調	備考
								口径長	底径幅	器高厚				
352	51		黒色土器	椀	1		第3層		6.4	5.0	10以下	外:ミガキ、線刻あり 内:ミガキ	10YR2/1 黒	両黒(B類)、10世紀後半~11世紀前半
353	51	25	石製品	石鍋	2		第4層	22.4		(5.6)	10以下	外:ケズリ	10YR6/2 灰黄褐	滑石製、12世紀か
354	51	26	瓦	丸	1		第4層	(15.1)	(7.0)	1.8	13	凹面:布目	N7/0 灰白	須恵質に焼成、断面セピア色、拓本あり
355	51	26	瓦	平	2		第5層	(12.7)	(12.8)	1.8~2.1	13	凸面:縄目タタキ 凹面:布目、側縁ケズリ	N6/0 灰	拓本あり
356	51	26	瓦	平	1		第3層	(3.1)	(15.2)	2.7~3.0	17	凸面:斜格子タタキ 凹面:布目、側縁ケズリ	7.5YR7/6 橙	梶原瓦窯1号窯産か(T141に類似)、拓本あり
357		18	製塩土器		2	196 落込み	第4面							大阪湾Ⅱ-2式 F2類
358		18	製塩土器		2	196 落込み	第4面							大阪湾Ⅱ-2式 F2類
359		18	滑石製模造品	白玉一連	2	196 落込み	第4面							
360		19	鉄器		2	196 落込み	第4面	(4.5)	(2.6)	0.3				土器に付着
361		19	金属製品	鉄滓か	2	196 落込み	第4面	(2.6)	(2.1)	1.2				
362		19	金属製品	鉄滓か	2	196 落込み	第4面		(1.2)	0.4				
363		19	金属製品	鉄滓か	2	196 落込み	第4面	(1.6)	(1.3)	0.7				
364		19	金属製品	鉄滓か	2	196 落込み	第4面	(2.3)	(1.4)	0.4				
365		19	金属製品	輪羽口	2	196 落込み	第4面	(3.4)	(2.7)	1.6				
366		19	金属製品	鉄滓か	2	196 落込み	第4面	(2.4)	(1.7)	1.0				
367	19・27		鉄器		2	196 落込み	第4面	(1.5)	(1.1)	0.1				
368	19・27		鉄器		2	196 落込み	第4面	(4.8)	(1.4)	0.2				
369	19・27		鉄器	刀子?	2	196 落込み	第4面	(2.7)	(1.5)	0.3				
370	19・27		鉄器		2	196 落込み	第4面	(3.6)	(1.6)	0.4				
371	19・27		鉄器		2	196 落込み	第4面	(2.2)	(1.7)	0.5				
372	19・27		鉄器		2	196 落込み	第4面	(2.3)	(1.8)	0.6				
373	19・27		鉄器	刀子?	2	196 落込み	第4面	(1.9)	(0.8)	0.2				
374	19・27		鉄器	刀子?	2	196 落込み	第4面	(3.3)	(0.9)	0.2				
375	19・27		鉄器		2	196 落込み	第4面	(4.6)	(2.2)	(0.4)				
376	19・27		鉄器		2	196 落込み	第4面	(2.5)	(1.2)	0.1				
377	19・27		鉄器		2	196 落込み	第4面	(2.6)	(1.2)	0.1				
378	19・27		鉄器		2	196 落込み	第4面	(2.3)	(0.7)	0.2				
379	19・27		鉄器		2	196 落込み	第4面	(2.4)	(0.9)	0.3				
380	19・27		鉄器		2	196 落込み	第4面	(1.8)	(0.9)	0.2				
381	19・27		鉄器		2	196 落込み	第4面	(1.7)	(0.9)	0.2				
382	19・27		鉄器		2	196 落込み	第4面	(2.4)	(1.5)	0.2				
383	19・27		鉄器		2	196 落込み	第4面	(2.9)	(0.6)	0.4				
384	19・27		鉄器		2	196 落込み	第4面	(2.0)	(0.6)	0.5				
385	19・27		鉄器		2	196 落込み	第4面	(3.7)	(0.9)	0.3				
386	19・27		鉄器		2	196 落込み	第4面	(4.1)	(0.7)	0.4				
387	19・28		鉄器		2	196 落込み	第4面	(4.5)	(0.6)	0.4				
388	19・28		鉄器		2	196 落込み	第4面	(3.5)	(1.6)	0.1				
389	19・28		鉄器		2	196 落込み	第4面	(3.3)	(0.9)	0.3				
390	19・28		鉄器		2	196 落込み	第4面	(3.4)	(1.7)	0.1				
391	19・28		鉄器		2	196 落込み	第4面	(3.5)	(1.5)	0.1				
392	19・28		鉄器		2	196 落込み	第4面	(2.8)	(1.9)	0.1				
393	19・28		鉄器		2	196 落込み	第4面	(1.9)	(2.1)	0.1				
394	19・28		鉄器		2	196 落込み	第4面	(2.9)	(1.9)	0.1				
395	19・28		鉄器		2	196 落込み	第4面	(3.8)	(3.0)	0.2				
396	19・28		鉄器		2	196 落込み	第4面	(3.4)	(2.0)	0.2				
397	19・28		鉄器		2	196 落込み	第4面	(4.5)	(2.3)	0.1				
398	19・28		鉄器		2	196 落込み	第4面	(1.9)	(2.4)	0.1				
399	19・28		鉄器		2	196 落込み	第4面	(1.6)	(2.7)	0.1				
400	19・28		鉄器		2	196 落込み	第4面	(1.9)	(2.1)	0.1				
401	19・28		鉄器		2	196 落込み	第4面	(1.5)	(2.2)	0.1				
402	19・28		鉄器		2	196 落込み	第4面	(3.1)	(2.0)	0.1				
403		21	製塩土器		2	98 溝	第4面	(3.9)	(1.9)	0.3	10以下	外:タタキ	7.5YR4/1 褐灰	大阪湾Ⅱ-2式 F2類
404		21	製塩土器		1	98 溝	第4面	(4.3)	(3.3)	0.2	10以下		5YR8/1 灰白	大阪湾Ⅱ-2式 F2類
405		21	製塩土器		1	98 溝	第4面	(3.3)	(2.3)	0.2	10以下	外:タタキ	10YR5/1 褐灰	大阪湾Ⅱ-2式 F2類
406		21	製塩土器		1	98 溝	第4面		(1.9)	0.2	10以下	外:タタキ	10YR6/4 にぶい黄橙	大阪湾Ⅱ-2式 F2類
407		23	灰釉陶器	長頸壺	2	195 流路	第3面			0.8	10以下	内・外面:灰釉	N7/0 灰白	頸部径:9.4 cm
408		25	緑釉陶器	高台部	2		第2面 精査中	(3.9)	(1.8)	0.6	10以下	内・外面:緑釉	10YR8/2 灰白	
409		25	緑釉陶器	不明	1		西側溝	(2.2)	(2.1)	0.7	10以下	内:緑釉	10YR8/3 浅黄橙	

遺物 番号	挿図 番号	写真 図版 番号	種別	器形	調査 区	遺構名	面・層 名	法量(単位cm)			残存 率 (%)	調整等(ヨコナデ・ 回転ナデは省略、砂 →はヘラケズリによ り砂が動いた方向)	外色調	備考
								口径 長	底径 幅	器高 厚				
410		25	灰釉陶器	高台部	1		第3層		5.4	(1.7)	10以下		2.5Y7/1 灰白	
411		25	灰釉陶器	高台部	1		第2層		6.4	(2.5)	10以下		N8/0 灰白	
412		25	灰釉陶器	高台部	1		第3層		5.4	(1.3)	10以下		2.5Y7/1 灰白	
413		25	灰釉陶器	椀	1		第2層	12.2		(4.7)	10以下	内・外面：釉	2.5Y8/1 灰白	
414		26	瓦	平	2	167 落込み	第2面	(9.3)	(7.3)	2.0	10以下	凸面：斜格子タタキ 凹面：布目	10YR6/4 にふい黄橙	梶原瓦窯1号窯 産か
415		26	瓦	平	2	167 落込み	第2面	(9.3)	(7.7)	2.3	10以下	凸面：斜格子タタキ 凹面：布目	7.5YR6/3に ふい褐	梶原瓦窯1号窯 産か
416		26	瓦	平	1		第3層	(7.8)	(9.7)	2.6	10以下	凸面：斜格子タタキ 凹面：布目	7.5YR6/3 にふい褐	梶原瓦窯1号窯 産か
417		26	瓦	平	1		第2層	(4.6)	(6.9)	2.2	10以下	凸面：斜格子タタキ	10YR7/4 にふい黄橙	梶原瓦窯1号窯 産か
418		26	瓦	平	2		第2面 精査中	(2.2)	(2.7)	2.1	10以下	凸面：斜格子タタキ	7.5YR7/3 にふい褐	梶原瓦窯1号窯 産か
419		26	瓦	平	2		第3層	(6.1)	(8.3)	1.9	10以下	凸面：斜格子タタキ 凹面：布目	N7/0 灰白	梶原瓦窯1号窯 産か
420		26	瓦	平	2		第2面 精査中	(3.3)	(4.2)	1.4	10以下	凸面：斜格子タタキ	10YR8/4 浅黄 橙	梶原瓦窯1号窯 産か
421		26	瓦	平	1		第4層	(5.0)	(7.1)	2.1	10以下	凸面：斜格子タタキ 凹面：布目	10YR7/4 にふい黄橙	梶原瓦窯1号窯 産か
422		26	瓦	平	1		第3層	(3.9)	(4.8)	1.7	10以下	凸面：斜格子タタキ 凹面：布目	7.5YR6/1 褐 灰	梶原瓦窯1号窯 産か
423		26	瓦	平	1		第4層	(7.1)	(7.4)	2.1	10以下	凸面：斜格子タタキ 凹面：布目	7.5YR6/3 にふい褐	梶原瓦窯1号窯 産か
424		26	瓦	平	2		第4層	(6.3)	(7.1)	2.4	10以下	凸面：(無文) 凹面：布目	10YR8/3 浅黄 橙	
425		26	瓦	平	2		第4層	(4.6)	(6.9)	2.2	10以下	凸面：(無文) 凹面：布目、側縁ケ ズリ	10YR7/3 にふい黄橙	
426		26	瓦	平	2	195 流路	第3面	(6.5)	(6.6)	2.2	10以下	凸面：縄目タタキ 凹面：布目	10YR6/2 灰黄 褐	
427		26	瓦	平	2	195 流路	第3面	(6.8)	(4.7)	2.1	10以下	凸面：縄目タタキ 凹面：布目	10YR7/1 灰白	
428		26	瓦	平	2		第4層	(4.9)	(5.7)	2.1	10以下	凸面：縄目タタキ 凹面：布目	N6/0 灰	
429		26	瓦	平	2		第5層	(8.4)	(9.3)	1.6	10以下	凸面：縄目タタキ 凹面：布目	5Y7/1 灰白	
430		26	瓦	平	1		第3層	(9.1)	(6.3)	2.4	10以下	凸面：縄目タタキ 凹面：布目	10YR7/3 にふい黄橙	
431		26	瓦	平	1		第3層	(7.9)	(6.4)	2.4	10以下	凸面：縄目タタキ 凹面：布目	5Y7/1 灰白	
432		26	瓦	平	1		第3層	(7.9)	(7.8)	1.6	10以下	凸面：縄目タタキ 凹面：布目	2.5Y7/1 灰白	
433		26	瓦	平	1		第4層	(5.4)	(4.6)	1.6	10以下	凸面：縄目タタキ 凹面：布目	2.5Y8/1 灰白	
434		26	瓦	平	2		第3層	(5.7)	(7.3)	2.2	10以下	凸面：縄目タタキ	2.5Y6/2 灰黄	
435		26	瓦	平	2		第2面 精査中	(3.3)	(5.1)	2.5	10以下	凸面：縄目タタキ 凹面：布目	10YR8/3 浅黄 橙	
436		26	瓦	丸	1	4 溝	第2面	(4.6)	(6.7)	2.3	10以下	凹面：布目	2.5Y6/1 黄灰	
437		26	瓦	丸	1		第3層	(4.3)	(6.9)	2.5	10以下	凹面：布目	2.5Y7/1 灰白	
438		26	瓦	丸	2		第4層	(10.7)	(5.4)	1.6	10以下	凹面：布目	2.5Y7/1 灰白	
439		26	瓦	丸	1		第4層	(5.4)	(4.7)	1.7	13	凹面：布目	2.5Y6/2 灰黄	
440		26	瓦	丸	1		第4層	(5.0)	(5.4)	1.5	13	凹面：布目	N/0 灰	
441		26	瓦	丸	1		第3層	(7.9)	(4.5)	1.9	13	凹面：布目	2.5Y7/1 灰白	

写真図版



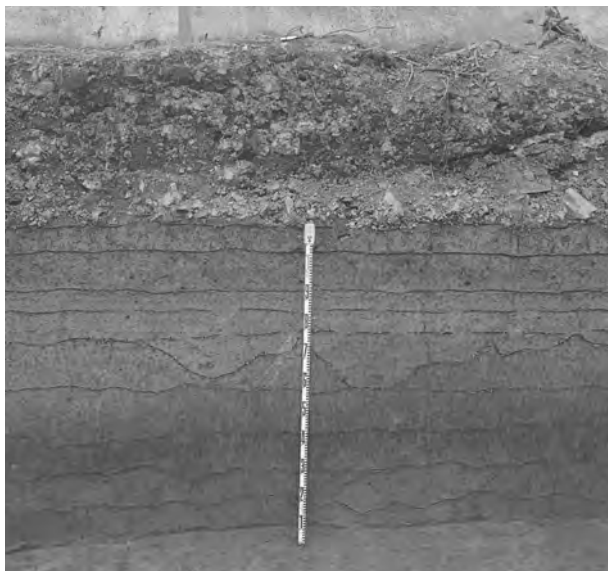
調査地遠景（北東から）平成28（2016）年5月12日撮影



1, 1区西壁断面（南東から）



4, 2区東壁断面（南西から）



2, 1区西壁断面（東から）



5, 2区東壁断面（北西から）



3, 1区西壁断面（南東から）



6, 2区東壁深掘断面（南西から）

写真図版 2



1, 258 溝 (南西から)



2, 258 溝 断面 (南から)



3, 258 溝 断面 (南から)



4, 258 溝北東端 土器出土状況 (東から)



5, 258 溝北東端 土器出土状況 (北東から)



1, 1区第4面全景 (南から)

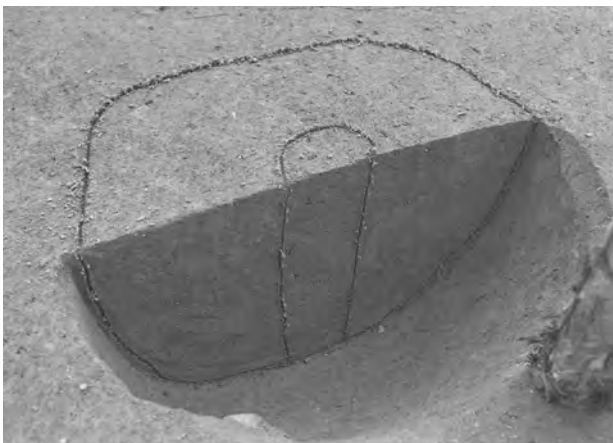


2, 2区第4面全景 (南西から)

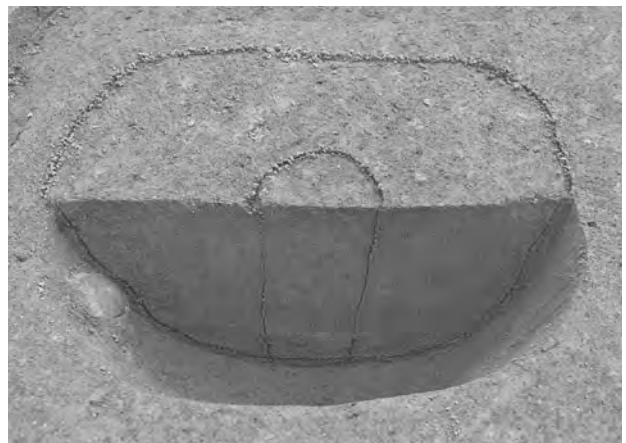
写真図版 4



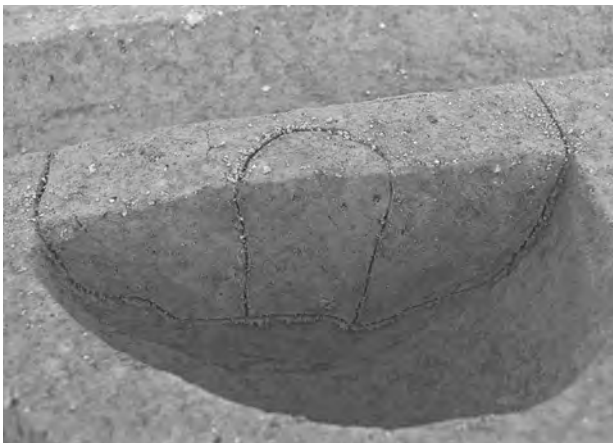
1, 1区第4面 掘立柱建物1と98溝(東から)



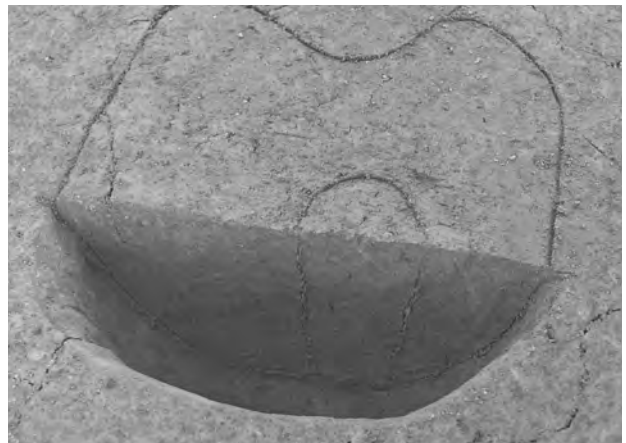
2, 掘立柱建物1 110ピット断面(西から)



3, 掘立柱建物1 111ピット断面(西から)



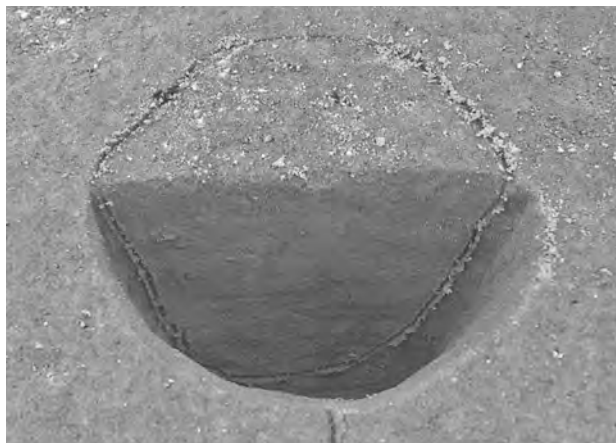
4, 掘立柱建物1 116ピット断面(南から)



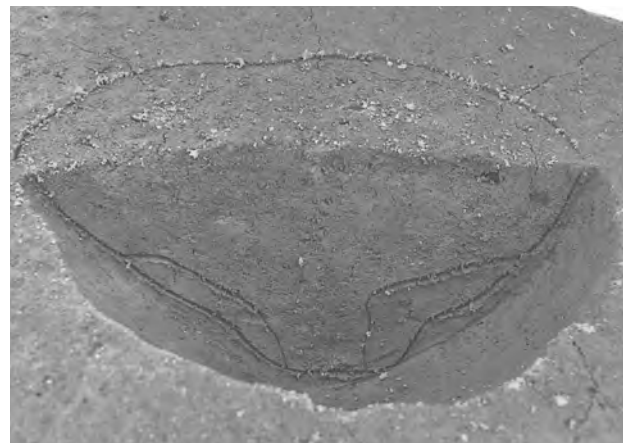
5, 掘立柱建物1 119ピット断面(西から)



1, 2区第4面 掘立柱建物4 (北西から)



2, 掘立柱建物4 198ピット断面(北から)



3, 掘立柱建物4 200ピット断面(北から)



4, 掘立柱建物4 203ピット断面(東から)

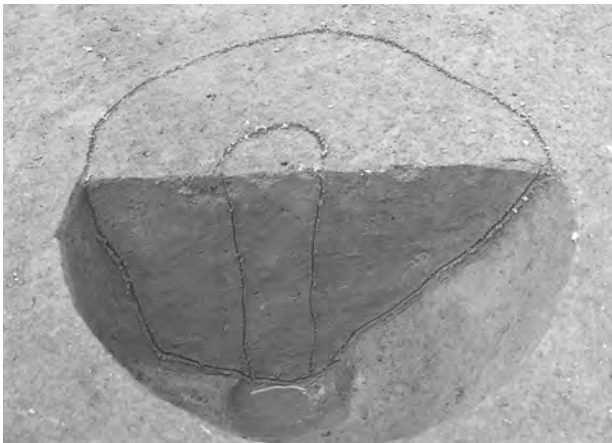


5, 掘立柱建物4 201ピット断面(西から)

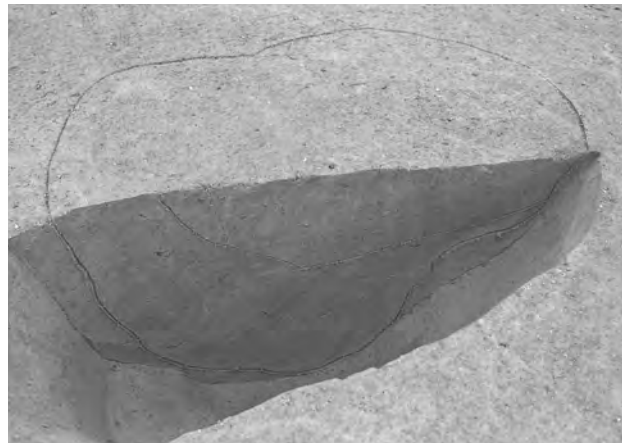
写真図版 6



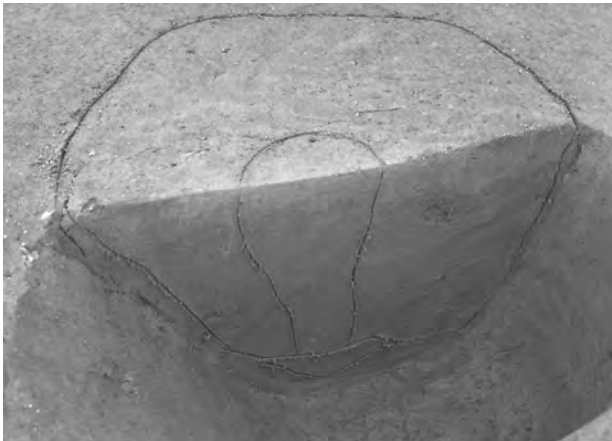
1, 2区第4面 掘立柱建物5 (南西から)



2, 掘立柱建物5 226ピット断面 (南東から)



3, 掘立柱建物5 237ピット断面 (西から)



4, 掘立柱建物5 257ピット断面 (西から)



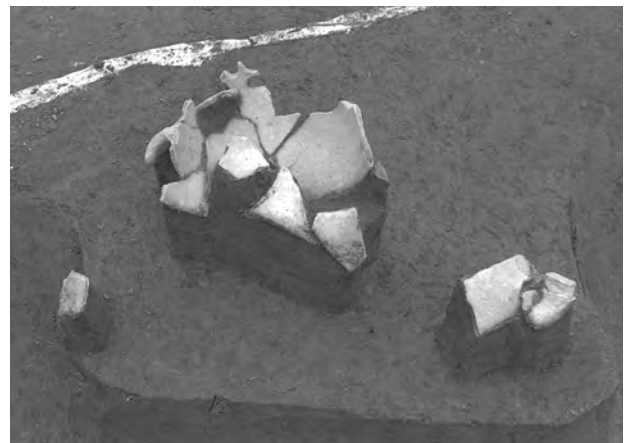
5, 掘立柱建物5 227ピット断面 (南東から)



1, 1区第4面 98溝 (北東から)



2, 98溝断面 (東から)



3, 98溝 土器出土状況 (北東から) (図31-198)



4, 98溝 土器出土状況 (東から)



5, 98溝 土器出土状況 (東から) (図30-197)

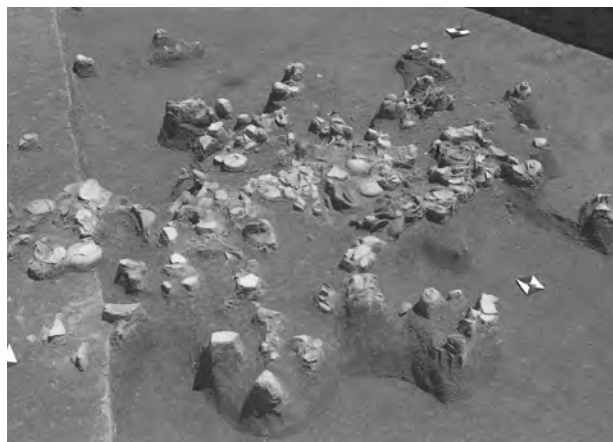
写真図版 8



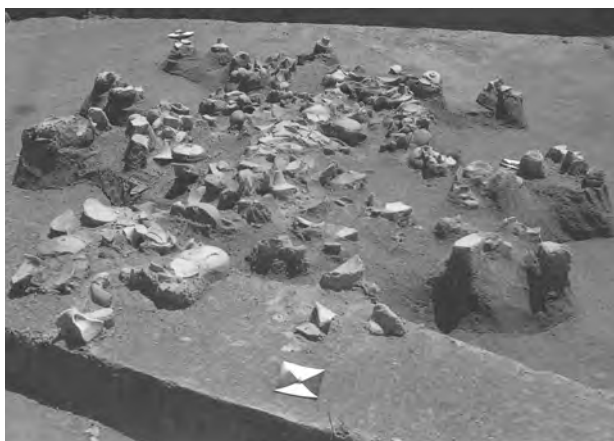
1, 2区第4面 196 落込み遺物出土状況 (東から)



2, 196 落込み 断面 (西から)



3, 196 落込み 遺物出土状況 (南から)



4, 196 落込み 遺物出土状況 (西から)



5, 196 落込み 遺物出土状況 (東から)



1, 124 土坑 断面 (南から)



2, 124 土坑 遺物出土状況 (南から) (図 33 - 208)



3, 99 落込み 遺物出土状況 (北東から)



4, 包含層 石釧出土状況 (北西から) (図 34 - 233)



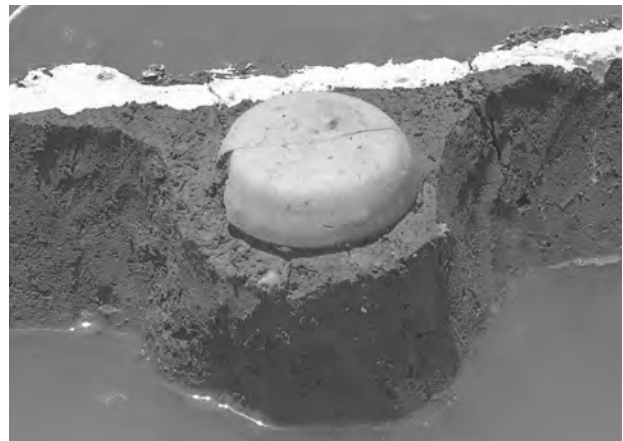
5, 包含層 土師器壺 出土状況 (南から) (図 35 - 248)



6, 包含層 須恵器甕 出土状況 (南から) (図 34 - 234)



7, 225 溝 断面 (北西から)



8, 225 溝 土器出土状況 (北から) (図 40 - 252)



1, 2区第3面 195 流路
(南西から)



2, 167 落込み及び 195 流路
断面 (西から)



3, 167 落込み及び 195 流路
断面 (南から)



1, 1区第3面全景 (南から)



2, 2区第3面全景 (南から)

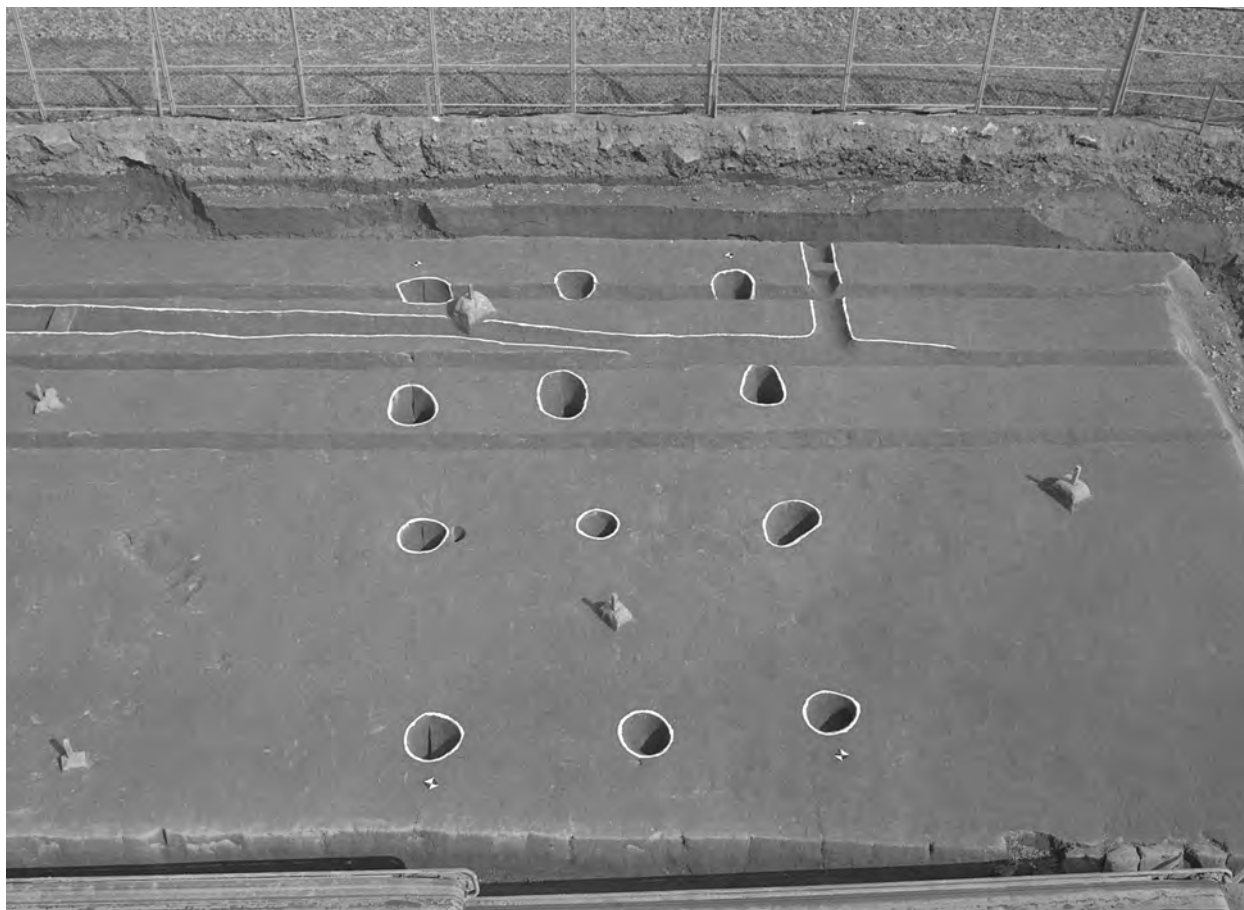
写真図版 12



1, 1区第2面全景(南から)



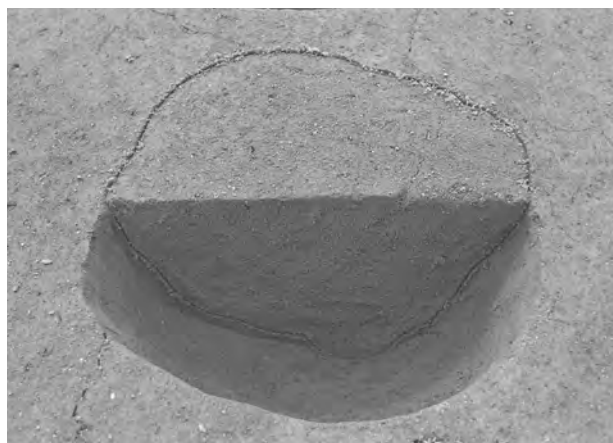
2, 2区第2面全景(南から)



1, 1区第2面 掘立柱建物2 (西から)



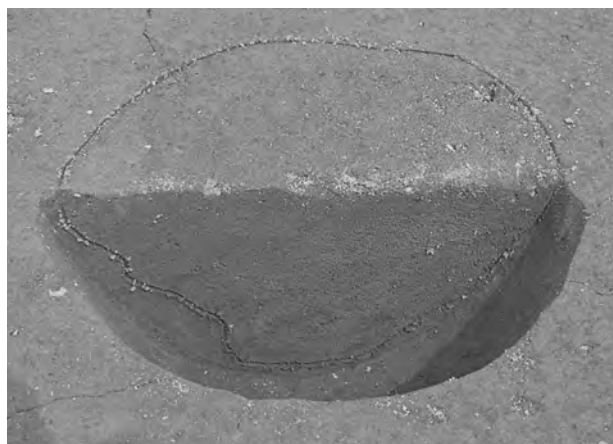
2, 掘立柱建物2 検出状況 (西から)



3, 掘立柱建物2 136ピット断面 (北から)



4, 掘立柱建物2 137ピット断面 (北から)



5, 掘立柱建物2 131ピット断面 (南から)



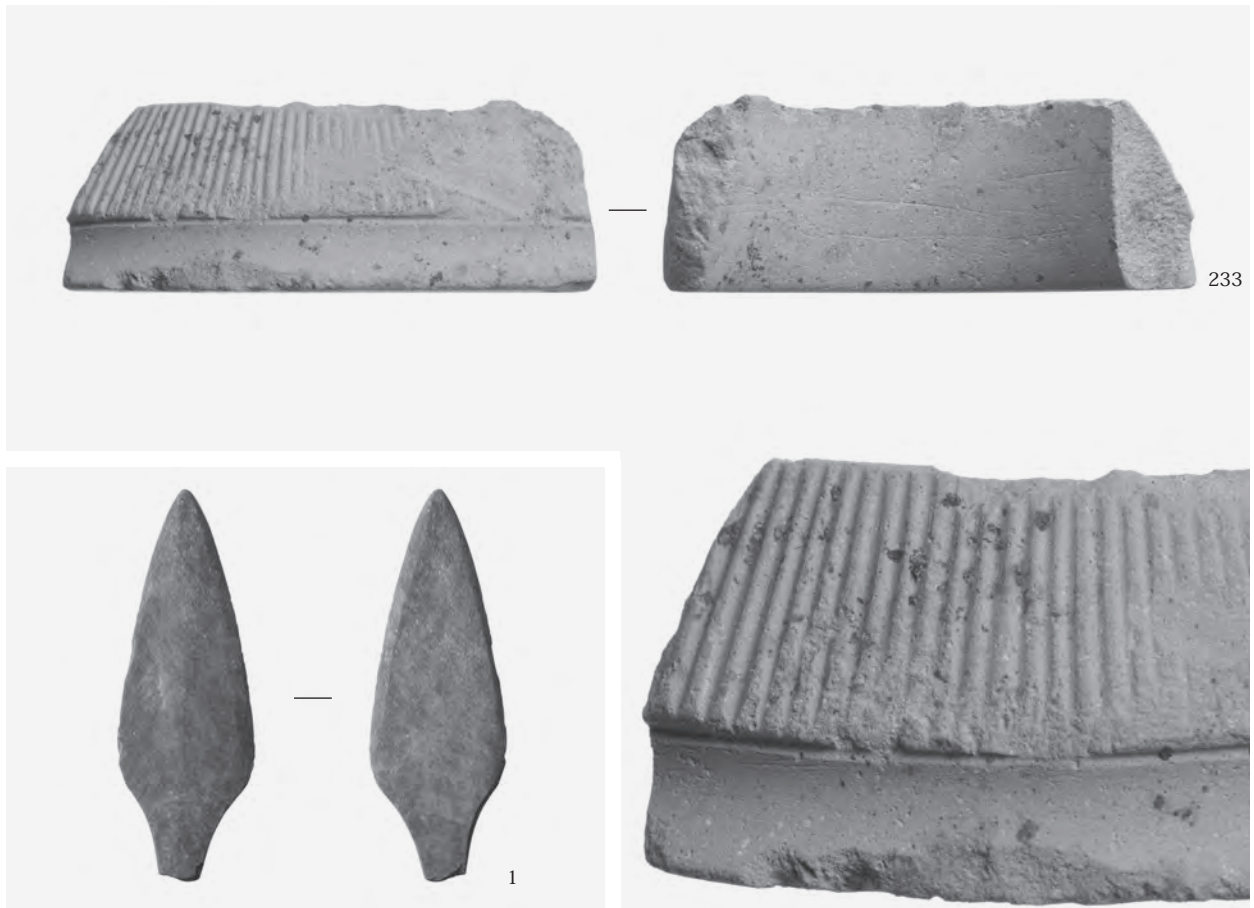
1, 2区第2面 掘立柱建物3
(西から)



2, 掘立柱建物3 149ピット断面(西から)



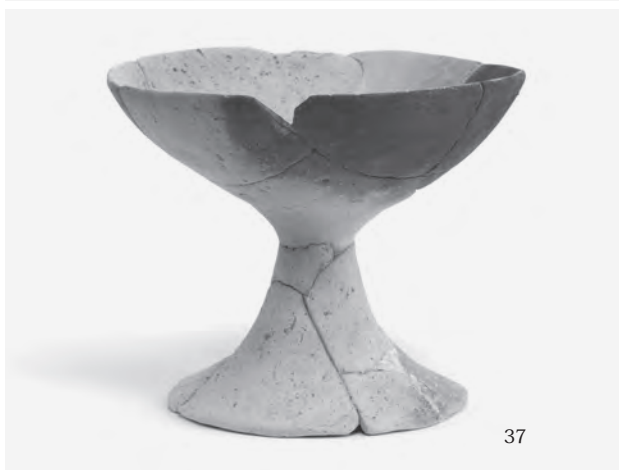
3, 1区第2面 4溝断面
(南から)



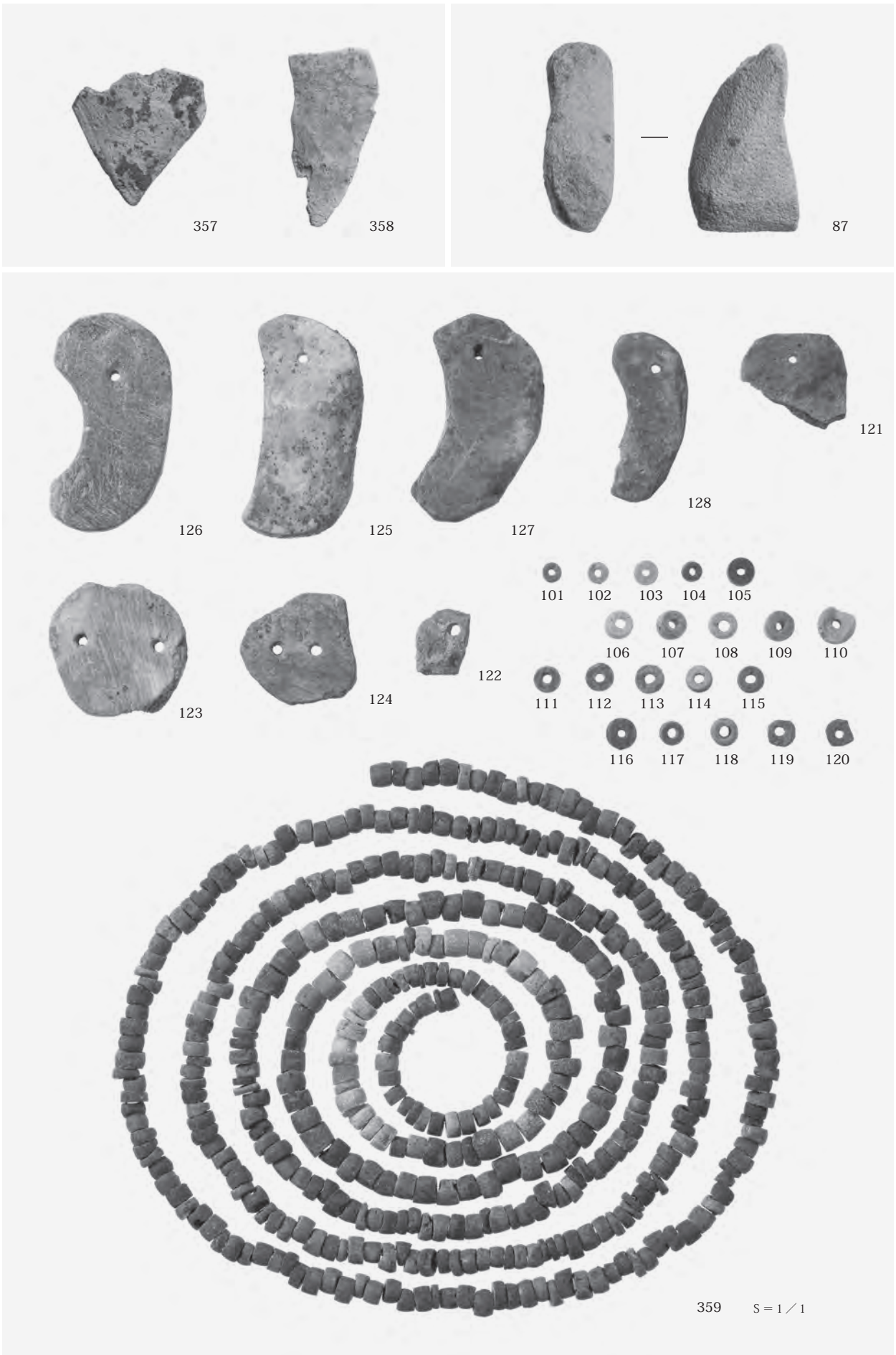
包含層その他出土遺物

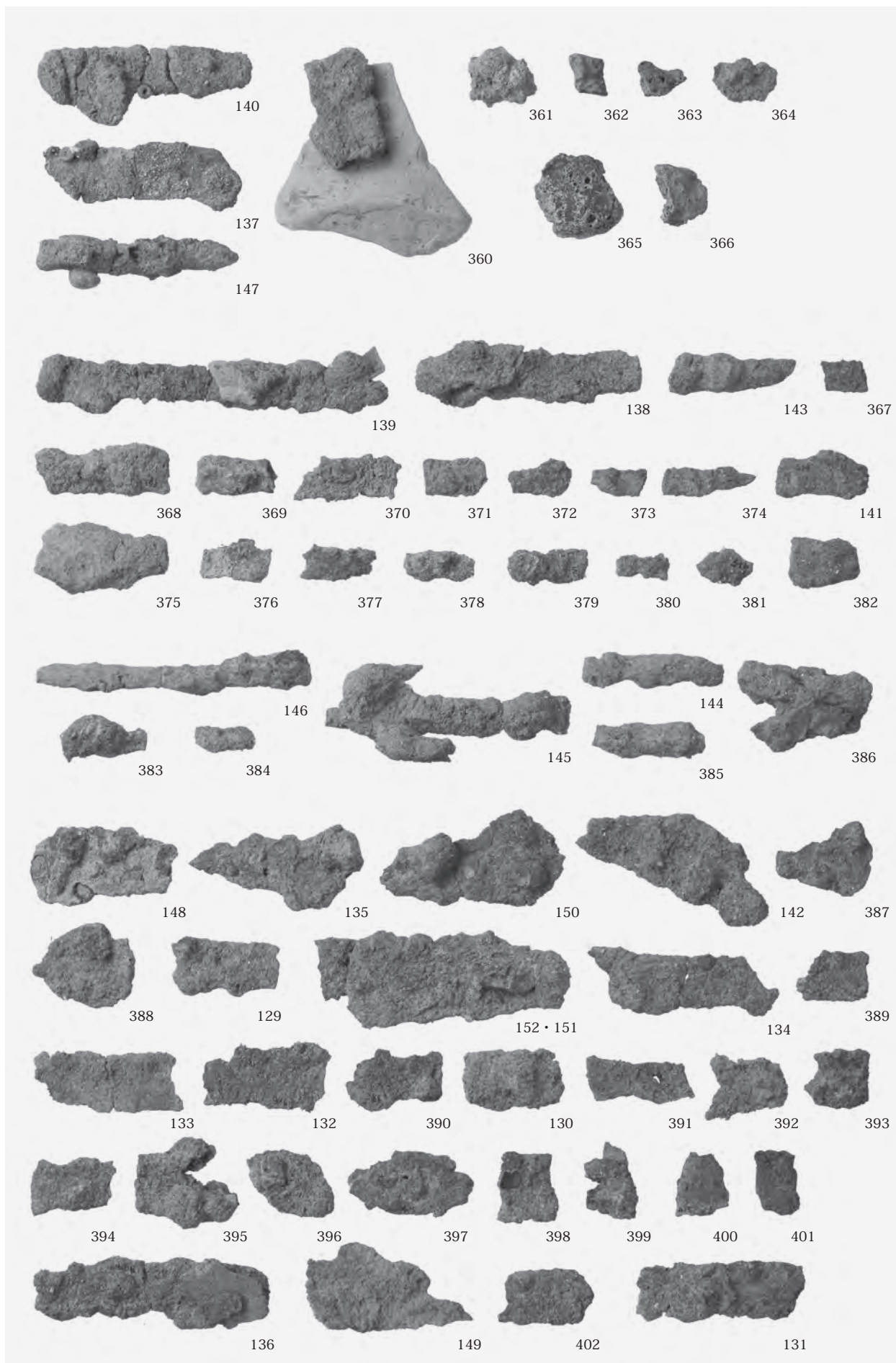


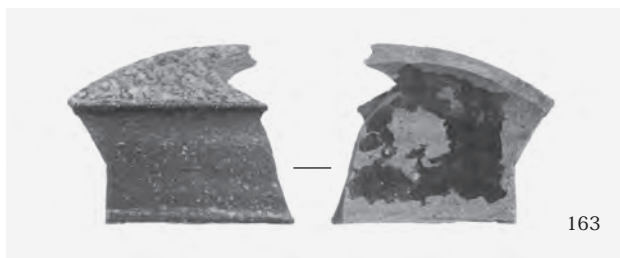
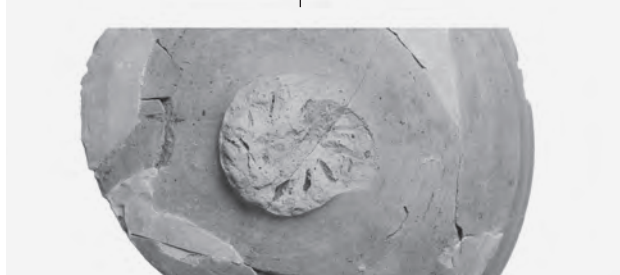
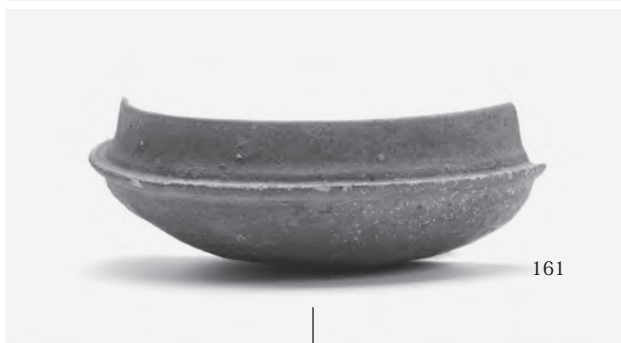
258 溝 出土遺物

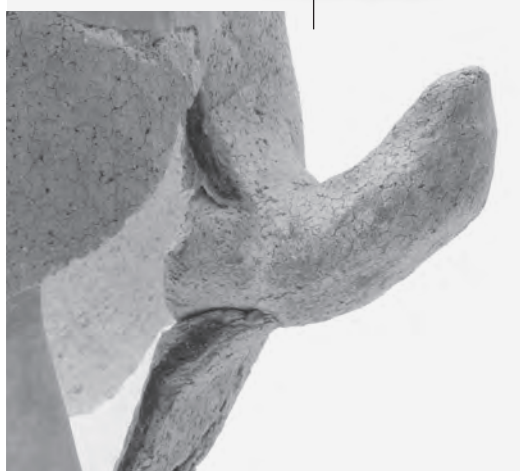












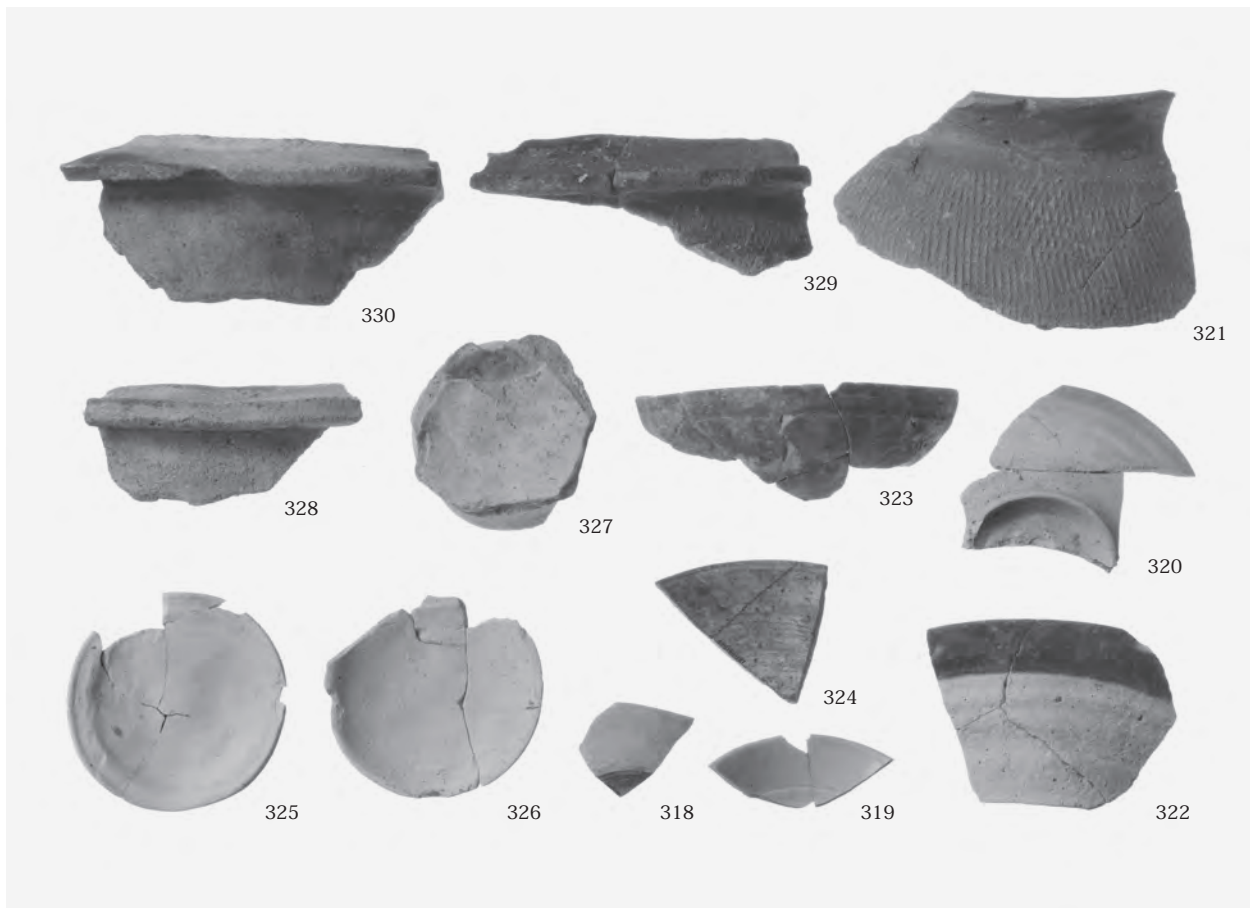
写真図版 22



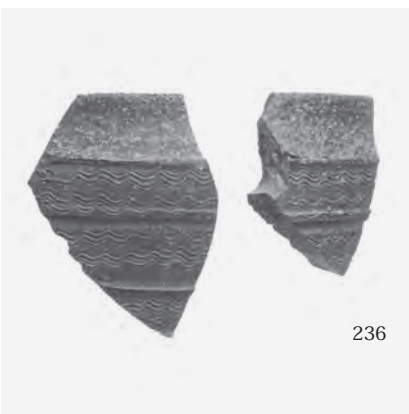
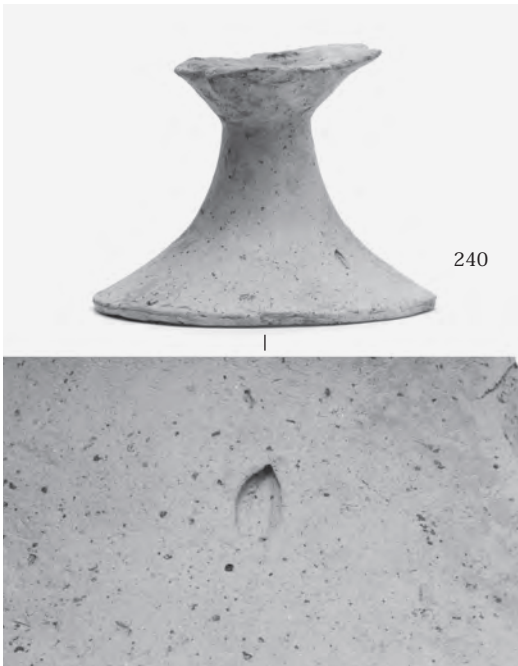
98 溝・124 土坑・252 ピット・225 溝・掘立柱建物 2・掘立柱建物 3・167 落込み 出土遺物



195 流路 出土遺物



4 溝 出土遺物



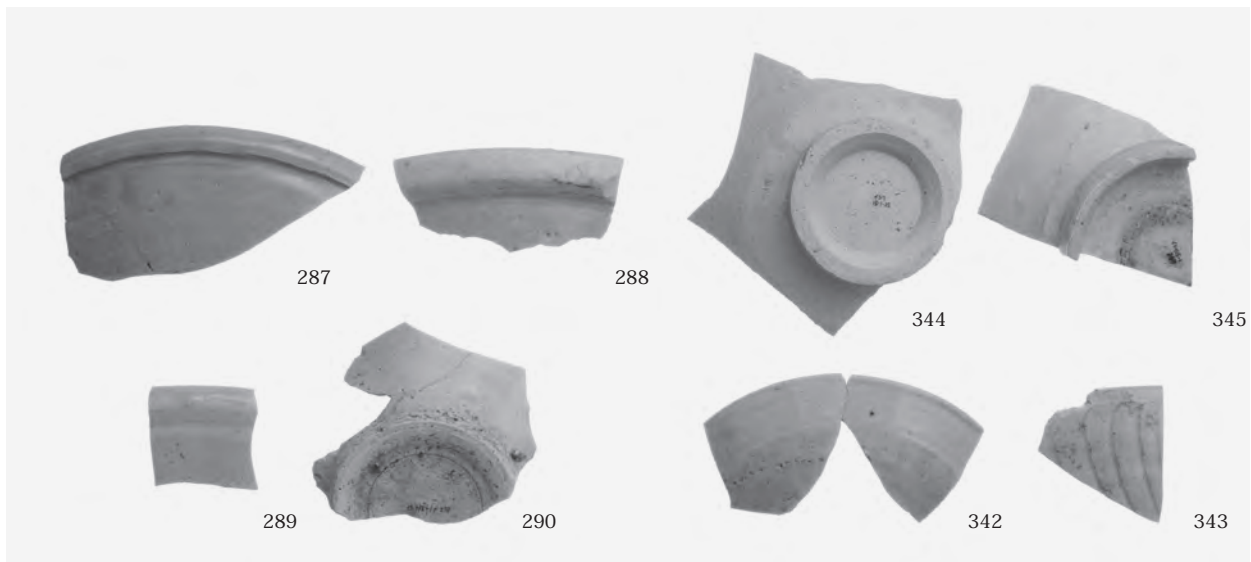
包含層出土遺物 (古墳時代)



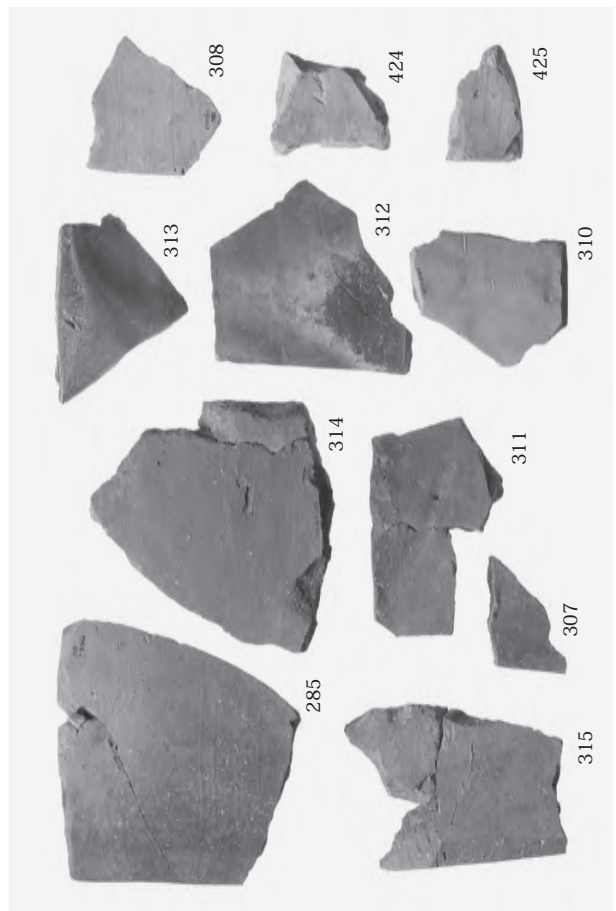
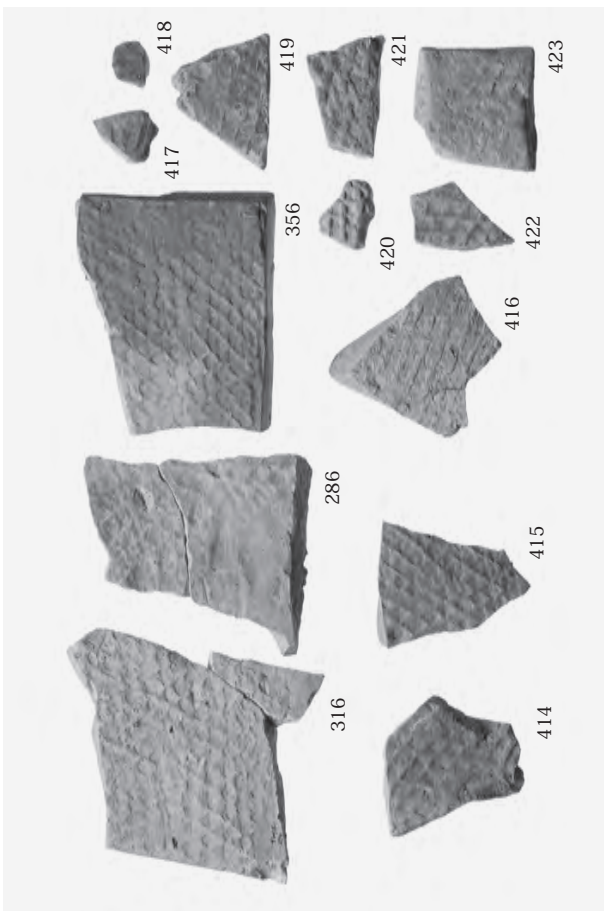
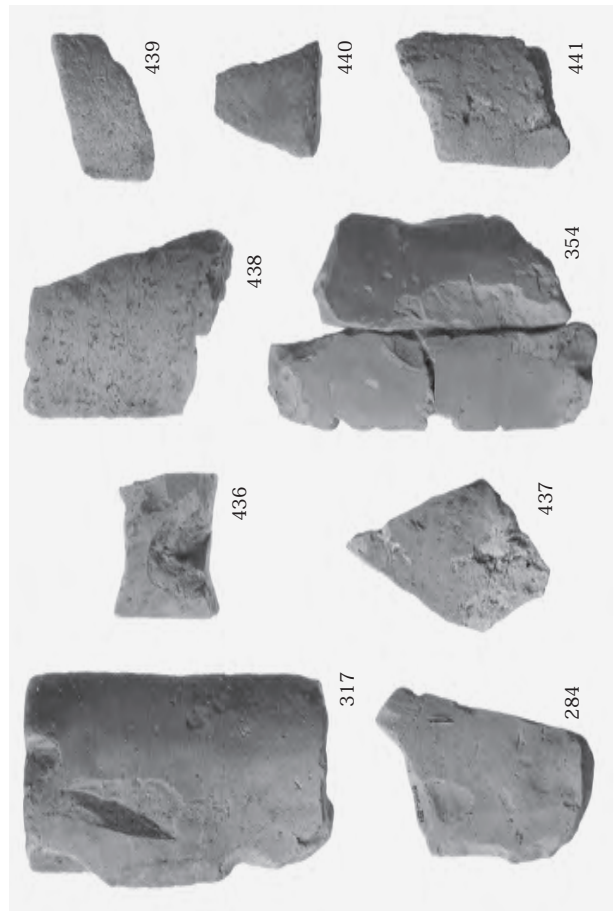
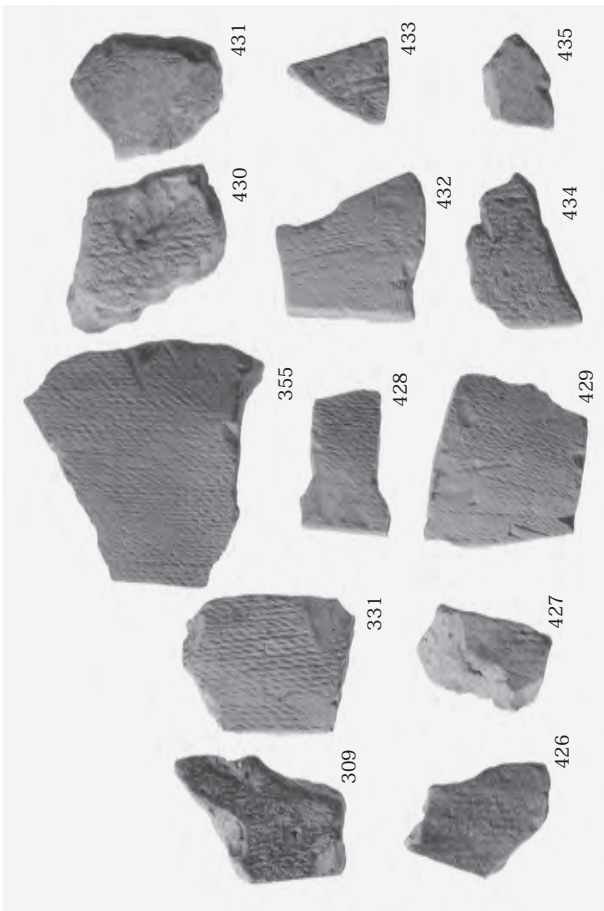
包含層出土遺物 (古代・中世)

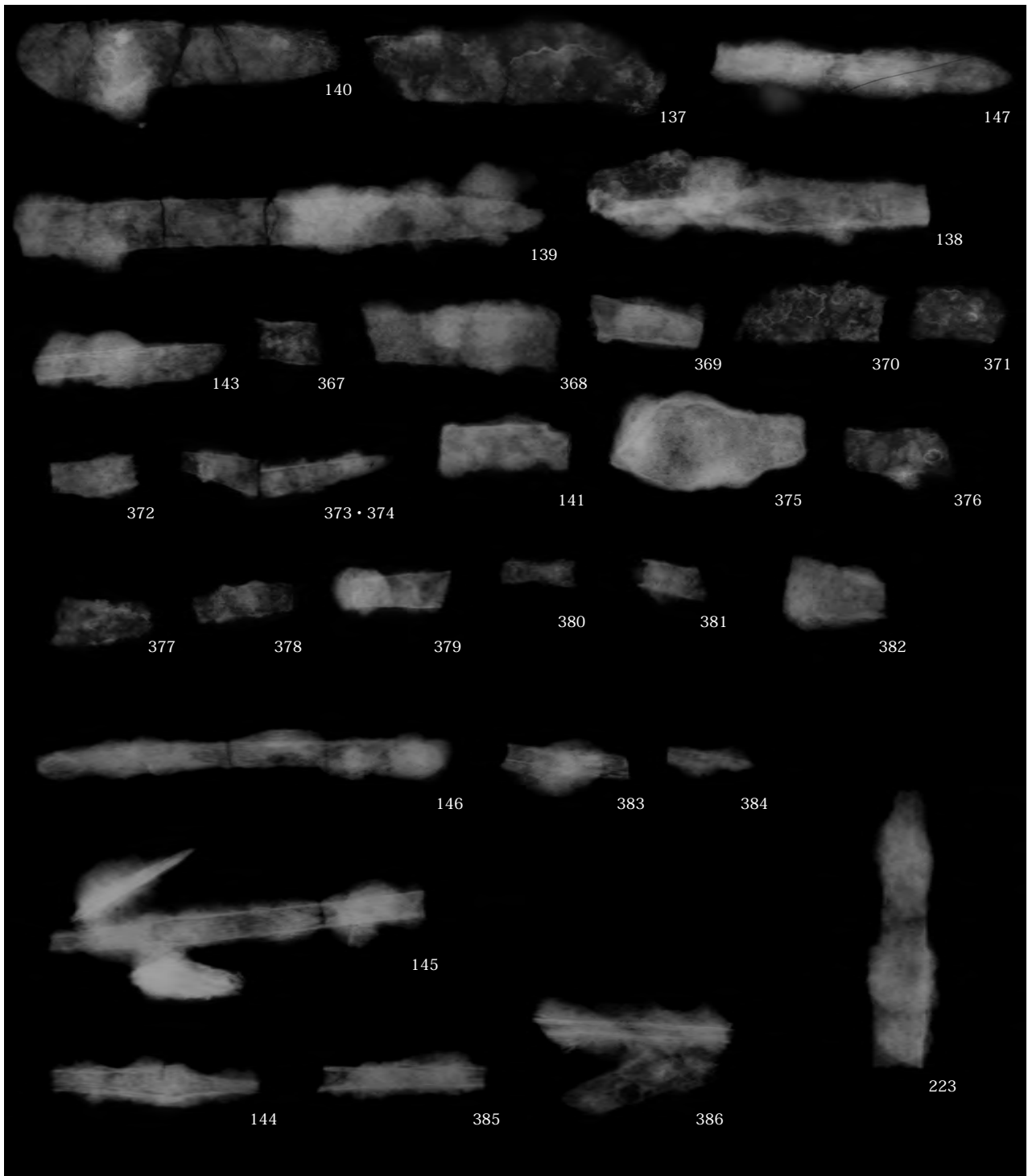


包含層出土 緑釉陶器・灰釉陶器

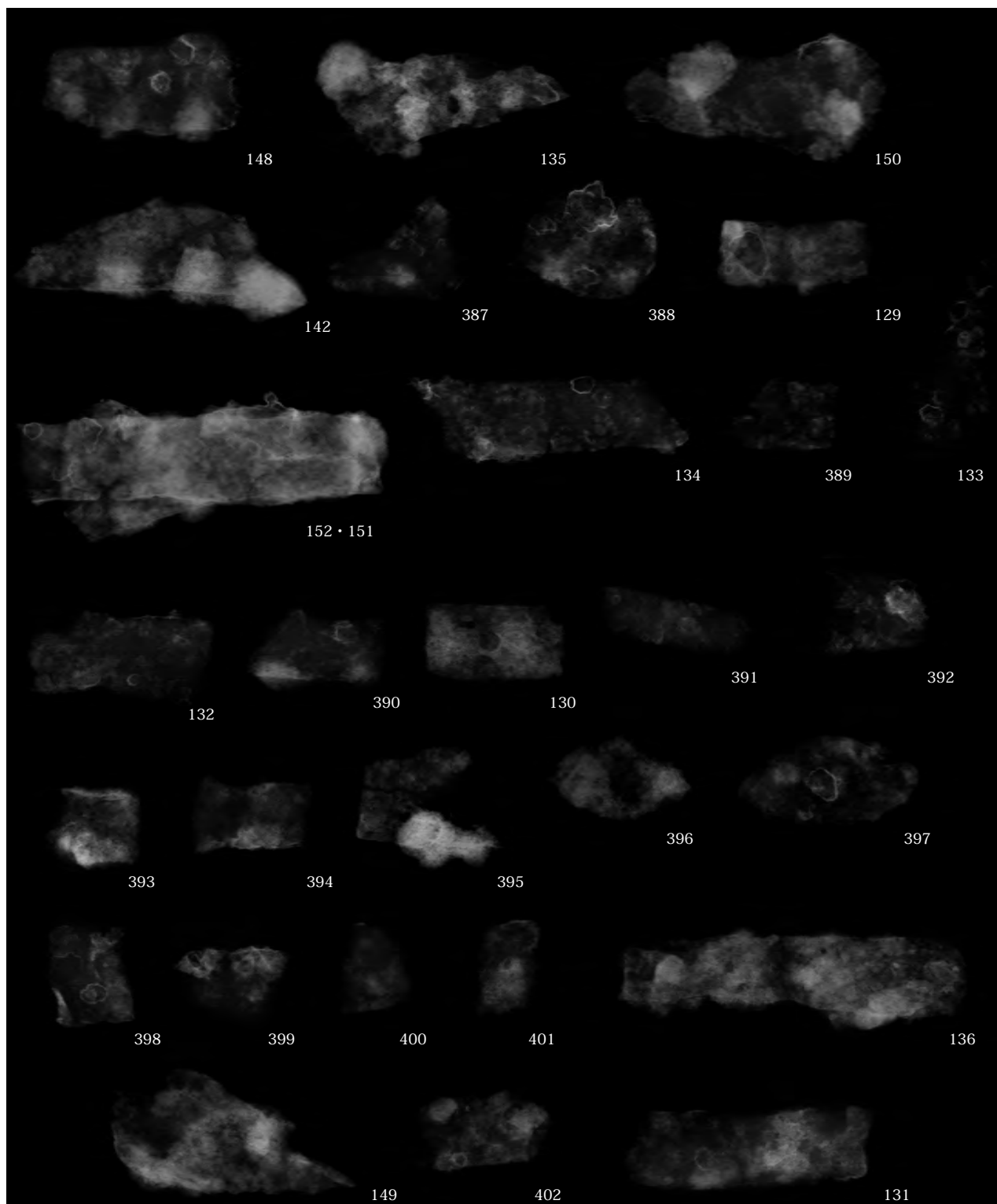


167 落込み・包含層出土 白磁





196 落込み出土 鉄器 X線写真



196 落込み出土 鉄器 X線写真

報告書抄録

ふりがな	いじりいせき						
書名	井尻遺跡 2						
副書名	一般国道 170 号（十三高槻線）道路築造事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次数							
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第 276 集						
編著者名	鹿野 壘						
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒 590-0105 大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号 TEL 072 - 299 - 8791						
発行年月日	2017 年 1 月 31 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号			(㎡)	
いじりいせき 井尻遺跡	おおさかふたかつきし 大阪府高槻市 いじり 井尻 1 丁目	27207	9580	北緯 34° 51' 39" 東経 135° 39' 10"	平成 27 年 12 月 9 日 ～ 平成 28 年 5 月 26 日	1,038 ㎡	一般国道 170 号（十三高槻 線）道路築造
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
井尻遺跡	集落 耕作地	弥生時代			磨製石鏃		
		古墳時代	掘立柱建物・溝・落込み・ 祭祀遺構		土師器・須恵器・韓式系 土器・製塩土器・滑石製 模造品・鉄器・石器・腕 輪形石製品（石釧）・鉄滓	土師器高杯・滑石製模造 品・鉄器を使用した祭祀 遺構の検出。鉄器の中に 鉄鋌が含まれる。 集落域での腕輪形石製品 （石釧）の出土。	
		奈良時代	掘立柱建物		土師器・須恵器・瓦	梶原瓦窯産平瓦の出土。	
		平安時代	掘立柱建物・溝・土坑・ピ ット・落込み・流路		土師器・須恵器・黒色土器・ 瓦器・緑釉陶器・灰釉陶器・ 白磁・浅沓か・瓦・石鍋		
		鎌倉時代	掘立柱建物・溝・土坑		土師器・瓦器		
要約	<p>今次調査では、弥生時代～中世に至る様々な遺構・遺物を検出した。当地における人々の活動の端緒は弥生時代中期に求められそうである。</p> <p>特筆すべき成果として、古墳時代中期の祭祀遺構が挙げられる。196 落込みからは大量の土師器高杯と滑石製模造品、鉄器が出土した。土師器高杯は約 130 点出土しており、形態が判明するものはいずれも腕形高杯である。鉄器の中には、鉄鋌や手鎌が含まれていた。5 世紀における祭祀の在り方を如実に示す成果があった。</p> <p>さらに、包含層出土ではあるが、これに近い時期と考えられる遺物に、腕輪形石製品（石釧）があり、大阪府域では集落出土例がほとんどない中、重要な成果があった。</p> <p>また、時期比定は難しいが古墳時代後期から奈良時代に属する建物を検出した。このうち、独立棟持柱を持つ掘立柱建物 4 が特筆される。柱構造から神社建築物に類するものの可能性がある。</p> <p>今次調査では、196 落込みの祭祀遺構や磨製石鏃、腕輪形石製品（石釧）、土師器小型丸底壺といった祭祀を想起させる遺物が出土している。掘立柱建物 4 が神社に類する建物であるならば、当地は弥生時代以降、連続と祭祀が行われた「場」であった可能性もある。</p> <p>平安時代中期になり、流路が形成され、再び集落が営まれるようになる。鎌倉時代にも一時期集落を形成していたものと見られる。それ以後は連続と耕作地としての土地利用が続いたものと推測される。</p>						

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第 276 集

井 尻 遺 跡 2

一般国道 170 号（十三高槻線）道路築造事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2017 年 1 月 31 日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号

印刷・製本 / 株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南 2 丁目 6 番 8 号

